り然し變價は多分メキシコドルの方に在る也

使曰　吉田の言し事に付互ひに解し違る處有り我々の草案中此ケ條に付ては外國商人金貨を買入れ貯蓄するも少しも關係無之存候

國曰　第六ケ條にては日本政府にて一メキシコ銀を一圓と同樣に可受取今一メキシコ銀は一圓より價高し

使曰　我々は一金圓を一メキシコ銀同樣とす凡て外國の貨幣は金銀礦と見做す故なり

國曰　其金銀礦の價を以て算さるれは幸ならん一メキシコ銀中には一圓金より多く價する丈の金礦あり

使曰　此は再鑄する費の議なり

國曰　夫れか爲に利を欲せらるゝや

森曰　是は思ひも依らさる義也

國曰　日本政府にて何の約束を以て日本海岸に外國船商買するを赦さるゝや

使曰　我々は此を日本國政府内務とし規則を立る事を欲す雖然所望の者あらは格別の免許を與ふべし

國曰　何事も日本政府に任せる條約は難成

森曰　郵便船或は其他の船に格別免許を與べし然し海岸商方の權は政府にて占る事なれは日本政府にて設けたる地方の律に從はさるを得す

國曰　我等解得する所にては閣下等は貴國金貨幣を認めらるゝ事を欲する也此は政府にて常の價を以て充分に供するの約束あり他國商人の〆買するを防くに非されはなし難し拙者所存を至極御同意せり唯閣下等の言ふ所と同意せざるなり合衆國に於て毎週間數百萬の金貨を賣却す大國にて金銀貨を賣り利を得と欲するは甚似合しからす唯九百九十メキシコ銀を以て一千金圓に換へ又は其割合を以て引換ると言はるれは可ならん金一ヲンスは常に銀夫丈けの價有る者なり

森曰　金銀比較の價は時に依て變する事を承知せり

國曰　合衆國にては定りたる位價ありて數十年ならては變する事なし

森曰　我々若し外國貨幣を受る時は再鑄の入費を差引さるを得す

國曰　右に付如何の規則可相立位の報知ありても可然又以前會に於て兩政府共輸出稅を不取立由御同意あり然るに此草案中に其議無之は如何

森曰　夫れは岩倉出席無之時の會議にて木戸大久保之と商議致すへき旨を言たる而已にて慥に定りたるに非す又其則言たる如く内國稅方定る迄は取極難し

國曰　商議記錄を出すべしとて之を取り第八十八枚目を開く

國輔曰　其後の會議にも是等の事を不被仰唯是等の事は其儘にし置とのみいわれたる計なり

國曰　其他解譯を被望候條有之候や

使曰　御勘考を望所其丈け也

國曰　是は凡て商法規則なり條約全備なすには其他地方規則あり之等は方今の如く差置かるゝか或は年々商法の多寡に依りて四五ケ國外國政府に任せらるゝや

使曰　是は口づから被言るや又は書物にて被出るゝや

國曰　此事又他の事も凡て條約草案に纒め御覽に入るべし

使曰　今日議したる事も其中に加へられて書物にて被送れは甚便宜なり我々能勘考する事も出來べし

國曰　然らは左樣可仕

使曰　右送られ次第篤と勘考すべし岩倉も甚御多忙中無心の義なからニューヨルク、ボストンえも參り度殊更早く本國に歸り先頃御咄し致置たる事件等進歩可致取計ひも致し度間成丈早く右草案御遣し有之度候

國曰　議院月曜日に閉る時は一二日間は甚多忙なるべし然し火水曜日迄延引すれは夫丈けの暇有之時日は豫しめ難定候得共數日間に寫しを可差上

八二　四月二十九日（六月四日）　副島外務卿等ト伊國公使トノ對話書

日米間條約改正交渉ニ關シ伊國公使ヨリ情報要請ノ件

中四月廿九日於外務省外務卿副島種臣大辨務使寺島宗則伊太利國公使コントアレサントロフエ應接記の内

一條約改定の儀に付御手紙被下候處其前既に其事は外より承知いたし候儀も有之候尤此儀前以閣下より御咄し御坐候得は次第柄能く分り候樣我政府え申遣候得とも何分にも御咄無之義故御遣しの御書翰而已何となく差遣候

副島　一承知いたし候宮本え御引合の趣も承り申候御尤の事に候

手紙の趣意は談判の都合に依ては彼地にて調印いたし候
てもよしと命ぜし事にて各國政府にて此地にて調印被致
度義なれは元より此地にて致し申候此度の手紙を以て最
初の手紙を打消し候事には無之候
一右儀華盛頓に在るミニストルより本國政府え申越本國
より新聞にて拙者え申來候
一寺島夫は違ひ可申候今迄は調印せぬ積の處今度調印致し候樣
始て申遣候事候
一外より聞候事は委しく此地にて承り候事少く拙者より
本國え何も不申遣候樣にては困却いたし候
一副島副使が歸て未た其事を議し不決定今日も既に評議いたし
居候
一他より委しく本國へ申遣候に此地に居りながら拙者よ
りは何故御國の事を不申越哉と疑ひ可申候夫故拙者甚
た不喜候
一申上候通り今日迄も其儀未た議定致さず候義故何とも御
咄し致兼候
一寺島改定ケ條を御聞被成度儀に候哉
一ケ條の事を強て伺度もなし併し只今申通り拙者より本

國え何とも不申遣は不都合に候
一夫は華盛頓より本國え報知は華盛頓より此地え申參り此
地より貴國へ報知よりは早く候亦國々へ參り議すれは其
國々毎に存意異れは我使節其國々の存意により意見を開
き段々に違ひ可申候間夫を預め申上候譯には不參候
一副島華盛頓え行時は元より改定の論は歸り候上の事なれはケ
條は極り居不申候
一華盛頓より計に無之其外よりも申越候外より申越候處
何れも委し
一寺島夫は先の國々の都合により色々に違ふてもよしとならは
極た丈申上へし
一如命色々に變るとも根本は變る事なかるべし
一米より申越したるは前の咄にて今日の論とは違ひ申へし
一拙者の方にては前の咄か今の論か違ふても何れにも新
聞に候
一此度申上れは我方にては不變候間新聞に非す
一前と今と變ても根本は依然ならん
一先と今とは丸て違ひ申候
一米にて論議がありて夫を今に至て一向御咄なし

一夫は御入用に候哉
一素より日本の咄を本國より承り候樣にては不都合に候
一副島夫は彼國へ對して遠慮可致事もあり御咄申てよき事も有
之候
一初めの本の大體が承知致し度候
一寺島初めはケ條も何も聢と不極
一最初は談判計と國へ申遣候然るを華盛頓にて改定の咄
を初められし
一前の處にては國々の考を聞ため出事ゆへ極つたものはな
し此國に聞尤と思へは其先の國にては其尤と思ふた咄を
致し以前の咄は不致事もあるべし
一されは行時は談判計の積に候處行先にて意見が變し候
事歟
一其意見を開くは則聞に迫る趣意なり
一改定の談判を始めしは則丸て意が替りしなり
一替ても宜しき也今度夫を聞ため副使が立戻り候
一對話書に細目迄有之候
一談判は致しても未た夫て極候事には無之候
一本國にては夫を見ば心惡しく思ひ可申候夫故辯解申送
り度存し伺申候
此時寺嶋退く
一題目位は初より知れてあるべし
一副島眞の御咄は使節出立の頃は何も不極只各國の有樣を一日
も早く見度其上吾意見を立歸候後改定の議に可及と存居
候
一米にては既にケ條あり
一夫はケ條を被問使節が存意丈を答しなり夫故國書にも拙
者共よりの書簡にも歸て後改正と有之候只其時より一ケ
條極つた事あり國權を復する一理なり
一初の御手紙と意の替た事は今般初て拙者共へは御報知
に候得共華盛頓えは四十日も前既に御申越可有之候左
もなくては改定の談判はなき筈なり
一左樣の事はなし虛言は決て不申候
一外にては米にて改正に調印する事と誰も思ふべし
一御疑は御尤に候左樣の儀に非さる證は今度副使は米の方
え不參先長崎へ行電信を以歐羅巴にて可落合旨を岩倉へ
申送り直に印度海より歐羅巴え參候
一然らは米の全權大使も直に歐洲へ行か

一電信が屆けは直に出立いたし候既に此程セパルトえ調印を望む手紙を送りながら直に其地を出立する樣の譯故夫を米にて承知する哉否も不十分候

一歐洲え不行前米にて岩倉調印すべし

一夫はなし拙者請合申候

一夫はいつれにても宜く候へども本國え申遣し度存候間伺申候

一御尤に御坐候何分使節等都合相成候樣御賴申候

八三　四月二九日（六月四日）　大使隨行田邊一等書記官等ノ口上ノ覺

歸朝ノ使命等ニ關スル件

口上の覺

條約改正の義於當府議決鈐印可致運に相成候に付其爲大久保伊藤兩副使歸朝建言被致全權委任の憑書森少辨務使へ御下け可相成處今般電信機の趣にては當國より歐洲へ名代人差出し改正會議の席へ列し候樣當國政府へ請求いたし會議の上條約鈐印に及可申御趣意に有之一體條約改正の儀は最初御國出帆前には今般御使節巡聘の序各國の見込をも承置歸國後大に各國公使を會し改正の談判に渉り鈐印にも及可申積の處當國え相越候後篤と事情觀察候處長州償金の一條を初め當政府人民とも御國の爲格別懇切を盡し可申樣子も相顯れ從て此國にて一談判を盡し一定の條約取結候上は歐洲へ相渡候後も多少御盡可相成目的も有之然るに大統領交代諸長官も引換り可申時限も迫り居即今決定に不及候ては不都合も不少候間此より依賴及兩副使歸朝の上は必一同見込通可相成旨を以委任狀も無之御國書面にも無之廉なから使節一行の情面へ對格別懇親の廉を以當國務尙書フイスにも引合呉候次第にて固より彼より望候事には無之此より請求候條は今更縷述不仕候とも大久保伊藤兩副使より陳述致候儀にて既に御承知可有之と存候乍然猶歐洲各國へ相越夫々政府に就談判及候も多少歲月を費し可申に付歐洲各國は會議の積に見込候得とも此以當國丈け爲相濟歐洲は會議と申候ては自然偏頗の論にも相聞可申に付同しくは當國よりも會議の席に列り鈐印丈けにても致呉候はゝ好都合に付其段猶森少辨務使を以ヒイス存寄被承候處斷然不承知の趣に御座候是又兩副使承知の事に就ては此國丈けは此國にて結

局迄談判いたし兼て見込申上置候通御委任狀到着次第鈐印の運を以兩副使出立後も引續き談判いたし草案をも差出候位に渉取候に付即今に至り何分前議を變し殊に此方より依賴及候廉を替へ御下知通歐洲會議の事賴入候事は事情おゐて如何にとも難仕場合に有之且アラバマ一條に付當國國務尙書も兎角に多忙既に洋曆四月丈けは談判も無之打過候位故今般電信機の御下知にも其期を誤らす候へ共もし當然の運に御座候はゝ一行のものは既に談判濟にて鈐印丈け相殘し既に英國に趣候後にも可有之位の義旁以當國にて名代人爲差出候談判は開口可致樣無之實以進退維谷に付不取敢以電信其段大使より報知被致候事に御座候乍然前文申述候次第は兩副使委曲差含被居候筈の處右樣御下知相成候事は別に子細御座候事と被察電信且書上而已にては事情難盡候に付私儀被差戻委曲陳上可致候旨に御座候間御聞取被下度候御下知面に相背御不都合有之候條は錢を被甘候旨に御座候右實際の眞情無據次第柄御諒察私共より申立候條篤と御評議被下度候米邦より歐洲え名代人爲差出候儀談判可仕旨御下知御座候義此許にて精察仕候へは必然外各國公使建議の趣意に被爲依候義にも可有之右は外國にも當國同樣各國右内々談判に相成候はゝ不偏不停の御處置にて差支有之間敷存候へ共右當國にては名代人爲差出兼候趣意柄兩副使篤と承知にて歸朝の上は右等の義は固より容易に御決議可相成筋と被存さ候へは外に深き御趣意にも御座候て御下知御座候事に可有之哉と事實大使初心痛の極に御座候且右會議の義既に各國在留の公使にも御告報有之今更再御變替被成ては政府の御信義不相立との事に御座候不得已次第境外擅命の段大使にも固より錢を被甘候趣に御座候此迄の手續に無之ては全權使節の面目相立不申數度變更の御報告御座候ては政府の御信義を缺く事二者の間輕重小大の辨篤と御忖度現今將來御爲可宜處を以斷然御處置有之度被相望候旨に御座候

一電信の義以來暗號等相用度即今般所持いたし候事

一御用金最早殘少に相成右は英國於て東洋銀行へ申談爲替取計の筈にて大藏省にも定て如才なき事とは存候得とも一應申談同しくは大藏省より横濱出店先へ爲申談一電報を通し置候樣致度存候事

一返命の義は御用相濟次第可成速に立戻り申度即今差定め何國郵船にて立戻り可申との義難申上候多分當八月の季

九月の初歐洲中にて拜謁可仕事と存候

一各國會議の御廟議相決候は時月を費し不申樣との御趣意は可有之存候就ては此國丈けは別段にいたし歐洲各國會議の論被行候節は大副使の內御分派相成其爲御國書被下候て御分歷相成候ては如何可有之候哉右は御國內無據御用有之使節急速歸朝爲致不得已分遣歷聘爲致候旨在留公使え御達相成御出先にても御國書御落手次第其地在留各公使へ御引合にて聊御國信誼に關係可仕事共不被存候萬一廟議右等の邊に御決可相成に付御下問も御座候はゝ如何申上可然哉

一大副使御發遣の節條約改正談判の爲と中外にも御布告御座候處無據事情とは乍申米國のみ森少辨務使の調印と相成候義御不都合との廟議も可有之哉存候左候はゝ先日御議論も御座候通大副使の內歐洲歸路當府御立寄且哈維國をも御遊歷御座候も可然右は御下問御座候はゝ如何申上可然候哉

註　右ハ文意ヨリ推シ大使隨行田邊一等書記官安藤四等書記官カ用務ヲ帶ヒ華盛頓ヨリ歸朝セントスル際岩倉大使等ニ宛タル口上ノ覺ト思ハル尙日附ハ假ニ田邊等カ

出發ノ日（三五附記ニヨル）ヲ採ル

八四　五月二日（六月七日）　太政官正院ヨリ副島外務卿宛

岩倉大使ヨリノ電信ニ對スル回答ニ關シ取計方依賴ノ件

附屬書　四月二十二日岩倉大使ヨリ三條太政大臣宛電信和譯文

條約調印ノ全權御委任狀ヲ森少辨務使ニ附與スル儀ニ關シ速ニ回答アリ度旨ノ件

附記　五月二日三條太政大臣ヨリ岩倉大使宛（電信）

右ニ對シ回答ノ件

今朝華盛頓よりの電信別紙譯文の通申來候就ては右返答別紙の趣を以申遣度候間尙大久保伊藤兩副使へも御打合可然御取計有之度候也

壬申五月二日　　正　院

副嶋外務卿殿

（附屬書）

七十二年第五月廿八日發從華盛頓

再應政府へ申上候は恐入候へ共歐羅巴へ全權公使被差遣へき子細は伊藤大久保承知いたし居候當國條約取極の爲森へ全權御委任可相成事は何故直に御返答不被下候哉

岩　倉

三條太政大臣殿

註　本號文書本文ニ謂フ「返答別紙」ハ草案ナルニ付省略シ右決定案ヲ左ニ附記ス

（附記）

日本東京洋曆六月七日

日本大使岩倉閣下

米國華盛頓日本國公使館ニテ

五月二十八日ノ電信ヲ落手セリ

同月二十五日桑港ニ向テ出帆シタル船便ニテ小松ニ附シ君ノ求ムル報告書ヲ贈リタリ

三　條

（欄外註記）此分達ス

八五　五月三日（六月八日）　岩倉大使等ト米國國務卿等トノ對話書

米國側ヨリ條約竝ニ附錄草案提出ノ件

千八百七十二年第六月八日第一時第八回談判筆記

列席の人員

岩倉大使　木戸副使　山口副使　森少辨務使　鹽田篤信　福地源一郎　ブルックス　國務卿ハミルトンフィシ　國務大輔チャルレスヘール

國　今日は我曹の見込を以て改正いたし候條約の草案を我合衆國の爲に貴君え御差出申度此內には我曹の思考致し候箇條も有之彼是餘程變更致し候處も有之候得共別段微細に說明仕候迄にも及ひ申間敷尤も此文章は外國國との條約書を見合せ語辭も宣敷方に取直し置惣體に御同樣にて希望仕候箇條を記載致し候將た書面中御同樣に見込の相違致し候廉も不少と被存候間貴君篤と御熟讀の後に御見込の處御伺可申猶其節に御議論に及ひ可申候

使　御書面中には我曹より差出候勅書の草案たるへき附錄も其中に相籠り居候哉

國　左樣に候尤其內にて一二ケ條は條約本文の方に書載致

申候

使　只今は御書面を落手仕候迄にて別段所存の處は不申述篤と熟讀致候上追て御談判およひ度既に先般より申述候通我曹は可相成丈急速に此事務を相整へ度存居候尤も貴國政府よりの御案内に應しウエストポイントえ相越候積にて候間凡何日頃には我曹當府え歸着仕候て御都合宣敷候哉承り度候

國　ナイアガラの瀑布も御見物被成候哉左候はゝ何日程も相掛り可申哉

使　ナイアガラ見物より歸路ボストンえ相廻り凡十日程も相掛り候見込に候得共御都合次第右巡歴の日限を相縮め候ても差支無之候

國　來る月曜火曜兩日の内には議院も閉局に至り可申左候得は僕も當話聖東府を急速に相發し凡一週間も旅行仕候積是は僕近來不快に候間保養の爲に出掛候義に候質は八ケ月の時間當府にて更に休暇なく事務取扱候故此休暇を得保養を加候義は誠に希望仕候事に候

使　然らは我曹の旅行も十日程に致し可申候

國　至極宜敷候尤も現今條約取結の義に至り不申節は是迄談判の箇條も後日の變更に差支無之且つ此度の談判を此儘に差置後日之を再議致し候節には此書面は其節に改正致し候ても宜敷候

乍併御相談の模樣に寄ては双方の異議も相纏り可申候此度の御旅行の御愉快を期望仕候ウエストポイントの對岸の地に僕の別業有之候得共貴君御巡歴の節此別業に居合せ申兼候義は實に殘懷至極候若し居合候ならは御招待申上候快事も可有之候

右畢て退散

午後第一字十分

八六　五月三日（六月八日）

米國側ヨリ提出セル合衆國日本帝國新定條約竝附錄草案譯文

（表題）一千八百七十二年第六月八日第三回（八カ）談判の節米國國務尚書より差出たる草案

合衆國
日本帝國條約竝附錄草案譯文

亞米利加合衆國及ヒ日本天皇陛下ハ茲ニ兩國ノ間ニ存在セル和親ヲ厚クセン事ヲ願ヒ且兩國ノ貿易交通ヲ進メン事ヲ欲シ和親貿易航海ノ條約ヲ定ムル事ヲ協議シ爲メニ各々其全權ヲ命セリ卽チ

合衆國大統領ハ
日本天皇陛下ハ

此全權ハ各其委任狀ヲ取替ヘ其善良適正ナル事ヲ知リ左ニ條々ヲ協議セリ

第一條

兩國ヨリ互ニ其交際公使或ハ交際官員ヲ派出シ其都府ニ在留セシムル事ヲ得ヘシ且兩國ヨリ總領事、領事、副領事、代理領事又ハ管商官（コンメルシエルエーゼント）員ヲ命シ外國交易ノ爲メニ開キタル港或ハ場所ニ居留セシムル事ヲ得ヘシ此者等ハ最モ優待セラレタル國々ノ領事官員ニ許スヘキ權理殊典特例ヲ占ムヘシ

右ノ交際官員及ヒ領事官員ハ兩國中イツレノ場所ニテモ勝手ニ旅行スルノ權理アルヘシ

第二條

右兩國ノ總領事、領事、副領事ハ公務ヲ司ドルニ付其權理殊典特例ヲ占ムヘキ爲メニハ其職務ニ取掛ルヘキ前ニ其在留國ノ政府ニ適當ナル委任狀ヲ示スヘシ其政府ノ認メ書ヲ得タル上ニテ在留地方ノ官員及ヒ人民ヨリ公務ニテ尊敬セラルヽ事ヲ得ヘシ

第三條

兩國政府ニテ命シタル領事官員ハ其在留國ノ人民ニ非サル以上ハ都テ其國役幷ニ諸租稅地方稅等ヲ免ルヘキ事ヲ約定ス但シ貿易ノ爲メ又ハ其所有物ノ爲メニ納ムヘキ稅ハ此例ニアラスト雖モ中外ノ差別ナク其地方ノ住民ヨリ納ムヘキ高ニ過サルヘシ

公用書類ニハ猥リニ手ヲ下ス事ナカルヘシ又何等ノ時宜アルトモ地方ノ官吏ハ此ノ公用書類ヲ取押ヘ或ハ之ニ關係スル事ヲ得サルヘシ

第四條

領事官員ハ自國ノ商船内ノ取締ヲ引受テ管轄シ海上港内ノ別ナク其商船ノ船長士官其外乘組ノモノヽ間ニ起リタル爭論就中其俸給ノ割合或ハ約定ヲ履行スル事ニ關係シタル諸務ハ獨斷ニテ裁判スヘシ

兩國ノ地方官吏ハ何等ノ名義アリトモ此ノ爭論ニ立入ル事ナカルベシトイヘトモ若シ領事官員ヨリ願ヒ出ル時ハ其領

事官員ガ取押ユヘキ事ヲ緊要ナリトスル乘組ノモノヲ捕亡シ禁縛シ又之ヲ入牢セシムル事ニ付地方官員ヨリ力ヲ假スヘシ

右ノ取押ユヘキモノ等ニ付テハ日本及ビ合衆國ニ於テ領事官員ヨリ其地方官吏ニ差出タル願ノ書面ヲ證據トシテ取押ユヘシ但シ此願書ニハ船目錄ノ書拔或ハ乘組人名表ヲ添ユヘシ尤此ノ取押ラレタルモノ等ハ其船滯留ノ時間ハ領事官員ノ差圖ニ任スヘキモノタルヘシ

又此ノ者等ノ出牢ハ領事官員ノ願書ヲ證據トシテ取扱フヘシ

此者等ノ捕亡幷ニ入牢ノ諸費ハ領事官員ヨリ之ヲ拂フヘシ

第五條

領事官員ハ自國ノ軍艦或ハ商船ヨリ出奔シタルモノヲ取押ヘ禁錮スル事ニ付其地方官吏ノ助ケヲ求ムルノ權アルヘシ此儀ニ付領事官員ヨリ書面ヲ以テ出奔人取押ノ事ヲ裁判所裁判役或ハ其筋ノ役人ニ申立船目錄乘組人名表ヲ示シ此モノハ其船ノ乘組中ノモノニ相違ナキ事ヲ證スヘシ

此出奔人ヲ取押タル時ハ其領事官員ノ差圖ニ任セ申立人ノ願ニヨリ其入用ニテ入牢セシメ又ハ其乘組ノ船カ或ハ同國ノ他船ニ送リ渡スヘシ

若シ右ノ取押ラレタル者ヲ其擒捕ノ日ヨリ（註　原文）月ノ間ニ引取ラサル時ハ此者ヲ赦シ其後ハ此舊罪ヲ以テ再ヒ取押ヘサルヘシ

第六條

兩國互ニ協議シ輸入稅輸出稅ハ其稅ヲ取立ヘキ物品ヲ何國ニ輸出シ何國ヨリ輸入スヘキ歟ヲ問ワス都テ一樣ノ稅額タルヘシ

國ノ差別ヲ論セス一般ノ人民ニ施スヘキ制限ノ外ハ直又ハ不直ニ拘ラス免許或ハ別段ノ許可ノ名義ヲ設ケ以テ合衆國人民日本臣民トノ間ノ貿易ノ交通ニ制限ヲ置カサルヘシ

兩國軍艦ノ用意品ハ雙方ノ開港場ニ陸上ケシ相當ノ藏敷ヲ出シ租稅役人ノ管轄タル借庫ニ納メ或ハ公然ト命セラレタル政府ノ藏船ニ納ムル事ヲ得ヘシ尤モ其國ニ於テ用ユル爲メニ賣拂フ時ノ外ハ稅ヲ拂ハサルヘシ

第七條

日本政府ハ可成丈急速ニ各開港場ニ於テ燈明臺ヲ取建ル事ヲ約シ右建築ノ上ハ國ノ差別ヲ論セス入港ノ諸船ヨリ噸稅ヲ取立其費用ニ充ルヘシ

第八條

日本政府ハ其帝國ノ諸開港ニ於テ適當ノ港規則ヲ創立スル事ヲ約ス此規則ヲ實地ニ施行スヘキ外國人ノ撰擧ハ其港ニ在留スル合衆國ノ領事カ許可セサル人物ヲ命スル事ナカルヘシ

第九條

條約遊歩規程內及ヒ外國ノ貿易ノ爲メニ開キタル諸港ニ於テ日本人民ハ合衆國人民ニ勝手ニ雇ハレ又合衆國人民ヲ雇フ事ヲ得ヘシ

第十條

兩國ノ人民ハ互ノ地方ニ於テ其信教ニ付最モ充分ナル安全ヲ占ルヘシ且ツ其國ノ法律風習ヲ當然ニ尊敬スル以上ハ其宗旨信仰ノ事故或ハ自宅又ハソノ爲メニ設ケタル他ノ場所ニ於テ相當ナル禮拜ヲ行フノ事故ヲ以テ之ヲ煩シ之ヲ妨ル事ナカルヘシ

第十一條

兩國人民ノ死骸ハ地方ノ相當ナル規則ニヨリ雙方ニテ適當ナル墓地ニ埋葬スル事ヲ得之ヲ荒シ之ヲ發ク事ナキ樣ニ保護スヘシ

第十二條

兩國中一方ノ管轄內ニ於テ左ノ罪名ヲ犯シ他方ノ領內ニ來リテ潛匿ヲ求メ其地ニテ見出サレタル罪人ハ兩國互ニ之ヲ引渡スヘキ事ヲ約ス

但シ此義ハ罪人ヲ見出シタル地方ノ法律ニ據リテモ其者ノ罪狀ハ恰モ猶其地方ニテ犯セシモノト同樣ニ審斷スヘキ程ノ確證アル上ニテ行フヘシ左ニ揭ケタル罪狀ノ內ヲ犯セルモノハ此ヲ引渡スヘシ

人殺シ、人殺シヲ謀ル モノ、强奸、火付、海賊、船乘組內ノモノニテ船中ニ於テ船長ヲ欺罔シ或ハ脅威シテ其船ヲ奪取タル モノ、强盜、追剝キ、謀書、金、銀、紙幣、公債證書、バンク手形證書其外證文書類ヲ贋造スル モノ

政府官省ノ印、極印、證印、標印ヲ贋造スル モノ、雇ヒ人或ハ奉公人ニテ其主人ノ害トナルヘキ程ノ引負ヲナシ其罪重科ニ附スヘキモノ

此條約ノ明文ハ國論上ノ罪ニハ及ホサヽルヘシ且ツ右ニ揭ケタル罪狀ニテ引渡サレタルモノハ何等ノ時宜アリトモ從（衍脫カ）犯シタル他ノ罪科ヲ以テ之ヲ審斷スル事ナカルベシ然レトモ兩國政府ハ自國ノ人民ニテ右ノ罪ヲ犯スモノアリトモ

之ヲ引渡スニ及バサルヘキ事ヲ協議ス

第十三條

此條約ノ取極ニ基キ右ノ引渡ヲ申立ラレタル罪人若シ其潛匿ヲ謀リタル地方ニ於テ罪科ヲ犯シタルニ付擒捕セラレ或ハ罪科ヲ犯セリト決斷セラレタル時ハ其引渡シヲ延期シ其モノ赦免或ハ裁判ノ通リ入牢ノ期限ヲ滿シタル後ニ引渡スヘシ

第十四條

右ノ吟味ヲ免レ潛匿セルモノヲ引渡ヘキ達書ハ兩國ノ交際官員ヨリ差出スヘシ若シ其交際官員其國ニ詰合セサルカ或ハ其國政府ノ近傍ニアラサル時ハ領事官員中ノ重立タルモノヨリ此達書ヲ差出スヘシ

右ノ引渡ヲ申立ラルヘキ罪人ハ罪科アルト定マルニ付其ノモノヲ審斷シタル裁判所ニ於テ罪科ヲ極メタル書付ノ寫シニ其官印ヲ押シ相當ノ司法官員ヨリ此審斷役ノ公務權理ヲ保証シ猶其上ニ合衆國或ハ日本ノ公使又ハ領事此司法官員ノ公務權理ヲ保証シタル書面ヲ添テ達書ヲ差出スヘシ

尤モ此潛匿セルモノ只罪狀ヲ犯セリト看認タル時ハ其罪ヲ犯シタル國ニ於テ之ヲ取押ユヘキ爲メニ發行シタル擒捕證

書ノ正當ナル寫又ハ此ノ擒捕證書ヲ發行シタル原因タルヘキ證據人口書ノ寫ヲ右ノ達書ニ添ユヘシ

猶此合衆國ニテハ國務尚書又ハ日本ニテハ適當ノ行政官員ヨリ右ノ潛匿人ヲ取押ユヘキ證書ヲ發行シ吟味ノ爲メニ適當ノ裁判役ノ前ニ連レ來ラシムヘシ

然ル上ニテ法律ヲ案シ口書ヲ糺シ條約面ニ基ツキ引渡シヲナスヘキト決定セハ此般ノ場合ニ於テ行フヘキ定例ニ從ヒ此潛慝人ヲ引渡スヘシ

第十五條

右ノ罪人ヲ取押ヘ入牢セシメ送リ渡ス事ノ諸入用ハ其引渡シノ達書ヲ差置タル政府ヨリ之ヲ拂フヘシ

第十六條

兩國中互ニ人民他ノ一方ノ海岸ニ於テ軍艦商船ノ別ナク難船スル歟或ハ風浪ノ難ニ罹ル歟或ハ賊船又ハ敵船ニ追ハレ止ムヲ得ス河灣港ノ内ニ逃込事アルトキハ懇親ニ之ヲ遇シ保護ヲ與ヘ且ツ其航海ヲ全フセシムル爲メニ其船ヲ修覆シ食料ヲ得ル等ノ事ニ於テ要用ナル助力ヲ與フヘシ

若シ難船ノ荷物卸シ及ヒ再ヒ船積スル事ヲ緊要ナリトスル時ハ其地ニ於テ賣拂フヘキ品物ノ外ハ相當ノ規則ニ從フテ

之ヲ取扱ヒ租稅運上ヲ拂フニ及ハサルヘシ

第十七條

合衆國ノ人民ハ外國貿易ノ爲メニ開キ或ハ開クヘキ場所ニ於テ條約規程内及ヒ其地ヨリ定メタル距離内ニテ靜產ヲ賃借シ之ヲ占ムル事ノ許ヲ得ヘシ

第十八條

兩國ノ政府ハ一方ノ准允ヲ得ルニ非サレハ是迄雙方ノ人民ニテ賃借シ所有シ占領シタル土地ヲ所持スルノ法ニ差響キ又ハ之ヲ更正シ或ハ其稅法ヲ創立スル法律ヲ設ケ又ハ規則ヲ建サルヘシ

第十九條

兩國ノ人民ハ他ノ管轄内ニ於テ地ヲ賃借シ其地及ヒ動所有物ヲ他人ニ賣渡シ讓渡シ遺物トシ其外ノ手續ヲ以テ之ヲ處置スルノ權理アルヘシ且ツ其ノ相續人或ハ法ニ叶ヒタル代任ノモノ他ノ一方ノ人民タルニ付遺言狀ノ有無ヲ論セス右ノ動所有物ヲ相續スヘシ且ツ此相續シタルモノハ自身歟又ハ名代ヲ以テ之ヲ占領シ其意ニ隨フテ之ヲ處置スルヲ得ヘシ

尤モ右樣ノ場合ニ臨ミ其動所有物ヲ置タル地方ノ住民ヨリ納ム丈ノ稅ヲ而已拂フヘシ

若シ此儀靜產タル時ハ其相續人或ハ法ニ叶ヒタル代任ノモノハ外國人タルノ故ヲ以テ之ヲ相續シテ所有スル事不都合タルヘシ尤モソノモノヽ相當ト思惟スヘキ程ニ此靜產ヲ處置スヘキ爲メニ三年ノ期限ヲ許シ其代料ヲ故障ナク又一切ノ稅ヲ拂フ事ナク持出ス事ヲ許スヘシ

第二十條

平和ノ時ニ於テハ相當ナル日本官員ノ免許ナクシテハ合衆國ノ兵ヲ日本ニ上陸セシメス又相當ナル合衆國官員ノ免許ナクシテハ日本ノ兵ヲ合衆國ニ上陸セシメサル事ヲ協議ス

第廿一條

日本天皇陛下ハ此條約本書取替セノ期限又ハ其以前ニテモ帝勅ヲ下シ此條約ニ添ヘ其一分トナルヘキ附錄ノ箇條ヲ充分ニ履行スヘキ旨ヲ此ニ協議決定ス

第廿二條

千八百五十四年第三月三十一日及ヒ千八百五十八年第七月廿九日合衆國及ヒ日本トノ條約并ニ之ニ附屬スル章程ハ此條約ノ箇條ニ反對セルモノヽ外ハ猶之ヲ實踐スヘシ

第二十三條

兩國ニ於テ貿易航海ノ事ニ付直チニ他ノ一方ニ許サヽルヘキ特典ヲ外國ニ與ヘサルヘキ事ヲ互ニ約ス此他ノ一方ハ此特典ニ制限ナキモノナラハ制限ナク之ヲ占ムヘク若シ又此ノ特典ニ約束アリテノ事ナラハ其約束ヲ履行シテ之ヲ占ムヘシ

兩國ノ諸船ハ是迄占得シ或ハ許可セラレタル貿易航海ノ殊典權理ヲ其儘ニ引續キテ占有スヘシ

第二十四條

若シ此條約ノ箇條中ニ違背スル事アラハ雙方中ソノ損害ヲ蒙リタルト思惟セル方ヨリ先ツ確證ヲ掲ケ損害ノ條件ヲ記シタル書面ヲ差出シ公裁ヲ促シ償ヲ求メ然ルニ之ヲ拒絶シ或ハ道理ナク遲延スルニ非サル以上ハ損害ノ議論ヲ以テ絶交ノ所業ヲ命セサルヘク又他ノ一方ニ對シ戰爭ヲ公布セサルヘシ

附　錄

第一　現今外國貿易ノ爲メニ開キタル諸港ノ外ニ猶左ノ諸港ヲ開クヘシ

鹿兒島　石ノ卷　敦賀　小樽內　下ノ關

右ノ內二港ハ此附錄ノ本文タル條約本書取替セノ日ヨリ一ケ年ノ內ニ開クヘシ今一港ハ其日ヨリ二ケ年ノ內殘リ二港ハ其日ヨリ五ケ年ノ內ニ開クヘシ

第二　此附錄ノ本文タル條約ノ本書取替セノ日ヨリ二ケ年ノ後ニハ舊條約ニ依リテ日本ニ於テ合衆國人民靜產ヲ賃借シ占有スヘキ境界ヲ擴充シ諸開港場ヨリ五里地內ニ及ホシ猶二ケ年ノ後ニハ十里地內ニ及ホスヘシ

第三　此附錄ノ本書タル條約本書取替セノ日ヨリ一ケ年ノ後ニハ合衆國ノ人民ハ左ニ記載シタル規則ニ從ヒテ日本國ノ內部ヲ旅行スル事ノ免許アルヘシ凡ソ內部ヲ旅行セント願フ人民ハ書面ヲ以テ合衆國ノ領事ニ願立ヘシ此書面ニハ旅行ノ道筋時限保養或ハ用向歟ヲ認ムヘシ

領事ハ此書面ノ趣意ニ相違ナク又願人ノ性質一體ニ善良ナル事ヲ充分ナリトセハ領事ハ此ノ書面ニ表向ノ奧書ヲナシテ之ヲ日本政府ノ相當ナル地方官吏ニ差出スヘシ地方官吏ハ之ニ據リテ其願人エ往來切手ヲ發行スヘシ

若シ此往來切手ヲ渡シタル合衆國人民中ニ不行狀ノモノアルトキハ直樣其モノヲ捕ヘ領事ヘ引渡スヘシ領事ハ此人民ニ不行狀アルノ事理ヲ充分ニ承知セハ直樣其ノモノヲ呼戻スヘシ且ツ右樣ノ事アルニ於テハ其モノヘハ以來他ノ旅行往來切手ヲ發行セサルヘシ

第四　日本政府ハ輸入品ニ付可取立稅目ニ付其ノ改革ヲナス事アラハ（註　來月）月前ニ公達スヘキ事ヲ約ス

第五　日本政府エ可相納稅額ハ都テ日本ノ金圓ヲ相用ユヘシ尤相當ノ時限中ニ此金貨入用ナル高ヲ容易ニ得カタキトキハ日本政府ハ其代リトシテ金貨百圓ニ付「メキシコ」銀九十九ドルラル九分ノ一ノ割合ヲ以テ「メキシコ」銀ヲ請取ヘキ事ヲ協議ス

註一、右草案ハ五月三日米國國務卿ヨリ岩倉大使等ヘ提出セラレタルモノナルニ付玆ニ挿入ス

二、右草案ノ歐文見當ラス

八七　五月二十二日（六月二十七日）日本駐劄獨國辨理公使（華盛頓ニテ）ヨリ岩倉大使等宛

條約改正問題特ニ最惠國約款ニ關スル件

千八百七十二年第六月廿七日於華聖東

昨日閣下え御面晤の砌御談話中日本と各國と取結ひたる條約中所謂最も優待されたる云々の條有之と申義に付御疑念の御口上有之に付卽ち墺斯太利翁加里府と日本天皇と取結ひたる條約第二十條及ひ第二十一條の寫差上申候

第二十一條に於ても條約改議及ひ其布告を以て現存の條約の權利廢却する義決て之無き義と存し候日本日耳曼の條約第二十條及第二十一條も全く墺太利條約と同樣の者に候

第二十條

日本

天皇陛下他國の政府及ひ其人民に與へ或は爾後與へんとする總て別段の免許及ひ便宜は墺地利及洪噶利政府幷に其人民にも此條約施行の日より免許あるへきを今爰に確定せり

第二十一條

來る壬申年卽千八百七十二年第七月第一日或は其後に至り此條約貿易定則幷輸入輸出の商稅を實驗し緊要なる變革或は改正を加ふる爲め是を再議し得へし然りといへとも此再議の趣は一ケ年前に告知すへし若し日本

天皇陛下此期限前に各國の條約を改議せん事を欲し其事に就て他の條約濟の各國にて同意せは墺地利及ひ洪噶利政府も亦日本政府の望みに從ひ此會議に加るへし

臣　フオンブランド

岩倉等閣下

註　「昨日…御談話」ノ記錄見當ラス但シ右談話ノ内容ニ關シテハ「木戸孝允日記」其ノ日ノ條參照

八八　五月二十三日（六月二十八日）　佛國臨時代理公使ヨリ副島外務卿宛

條約改正要項提示方申入ノ件

附記　右ニ對スル回答趣意書

改正要項提出シ難キ旨ノ件

Legation DE FRANCE AU Japon.

Yokohama, 28 Juin 1872.

Monsieur le ministre,

Une des principales questions dont la prochaine revision du traité Français avec le Japon me fait un devoir de me préoccuper, est celle de la juridiction. Je vous serais reconnaissant de m'indiquer aussi exactement que possible les réformes que vous désireriez obtenir de la part de mon Gouvernement

dans l'ordre de choses établi par le traité de 1858 afin que je puisse indiquer à Son Excellence le Ministre des Affaires Etrangères celles d'entre elles qui, dans mon opinion ne préjudicieraient pas aux véritables intérêts de nos nationaux, et donneraient en même temps une satisfaction aussi complète que possible à la manière de voir du Gouvernement Japonais. L'organisation des concessions Etrangères offrant pour moi un intérêt égal, je prierais aussi Votre Excellence de m'indiquer les bases de l'arrangement relatif à cette question qu'Elle compte proposer aux Puissances à l'époque de la révision des traités.

Veuillez agréer, Monsieur le Ministre, les assurances de ma haute considération.

COMTE DE TURENNE.

Son Excellence
Monsieur Soyesima Taneomi,
Ministre des Affaires Etrangères.

（右和譯文）

壬申五月廿五日來

以手紙致啓上候然は日本及佛國の間條約改正の義前以勘考可致大切のケ條の内裁判管轄のケ條有之候間元千八百五十八年の條約面に定めたる事形に貴政府に於て被成度き御變革閣下より可成丈委細に御報知被下候樣致度候左樣に御承諾被成候得は拙者の了簡に於て右御變革の内我國人民の利益不破貴政府の御見込に的當するのケ條拙者より佛國外務卿閣下へ可申進候尚右を御報知被下候節外國人居留地に付此後組立つへき規則の義を條約改正の節貴政府より各國へ御申遣可相成始末柄をも御報知被下候樣致度候右可得御意如此御坐候以上

明治五年壬申五月廿三日

佛國代理公使
コントヾチユレンヌ

副嶋外務卿閣下

註　右來翰ニ對シ我方ヨリ左記ノ如キ趣意ヲ以テ回答セリ

參考ノ爲附記ス

（附記）

明治五年五月廿三日付の貴翰落手ゐたし候然は貴國と我國との間に取結ひ候條約改正のケ條中裁判管轄の事及ひ外國人居留地の事に付此後各國政府え可申談我政府の見込を閣下より貴政府へ御申遣し被成度に付委細御報知及ひ候樣御來示の趣致承知候然るに條約改正の重事に付ては我政府より先般重臣を外國え派出し各政府と議論を盡さしめ尚時態の變遷と事務の適宜とを斟酌し便誼處事の權をも付托し置候故今政府の見込を閣下え報知候共我重臣より貴國政府へ此後申談候趣とは殊異有之へきも難計付ては同人等其職務を行ふ以前委任の條々詳告いたしかたく因之乍御氣の毒御求に應しかね候

（朱書）「此一件花房石橋兩氏より佛公使へ面晤にて本文の趣意を以斷りおよひ候間別段御返簡不被差遣候事」

八九　五月二十七日（六月二日）　岩倉大使一行ノ會議ニ附議セル箇條

條約改正談判ノ手順打合ノ件

明治五年壬申五月廿七日夜の會議衆論に基き我使節一行進退の義に付再應會議一席え下問の條如左

既に前議には下問いたし候通り今般小松書記官再渡いたし候得共肝心の御委任狀は持參不致其上此程字公使の心附け

により討論の處舊約に掲けたる殊典を一般に與ふるの義其道理無之とも難申於此集說によりて我使節一行の進退を豫定する事緊要に有之候間其順序を左に陳縷いたし候

一當國國務尙書と談判の條約箇條は此程より取調候草案決議の上之を英文に反譯いたし國務大輔に相渡候歟或は都合により國務尙書歸府の上直に相渡し十分に此方の趣旨を相貫候樣應接可致

一夫より改て使節より國務尙書へ可申入義は大久保伊藤兩副使歸朝の上建言いたし候處政府にて其議を採用し今般改て御國書を御渡相成條約全權委任狀も下賜候尤本書は兩副使持參にて歐洲へ赴候積にて其寫丈は今度書記官持參いたし候間左樣御承知可有之

一扨條約決議調印の義は我政府に於ては一ヶ所にて會議の上にて取結度義其期望に候此一ヶ所と申場所は歐洲中にて便宜よろしき某地を相撰み度趣勿論此義は貴政府を初とし各政府御承知の上ならては難相成義に候尤大久保伊藤兩副使發軔前御問合中上候處御不同意の趣には候得共我政府の期望に候間猶此段御相談致し候なりと可申入

右の通りに申談し若し國務尙書是を承知いたし候はゝ其會議の地は追て歐洲へ相廻り候上にて傳信を以て歟或は其地の在留公使の手を經てか其後へ可申入と相談し可申若又不承知の節は此方の都合より東京にてか或は話聖東にて歟可相結其節は使節の內再渡いたし可申左も無之は東京へ全權の人御差圖の義可相賴旨を申談し手別れと可致殊更全權委任狀到著せざるにより此邊の談判に都合宜敷かるへしと被存

當地の結局右の通にて相濟候上は使節の內歟又は書記官の內にても倫敦に渡り彼地の都合をなし其傳信を得候上使節一行も相渡り同所にて大久保伊藤兩副使を待合せ來著の上大に會議し英國への談判筋を謀り可申尤謁見の禮式等は英國政府にて許可する時は兩副使來著の前たりとも拜謁を遂け可申積

一當合衆國初め英國其外にて會議の義を承知する時は實に上策なれは決議の通り歐洲の一ヶ所に於て之を取結ひ可申之を上策となす

各國の政府より其全權を一ヶ所に差出し可申歟否は倫敦にて使節より各國の公使え問合せ其本國へ懸合候得は其成否は直ちに相分り可申

一此會議の事一二ヶ國にて不承知の節は斷然不被行義と見據へ然らは東京にて談判いたし條約を可取結間全權の人々を御差出可有之旨を使節より各國政府へ申入是は各國政府にて不承知は無之事勿論なり又使節に取りても何地に於ても條約を可結との御委任の趣意に觸候義は無之と被存是を中策とす

一扨使節は夫より御國書內の交誼聘問の御趣意を大目的として各國を巡歷いたし其地の宰相大臣等え面會の節は我國の事情と期望する所以を說明いたし候はゝ東京へ歸り候上條約取結の爲に多少其功驗は可有之と被存

一各國別々に條約を結ひ遂には其國々の爲に其望を達し結局は我國の損のみ多く得分は少なかるへし之を下策とす

右の通り衆議の大趣意に候猶其成否の處再應議論可致事

註　右文書ノ作成セラレタル日附竝ニ其ノ附議セラレタル會議ノ日詳ナラス仍テ便宜此ノ日ニ收ム

九〇　六月五日（七月十日）　米國國務卿別莊ニ於テ岩倉大使ト米國國務卿トノ對話書

三　條約改正ニ關スル件　九〇

條約改正ノ爲ノ各國合同會議等ニ關スル件

附記　大日本合衆國新定條約竝附錄草案

（表題）「特命全權大使合衆國々務尙書第九回談判筆記」

第九回談判筆記

明治五年壬申六月五日即千八百七十二年第七月十日新約克州ウエストポイントの對岸ガルリソンなる別莊に於て合衆國々務尙書え應接の覺　第一時半より二時半にいたる

特命全權大使　岩倉具視
國務尙書　ハミルトンフィシ
通譯　鹽田篤信
筆記　福地源一郎

一應挨拶畢て

大使　今日は折入て御談判いたし度事件有之候に付態々御別業迄推參致候次第に有之扨大久保伊藤兩副使我國に歸朝いたし候以來の狀實此程書記官壹人再歸に付委曲に相分り申候兩副使歸朝の上海外に於て條約取極の儀建言および候處政府にて之を許可いたし候尤取極へき

地は歐洲の一地にて會議の上に可相結旨に決議し其段改て政府より使節に下令被致右會議の地へ貴國政府よりも全權の人を御差出被下候樣拙者より御依賴可申旨申來候

尤此全權御差出の儀に付ては兩副使當地發軔前に森少辨務使を以て貴君へ御問合および候處貴國政府にては歐洲へ全權を御差出の儀は御不承知の趣御答有之是は兩副使も篤と承知の上にて歸國致候間貴國との條約は當國にては可相結儀を建議いたし百方力を盡して論辨および候趣然るに我政府の決議は之を許容せす一地におゐて會議條約と相決候に付今更申述候も氣の毒の至に候得共猶再應拙者より御依賴いたし候間全權の人を此會議の地へ御差出有之候樣いたし度候

尙書　先頃森少辨務使より右の談し有之候尤其節は公然たる談判には無之同人限りの問に候間拙者限りの思考を以て相答置申候此義を熟考仕候處頗る容易ならさる義に付其旨大統領えも建言いたし可申候得共拙者の見込にては米國政府におゐては迚も御同意致申間敷と存候

大使　我政府にては海外にて條約取結の事を許可し會議決定と治定いたし候間貴國政府よりも枉も全權の人を御差出被下間敷哉

尙書　唯今も申上候通り日本と合衆國との條約を取結候爲に全權のものを歐洲へ相廻し候儀は政府にて承允致間敷と被存候畢竟歐洲にて御取結可相成御見込は何等の利害得失を御謀り被成候ての御決議に候哉拙者に於ては其御趣意柄更に相分り兼候

大使　是は我政府の決議に候間拙者に於ても其趣意柄は難計候尤我使節一同の見込にては當國にて取結候積にて候得共政府の決議會議條約と相成候間不得止此段御依賴申候儀に候

尙書　和親貿易航海の條約を取結候爲に歐洲に於て會議の條約を御取結被成我國よりも全權を差出候樣貴國政府にて御依賴被成候は實に非常の御處置と被存候使節御渡來の上は當國に於て取結候歟或は日本にて取結候歟兩樣の內にいたし候こそ當然の儀と存候

大使　日本に於て我政府より此儀に付各國の在留公使へ差遣候公書は既に貴國の公使より貴君へ相廻し候哉

尙書　本日日本公使館より書通有之候得共其儀は何とも不

申越候

大使　是は我國の外務卿輔より各國公使へ差遣し候公書にて其趣意は今般の使節は初め聘問の爲幷に各國政府の考案を乞候爲に派出いたし候處今般改て便宜の地に於て條約取結の權を附與いたし候趣を通達せしなり勿論書面上には便宜の地とのみ有之何の地なる歟發輝といたし不申候へ共政府より拙者共への下令にはこの便宜の地は歐洲中の一地を撰み可申旨申來候

尙書　到底日本と條約を取結候爲に全權のものを關係もなき歐洲の一地へ差出候儀は甚た不都合の擧に候我合衆國に於ては決して此儀を承諾不致且つ是迄右樣の事を實行いたし候儀曾て無之候但戰爭後和睦を取結候爲の條約ならは隨分會議條約の例も有之候得共通常の條約は獨立國互に締盟するを主旨といたし候に付他國に關係すべき條理は無之筈此儀は合衆國政府にては尤も主張いたし候趣意に有之候右に付貴國政府の御趣意柄難相分候と申候儀に候

大使　只今演述いたし候公書中にも便宜の地と有之候に付愈々歐洲へ全權御差出の儀御不承知に候はゝ外に一方法有之候間猶一應御談し申度候

尙書　我國政府の便宜の地は卽ち話聖東なりと可申上候

大使　扨肝心の全權委任狀は大久保伊藤の兩副使持參いたし直に我國より歐洲へ向けて發航いたし候積に候是は貴國政府にても會議の地へ全權御差出の儀御承諾可有之と見越し候故に候然る處此儀御不同意の上は外に致し方無之候間是迄の條約談判は引續きて御相談いたし結局に至り夫より拙者共は歐洲へ發航致し彼地にて兩副使へ面會を遂け副使の內一人全權委任狀を携へて再歸いたし調印可及都合にては如何

尙書　一體合衆國政府の趣意は貴國の爲に可相成丈御都合宜敷樣にいたし度との事に有之此度とても貴君方の御都合を謀り候を目的と致し居候然るに唯今の御詞にては歐洲との條約を先にし而して後に合衆國に及ぼし被成候御趣意と被存候左樣に候はゝ我政府にても其節にいたり更に別段に可申上箇條も可有之是は兼て約定無之故に候此段爲念申上置候

大使　拙者より申述候趣意は我使節目今委任狀無之に付談判丈は落着迄いたし置其結局にいたり扨其後に一人歐

洲より立歸りて調印可致積に候

尙書　然る時は拙者は條約取結の全權を有し貴君方には無之故其談判に涉るも一方は正しく一方は正しからさるものゝ妄に相當り不都合に候

大使　我使節には全權無之にあらす大久保伊藤の兩人持參にて歐洲へ相廻り候義に候

尙書　左樣ならは其全權委任狀を御落手迄條約の談判を相延し可申候

大使　最先兩副使發輒前に御打合申上候節には使節は條約の談判を遂け候丈にて調印の儀は森少辨務使え相命し候位の見込にて御打合いたし貴君も夫にて御承知被成候然る時は何も唯今に至り此方は更に相替り候儀は無之候

尙書　拙者の考にては使節方へ全權委任狀到着の積に心得居候

大使　其節御打合申上候趣意に基き使節の內壹人立歸り調印可致と御相談いたし候儀に候

尙書　成程夫は最先御打合も有之候乍併熟思致し候處調印の節に至り何樣にも變更可相成ものを唯今の內に談判いたし候は空に涉り候て不都合に有之到底約束もなきものと同樣に候

大使　前條の趣意に基き談判は引繼きて御相談いたし調印丈を相延し候儀御同意被下間敷哉

尙書　然る時は雙方にて約束を以て拘束せざるものなれは調印の時に至り雙方とも何時たりとも好み次第に其箇條を變更いたし其趣意を取替へ可申此會議條約の儀に付ては恐らくは歐洲の諸政府より申上候儀有之候より貴國政府にて御趣意柄を御變し被成候儀と被察候一體米國儀は一太平海を隔て貴國と相對し日を遂て交誼を盛にし貿易も昌に及候より歐州の諸國より之を傍觀し頗る偏執を懷き候に付不佳の策を獻し大に貴國の邪魔とも可相成候殊更御同樣に御談判いたし互に草案を示し合ひ意裏を打明け居候處今更結局に至らすして英國へ御渡航の上は必然御變說被成候儀も可有之歟と被存候

大使　拙者の申上候趣意は談判丈取極め置其上にて全權を歐洲より持參立歸り調印可致丈けの事に候

尙書　左樣ならは全權委任狀到着迄談判を延し可申候

大使　是迄に條約の談判に涉り候儀に付此處にて結局を遂候ものを此後にいたりて變更いたし候儀は御心配には候得共歐洲へ渡候とて變說可致儀は決して無之筈此儀は拙者より御請合申上候既に使節を御信用ありて談判も御初め被成候儀なれは此儀も同樣御信用被成候樣いたし度候

尙書　拙者の方には條約取極の全權を所持致し貴君には之を御所持不被成候時は何樣の御談し有之候共これに從ひ難く候御同樣に政府の名代として談判に涉り候節に其全權の確證なくては大不都合にて候

大使　御尤には候得共御同樣に取極候談判の趣意を決して相改め不申確證有之候におゐては貴君も御安心被成談判を取繼き被下間敷哉

尙書　其確證の仕法相伺ひ可申候

大使　此儀は猶副使一同とも相談の上ならでは難相決候得共先つ拙者の見込にては副使の內を一人相殘し置歐洲よりそのものへ全權委任狀を相送り調印爲致候ては如何

尙書　副使壹人御殘り被成候も御立歸り被成候も到底同一の事に候何分それを以て變更せざるの確證とは難致夫迄にも必らす相替り候說も相始り可申と被存候右樣の不分明なる義を以て政府人民を約束いたし候儀は拙者におゐては難取計候今般の儀は貴國政府の御內情も貴君の御心配も考察いたし居候得共御引受難致義は實に不得止事に候尤も御談の趣は大統領へも建言可致候得とも多分不承允に可有之候詰り最先の趣意に基き話聖東にて取結候を第一の便宜とし然らざれは日本に於て取結候爲に全權をデロングえ相送り下令いたし候外致し度無之候

扨先頃御面會の節差上候條約草案は御熟覽被成候哉其箇條貴君には御滿足被成候哉

大使　右は篤と拜見いたし候處拙者共に於て滿足せさる箇條も有之又政府より此程の便にて申來候趣意に基き相加へ候箇條も有之依て貴案を原とし之に刪除增補を加へ申候

扨今般我政府より下し候委任狀にて條約取結の全權を共與し分與すと有之候に付都合次第正副使も相分れ候積に候右に付此趣意に基き一人相殘り候儀を申述候事

にて候

尙書　夫ならは雙方にて全權の書を照し合せ談判に取掛り候迄は我國にても期望する所の箇條を加へ貴國にても同樣加除被成候て宜敷筈に候間前以御斷り申上置候諸事貴國の御爲と可相成儀ならは可相成丈盡力いたし何事によらす御周旋可申上度候へ共條約取結の儀は我合衆國の國體にては國務尙書の議案に大統領の調印議院の許可を經以て全國の法則とも致し候程の儀なれは浮たる姿にては談判いたしかたく候扨貴君御見込の條約草案は最早出來候哉

大使　出來いたし居候

尙書　いつれ月曜日（第七月十五日）には話聖東へ歸府致し候積其翌日は大統領も歸館に候間直樣大統領へ相伺ひ御決答可申上又條約の御草案も其節迄に御用意被成度候併し御草案は今日御持參に候哉

大使　左樣ならは話聖東御着の上御相談被下度尤條約の草案は今日も持參致し居候へ共文中前にも申上候通り餘程相改め候箇條も有之其相改め處は何々の箇條と申儀は一々に御辯解難致又文中別段に標記も致し置不申此

段御承知に候はゝ唯今（註附記參照）この草案を貴君え差出置可申候

尙書　只今請取可申いつれ國務省へ相廻し拙者より差出候草案の稿本と比較爲致歸着の上其異同の箇條を調へ可申候尤御草案は我案を原と被成候儀と存候

大使　左樣に候（朱書）「第三號の草案を大使より國務尙書へ相渡す」

尙書　外に御談しの箇條も有之候哉

大使　別に可申上儀も無之候到底先頃よりの御約束申上候儀と齟齬いたし候姿に相當り殊更御避暑中に推參いたし深く御氣の毒に存候何分にも可然大統領へ御申上相成御決答の程相待申候

尙書　承知いたし候

（朱書）「是より雜話對食の後庭園遊歩第五時後に退散」

註　右對話ノ際日本側ノ提出セル條約草案左ニ附記ス但シ左ノ草案ハ刪補ノ跡甚シク從ツテ米國側ニ手交セラレタル最後ノモノハ詳ナラス又草案ノ英譯見當ラス

（附記）

（表題）「大日本合衆國新定條約竝附錄草案」

（朱書）「左ノ本文ハ正院議案ヲモ採用セリ」

明治五年三月十五日第四月廿二日（原註朱書）「御第一號（註七六參照）」使節ノ草案ヲ米國國務尙書ニ渡ス

同

五月三日第六月八日（原註朱書）「御第二號（註八六參照）」國務尙書ヨリ其草案ヲ使節ニ渡ス

同五月十八日十九日第六月廿三廿四日會議ニ於テ國務尙書ノ草案ヲ原トシテ之ヲ刪正シ我考案ヲ朱砒ス

五月　廿日稿　成

五月廿九日英譯成

六月五日第七月十日第九回談判ノ節國務尙書へ差出ス

國務尙書ノ別墅ガリソンニ於テ

日本天皇陛下および亞米利加合衆國は玆に兩國の間に存在せる和親を篤くせん事を願ひ且つ兩國の貿易交通を奬めん事を欲し和親貿易航海の條約を結ふ事を協議の爲に各々其全權を命せり卽ち

日本天皇陛下は

合衆國大統領は

此全權は各其委任狀を取替へ其善良適正なる事を知り左の條々を協議せり

第一條

兩國より互に其辨務使（註「辨務使或は」ヶ條ノ下ケ札シアリ）或は交際官員を派出し彼の都府に在留せしむる事を得へし且兩國より互に總領事領事副領事代理領事又は管商官員（コムメルシアルエゼント）を命し外國貿易の爲に開きたる港或は場所に居留せしむる事を得へし此官員等は最も優待せられたる國々の領事官員に許可すへき權理殊典特例を占むへし

右の交際官員及ひ領事官員は互に彼の國中におひて何れの場所にても勝手に旅行するの權理あるへし

第二條

兩國の總領事領事副領事は公務を司とるに付其權理殊典特例を占むへき爲に其職務に取掛る前に其在留國の政府に適當なる委任狀を示すへし其政府の看認め書を得たる上にて在留地方の官員及ひ人民より公務にて尊敬せらるゝ事を得へし

第三條

兩國政府にて命したる領事官員は其在留國の人民に非ざる以上は都て其國役幷に諸租稅地方稅等を免るへき事を約定

す但し貿易の爲歟又は其所有物の爲に納むへき稅は此例にあらすと雖とも中外の差別なくその地方の住民より納むへき高に過さるべし

（朱書ノ註「我草案第五條」ト欄外ニ朱書シアリ）
「但し此領事官員等は貿易を營なむに於ては其在留地方にて平民を治むる處の法律故例に服從せさるへからす

此官員は其役所の門前に政府の徽章を掲け其上に官名を記し置事の殊典を得へし尤此標記ありとて決て罪人を陰弊するの權利を附與するには非す又その家屋をして地方裁判役の追窮を免れしむへき名義あるに非す」

公用書類には猥りに手を下すことなかるへし又何等の時宜ありとも地方の官吏はこの公用書類を取押へ或は之に關係する事を得ざるへし

第四條

領事官員は自國商船内の取締を引受て管轄し海上港内の別を論せす其商船の船長士官（註「墨書朱消」）其外乘組のものの間に起りたる爭論就中其俸給の割合あるひは約定を履行する事に關涉したる諸務は獨斷にて裁判すへし

兩國の地方官吏は何等の名義ありとも此爭論に立入る事なかるへしと雖とも若し領事官員より願ひ出る時に其取押ゆへき事を緊要なりとせば乘組の者を追捕し之を擒縛し又之を入牢せしむる事に付地方官員より力を假すへし

右の取押ゆへきもの等に付ては日本および合衆國に於て領事官員より其地方官吏に差出たる願立の書面を證據として捕縛すへし但しこの願書には船目錄の書拔或は乘組人の姓名表を添ゆへし尤この捕縛せられたるもの等はその船の滯留中は領事官員の差圖に任すへきものたるへし

又この者等の出牢は領事官員の願書を證據として取扱ふへし

此者等の捕縛并に入牢の諸費は領事官員より之を拂ふへし

第五條

領事官員は自國の軍艦或は商船より出奔したるものを取押へ禁錮する事に付其地方官吏の助勢を求むるの權理あるへし此義に付ては領事官員より書面を以て此出奔人取押の事を裁判所或は裁判役或は其筋の役人え申立船目錄乘組人姓名表を示し此者は其船の乘組中の者に相違なき事を證すへし

此出奔人を取押たる時は其領事官員の差圖にまかせ申立人の願によりて其入用を以てこれを入牢せしむる歟又は其乘組歟或は同國の他船に送り渡すへし

若し右の取押へたるものを其捕縛の日より（註「六ケ」ト黑枠内ニ朱書シアリ）六ケ月の間に引取らさる時はこのものを赦し其後はこの舊罪を以て再ひ取押へざるべし

（朱書ノ註「我草案第八條」ト欄外ニ朱書シアリ）
「第六條

兩國玆に嚴約して以て彼此の人民その封彊及ひ管轄内にあるものの身體家產を專ら保護せん爲に裁判所を洞開し最も優待せられたる國民と同樣なる裁判の扶助を得せしめんとす右の人民等その國の法律或は故例に從ふて證據を立る時は敢て兩國の諸裁判所に於て之を眞正の憑詞と看做し兩國人民いつれも裁判所に出訴して須要の手段を盡す事勝手たるへし」

第七條

兩國互に協議し雙方より輸出する物品に稅を課する事なく且つ凡の法に叶ひたる輸入（朱書）「品」輸出（朱書）「品」は稅金拂濟の上兩國にて輸出入する事勝手たるへし「其稅（朱書）目兩國政府にて時々各々之を取設べし」（註「我草案第九條刪定」ト欄外ニ朱書シアリ）（註「墨書朱消」）

國の差別を論せす一般の人民に施すへき制限の外は陽はにても又は陰にても免許或は別段許可などの名義を設けて日本臣民と合衆國人民との間にある貿易の交通に制限を置かさるべし

（朱書）
「兩國人民の貿易及ひ人事の交際に於て一般の人民に施すへき制限の外は陽はにても又は陰にても制限を置かさるへし且つ此國の人民に於ては彼國の人民を雇ふて法に戻らさる使役に供する事自由なるべし」

（朱書ノ註「我草案第二條」ト欄外ニ朱書シアリ）
「兩國の人民は互に其國民を治むる處の法律諭告および故例に服從すへし」

第八條

兩國軍艦の用意品は雙方の開港場に陸上けし相當の藏敷を出し貸庫に納め或は公然と命せられたる政府の藏船に納むる事を得へし尤も其國に於て用ふる爲に賣拂ふ時の外は稅を拂はさるへし

第九條

（註「墨書朱消」）
日本政府は可成丈急速に各開港場に於て燈明臺を取建る事を約し右建築の上は國の差別を論せす入港の諸船より噸稅を課し其費用に充るへし

（朱書ノ註「我草案第三條」ト欄外ニ朱書シアリ）
「此方の船舶彼方の海港に到るものは凡て噸稅燈明稅引水稅および一切の諸稅官吏の手數料に就きて其取扱を受る事

とも最も優待せられたる國民と同樣たるへし」

第八條

（註　墨書朱終）
日本政府は其帝國の諸開港場に於て適當の港規則を創立する事を約す此規則を實地に施行すへき外國人の撰擧は其港に在留せる合衆國領事が許可せさる人物を命する事なかるへし

第九條

（註　墨書朱終）
條約游歩規程内および外國の貿易の爲に開きたる諸港に於て日本人民は合衆國人民に勝手に雇はれ又合衆國人民を勝手に雇ふ事を得へし

第十條

兩國の人民は互の地方に於て其信教に付最も十分なる安全を占るへし且つ其國の法律故例を當然に尊敬する以上は其宗旨信仰の事故歟或は自宅又はその爲に設けたる他の場所に於て相當なる禮拜を行ふの事故を以て之を煩し之を妨くる事なかるへし

第十一條

兩國人民の死骸は地方の相當なる規則により雙方にて適宜なる墓地に埋葬する事を得之を荒し之を發く事なき樣に保護すへし

第十二條

兩國中一方の管轄内にありて左の罪名を犯し他方の領内に來りて潛匿を求め其地にて見出されたる罪人は互に之を引渡すへき事を約す

但し此義は罪人を見出たる地方の法律に據りて其者の罪科は恰もなほ其地方にて犯せしものと同樣に審斷すへき程の確證ある上にて行ふへし

左に掲けたる罪名の内を犯せるものは之を引渡すへし

人殺し　人殺を謀るもの　强奸　火付　海賊

ムチニーと唱へ船乘組の惣人數か或は其内にても徒黨を結ひ船中に於て船長を欺罔し或脅迫して其船を奪取たるもの　强盜　追剝き　謀書　金銀紙幣公債證書バンク手形證文其外證書類を贋造する者　政府官省の公印極印證印標印を贋造するもの　雇ひ人或は奉公人にて其主人の害となるへき程の引負をなし其罪重科附すへきもの

此條約の明文は國論上の罪科には及ほさゞるへし且つ右に掲けたる罪科にて引渡されたるものは何等の時宜ありとも

從來犯したる他の罪科を以て審斷する事なかるへし

然れとも兩國政府は自國の人民にて右の罪を犯すものなりとも之を引渡すに及はさるへき事を協議す

第十三條

此條約の取極めに基き右の引渡を申立られたる罪人若し其潛匿を謀りたる地方に於ても又罪科を犯し捕縛せられたる歟或は罪科を犯せるものなりと決斷せられたる時は其引渡を延期し其者の赦免或は審斷通りの禁錮時限を滿したる後に引渡すへし

第十四條

右の吟味を免れて潛匿せるものを引渡すへき達書は兩國の交際官員より差出すへし若し其交際官員其國に詰合せさる歟或は其國政府の近傍にあらさる時は領事官員中の重立たるものより此達書を差出すへし

右の引渡を申立られたる罪人は罪科あると定まるに付其ものを審斷したる裁判所に於て罪科を極めたる書付の寫しに其官印を押し且つ其節の司法官員より此審斷役の公務權理を保證し猶其上に日本或は合衆國の辨務使又は領事この司法官員の公務權理を保證したる書面を添て達書を差出すへし

尤も此潛匿せる者を只罪科を犯せる者と看認たる時は其罪を犯したる國に於て之を取押ゆへき爲に發行したる追捕證書（ト）の正寫歟又はこの追捕證書を發行したる原因たる證據人口書の寫を左の達書に相添ゆへし

於此日本にては適當なる行政官員又合衆國にては國務尚書より右の潛匿人を取押ゆへき證書を發行し吟味の爲めに其筋の裁判役の前に連れ來らしむへし然る上にて法律を按し口書を糺し條約面に基き愈々引渡しをなすへき事と治定せは此般の場合におゐて行ふへき定例に從ふて此潛匿人を引渡すへし

第十五條

右の罪人を追捕し入牢せしめ送り渡す事の諸入費は其引渡しの達書を差出したる政府より之を拂ふへし

第十六條

兩國中彼の人民此の海岸に於て難破する歟風浪の難に罹る歟或は賊船又は敵船に追はれ止むことを得すして河灣港の内に逃込むことあるときは軍船商船の別を論せす懇親に之を遇し保護を與へ且其航海を全ふせしむる爲に其船を修復

し食料を得る等の事に於て緊要なる助力を與ふへし若し難船の荷物を卸しおよひ再ひ船積する事を緊要なりとする時は其地に於て賣拂ふへき品物の外は相當の規則に從ふて之を取扱ひ租稅運上を拂ふに及はさるへし

第十七條

合衆國の人民は外國貿易の爲めに開きたる歟或は開くへき場所に於て條約規程内およひ其地より定めたる距離内に於て日本政府の法律を遵奉して靜產を賃借し之を占むる事の許を得へし

第十八條

（註墨書朱枠）×（註「除」下欄外ニ墨書シアリ）兩國の政府は一方の准允を得るに非されは是迄雙方の人民にて賃借し所有し占領したる土地を所持するの法に差響き又は之を更生し或は其稅法を創立する法律を設け又は規則を建さるへし

第十八條

兩國の人民は他の（註「にして他の外國人を許されたる所に於てと」を「管轄内」の下に加ふ、「し」の「賣渡し」を除「下ケ札シアリ」）管轄内に於て地を賃借し其地およひ動所有を他人に賣渡し譲渡し遺物となし及ひ其餘の手續を以て之を處置するの權理あるへし且つ其相續人或は法に適ひたる代任のものは他の一方の人民たるに付其遺言狀の有無を論せす右の動所有を相續すべし此相續したるものは自身歟又は名代を以て之を占領し其意に從ふて之を處置するを得へし尤も右樣の場合に臨み其動所有を置たる地方の住民より納むる丈の稅のみを拂ふへし

若し此義靜產たるときは其相續人或は法に適ひたる代任のもの外國人たるの故を以て之を相續し之を所有する事は差支たるへし尤もそのもの丶相當なりと思考すへき程に此靜產を處置せしむる爲に（註墨書朱枠）三年の期限を許し其代料を故障なく又一切の稅を拂ふことなく持出す事を許すへし「地方に」（朱書×註「我草案第七條」下欄外ニ朱書シアリ）て定めたる或は定むへき相當の期限を許し其代料を故障なく持出す事を得へし尤も地方の住民より納むる丈の稅のみを拂ふへし」

第十九條（註「十九條全條」下下ケ札シアリ）

平和の時に於て其筋の日本官吏の免許なくしては合衆國の兵隊を日本に上陸せしめす又其筋の合衆國官吏の免許なくしては日本の兵隊を合衆國に上陸せしめざるへき事を協議す

第二十條（註「二十條全條」下下ケ札シアリ）

日本天皇陛下は此條約本書爲取替の期限又は其前にても帝勅を下し此條約に添「たる」（朱書）附錄のヶ條を十分に履行「すへき」（朱書）旨を玆に「約す」（朱書）

第二十一條

兩國に於て貿易航海の事に付直ちに他の一方に許さゞるへき殊典を外國に與へさるへき事を互に約す此他の一方は此殊典に制限なきものならは制限なくして之を占め若し又約束ありての事ならは其約束を履行して之を占むるを得へし

（註墨書朱枠）兩國の諸船は是迄占得し或は許可せられたる貿易航海の殊典權利を其儘に引續きて占有すへし

（朱書×註「我草案第二條」下欄外ニ朱書シアリ）一此條款を以て兩國中沿海貿易の事に用ふへからす其規則は雙方いつれも各自の法を以て之を治むへし」

第二十二條

若し此條約の箇條中に違背する事あらは雙方中その損害を蒙りたると思惟せる方より先つ確證を揭け損害の條件を記したる書面を差出し公裁を促し償を求め然るに之を拒絶し或は道理なく遲延するに非る以上は損害の議論を以て絶交の所業を令せさるへし又他の一方に對し戰爭を公布せさるへし

第二十三條

（註墨書朱枠）千八百五十四年第三月三十一日およひ千八百五十八年第七月廿九日日本およひ合衆國との條約竝に之に附屬する章程は此條約の箇條に反對せるものの外は猶之を實踐すへし

（朱書×註「我草案第十四條」下欄外ニ朱書シアリ）一從前日本帝國と合衆國一己又は他國と協同して取結ひたる和親貿易航海又は地方の事務につき約定したる一切の條約約定規則章程はすへて玆に之を廢し此條約は本書爲取替日より十ヶ年の間之を施行すへし一但し此期限前に一方より他の一方に此條約施行を廢止することを一ヶ年前に公達せさる時は之を滿期し猶其後迚も右樣の公達をなさ丶る間は尙ほ十二ヶ月の間之を遵奉し「年々十二ヶ月の終に於て之を續く」（朱書）べし

（註朱書黑枠×註「新加『地利條約ノ第廿一條ノ例』下欄外ニ朱書シアリ）若し日本天皇陛下この期限前に各國の條約を改議せん事を欲し其事に付て他の條約濟の各國にて同意せは合衆國も亦日本政府の望みに從ひ此會議に加るへし

（朱書×註「新加」下欄外ニ朱書シアリ）「第二十四條

此條約は一方に於ては日本天皇陛下の許可を得へく又一方は合衆國大統領及ひ議院の准允を經て之を取替すへし之は皇明治（註空白）日卽千八百七十（註空白）日本東京に於

て取替すへし此條約は和文英文の二通に認め其文意は全く同義たり依て此條約を保證せん爲めに雙方の全權茲に記名し調印するもの也」

附　錄

第一款

現今外國貿易の爲に開きたる諸港の外に猶左の諸港を開くへし

鹿兒島　石ノ卷　敦賀　小樽内　下ノ關

右の内二港は此附錄の本文たる條約本書爲取替の日より一ヶ年の内に開くへし今一港は其日より二ヶ年の内に殘り二港は其日より五ヶ年の内に開くへし

（朱書）「此諸港を開く時は新潟港を閉へし」（註「耳附錄第一條」下欄外ニ朱書シアリ）

右に掲載したる諸港を以て内外の貿易に於て實に樞要の地なりと看做すと雖も雙方の協議にて更に是より便利の港あるに於ては日本政府は其場所替を承諾すへし」

第二款

此附錄の本文たる條約の本書爲取替の日より「三」ヶ年の後（註「二ニヲ消シ「三」ト朱書」）には日本に於て合衆國人民靜産を質借し占有すへき（朱書）「舊條約の」境界を擴充し諸開港場より五里地内に及ぼし猶（註「二」ヲ消シ「三」ト朱書）「三」ヶ年の後には十里地内に及すへし

（朱書）「此規程を擴充する日より現時の居留地規則は之を廢し其規則税其地方官の審斷を受へし」（註「新加」ト欄外ニ朱書シアリ）

（朱書）「此程内に居住する外國人は日本政府より格別の允准を得るに非れは山林を斬伐し鑛山及ひ田畠を所有し産業の資となすを得す」（註「耳附錄第二條」ト欄外ニ朱書シアリ）

第三款

此附錄の本文たる條約爲取替の日より一ヶ年の後には合衆國の人民は左に記載したる規則に從ふて日本國の内部を旅行することの免許あるへし凡そ内部を旅行せんと願ふ人民は書面を以て合衆國の領事に願立へし此書面には旅行の道筋時限游覧歟或は用向歟を認むへし

領事は此書面の趣意に相違なく又願人の性質一體に善良なることを十分なりとせは領事は此書面に表向きの奥書をなして之を日本政府の其筋の地方官吏へ差出すへし地方官吏は之によりて其願人へ往來切手を發行すへし

（朱書）「日本政府は旅行するものを保護するは中外人民の差別なく一般に之を施と雖も其損害の爲めに別に償金を拂はさるへし」（註「新加」「正院樂」ト欄外ニ朱書シアリ）

若し此往來切手を渡したる合衆國人民中に不行狀のものあるときは「其事を領事に公達すへし領事は此人民に不行狀あるの事理を十分に承知せは直樣其ものを呼戻すへし」（註「墨書朱枠」）

（朱書）「之を召捕へ其國の領事に引渡すへし尤も」（註「耳附錄第三條」ト欄外ニ朱書シアリ）「石取押方并引渡等に付ての要用なる費用は領事の手に此ものを引取る時に」（朱書）「之を償ふへし」（註「新加」ト欄外ニ朱書シアリ）且右樣の事あるに於ては其ものへは以來他の旅行往來切手を發行せさるへし

往來切手を發行する毎に相當の手數料を拂ふへし

第四款

日本政府は輸入「輸出」（朱書）品に付課すへき税目に某の改革をなす事あらは「六ヶ」（朱書）月前に公達すへき事を約す

第五款

「日本政府に於て彼此の便宜を謀る爲に各地に適當の裁判所を設けて訴訟を聽斷する迄は皇曆安政五年六月十九日即ち千八百五十八年第七月廿九日取結ひたる條約に基き開港場に於て從前仕來の通り政府にて承認せし其地に居住する領事官員に裁判の權および其職掌を執行せしむる事を協議す」（朱書）（註「耳附錄第五款」下欄外ニ朱書シアリ）

右の時限に至りて日本政府より其公告をなす迄互に約定する事左の如し

合衆國人民日本人に對して法を犯す時は合衆國の領事裁判所に於て之を吟味し其上にて合衆國の法律を以て之を罰すへし

日本人民合衆國人に對して法を犯す時は日本の官吏に於て之を吟味し其上にて日本の法律を以て之を罰すへし

合衆國領事の裁判所は日本債主合衆國人に對して正當の催促をなす爲に開き置き日本官吏の裁判所は合衆國の債主日本人に對して正當の催促をなす爲に開き置へし」

第六款

日本政府へ可相納税額は都て日本の金圓を相用ゆへし尤も相當の時限中にこの金貨の入用なる高を容易に得かたき時は日本政府「其代りとして金貨百圓に付メキシコ銀九拾九ドルラル九分の一割合を以てメキシコ銀貨を請取べき事を協議す」（註「墨書朱枠」）（朱書）（註「新案」ト欄外ニ朱書シアリ）

（朱書）「此附錄の本書たるへき條約爲取替の日より三ヶ年の間メキシコ銀を以て入用丈けの金圓を賣渡すへし尤も其割合は造幣寮より公布したる時々の定價に從ふへし」（註「新加」ト欄外ニ朱書シアリ）

第七款

日本政府は條約游歩規程を全く擴充する迄は合衆國人民從

來占鎭し或は賃借せる地所の義に付稅法及ひ規則等を更正し或は創立することなかるへし」

九一

六月十五日（七月二十日）華盛頓ニ於テ岩倉大使等ト米國國務卿等トノ對話書

條約改正交渉ハ大久保、伊藤兩副使來着迄中止ノ件

皇明治五年壬申六月　洋千八百七十二年第七月二十日　於話聖東第十次會議

列席人名

岩倉大使　國務尙書　フヰシ
木戸副使　ヘール
山口副使　ライス
鹽田書記
田邊書記
ブルークス
一應挨拶了

魚　今日は御談判拂取候樣いたし度存候御國え差出置候セ

パルト方より文通有之御國政府於て御使節出先にて條約決議調印の全權御附與相成候趣各國政府談判の上便宜の地にて決議可及條御布告御坐候由左候はゝ當府おゐて御決議御調印可相成事と存候

岩　左樣に候此方にも其通申越候乍然先日も御別業え推參申述置候通各國政府談判の上便宜の地と申は歐洲中の某地に會議の心得にて其爲御國政府よりも名代人御差出方請求および候事に候

魚　仰の趣は先日一應拙者存意申述置候得共猶大統領えも承り候處國の政體に關係仕候儀不承知に御座候一體貿易航海の條約は各國相對にて取結候筈に御坐候間他國の地に會議候理合無之此趣意篤と御了解被下度候

岩　左候はゝ會議の儀は斷然御不承知と存候先日御談申置候副使の內當府居殘調印可致旨は畢竟兩副使直歐洲え可相越見込を以申上置候儀の處何圖今般桑港到着の電報有之當府參着も近日に有之左候はゝ全權委任狀も必持參可致旨談判の都合次第居殘可調印致との義は如何御考被下候哉

魚　兩副使は條約調印の全權御持參に相違無之候哉

岩　決て相違有之間敷候

魚　左候はゝ當府にて調印可被及候

岩　右は先日も申述候通拙者共迄申越候通には御國名代人御差出にて歐洲中の一地に會議御請求可致尤御不承知に候はゝ不得已副使の內同所より立戻り調印可致との趣意に有之右故立戻り候事と居殘り候事と兩樣の見込御賢慮御尋申上候事に御坐候然るに今般兩副使直樣當府相越候は申越候手續と相違いたし頗る疑訝いたし或は前趣意に異り候樣の儀も有之哉と心配いたし候其邊は兩副使當府到着面會の上に無之ては不相分候尤條約調印の全權は必持參の事に御坐候

魚　左候はゝ此度兩使共着の上必御調印可及の確證無之間談判結局の見据無之間今日は先日御差越の草案に據り一論辨可仕心得の處夫も無益に屬し可申に付先見合せ兩使御着迄差延し可申候

岩　尤歐洲會議の儀は幾應も申上候事には候得共斷然御同意いたし兼候

岩　兩副使到着も兩三日間に候間其上にて決議可致存居候今日此席にては御決答および兼候

魚　何日頃御着に候哉

岩　多分明後日卽月曜日に御坐候

魚　左候はゝ御着迄御談判差延し可然候

岩　大體の趣意におゐて決て相違は無之と存候へ共僅に兩三日間の事に付兩使着の上にて御相談可及乍殘念今日の御談判は差延し可申候

魚　水曜日には再他行可致積其前日は大統領方に會議有之候間其前日御着當日第二字御來會有之度候

岩　明後日は着相違も有之間敷候得共刻限の遲速も難計今より御約束及ひかね候彌到着候はゝ三字頃より參上可致候

九二

六月十七日（七月二十二日）華盛頓ニ於テ岩倉大使等ト米國國務卿等トノ對話書

日米間條約改正談判ノ貫徹シ難キ事情ニ關スル件

附記　五月十四日條約調印ノ全權御委任狀

皇明治五年壬申六月十七日　洋曆千八百七十二年第七月廿二日第三時　於話聖東

府第十一次會議

列座人名

岩倉大使　國務尚書　フキシ
木戸副使　國務大輔　ヘール
山口副使　ライス
鹽田篤信
田邊太一
ブルツクス

魚　兩副使は彌御着御座候哉

岩　今朝着致し候

魚　道中御障も無之候哉

岩　何も健固に候乍然暑中長途格別疲勞致候間今日も參館可致所不能其儀拙者共より宜申述候樣申出候

魚　全權狀は必然御持參と心得候

岩　持參致し候乍然右に付我國政府見込の委細も相分り候

魚　左候はゝ此地にて條約御決議御調印可相成儀に候哉

岩　其儀に付只今可申述候一體今日に至りケ樣の儀申述候事いかにも御氣の毒存候日本政府の見込は海外にて條約取結候事は許允可致候得共其爲歐洲の一地於て會同議定可致就ては御國政府よりも是非とも名代人御差出し相成候樣御依賴可申との趣意に御座候右は先達ても申入候事にて御決答の趣も御座候得共兩副使到着の上承り候處矢張別段の趣向も無之候間無據再應申述候最初御談判申候處は兩副使も素より相心得居候事に付盡力建言いたし候儀には候得共右樣決定申越候上は不得已次第に御座候

魚　大統領も不在に付御即答も仕兼候猶御口上の趣可申立候乍然前日御談判の節申上候より外御答振も無之候左候はゝ條約に付御談判仕候事は最早無益と被存候

岩　今日迄度々御面談申候上如是儀申出候事如何にも不快意千萬御氣の毒に存候

魚　拙者にも殘念不少奉存候合衆國政府にては可成丈御國の御爲相成候樣の條約取結申度種々談判も仕候儀に御座候處悉く水泡に歸し候事無據儀に御座候何れ各國にて御條約御取結にも可相成候間其後に至り合衆國にても右に基き又候御談判可仕と存候使節方にも彼是御心配御盡力の程は能々了解罷在候歐洲の一地と被仰候は何れの地に候哉御含伺度候

岩　何地とも難定即各國政府と相談の上便宜の一地にいたし候心得に候是迄格別御多務の外屢御面談およひ結局如是儀如何にも御氣の毒に候

魚　無據儀に御座候猶好機會も可有之

岩　先日御談の通御國にて會議御不承知の上は外各國政府にても定て不承知も可有之左候はゝ自然條約取結候事には及兼可申も難計候大統領には幾日頃御歸館御座候哉

魚　明日に候

岩　左候はゝ今日申述候儀猶再應御伺の上御決答可有之哉

魚　勿論に候乍然先日御決答申上候外答詞も有之間布大統領にも必定嘆息可仕と存候同人にも兩副使御歸朝の上は此地おゐて條約決議調印の全權御委任可有之と存込居候處右樣の次第無據儀には候得共滿足は仕間敷と存候

岩　最先御談判の趣に基き兩副使も歸朝拙者共も此迄盡力いたし候處右樣に成行候事御氣の毒は勿論拙者共にも殘念不少存候此段大統領えも宜布御申陳有之度候

魚　勿論可申陳候

右畢て大統領え暇乞に謁見如何被成候哉抔フキシより鹽田篤信ブルツクスえ内話有之候

註一、右對話ニ見ユル條約調印全權ノ御委任狀左ニ附記ス

（附記）

天ノ命ニ則リ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本國
天皇御諱敬テ威望隆盛ナル良友
某國皇帝名陛下ニ白ス朕幸ニ兩國間ニ存在セル友愛懇親ノ情誼ヲ永ク維持センコトヲ希フ至情ヨリ茲ニ貴重ノ使臣ヲ派遣ス乃チ右大臣正二位岩倉具視ヲ特命全權大使トシ參議從三位木戸孝允大藏卿從三位大久保利通工部大輔從四位伊藤博文外務少輔從四位山口尚芳ヲ特命全權副使トシ之ニ全權ヲ合與又ハ分與シ
陛下ノ政府ニ赴キ兩國平和ノ交誼ヲ益堅ク益廣カラシメンカ爲メ便宜ノ地ニ於テ商議センコトヲ委任セリ而シテ今我國ト貴國政府トノ間ニ存セル條約ニ載セタル條約改正ノ期近キニアルヲ以テ朕之ヲ改定修正シ大ニ公權公利ヲ擴充セシメンコトヲ願フ今此目的ヲ達セン爲メ最モ文明ナル諸國ニ行ハルヽ制度規模ノ善ク我國現時ノ事情ニ適スル者ヲ撰ハン事ヲ欲ス是以テ從來ノ條約ニ揭載スル趣旨ニ從ヒ貴政

府ト會議商量シ以テ此條約ヲ改正セシメンカ爲メ右特命大使及副使等ニ全權ヲ分與シ或ハ之ヲ合與セリ朕望ムラクハ右使臣等ヲ篤信セラレンコトヲ特ニ彼等朕ニ代リテ朕カ懇篤ノ友情ヲ證シ

陛下ノ萬福ヲ祝シ貴國人民ノ安寧ヲ祈ル誠意ヲ表スルニ當テハ更ニ寵眷アランコトヲ希フ

明治五年壬申五月十四日東京宮城ニ於テ親ラ名ヲ署シ璽ヲ鈐ス

御　諱　御　國　璽

奉勅　外務卿正四位　副　島　種　臣

合衆國大統領　グラント
大不列顛愛倫皇帝　ウヰクトリア
佛蘭西大統領　チ　エ
露西亞全領ノ皇帝　アレキサントル
獨逸皇帝孛漏生（註　コノ行原白）
澳地利皇帝洪喝利皇帝　ジヲーセフ
伊太利皇帝　ウヰクトルエマニユル
葡萄牙皇帝　ルウイス
和蘭皇帝　ウヲルレム
瑞西大統領（註　コノ行原白）　カ　ル
瑞典那威皇帝　レオポルト
白耳義皇帝　アメジヲ
西班牙皇帝　キリスチエン
丁抹皇帝　カメハメハ
布哇皇帝

註二、右ハ大久保伊藤兩副使途中米國ヨリ引返シ拜受シタルモノナルモ實際ニハ各國ヘ達セラレサリシモノナリ

九三

六月十九日（十月二十四日）　米國國務卿宅ニ於テ岩倉大使ト國務卿トノ對話書

日米間條約改正談判中止ニ付今後ノ見込談合ノ件

明治五年六月十九日暇乞として米國國務尚書非士宅え使節五名罷越候節副使四名は先に去り大使一人跡に殘りて内談せし如左

大使　先日も申上候通り折角取掛候條約の談判も半途にして畫餅になり實に殘念千萬貴君に於ても御盡力の處其

詮も無之氣の毒に存候乍併兩國懇親の儀は之に係らす不相替懇親の樣相祈候扨條約の義に付此後の御處分貴國政府にては如何の御見込に候哉

尚書　今般條約改正の義は素より貴國の御所望に付此方にても之を引受談判に取掛候處其後貴政府の御議論も有之趣にて遂に半途にして立消いたし候に至る上は合衆國政府は依然舊條約を固持するの權理は有之義に候

大使　今般の會同條約も既に貴國にて御不承知の上は歐洲の諸國にても同樣承知いたす間敷存候

尚書　若し歐洲におゐて新條約御取結の上は合衆國は矢張舊條約を固持し新條約にて他國へ御差許の箇條は之を占むるの權理有之候

大使　其儀に付ては將來の處何とか只々懇親の御相談におよひ度候

尚書　其節に至り猶又御相談も候はゝ可然取計方も可有之と存候

此後は雜話

記者曰國務卿は交際の事務は練熟せる故か其語氣溫和を旨とし婉曲の間に右の議論を含蓄せり然れとも其言語を親聽する時は又筆記の如く激烈の鋭鋒を露出せるに非す西州にて所謂交際家の話法なり

九四

十月二十二日（十一月二十三日）　英國外務省ニ於テ岩倉大使ト英國外相トノ對話書

條約改正ニ關聯シ英國側ノ意嚮打診ノ件

壬申十月廿二日外務省に於て

岩倉大使　陪從　杉浦三等書記
外務宰相　グランウヰル　通譯　アストン
雙方挨拶畢る

宰　此節の旅行は御有益に相成候歟

岩　有益不少候歸國の上は我國に於ても百工彌々盛に相成樣希望致候且又パークス氏アレキサンドル氏及アストン氏等をも差添被下甚懇切の御案内に預り至る處親切の御取扱是皆　女皇陛下の御懇志政府に御注意被下候所にて我等一統甚感悅致候今日は右御禮の爲め罷出謝詞申陳候

宰　先達てパークスより申聞候に　女皇陛下謁見前に拙者

え面會被致度趣承知仕候若し御談のヶ條も御座候はゝ
唯今承り可申候

岩　御談仕とも不苦候へは重疊に候我輩此度奉する所の使命の趣は則御國書中に有之通第一に聘問の禮を修め且從來我國の情態を詳に申陳へ將た條約改正期限近きにあるを以て貴國政府に御考案を承度事に候但し日本の變革の次第見込の處を備に申述候には時節も移り可申殊には略御承知の儀とも存候間大略申述候一體我國は數百年來鎖國の風習にして人心嚴に固結の處二十年來外國と往來候より近年迄の間容易ならさる形勢にて禍亂有之候末近く
天皇陛下一新天下を一統し人心初めて方向を定め其後數百の大藩を廢し郡縣の體裁を立候此儀は尤容易ならざる事業の處幸にして一の砲聲を不聞刄に血ぬらすして天下愈平治致候故に此上は偏に外國交際を重し前條申陳候趣旨を以我輩を差立候儀に御座候

宰　近年一般に日本の開化に進を承り甚之を悅且當國に辨務使被差置候義美事と存候

岩　我國も精々開化の地位に至らんと盡力すれとも未た十分ならす候

宰　近年改革已來日本に力を盡せし有名の人々
天皇陛下より使節として當國に被遣候事滿悅に存候扨條約は日本に於て御整被成候や於當國被成歟

岩　唯今中入候通於日本之を整候積に候

宰　條約改定に付ては別段御質談のヶ條は御座候歟

岩　右は我輩より申上候事は別段無之國書中に有之通貴國政府の御考案を承度候

宰　我か聞く所には宗旨の一條に付て何か六ヶ敷趣近年各國政府は一般に宗旨の禁を自由にするを國の爲めに益ある美事と致候

岩　此ヶ條に於ては後日猶御談し可申候

宰　外國人は日本國内を自由に旅行するを得ざるべし是は自由に差許し候方可然存候當國に於ては閣下御着已來御承知の通り自由の旅行出來申候故中外の國民互に樂み交々に益ありと存候

岩　御談の通我國にても文明各國と并立する事を希望致候に付將來は中外國民の差別なく旅行相成候樣可致積に候へ共當今の處にては未た頑愚の輩も有之外國人に自由の旅行を許す事は甚難事と相考候

宰　今日は又外に御談判の事件は無御座候歟

岩　於此方別段談判致儀も無之唯々貴政府の御考案伺度候

宰　ヶ條を此方より申入候に付ては少々思慮仕度候故再御面會の折に御談仕度候

岩　然らは何日頃に再ひ御面會の御都合出來候歟

宰　當月廿六七八日頃の間には何れも差支無之候

岩　然らは廿七日に御面會可申候

宰　廿七日に御待可申候

岩　其日は副使の内一人と在留辨務使をも同導致差支無之歟

宰　勿論差支無之候又大執政グラットストンえ御面會被成度候はゝ御案内可申候

岩　別して忝候何時にも御案内被下度候

宰　パークスは日本政府の進歩に付て餘程心を傾て之を希望し且己の職務にも心をいれ勉勵して兩國の商業の爲め益ある趣當政府に於ても幸と悅ひ候

岩　パークス氏も是迄日本の爲め盡力あり就中一新の際我天皇陛下の爲め殊に心を竭(マヽ)ん事もありて我國の爲め滿悅致候

宰　右樣承候へは當國政府の趣意に協深く滿悅に存候扨定て御承知に可有之十二月五日に女皇陛下より御引接有之筈に候

岩　然り承知致居候
其後挨拶をなして此席を撤す

九五　十月二十七日（十一月二十七日）　英國外務省ニ於テ岩倉大使等ト英國外相等トノ對話書

條約改正ニ關聯シ意見交換ノ件

明治五年壬申十月廿七日夕第五字倫敦外務省に於て應接概略

岩倉大使　山口副使
寺島大辨務使　福地一等書記筆記
外務尚書クランウヰル侯　ソルハルリーパークス
アストン通譯

尚書　過日の御談判に從へは條約改正の評議は日本にて御取行ひ可被成趣右は其通りにて可然拙者の考案見込御

承知被成度との事に候へは先貴方の御見込より承度候

大使　此程申述候通我御國書の趣旨に基き公理公權に從ひ我國と各國との交際致度に付我國の爲に相成候儀は其御考案承知仕度就ては我國の事情形勢可申述候間御不審の廉御座候はゝ御尋可被成候

尙書　左樣にて條約の談判は日本にて論定可相成に付只今十分にこれを討論いたしかたく乍去無伏藏日本の御爲申上候へは我英國との間に貿易を盛大に致し候より外無之其方法は荒增の所を揭候へは內地の往來住居の自在を外人に許し又何の港なりとも航海無差支義を主本と可被成卽我國同樣の體裁に相成度候

大使　追々我國內の產物も繁殖し運輸の便も相開き候はゝ漸々に猶開港場の數をも相增可申候得共卽今の所にては迚も英國同樣の姿にいたし候譯には難相成候其詳細は寺島より可申上候

寺島　現今纔の開港場にてさへ聊の規則を取設候ても一々外人より故障を立兎角不被行然るを御國同樣に致し候はゝ數層の難事相增可申候

尙書　難事とは何等の儀に候哉

寺島　假令は遊獵の規則瓦斯燈の取建港內泊船の方等も歐洲に於ては實に平凡の規則も猶我開港場に不被行位の事に候

尙書　我國於ては何れの國人たりとも總て政府の法に從ひ候事に候

寺島　日本にては決して不然詰り外國人我政府の規則に服從することなれは何事も無差支候へとも都て外國人と相談と申事に候故被行かたき事多く有之候

（朱書）「此時ハークスより外務尙書に日本開港場に於ては何も難事なき旨を論す」

尙書　是等の事は何も六ケ敷事には無之篤と其地方に於て御相談相成候て可然存候扨只今も申上候通何の港にても無差支往來候儀如何候哉

大使　只今寺島より申述候通卽今の港數にても混雜不少況んや多港におゐてをや

尙書　何故に左樣雜事相生し候哉

寺島　英國の如きは何國の船何の港に渡來候とも盡く英國地方法律に服從いたし稅則其外に至る迄唯英國政府の取極次第に從ひ別に在留公使にもコンシュルにも相談

致に不及我國のことときは全くこれに反し諸事相談の上ならては難行橫濱にても猶然りまして其餘の諸港に至りては尙更葛藤のみ迚も貴國を以て比較致候譯には到り兼申候果して是を行はんには先外人をして我法律に從はしむるを專一と致候

（朱書）「此時ハークス外務尙書に向ひ情實を論す」

ハークス　愚考にては目今何も是と云へき難事無之何を難事と被仰候哉水夫上陸亂妨等を申候哉

寺嶋　其儀丈は近來遲卒取締の法出來先患は無之候

尙書　然らは何々の規則不被行候哉

寺嶋　譬は今一例を擧ん遊獵場十里內の規則今に到るまて三ケ年を經て未た議決せす瓦斯の設方地稅の論皆我法律の通りに不被行より相生候難事也

（朱書）「此時ハークス又辨解す」

寺島　遊獵免許の儀今以落着不致には無之哉

パアクス　是儀は近々落着可仕其餘地代等の論も屹度相決可申候

（朱書）「此時ハークス又尙書に對し遊獵は免狀を得地代は之を拂ふ何も妨なしと云旨を再辨す」

尙書　追々と貴國に於ても交際貿易に慣習し中外の人民を同視するに至り候はゝ其時こそ別に外國人の爲に法則を設候にも及申間敷其機に至り候はゝ外人も御國法則を守り可申と被存候

大使　後來は兎も角も目下の處にては內地旅行沿海貿易等の事迚も貴國同樣に候ては難致乍併時勢相運ひ中外人民一視になり候はゝ外國人も全く我法律に從ひ可申との御見込に候哉

パークス　現今の時勢にては迚も地方の律には外國人服從致す間敷其故は日本の法律は歐洲と大異にして隨分不開化なる法もあり又其罰重きに過き苛酷に失するあり旁我歐人は從ひ申間敷候

尙書　拙者の見込もパークスより只今申述候通りに候

大使　夫故目今日本政府於て法律改正に取懸りやかて歐洲と其大概を同ふするにいたれは裁判を起す積に候

尙書　是は私一分より申上候もし御國裁判法十分に御國に被行其公平の實相顯れ候はゝ英國政府の見込も相變し可申先夫迄の所は假に規則を設け相談の上にて裁決候より外有之間敷候

大使　我君主手書中にも記載有之候通り今日は貴國の考案を得候爲御談し申上候左樣ならは貴國の御考にては我國に於中外人民の別なく同視の政をなし相當の裁判實地に行れ候はゝ英人をも此法律裁判の下に立しめ候儀御承知可被成思召に候哉

尙書　一旦には御引渡し難申乍去他日多の例に倣ひ候先貴國裁判の實効を目擊し十分公平と安心候はゝ民法丈けは貴國の權に任せ夫より猶一層進歩遂に刑法及可申候

扨沿海貿易の儀は如何の御見込に候哉又內地往來も御差許に相成其地方の律に背き候ものは召捕へ英の官員へ御引渡相成候ては如何

寺嶋　夫は實地に不被行候假令は遊獵の規則のごとき十里以內にてすら今以其法立すまして十里以外に至り可行屆事無之又一々召捕へ開港場へ送り候も詰り面倒にて第一入用相懸り手數の出所も無之候

パークス　右等の罪人送り屆の入用は此方より相拂候儀に候

寺嶋　我國の法律未た其例無之候

尙書　內地往來の法は往來切手を與え旅行差許候はゝ何も御不都合は有之間敷候

寺嶋　其不都合は往來切手を所持するも所持せさるも同樣に候

尙書　乍去支那にては此法を行ひ差支の筋無之樣存候

寺嶋　支那內地の差支は御問及無之により可申もし支那に問合せ候はゝ慮外の差支不都合も可有之事に候

（朱書）「此時パークス又往來切手の差支なきを辨す」

尙書　拙者共は日本の事情を不存候より何とも難申上候得共只今パークス申聞候所にてはさしたる差支も無之と存候

寺嶋　結局諸規則等都て外人に相談不致候ては不被行より種々の混雜相生候儀と存候

尙書　乍去自由貿易內地往來等の事御差許無之候はゝ御國の開化を進むるの手段は無之と被存候

（朱書）「此時外務尙書パークス座隅に去り密話良久」

寺嶋　裁判法律の實證を見たる上にて其權を附與するとの御說に候得共一旦其間外國人に與へたる權利は後に至りて挽回しかたし遊獵のごとき其例に有之又兵庫地所の如き海岸の地新築成功の前に山手住居を許せしに地稅の前約無之により今以地代を相拂ひ不申候

（朱書）「此時パークス日本に於て地稅を外人に增課する弊あるを述ふ」

尙書　此も結局日本に適當の裁判無之故に候

パークス　難事といふものは日本にて常に自由の權を裁判せられ候よりの事に候若し其事なくは難事も起る間敷候

（朱書）「此時パークスより日本の官員には定論なく一人々々其說を異にす縱令は一規則を問はんとするも各人其說を殊にすれは竟に其實を得すと尙書に述ふ」

尙書　到底日本と英國との貿易に利を謀る事第一義と存候將來條約改正談判の節に至り猶評論の次第も可有之と存候

大使　猶其節雙方にて打合候て隨分評決可申拙者共貴國の御考案を承り候丈け職掌に付今日相伺候他日多くの法律なと委曲歸朝の上可申立候

尙書　專制貿助（マヽ）自由の政務は都て英國にて實驗し遂に自由の大利を知りしなり幷此程の談判に申上候通り現今英と日本との政體に大異あるは宗門の禁に候旣に日本におゐて不相替嚴禁の政を被行候より或は拙者に書を寄せ貴君と御談判申上候を止め候輩有之候迄至り申候

大使　宗門の儀は一應御談申置度候初め三百年前天主教我國に入政務の妨になるにより遂に大禁の令を發し舊習の久しき又天主教の何者たるを知らすして之を忌むに至る今や一旦寬恕の令を出し候節は都て內地の人心に害するの恐れあり乍去開港の節より踏繪の法を廢し奉教の者を嚴罰に處せん（マヽ）今日に至りては假令之を奉するとも政事上に害なきものは之を咎むることなし終には寬恕の期に至るへく候

尙書　夫は宜事に候此外猶御談御座候や

大使　猶二ケ條有之候第一條は橫濱在留の貴國兵隊是は前日日本の形勢不穩ゆへ不得已事に候へ共最早今日に至りては全く不用に可有之御引拂の義相願度委曲パークス君へ話し置申候

尙書　熟考の上御答可申上候

大使　今一ケ條は下ノ關償金一條に候是は寺嶋よりも委曲御話し可申上候

寺嶋　下ノ關償金の儀是は六回の拂方に相定め三回迄拂濟と成四回に至り事務多端三ヶ年に延期申入尤其間に利足相拂候事に治定いたし即三百萬弗の内百五十萬は拂濟殘りの半金未滿に相成申候此義に付御談判仕度尤委細の樣子は此書面に相認め有之候間篤と御讀過の上御挨拶可被下候（註「此書面」ナラス）

尙書　篤と拜見いたし同僚とも相談の上御挨拶可申尤償金に代るものは此書面に御書入被成候哉

大使　固より書加へ置候尙後日面會相願度御都合宜日柄御申越可被下候

尙書　承知いたし候來る一週日には執政も御面會申上度よし申居候乍然其家屋修復中故不任其意殘念の趣故に拙宅御來臨被下候樣致度日期相定め可申上候

九六　十一月六日（十二月六日）　英國外務省ニ於テ岩倉大使等ト英國外相等トノ對話書

條約改正、內地旅行、衞兵引揚、下ノ關償金ニ關シ談判ノ件

壬申十一月六日第二字倫敦外務省に於て應接概略書

岩倉大使　山口副大使　寺嶋大辨務使

外務尙書グランウヰル　在日本公使ハルリパールクス

通譯（アストン）鹽田一等書記　筆記福地源一郎

一應挨拶畢る

外　先頃御面會の節に御談相成候件々の外猶別に相伺可申儀有之哉

大　別段可申上事件は無之候今日は貴君よりの御答詞相伺爲に候

外　先頃の御面晤には內地往來の事等申陳候處日本に於て難事有之との御辯解有之拙者に於ては右の御說明を伺候丈にて候間即ち此程の談判殘り二ヶ條の御返答可申上候

第一條は海軍兵隊引上の儀是は當今橫濱に屯所相設け置候も左までの緊要も有之間敷候へ共公使館の護衞等其儘打捨置候譯にも致兼候勿論以前は貳千餘の印度所轄の兵隊を差遣置候得共當今の處にては夫程の儀にも及申間敷との事に稍々相減し昨今の處にては海軍兵隊を以て護衞爲致候儀に候詰り公使の身上其外を大切保護致し候爲めなれは矢張相設候方日本政府の爲め御都合に可然と被存候尤パルクス儀は日本を去候以來既に多月に相成候儀故同人再渡の上篤と實地の景況を見候旨に候其報告に從處置可致十分の安心と申場合目擊の上右の兵隊可引上申候

大　貴國政府の御見込其通に候はゝ兵隊被差置も御尤に候得共未た目今の情實御存知無之故と被存候右兵隊御呼寄の節は國內騷擾の際人心均く都て不安心の儀而已に候處國政一新已來既に四五年にも相成此節に至りては諸事都て　天皇陛下の叡慮通りに多少の政務行屆き中外の事務各國同樣に進步致候を心掛け候折柄なれは最早掛念の儀は無之拙者儀申上候を御信用被下度尤貴國に於ても御掛念の處を强て解兵御申談仕候には無之候得共拙者共の口上にて我邦の形勢御賢察被下度最早貴國人の身上に付掛念無之儀は屹度御請合申候

外　貴國形勢の昔日に相變候儀は能々承知罷在候故兵隊も取替其數も減少致し候譯に候乍然公使より實際の報告を不待して全く之を引揚候儀は取計難く候

扨下ノ關償金一條の書類篤と拜讀致し候處右書中には何の約束を代りと致候儀發輝と致し不申

大　先兵隊の儀より相片付け其上にて償金の御話及ひ度候一體貴國政府に於ては深く日本政府を御信用有之既に此度の使命を達（奉カ）し罷越候ても其御懇篤の情は御取扱振にても分明に候殊更貿易の通交は日本の諸港におゐて英國を以て第一に致し諸外國の手本とも可相成御國柄に候然るに箇樣の英國政府にて猶御不安心の處より兵隊を今以御引上無之は日本の人民をして開化の運に進ましむの手段に無之拙者共に於ては深くこれを殘念に存候（此時アストン病氣を以通譯を辭す鹽田これに代る）

外　至極御尤に候へ共到底公使の實報を得候上ならては解兵の儀難計候

山口より寺嶋へ密話に及ひ大使より又寺嶋に問合す

パルクスは始終我方の樣子を見て眼を放たす一座默する事凡五分計

大　右の御挨拶にては詮方無之候

外　扨下ノ關償金一條は只今も申上候通御書面上には何の代りを以てするといふ約束も無之殊更英國一分の事に無之諸外國えも關係の儀に付今度各國御廻歷候はゝ其

考案を御聞取御歸朝の上にて實地の御談判に御取掛の節は我方に於ても篤と外國えも問合せ御國の爲めに可然御都合に相成候樣の處置も可有之候

大　過日は御同僚に御相談との御口上今日は又外國々へ御問合との事何れか間違には無之候哉兎角御言葉が違ふ樣に被存候

此儀に付鹽田アストンより心附の如くに問合せる先日の同僚と云し詞は英國尙書の同僚にあらす外國の外務卿を指して同僚と云しなり於是同僚の字義漸く相解り

外　最初より申上候通り一體今度の御使命は日本政府の御見込は被差置御回書面に基き英國の見込を而已御承知被成度との儀に付卽ち我見込の儀申上候也何れ御歸朝の上實際の談判に至らすしては取極候挨拶は出來兼申候

大　御口上の通りいつれ拙者等歸朝の上は各國にも承合候考案と實地經歷する所を以て我國の情實に應し折衷いたし可申積假令は內地往來の如き先頃も申上候通迎も英國同樣には處置致かたき義に候へ共又寺島より申上候如く中外の人民均しく國法に服從する猶英國に於けるか如くならす(ママ)隨分實地に被行可申歟此般の類卽ち歸國の上篤と彼我を照考し夫より實地に取掛候手續見込に候

外　私おゐても其御見込の處は篤より相分居候へ共實地の談判に涉候節ならては御談判致兼候

大　償金の儀は條約改正に御關係無之故拙者共見込の義申上度候

外　相伺可申候

大　只今は右の償金に代るへき約束無之との御口上に候へ共一體當初英國政府の御見込はあなかちに金を主と被致候には無之日本の陋習を破り貿易を盛大に致候大主意と被成候には無之哉此程も書面にて申上候通我邦の開化今日の進步に至り昔日馬關談判の節の形勢には無之候漸々貴國にて御希望被成候場合に至申候

パルクス　御說の通償金を主とするには無之候得共右談判の節は貿易の利を御許容無之より償金に取極候に至り候なり

外　兎に角一旦約定致候義は之を奉遵致候はては不相成乍

然實地の談判に及ひ候節は猶勘考致候御都合を謀り可申候

山口說を吐かんとす寺島之を止む

大　外務卿におゐては外に何と歟御勘考被致方は無之哉我等歸國の上實地談判の節に無之候ては御勘考被成兼候哉又は唯今どふとか外に考は無之哉

外　御歸國實地談判の節英國の處分も發輝相分可申候當地にては見込を御聞取被成候義使節の御趣意と存候

大　唯今も申上候通り償金は條約改正とは全く別議に候間此席にて御談判に及度候也

此談判外務尙書の口上始終不分明候也蓋し此使節條約改正の爲に無之各國の考案を得候爲と有之候故償金の事を此席にて談判致とも扨代りには何々箇條何の義を許すと云事に涉時は矢張條約改正にも差響き又々是を議決するの權も無之使節なれは矢張終には空論に歸すべし於此歸國實地談判の節に無之ては政府にて思考致候處を吐露し難候若其節には日本の御都合に可然樣盡力可致丈にて澤山と答候也と云意を含めり

大　○中(ママ)意味なる事を寺島より大使に分解す三使再ひ相談此程の書面中に代りの約束無之と被申候得共右書面中には燈明臺を取建其外の義をも書載致置候乍併是位にて十分の代りと不相成候はゝ猶御望の程を相伺御相談に及ひ度候

外　御書面中天皇陛下條約批准の義有之候是は當然の義にて決して代りと看做候義に無之如何となれは批准無之候へは敵對の場合に至り可申候又燈明臺迎も外國船の爲而已には無之日本商船の便にも相成候儀其上燈明臺御取建に付ては夫々燈明稅をも課被成候には無之哉

大　左樣ならは燈明臺(稅カ)を省候へは代るものと御看做可被成候歟

外　其邊の處只今は御挨拶難及候事瑣末に關り候より此一席にて御答に及かたく矢張御歸朝の上實地談判に至りて相決度候

大　左樣ならは歸朝の上の談判と致し可申候夫に付右償金殘り高の拂ひ期限も歸朝まで相延し候義御承知可被下候

パルクスより外務尙書え向ひ殘半高の期限は今年第

五月十五日を期と致候尤利息の代りとして増税を相延候義幷に右拂込み延期に付ては日本政府より是迄一言の御掛合無之今日初めて申出たる事を辨す

外　御歸朝の上の談判に相護り可申夫迄の處は只今の通り其儘に致置手を下さざる方に致可申候

右畢りて退散す

事項四　清國トノ修好條規通商章程締結ニ關スル件〔第四卷事項九參照〕

九七　一月二十四日（一八七二年三月三日）　柳原外務大丞ヘノ辭令

少辨務使兼任ノ件

外務大丞　柳原前光

兼任少辨務使

太政大臣從一位　三條實美宣

大内史正五位　土方久元奉

（朱枠〆註　朱枠内ニ「太政官印」下朱書シアリ）

明治五年壬申正月廿四日

（使清日記）

九八　二月二日（三月十日）　柳原少辨務使、鄭外務大錄ヘノ辭令

清國派遣及隨行申付ノ件

外務大丞兼少辨務使　柳原前光

任外務少記

太政大臣從一位　三條實美宣

御用有之清國ヘ被差遣候事

壬申二月二日

太政官

外務大錄　鄭永寧

外務大丞柳原前光清國ヘ被差遣候ニ付隨行申付候事

壬申二月二日

正院

（使清日記）

九九　二月三日（三月十一日）　鄭外務大錄ヘノ辭令

外務少記任命ノ件

外務大錄　鄭永寧

任外務少記

太政大臣從一位　三條實美宣

大内史正五位　土方久元奉

（朱枠×註　朱枠内ニ「太政官印」ト朱書シアリ）

明治五年壬申二月三日

（使清日記）

一〇〇　二月四日（假）（三月十二日）柳原少辨務使ヨリ外務省宛

清國派遣ニ付政府ヨリノ命令狀、照會文下附方其ノ他心得方等ニ關シ伺ノ件

今般少辨務使兼任ノ旨ヲ奉シ清國ヘ出張致候ニ付愚考ノ所在左ニ臚列シテ相伺候可然御加評ノ後御決議ヲ冀フ頓首

壬申二月

外務大丞　柳原前光

條件

一前光竝ニ鄭少記ヘ舊例ニ倣ヒ政府ヨリ命令狀（コムミツシヨン）下賜リ度左ニ取調相伺候

（註　此處ニ右ニ謂フ「命令狀」案記載シアルモ一〇一中ノ柳原少辨務使、鄭外務少記ヘノ命令ト同文（但シ日附ハ二月日トアリ）ニ付略ス）

前光考一昨年中鮫島森二氏歐米ヘ被差遣候節ハ交際事務取扱ノ下ニ留學生管轄ノ文字有之候ヘ共既ニ交際事務辨理致候以上ハ清國在留ノ領事官以下總テ管下ニ歸シ申候事故相刪リ候

一萬國公法公使ノ等級ヲ案スルニ第四等ノ使臣ハ信憑ヲ部臣ニ贈ルノ義ナル故外務卿輔公ヨリ昨年伊達氏出使ノ節款接ノ謝禮御申送ヲ兼テ信憑（クレデンス）トシテ清國總理各國事務大臣ヘ照會一通左ニ取調相伺候　照會文末ニ記ス

一今般少辨務使トシテ派遣被　仰付候ハ專ラ條約改正ノ目途ヲ告ケ敢テ駐劄ト極リ候義ニハ無之候ヘ共元來少辨務使ハ公法上第四等ノ使臣ニ列シテ國ニ代リテ事ヲ行ヒ交際事務ヲ辨理スルノ權ヲ有スルノ官職ニ候ヘハ滯留中ハ清國在留ノ領事官及外官吏留學生士農工商總テ統轄致シ可申事

一兩國交渉ノ事宜大事ハ決ヲ本省ニ仰キ候ハ勿論ニ候ヘ共瑣小ノ義ニ至リ候テハ隔遠ノ土地故臨機專決致シ候事

一少辨務使兼任ノ命ヲ奉シ候ヘ共未タ在留ト確定無之其上今般條約改正ノ談判ヲ除クノ外ハ交際事務希少ニ御座候ヘハ未タ常住ノ公使御派遣ニモ及間舖被考北京天津等ニ公館建立ハ暫ク相見合セ談判ノ地方ニテ相應ノ家屋賃借住居可致候事

一彼地ニ於テ自然事故有之歸　朝又ハ病氣故障等ノ節ハ少辨務使ノ事務鄭少記等ヘ讓與可及尤此義ハ彼國官員ヘモ報知シ不都合ナキ樣致シ可申候事

一彼國ヘ到着ノ後ハ日記略ヲ作リ船便ニ事情ヲ報上シ書翰往復總テ大少丞記ヘ可差立候ヘ共事件機密ニ關シ候事ハ卿輔ヘ可啓上事

一舊臘中建議ノ末本省ニ屬シ領事官御建設相成候ニ付テハ外務大錄品川忠道事代領事ニ被任上海港務辨理被命度候事

一今般同行中英語通曉ノ者無之歐西官吏ニ接遇致シ候ニ差支候ヘハ品川忠道ヲ上海ヨリ天津ヘ召連レ申スベク候事

一會計向ノ義其他件々追々伺ヒ可申候事

一條約改正談判ノ目的ハ別ニ愚按ヲ註シ相伺候事

以上

（註　此處ニ右ニ謂フ「照會文」記載シアルモ一〇三ト同文（但シ日附ナシ）ニ付略ス）

（使清日記）

註一、本號文書日附ヲ欠クモ假ニ此處ニ挿入ス

二、本號文書ハ伺ノ通省議ニ於テ可決サレタリ

一〇一　二月十日（三月十八日）柳原少辨務使、鄭外務少記、穎川外務大錄ヘノ命令狀

清國交際事務辨理及隨行仰付ノ件

外務大丞兼少辨務使　柳原前光

清國ヘ被差遣候ニ付交際事務辨理可致事

（朱枠×註　朱枠内ニ「太政官印」ト朱書シアリ）

明治五年壬申二月十日

外務少記　鄭永寧

外務大丞兼少辨務使柳原前光清國ヘ被差遣交際事務辨理被仰付候ニ付副從參與可致事

（朱枠×註　朱枠内ニ「太政官印」ト朱書シアリ）

明治五年壬申二月十日

外務大錄　穎川重寛

柳原外務大丞清國ヘ被差遣候ニ付隨行申付候事

壬申二月十日　正院

（使清日記）

一〇二　二月十日（三月十八日）副島外務卿等ヨリ柳原少辨務使宛

清國派遣ニ付條約改修交渉ニ關スル權限委任ノ件

委限要旨

外務大丞兼少辨務使　柳原前光

今因和清約成特請

欽命兼任少辨務使遣于清國

專將此番本卿大臣等奉

旨於兩國條款內照會彼國大臣預行擬題酌改事宜委爾方遞本

卿大臣等公文時詳加參述解說懇請妥協咨准以期隨時備

文往復修改條款便于善後互換務必兢々盡職爲要所有須

加參述情節開列于左

一公文所開因嗣後改定西例俟後改議其所以者始我欽使所

請于清國之約仿照彼與外國所約之例清國欽使則云我與

外國所定之約成于有來無往惟以貴國最爲隣近宜成有來

有往之約遂將兩國外交各例併載同條止據一本兩國共用

可以各自照行只因來歲我與歐西改約之案起于欽使適清

之後業已擬定專欲取法于歐西常行條例以改我國外交之

約如將兩國條約嗣後施于我國各港以有不合于該擬案者

爲憾

朝議必欲於互換正約之前細加解說熟商始行批准發使況現在

我各港所住清民不下數千兩民相狎之間每多奸猾亡賴之

徒欺人犯法互興詞訟爲地方累有甚于歐西諸國商民之衆

者即今清國新派理事官來須先熟察實地情形應尙有隨時

酌議之處俟其就緒之間未及能照條約會同訊斷又如後附

兩件有礙大局是以一併商及者也

一調處一條據查美國與清所約之文美國止云自爲清國從中

調處即我國與美所約亦是同然皆屬偏爲美國單作一面之

詞而我欽使與清互約者蓋據清美條約漢文而准之也今閱

美文知其不然則宜改之或仿清國與美我國與美之例竟成

偏爲之約亦爲不當是以議裁撤也

一刀械一禁論我國官吏紳裔常佩雙刀即農工商賈有時亦帶

單刀本係禮制而不便于公禁之也蓋清國以不常帶刀故亦

不欲我商民之在彼地者帶刀則由我理事官知其有禁令我

商民無犯可也故議削除

一公文所議之外通商章程第二十八款所載進出口稅一例須

議在我國各港則應照該海關成規而收稅

一除就以上各款本卿大臣等應與清國大臣時相備文往來預

行擬議事宜外所有約面各條款兩國無不遵行

右須知悉

明治五年壬申二月十日

外務卿　副島種臣

外務大輔　寺島宗則

（使清日記）

註一、本號文書和文見當ラス

二、一二二附記一及一二五附屬書參照

一〇三　二月十日（三月十八日）副島外務卿等ヨリ清國總理衙門王大臣宛

柳原少辨務使派遣ノ旨通報ノ件

大日本外務卿副島　外務大輔寺島

爲

申謝竝照會事曩者大藏卿伊達使于

貴國幸値

李爵閣大臣等早奉

欽派接議條約事宜況普謁

貴總理王大臣渥蒙

盛誼厚待實所罕遇遂獲永結兩國之好旋國反命殊愜

朝廷嘉悅本卿大臣等知之均深欣感之至肅此申謝茲奉

上諭和清兩國經已修好通商合亟揀派妥員遣于清國監視兩國

交際通商事宜欽此本卿大臣等隨即銓選外務大丞柳原

特請

欽命兼任少辨務使又外務少記鄭　作爲幫辨同遣于

貴國辨事至于本卿大臣等奉

旨爲因交換兩國正約預行擬議事件此次函達

李爵閣大臣懇請題明覆覆以便屆時特派

欽使互換正約須至申謝竝照會者

右　照　會

大清欽命總理各國事務衙門王大臣

明治五年二月十日

（使清日記）

註一、本號文書和文見當ラス

二、本號文書ハ四月九日柳原少辨務使ヨリ直隸總督李鴻章ニ手交シ其ノ轉達方ヲ託セリ一二一、一二二附記一參照

一〇四　二月十日（三月六日）副島外務卿等ヨリ清國南洋通商大臣宛

柳原少辨務使派遣竝ニ品川代領事上海駐在ノ旨通報ノ件

大日本外務卿副島　外務大輔寺島　爲
申謝竝照會事曩者大藏卿伊達使于
貴國幸値
李爵閣大臣暨應臬臺陳道臺早奉
欽派接議條約事宜況蒙
盛誼厚待實所罕遇遂獲永結兩國之好旋國反命殊愜
朝廷嘉悅本卿大臣等知之均深欣感之至肅此申謝玆奉
上諭和清兩國經已修好通商合亟揀派妥員遣于清國監視兩國
交際通商事宜欽此本卿大臣等隨即銓選外務大丞柳原特
請
欽命兼任少辨務使又外務少記鄭　作爲幫辨同遣于貴國辨事
至于本卿大臣等奉
旨因後交換兩國正約預行擬議事件此次函達
李爵閣大臣懇請題明覆覆以便屆時特派
欽使互換正約又外務大錄品川忠道任代領事在滬管理本國
人民通商事務所有屬員從之爲此備文照會
貴爵閣大臣希即查照除少辨務使等在津聽候辨事外將該
領事等員一節煩爲移行上海道憲存認該官員等使其遵約
供職可也須至申謝竝照會者
右　照　會
大清武英殿大學士兩江總督南洋通商事務全權大臣一等毅
勇侯曾
明治五年二月十日

（使清日記）

註一、本號文書和文見當ラス
二、本號文書ハ柳原少辨務使カ携行シ三月二十一日上海ニ於テ道臺沈秉成ニ手交セル處南洋通商大臣曾國藩死亡ノ爲代任何璟ニ轉達サレタリ　一一七、一二一參照

一〇五　二月十日（三月六日）副島外務卿等ヨリ清國直隸總督宛

柳原少辨務使派遣竝ニ品川代領事上海駐在ノ旨通報ノ件

大日本外務卿副島　外務大輔寺島　爲
申謝竝照會事曩者大藏卿伊達使于
貴國幸値
李爵閣大臣暨應臬臺陳道臺早奉
欽派接議條約事宜況蒙
盛誼(厚カ)原待實所罕遇遂獲永結兩國之好旋國反命殊愜
朝廷嘉悅本卿大臣等知之均深欣感之至肅此申謝玆奉
上諭和清兩國經已修好通商合亟揀派妥員遣于清國口岸監視
兩國交際通商事宜欽此本卿大臣等隨即銓選外務大丞柳
原　特請
欽命兼任少辨務使外務少記鄭　作爲幫辨同遣于
貴國辨事嗣後遇有本卿大臣等與
貴大臣爲因擬議改換正約事宜往來文件便令解通文內情
節時加參述解說以期往來兩得妥協又外務大錄品川忠道
任代領事在滬管理本國人民通商事務所有屬員從之爲此
備文照會
貴大臣希即查照存認該官員等使其遵約供職可也須至照
會者
右　照　會
大清協辨大學士直隸總督北洋通商事務全權大臣一等肅毅
伯李
明治五年二月十日

（使清日記）

註一、本號文書和文見當ラス
二、本號文書ハ四月九日柳原少辨務使ヨリ直隸總督李鴻章ニ手交サレタリ　一二一、一二二附記一參照

一〇六　二月十日（三月六日）副島外務卿等ヨリ清國直隸總督宛

批准前條約改修ヲ提議スル件

大日本外務卿副島　外務大輔寺島　爲
照會事明治四年九月十九日我
欽使伊達歸來即將與
貴大臣議定之修好條規及通商章程等奏呈復命事畢既而
本卿大臣等奉

上諭前者兩國全權大臣議立修好通商之約查其條款可以各自照行惟以來歲我與歐西諸國改修條約之期將至已將今後意欲改議事件大略擬定在案著將此次兩國條約細爲核對若有應行酌改之處即須舉其綱領照會清國大臣預爲擬題略准以便批准遣使互換本約欽此本卿大臣等欽遵

諭旨當將此約就該擬案事理逐款查覈題其綱目如左

一修好通商各條款內因嗣後改定西例應行修改事件從前我國與各國間彼商民則有來我商民則無往而今特發欽使遍歷歐西欲取法于諸國互相常行條例以定我國外交約款而待彼諸國來人耳故昨與清所定條約至他日我與歐西改定其約之後則如國法訊斷等事必有須行更正者是以應議俟後改正

一修好條規第二條調處之約

兩國既結和誼若遇事從中調處盡其友情雖無此條有權可行是係諸國通例故此一條須議裁撤

一修好條規第十一條刀械之禁

刀械之於我國人也有准無禁惟清國所禁耳此遵修好條規第八條由我理事官檢束之可毋庸立約明禁也故此禁約須議削除

以上綱目已經奏准爲此本卿大臣等備文照會

貴大臣竝派委外務大丞兼少辨務使柳原　外務少記鄭　查照其所陳述煩爲裁覆俾本卿大臣等能與

貴大臣時相備文往來預請擬題略准以爲批准互換之地幸莫加焉須至照會者

右　照　會

大清協辨大學士直隸總督北洋通商事務全權大臣一等肅毅伯李

明治五年二月十日

（使清日記）

註一、本號文書和文見當ラス

二、本號文書ノ清國側ヘノ手交ニ關シテハ一二一、一二二附記一及一二五參照

一〇七　二月十九日（三月二十七日）米國臨時代理公使ヨリ副島外務卿等宛

日清修好條規中ニ攻守同盟ノ規定存スルヤノ噂アルニ付實情照會ノ件

No. 75　United States Legation,

Japan, March 27, 1872.

Sirs,

Three or four days ago there appeared in the newspapers the translation of a Treaty, said to have been made between China and Japan in which appears this extraordinary clause—"China and Japan being friendly, either shall in case of experiencing injustice or wrong from another State, be entitled to assistance or good offices from the other"—This if true is of course an "alliance offensive and defensive", and the object of this note is to enquire of Your Excellencies as to the truth of the rumor.

I have the honour to be,
Your obedient Servant,
CHARLES O. SHEPARD,
Chargé d'Affaires.

Their Excellencies
Soyesima Tanenani,
Terashima Munenori,
H. I. J. M.'s Ministers for Foreign Affairs.

（右和譯文）

申二月廿日來ル

七十五號

以手紙致啓上候陳者三四日前の新聞紙中に支那と貴國と御取結相成候條約の譯文有之其內に左の格段なるケ條相見へ申候

兩國好ミヲ通セシ上ハ必ス相關切ス若シ他國ヨリ不公平及ヒ輕蔑スル事有ル時ハ其知ラセヲ爲サハ何レモ互ニ相助ケ或ハ中ニ入リ程ヨク取扱ヒ友誼ヲ敦クスベシ

右實事に候はゝ素より聯爲攻抵の盟約に有之候間此書簡の主意は右實況に候哉閣下え御問合致候義に有之候右可得御意如此御座候以上

千八百七十二年第三月廿七日

シヤルレス、オ、セハルト

副島外務卿
寺島外務大輔　閣下

註　尙佛國臨時代理公使ヨリ二月二十日（三月二十八日）附副島外務卿等宛書翰ヲ以テ本號文書ト同文意ノ照會アリタルモ右書翰ハ略ス

一〇八　二月三十五日（四月二日）副島外務卿等ト獨國辨理公使トノ對話書

日清修好條規第二條等ニ關スル件

壬申二月廿五日第十字於外務省副嶋外務卿寺島
外務大輔獨逸國公使フヲンブランド應接記の內
支那國と御取結候條約の儀に付相伺度候右は私出立前本
國於て致一覽驚入候未た御調印は不相成候哉
然り第二ケ條其外可相改義有之故此節使節可差立と存候尤
右は支那米利堅の條約書に依り候義なから支那の方のみを
見て相認候處後に米利堅の方取調候へは相違致有之雙方調
印の本書に間違有之候は如何敷儀に有之夫れは兎も角も已
に懇信相結ひ候上は右樣の義書載不申ともそれ丈の權理は
獨立國於て可相持義に候間此度右ケ條可除去旨申遣候筈に
御坐候
此時書類指示す
此間筆記の者御用有之不得細記
此御書付寫一本頂戴相願度候

一〇九　二月二十五日（四月二日）　獨國辨理公使ヨリ副島外務卿等宛

日清修好條規第二條廢棄ニ關スル對話ノ趣獨國政府ヘ注進ノ儀照會ノ件

Kaiserlich
Deutsche Mission
in
Japan.

Jedo, den 2ten April 1872.

No. 4

Excellenzen!

In der Unterredung, welche ich heute mit Eueren Excellenzen über den zwischen Japan und China abzuschlossenen Vertrag zu führen die Ehre hatte, haben Euere Excellenzen mir erklärt, dass die kaiserl. Regierung den Vertrag in seiner jetzigen Form nicht ratifiziren und namentlich die in Artikel II desselben enthaltene Bestimmung eines Bundnisses zwischen Japan und China im Wegfall treten lassen würde. Indem ich hiermit von dieser Erklärung Euerer Excellenzen Akt nehme, werde ich zugleich nicht unterlassen, dieselbe zur Kenntniss der Regierung Seiner Majestät des Kaisers meines allergnädigsten Herrn zu bringen.

Ich benutze diese Gelegenheit, Eueren Excellenzen die Versicherung meiner vorzüglichsten Hochachtung zu erneuern.

Der Kaiserliche Minister-Resident,
V. BRANDT.

An
Ihre Excellenzen
Soyedjima Gaimu kyo und
Terashima Gaimu tayu.

（右和譯文）

第四號

以手紙致啓上候然ハ今朝閣下エ拜晤之時貴國ト清國ノ間ニ
被相結候條約ニ付御引合申候處右條約ハ今ノマヽニテ
天皇陛下政府御調印不可被成就中第二ケ條ニテ日本國ト清
國相應援スヘキ旨被書載候文以來御廢却可被成云々閣下貴
答ノ趣致承知候猶今此書簡ヲ以テ前文委曲承領シ且其通リ
我國
皇帝我親愛君主陛下政府ヘ注進可致旨ヲ御念ノ爲申上候右
之段可得御意如此御座候以上
千八百七十二年第四月二日
獨逸國辨理公使
フオンブランド

副嶋外務卿
寺嶋外務大輔　閣下

一一〇　二月二十五日（假）（四月二日）　柳原少辨務使等ヨリ副島外務卿等宛

日清修好條規改正ニ關シ內白ノ件

今般清國ヘ少辨務使兼任ノ命ヲ奉シテ發向シ本約互換ノ事
宜談判仕候付テハ愚案ノ件々左ニ內白仕候可然御涵察奉願
候也
壬申二月
柳原前光
鄭永寧

今般條約改刪ノ御照會ハ專ラ西約改定ニ因テ議論ノ發端
トナセトモ起原ハ修好條規第二條及ヒ第十一條ヨリ來ル
其議ニ曰ク第二條ハ兩國和誼ヲ結ヒテハ自ラ調處ヲ行フ
可キ事約上ニ明載セザルモ其權義アリト前光公法書ヲ閱
スルニ云ク兩國有爭論時有別國調處其間或不請而來或請
之而來或一國請之來或兩國請之來或因前約有善爲調處之

語而來作中保者若係自行前來彼兩國俱可辭而不受若兩國早有成言有憑何國爲中之語辭而不受卽爲失信爲中者固得與同議論但無强逼彼此依從之權亦不能保其約必成然爲中者大概亦兼爲保也ト又云ク保約之所許者不過遇事相助而已其事若敗不任其咎若係他國理直而當助之國理曲不必相助若其事與前約不合亦不必相助也ト是卽チ第二條ノ原意ニシテ名ケテ中保ノ例ト稱セリ前文ニ兩國有爭論時有別國調處其間或不請而來ト是御照會所謂ノ約上ニ明載セザルモ行フ可キノ義アリトノ基根ナラン又第十一條刀械ノ禁令ハ我領事ニ命シテ是ヲ取締ラスヘキノ旨ナレバ是ヲ要スルニ只約上ニ載セタルヲ刪ラントノ御趣意傍觀ヨリシテ評スレハ宜シク容易ナルカ如シ然レトモ實地談判ノ際ニ方リ擔當辨論スルニ臨ミテハ其責任ヲ辨シテ御趣意徹底ニ至ラシムルハ未易ノ事ナリ彼ノ拘泥不遷ハ我ノ日進改革ト逕庭ス是其一ナリ全權議定ノ約ヲ一朝變更スルハ他國ニモ其例乏シ是其二ナリ彼國鎖封ヲ主トシ開國ヲ好マサレハ元ヨリ條約ヲ修シ往來通商スルハ宇內ノ通義タルヲ知ラズ中國ヲ以テ自ラ處リ四夷ヲ撫スルノ見ナレバ議論苟モ彼カ持守スル所ニ觸レハ輙チ條約ヲ廢止セン

ト唱フ是其三ニシテ宜ナル哉米魯瑞等ノ如キ國權ヲ退讓シテ約ヲ修スルモ其已ムヲ得サルニ出ルナラン抑使ヲ他國ニ遣ハシ和親交際ヲ請フ各勢利ノ爲メニ非ザルハナシ其勢利ニ關シテハ往テ請フ者ト坐シテ接スル者ト與奪ノ間兵威ヲ用ヒサル以上ハ其住テ請フ者ニ能ク十全ノ望ヲ成就シ得ル者鮮シ故ニ一介ノ使ヲ以テ好ミヲ他國ニ求ムル者ハ循々然ト彼ヲ誘ヒ然シテ後我カ望ム所ヲ謀ルニ國權勢利皆其中ニ在リ是萬國人情ノ常ニシテ善交ノ第一方也然ラハ臣等出テ使スルノ目的ハ專ラ交際ヲ保護シ條約ヲ修全スルヲ大本トシ其論スル處ハ我國西洋ト條約改正ノ後ハ清トノ約ニ於テモ變更スベキノ條件不少彼モ亦西歐ト條約改定セバ我ヲモ一途ニ就カシムベシ然ラバ昨年ノ約ハ多ク廢紙ニ屬シ其新典ニ則ルヘキハ論ナシ故ニ改定セント欲スル條件ヲ預シメ議論シテ卽今彼ノ領諾ヲ請フベキモノハ修好第二條及第十一條ナレトモ約上ニ存シテ其如ク行ヒ難キ事ヲ述ルモノハ領事會同審斷ノ義ナリ此三條ヲ今日ヨリ議定シ置其他ハ我國西洋ト條約改正ノ後ニ到テ懸合改正シ其改正ノ談判ヲ了結シタル後本約互換ノ使ヲ派出スベキ運ヒト存シ候處右ノ掛リニテ御異存無之哉御裁示ヲ請ヒ候事

一御照會面ノ件々ハ李鴻章ヨリ總理衙門ヘ伺ヒ何トカ返書可差出其上ニテ卿輔公ヘ可寄呈ト存候ヘ共領事會同訊斷ノ義卽今難行竝ニ廿八條輸出入稅ノ儀ハ御委任狀ノ中ニ敍出セシ而已ナレハ前光少辨務使ノ職ヲ體シテ李鴻章ト談判ノ上何分ニモ照會或ハ約束ヲ取換シ置中度若會同訊斷ヲ拒ミ候一件ヨリ彼我ノ大體ニ響キ候樣ノ議ニモ及ヒ候ハヽ猶飛札ヲ以テ進止ヲ取リ可申事

一彼國到着ノ後條約改正ノ談判イタシ候ニ付テハ種々紛紜ノ議論モ可生就テハ其邊新聞紙或ハ各公使宛ノ傳聞等ニテ浮說百出シ候共輕易ニ御動搖有之召回等ノ命ニ被及候テハ臣等手足ヲ措ク所無之候條御聞捨難相成儀ハ其時々卿輔公ヨリ御紙面ニテ御汰沙被仰越度候事

一談判ノ難易ハ管窺ヲ以テ前件巨細ニ申上候通ニ候ヘ共其成否ハ彼ガ應許ニ由レハ元ヨリ臣等ノ逆シメ視定ムル所ニ非ラズ此段ハ正院ニモ本省ニモ深ク御涵察被成下度奉願候事

以上

（使清日記）

註一、右伺ハ「使清日記」ノ二月二十日ノ條ト同二十五日ノ條トノ間ニ「二月　日」トシテ挿入セラレ且「柳原前光鄭永寧清國發行ニ付彼地談判日案ノ件々外務卿輔ヘ內白シテ允可ヲ得」ト記載シアリ

二、本號文書ハ日附ヲ缺クモ前述ノ理由ニ依リ假ニ此處ニ挿入ス

一一一　三月二日（四月九日）副島外務卿等ヨリ米國臨時代理公使宛

日清修好條規第二條ハ攻守同盟ノ主意ニ非サルモ右條項削除ノ談判開始ノ筈ナル旨回答ノ件

三月二日達ス

千八百七十二年第三月廿七日附貴翰落手披見いたし候陳は新聞紙中に我國と支那と取結ひ候條約の譯文有之其第二條實事に候はゝ聯爲抗抵の約に付虛實御問合被成候旨承知いたし候右の條漢文にては貴國と支那との條約中揭載のケ條に均しく候故御申越の如き主意には無之候乍併我政府評議の旨も有之近日官員派遣の上は右ケ條取除け方談判致させ候積りに有之候右回答如此御座候以上

月　日

米代理公使閣下

外務卿輔

一一二　三月九日（四月十六日）副島外務卿等ヨリ獨國辨理公使宛

日清修好條規第二條廢棄ノ旨獨國政府ヘ注進ノ儀差支ナキ旨回答ノ件

申三月九日ケンプルマン出省の節相渡
その節卿輔直渡しの事

千八百七十二年第四月二日附貴簡致落手候然は我國と清國の間に取結候條約の義に付過日御面晤に申述候通り貴國政府え御申越可被成旨御來意の趣承知いたし候此段回答可得御意如是御座候以上

年　月　日

卿輔御兩名

獨乙公使閣下

一一三　三月九日（四月十六日）大藏省ヨリ外務省宛

本邦在留支那人取扱振ニ關シ問合ノ件

御國内在留の支那人過誤失錯有之節從前は都て御國人同樣の措置に有之候處昨年同國交易條約御取結相成候上は支那人雇入并交際上彼此爭訟の義出來候節は未た領事官も在留無之に付身分取扱振且措置方等の義は現今何樣の御規則に有之候哉致承知度此段及御問合候也

（下ケ札）

壬申三月九日

大藏省

外務省御中

追て本文差懸り有用に付至急御回答有之度候也

（下ケ札）

條約御取結相成候得共いまた假條約にて殊に領事も無之義に付支那人取扱振は先是迄の委にて可然旨大藏省えは回答致し置此掛合文面支那行の使節えも申遣し右等の事典も打合申越し候樣相達し候ては如何御坐候哉

一一四　三月十七日（四月二十四日）副島外務卿等ト獨國辨理公使トノ對話書

清國修好條規第二條、第十五條ニ關スル件

壬申三月十七日於外務省外務卿副島種臣外務大輔寺嶋宗則獨逸公使フランフラントえ應接記の内

一修交條規中第二ケ條十五ケ條不都合の旨申立る

一不都合の廉々は取除き可申筈に候

一一五　三月十八日（四月二十五日）清國出張柳原少辨務使等（上海ニテ）ヨリ外務大丞等宛

上海到着ノ事情等報告ノ件

一翰啓達致シ候時下春深雨濃ノ節卿輔兩公ヲ始メ各位御揃愈御健勝御奉職敬賀候然者卑職等其御地拜命發行ニ付テハ從來彼是御配慮ヲ得先以無滯當十六日上海着船更ニ相變リ候儀モ無之御休慮可被下候則チ別冊日記略相副（註「別冊日記略」省略）ヘ候卿輔公ヘモ可然御轉達被下度偖又當地道臺ニ會晤シ卿輔公ヨリ品川ヲ代領事ニ被任候吹聽ノ御照會相渡シ南洋通商大臣ヘ屆方相賴ミ度心得ノ處道臺南京ニ赴キ兩三日中歸着ノ由殊ニ外用向モ有之旁以六七日當地滯留ノ心得ニ候巨細ハ當地同知官陳福勳トノ對話書中ニテ御照知可被下候イツレトモ近日輪便見計ヒ天津發行ノ積尚其節ニモ可申寄存候ヘ共先ハ平安着船ノ御報竝ニ申謝相兼如斯ニ候謹言

壬申三月十八日

鄭永寧

柳原前光

外務大少丞記各位貴下

尚以宮本少丞殿ヘ申入候品川代領事ヘ昨九月ヨリ當二月迄ノ御手當金等相渡シ且是迄澁滯ノ清算向早々仕上ケ差立候樣申渡置候此段御含御照料有之度土子權中錄ヘモ御傳致ヲ賴候事

副啓當國別ニ相變ハル儀モ無之一二ノ新聞如左

一曾國藩死後大傅ヲ追贈シ文正公ト謚ヲ賜ハリ一等毅勇侯ノ爵ハ其子曾紀澤ニ命與シ世襲セシメ銀三千兩ヲ賜マヒ喪事ヲ理セシム實ニ非常ノ郵典ニシテ頗ル優待ノ由

一清國皇帝今年立后ニ付欽天監ニ命シテ吉期ヲ選ム卽チ七月廿六日納采九月十五日大婚ト定ル由

一李鴻章ノ建白ニシテ當地ニ出洋前路局後路局ヲ設立シ生徒百名ヲ選ミ歐洲ニ留學セシム年齡ハ十二歳ヨリ廿一歳

迄留學年限ハ十五年ニシテ一人ノ學費銀四百テイル有奇（即チ一年分）ト定ム現今專ラ其選擇中ノ由又當地製鐵所ニ外國人ヲ雇ヒ軍艦數隻ヲ造リソレニ生徒ヲ載セ歐洲ニ航渡シ技術ヲ傳習セシムト云フ其軍艦ノ最大ナルモノ一隻ノ造費百萬テイルト云

一先頃中ノ香港新聞ニ和清兩國條約ヲ訂立スルハ清ノ禍ニシテ和ノ福ナリ其故ハ昨年所訂條約ニ日本人滿足ナラサル廉有リ此末終ニハ兵端ヲ啓クニ至ラン然ル上ハ和ノ勝利ニシテ清ノ敗亡ナラント揭ケタル由ニテ清人モ少シク疑惑ヲ抱キ居ル由

（使清日記）

一一六

三月二十三日（四月三十九日）　外務省ヨリ清國出張柳原少辨務使宛（電信）

日清修好條規第十五條文意不詳ニ付後便ニテ委細指令スル旨通達ノ件

柳原少辨務使殿　　外務省

修好條規第十五條中猶平時云云トノ文意不詳ニ付後便委細可申達候也

壬申三月廿二日

註　一一二ニ記載シアル右文書ニハ「猶」ノ右側ニ「猶ハ其ノ誤カ」トアリ

（使清日記）

一一七

三月二十三日（四月三十九日）　清國出張柳原少辨務使等（上海ニテ）ヨリ外務大丞等宛

副島外務卿等ヨリ南洋通商大臣宛ノ照會文ノ轉達方ヲ上海道臺ヘ依賴セシ旨等報告ノ件

辰下列位彌御安泰御奉職敬賀候下官等一同依舊瓦全勤公御休慮可被下候陳者本地道臺沈秉成當十九日南京ヨリ歸到廿一日前光永寧及ヒ潁川大錄品川代領事沈道署ニ往ク卿輔兩公ヨリ南洋通商全權大臣曾國藩ヘ柳原少辨務使鄭幫辨品川代領事等ノ事ニ付御掛合ノ照會公文沈道臺ヘ渡シ轉達相賴ミ候尤曾國藩歿後其跡代職有之由ニ付御照會其代職ヘ相達シ其返翰廻到次第屆方等夫々手當致置候偖又今廿二日沈秉成陳福勳來館回拜相濟ミ明廿三日郵輪ニ乘込ミ廿四日曉開櫂天津ヘ向ケ候事ニ相決候巨細ハ別冊日記略ニテ御承知卿輔兩公ヘモ可然御轉陳相願候

（註　別冊日記略省略）

同行之內英語通曉ノ者無之付品川代領事ヲ天津ヘ召連候旨兼テ伺定置候處現今在本地ノ日本人凡六十名ニ過キ其間水夫ナド無賴之徒不少神代少錄壹人而已ニテハ管束屆キ兼且品川代領事新命ノ際ニ方リ自然不都合有之候テハ不宜候付旁以テ相遣シ置候尤永寧義英語概略相通シ且天津北京等ニテハ公使領事トモ大抵漢語譯官ヲ備ヘ居候故是ニテ差支ヘモナカルベク萬一事務繁劇ニ至リ候ハヽ其節召寄候筈ニ致置候開拓使ヨリ商法取調ヘノ爲メ滿川成種外三人當地ヘ差越シ居候逐々出商ノ基業等相立チ候上ハ興旺ノ機ニモ至リ可申存候

租稅權助本野盛亨以下二名海關規則取調ヘノ爲メ先般渡來ノ處已ニ取調ヘ相濟ミ次便ヨリ歸國ノ趣ニ候

當地製造局ニ於テ廣方言館ヲ設立シ西人五名ヲ雇ヒ專ラ格致ノ學ヲ漢譯イタシ居候其譯書現今新刻出來ノ分書名如左

運規約指　製火藥法　汽機發軔
開煤要法　化學分原　航海簡法
地學淺說　化學鑑原　算學啓蒙
御風要術　金石識別　勾股六術

是等多クハ輪船製造方要用ニ付譯出セシモノト見ヘ有用ノ書ニモ可有之前光已ニ之ヲ購閲ス其文字頗フル難澁ナレトモ自然開化ノ一端ニモ可相成哉ト存付候本省ニテハ御要用無之トモ諸君中ニテ御望ミノ方モアランカ御入用ナレバ品川神代ヘ御申越有之度候先ハ當地發船御報旁如斯候謹言

壬申三月廿二日

外務少記　鄭永寧
外務大丞兼少辨務使　柳原前光

本省大少丞記御中

副啓協辨大學士李鴻章舊冬來保定府ニ罷在候處本月八日天津行臺ヘ戻リ居候由相聞ヘ都合宜舖存候然ルニ今般奉命談判ノ事件至重至難ニシテ原ヨリ成功ハ覩定メ難ク候ヘ共彼地到着ノ上三四回ノ談機ニ於テ難易ノ鋒端ヲ試見シ得ベク就テ其開談ノ順次等寢食ヲ廢シ千計萬慮罷在候將又其御地ノ情景相變リ候義無之哉日誌新聞官員錄布令等ノ類時々落チ無ク御送リ被下度尙清國掛リヘモ御命シ置冀候也

（使清日記）

一一八

三月二十三日（四月三十九日）　外務省ヨリ大藏省宛

本邦在留支那人ノ取扱振ハ條約ノ批准アル迄從前通リノ旨回答ノ件

壬申三月廿二日達し濟

大藏省御中　　外務省

清國と條約御取結相成候に付同國人雇入方并過失有之候節取扱振云々御掛合の趣承知致し候右はいまた彼より官吏も差置不申殊に右等の事に付ては別に談判決定可致と存候間條約批准不相成迄は從前の通り所置致し候義に有之候間左樣御承知有之度此段回報および候也

壬申三月廿二日

一一九

三月二十六日（五月三日）清國南洋通商大臣ヨリ副島外務卿等宛

品川外務大錄上海代領事確認ノ儀ニ付テハ修好條約批准交換後迄待タレ度旨等回答ノ件

照會

大清欽命兼署通商大臣署兩江總督部堂江蘇巡撫部院何爲照復事同治十一年三月二十五日據上海關沈道送到貴卿大臣照會一件均已誦悉查前欽差大臣辨理通商事務兩江爵閣督部堂曾　業於本年二月初四日因病出缺本署大臣先後欽奉諭旨署理兩江總督兼署辨理通商事務大臣卽於三月十三日在江寧省城接受關防任事所有貴國外務大錄品川忠道任代領事在滬管理本國人民通商事務希行上海關道存認一節貴國在上海通商一切應行事宜應俟兩國議約互換事畢訂期擧行方能開辨本署大臣合先轉行上海關沈道知照一俟換約既畢擧辨有期卽將領事官存認俾得遵約辨事爲此備文照復貴卿大臣希卽查照可也須至照復者

右　照　會

大日本外務卿副島　外務大輔寺島

同治十一年三月二十六日

（使清日記）

註　右文書ハ上海在勤品川代領事ヨリ四月五日附書翰ノ別紙トシテ柳原少辨務使等宛ニ送致サレ柳原少辨務使等ハ四月十二日天津ニテ受領セリ猶一二一參照

一二〇

三月二十九日（五月六日）外務省ヨリ清國出張柳原少辨務使宛

日清修好條規中不穩當ナル箇條ノ廢棄改正方ニ關シ指令ノ件

壬申三月廿九日差立候書面案

修好條規第十五條の義先便電信を以申入置候に付御承知と存候右は此程李佛公使と應接の砌清國條約に心付の廉忠告不審の廉質問等有之節心付尙乂篤と勘考候處他條にも不穩當の邊追々心付夫々左に申入候

一第十五條此ケ條中平時云々の一段甚た難解候其故は平時とは卽ち戰時に對する文字にて旣に平時と云へは戰時の條規に非す隨て局外中立の義にも當らす此條々併せ揭へき筋に無之義判然に候併し此平時と云は甲國は兵を用る時なるも乙國之れに關せざる時は乙國は則平時なりと云說も可有之哉に候へ共究竟平時に於て許さすといへは戰時は之を許す嫌ありて文字穩當ならす殊に前段貿易并に船隻の出入を停め云々との義も其意唯損傷を受さらしむるに止まれは是乂中立の義にも當らず假令此約あらさるも封港を要する時は船隻出入を止め貿易を止めさるを得さるの事時あるへし故に此條全く刪去を善とす

一第十七條結尾の兩國書籍云々此段自ら別事にて上文と相關涉せず是に揭る甚た不可なり旣に我稅則中無稅品の部板本の一桁あり故に通商章程に揭る猶可なり宜しく是に刪去るへし

一第十三條中倘此國人民在彼國聚衆滋擾數在十人以外云々此條に據れは數在十人以外ときは則ち好し若し十人以內なれば舍て問わさる者に似たり甚た謂れなし宜數改正を議し數字以下六字を刪るへし

右前一條は全く廢棄し後二條は改正候方可然と議定候付不取敢此段相達候尤照會并に委限追加とも文案等不都合無之樣前段の意を以て取しらへ爲可有之白紙へ押印いたし差廻候間可然御取計可有之此段申入候也

壬申三月廿九日　　外務省

柳原少辨務使殿

一二一　四月十三日（五月十九日）清國出張柳原少辨務使（天津ニテ）ヨリ副島外務卿等宛

副島外務卿等ヨリ李鴻章宛書翰本人ト面晤ノ上相渡セル旨竝ニ條約改正談判ノ景況等報告ノ件

附記　四月五日清國京報

臺灣ニ於テ琉球人殺害事件ニ關シ清國閩浙總督ヨリ同國政府ヘ伺ノ記事

時下薄暑ニ際シ益御清寧奉職被爲渡慶賀仕候陳者前光事前月拜別後海上平安清國ニ到着シ追々其景況去ル八日迄ノ日記略ヲ以テ大少丞記ヨリ普覽致シ候事ト存シ候九日ニ到リ協辨大學士李鴻章ヘ面晤兩閣下竝ニ伊達從二位氏ヨリ申謝照會類相渡シ何レモ受納致シ候然ル後條約改正ノ談判追々相始メ候事ニ候然ルニ同人何分公務繁多ニ付天津海關道陳欽記名江蘇海關道孫士達ト申候兩名ヘ與奪候故屢次辨論會晤候事ニ候抑今般拜命ノ趣意ハ各國無例ニ等キ大難事ニ候得共此至重ノ任ヲ被命候奇遇ヲ感戴シ何程カ成功ヲ奏シ報答仕度日夜苦慮致シ居リ候得共容易ニハ前途分明ナラズ混沌未分ニ御座候談判書大ニ錯雜致シ考訂ニ精神ヲ費シ居候條後便ニ附送可仕候將又實地ニ方リ候テハ本省ニ在テ御教諭ヲ請ケ候トハ或ハ相違候事モ不免正ヲ捨テ權ニ趣カザルヲ得ザル情態モ御座候結局御趣意貫徹ニ到リ後害ヲ不招樣ニ處分候心得ニ御座候

代領事品川忠道新任報知ノ御照會上海ニ於テ道臺ヘ轉託候處曾國藩沒去候ニ付其代任何璟ト申者ヨリ返書差送リ候條文中披檢ノ末差上候御照收奉願候此文意ニ據レハ不約互換マテハ內許ノ貌ニシテ是ハ清國ノ通例ト存候乍併同人奉職筋ニ於テハ既已ニ昨年來餘國ト等シク事務照辨致シ居候事ニ御座候尤此照復ハ寫シヲ以テ同人ヘ相達シ置候

琉球人清國領地臺灣ニ於テ殺害ニ逢ヒ候事ニ付閩浙總督ヨリ清政府ヘ伺書京報（京報ハ我國ノ太政官日誌ノ類）ニテ一見候ユヘ自然廳島縣心得ニ相成候モ難計ユヘ訓點ヲ附シ差上候

先者船便ニ取紛レ亂略要々ノミ如是御座候當國ヨリハ追々大少丞記ヘ紙面相送候得共未タ更ニ一回ノ返報ヲ不得候何卒御下命有之陸續酬應日誌新聞類迄モ差越候樣願望致候謹テ時祺ヲ頌シ平安ヲ祝ス誠恐頓首

壬申四月十三日　夜八字天津府三岔河公館ニ書ス

外務大丞兼少辨務使　柳原前光手記

副島外務卿
寺島外務大輔　兩閣下

副啓亂毫不文可然御洞察奉願候

三白修好條規第十五條ノ根原タル清米約文ヲ拔萃シ大少丞記ヘ相送候御覽可被成候頓首

（使清日記）

註　本號文書ニ謂フ「訓點ヲ附シ」タル「京報」見當ラス但シ使清日記中ニ存スル左ノ記事ハ之ニ該當スルニ付附記ス

（附記）

同治十一年四月初五日京報

福州將軍兼署閩浙總督臣文煜福建巡撫臣王凱泰跪奏爲琉球國夷人遭風到閩循例譯訊撫恤夷伴有被臺灣生番殺害現飭認眞查辦恭摺馳　奏仰祈　聖鑒事竊據署福防同知張夢元詳報同治十一年正月十七日准臺灣縣護送琉球國兩起難夷松大著島袋等五十七名到省當卽安揷館驛妥爲撫恤一面飭傳該國留閩通事謝維垣譯訊據難夷松大著供伊是頭目官馬依德是夷官連同跟丁舵水一共四十六人俱係琉球國八重山島人坐駕小海船一隻裝載方物往中山府交納事竣于同治十年十月二十九日由中山府開行是夜陡遇颶風漂出大洋折斷帆桅船隻任風漂流十一月十二日漂至臺灣洋面幸遇民船救護伊等四十四人登岸原船沖礁擊碎該處民人將伊等帶赴鳳山縣衙門轉送臺灣縣安頓公所尙有同伴二人竝蒙鳳山縣續送至臺灣縣衙門蒙給衣食錢文詎跟伴永森宣一名患痘身故給棺收殮一面派委員辨將伊等配船護送來省又據難夷島袋供同船上下六十九人伊是船主琉球國太平山島人伊等坐駕小海船一隻裝載方物往中山府交納事竣于十年十月二十九日由該處開行是夜陡遇颶風漂出大洋船隻傾覆淹斃同伴三人伊等六十六人鳧水登山十一月初七日悞入牡丹社生番鄉內初八日生番將伊等身上衣物剝去伊等驚避條力庄地方生番探知率衆圍住上下被殺五十四人只賸伊等十二人因躲在土民楊友旺家始得保全二十一日將伊等送到鳳山縣衙門轉送臺灣縣安頓均蒙給有衣食由臺護送來省現在館驛等供由布政使潘霨造冊詳請具奏聲明牡丹社生番圍殺球夷應由臺灣文武前往查辨等情前來臣等查琉球國世守外藩甚爲恭順該夷人等在洋遭風竝有同伴被生番殺害多人情屬可憫應自安揷館驛之日起每人日給米一升鹽菜銀六厘回國之日另

給行粮一個月照例加賞物件折價給領于存公銀内動支一併造冊報銷該難夷等船隻傾覆擊碎無存俟有琉球便船即令附搭回國至牡丹社生番見人嗜殺殊形化外現飭臺灣鎭道府認眞查辦以儆强暴而示懷柔除咨部外臣等謹合詞恭摺馳奏伏乞　聖鑒謹奏軍機大臣奉旨覽奏已悉着照例辨理竝着督飭該鎭道等認眞查辦以示懷柔欽此

（使清日記）

一二二　四月十三日（五月十九日）　清國出張柳原少辨務使等（天津ニテ）ヨリ外務大丞等宛

清國直隸總督等トノ會商竝ニ修好條規第十五條ニ關シ報告ノ件

附　記一、四月九日柳原少辨務使等ト清國直隸總督等トノ應接記

批准前ノ條約改修提議ニ關シ論難折衝ノ件

二、四月九日柳原少辨務使等ト清國天津海關道等トノ應接記

少辨務使ノ資格ニ關スル件

三、四月十一日柳原少辨務使等ト清國天津海關道等トノ應接記

條約改正提議ニ對スル清國側ノ意見開陳等ノ件

益御清適奉職被成候段遙賀ニ不堪前光永寧以下平安乍憚御拋念奉願候陳者當月八日迄ノ日記略ハ差上御落收ノ儀ト存候其後景況如左

九日九字ヨリ十二字迄李鴻章ト應接午後一字ヨリ四字迄陳欽孫士達ト談判

十日一字ヨリ米領事ノ招ニ應シ紫竹林ニテ競馬ヲ見ル佛國少辨務使及ヒ各領事ニ接ス

十一日一字ヨリ四字迄陳欽孫士達談判

十二日無事

談判書ハ大ニ錯雜候ユヘ方今考訂中ニ付後便差上可申候亘細ハ卿輔兩大臣ヘ紙表ヲ以テ言上ニ及候昨十二日夜品川代領事ヨリ紙面相越シ候内神奈川縣ヨリ電信機ノ傳報有之如左

（註　此處ニ一一六ヲ記載シアルモ省ク）

右到着披見仕候定而亘細被仰越候事ト相待居候尤文意ハ字面通リノ儀ニテ其地ニモ昨年議約ノ全權伊達氏隨員ニハ津田司法中判事長文部少丞等罷在候得ハ定而御尋問御座候テ分明ノ義ト存候是ハ其根原ハ美國一千八百六十八年七月廿八日即チ大清同治七年六月九日兩國全權大臣美國華盛頓府ニテ議定候條約ヨリ出タルニテ即チ如左

第一條

大清國

大皇帝按約准各國商民在指定通商口岸及水路洋面貿易行走之處推原約内該款之意竝無將管轄地方水面之權一併議給嗣後如別國與美國或有失和或至爭戰該國官兵不得在中國轄境洋面及准外國人居住行走之處與美國人爭戰奪貨刼人美國或與別國失和亦不在中國境内洋面及准外國人居住行走之處有爭奪之事有別國在中國轄境先與美國擅起爭端不得因此條款禁美國自行保護下略

右ニ御座候定而本省御雇法師スミツト氏ニハ其節美國ニ居リ此事ハ承知致居候事ト存シ候横文ハ前光所持不仕候ニ付漢文拔萃御覽ニ入レ候何レ御不審ノ廉ハ追々御報知ニ寄リ拜承愚按可致候得共尙近日當地領事密妥士氏（メットホルス）人美國へ質問仕リ且ツ昨年此約ヲ議立候清人陳欽ヘモ談語致シ置可申候此段卿輔兩大臣ヘ可然御申陳相願候先者右金川縣ヨリノ電機信書落收致シ候御請旁如是候伏テ時祺ヲ頌シ併セテ列位ノ平安ヲ祝ス謹言不具

壬申四月十三日夜第八字

外務少記　鄭永甯

少辨務使　柳原前光

外務大少丞記列位御中

副啓金川縣ニハ別紙返書相送リ不申可然御含奉願候當方近時ノ景況更ニ相分リ不申既已ニ當國ヨリハ數度紙面差上候得共未タ一回モ御返信ヲ不得候何卒日誌新聞官員錄本省ノ模樣竝ニ岩右府公歐洲御談判ノ大略等御報知願候過日美國領事ヘ面晤候節承リ候得ハ既已ニ英國龍動府ニテ御談判最中ノ由ニ承リ候

（註「別封者略」）別封二從兩名ヨリ伊達位ヘノ書面御送屆ケ相願候也

（使清日記）

註一、四月九日ノ柳原少辨務使等ト李鴻章等トノ應接記、四月九日同十一日ノ柳原少辨務使等ト陳欽等トノ應接記左ニ附記ス

（附記一）

四月初九日壬戌晴熱

朝第九字柳原少辨務使鄭少記潁川大錄末次繁雄烏帽直垂李府ニ至ル從南轅門入ル大門上ニ直隸總督行臺ノ額ヲ掲ク轎子ヲ二門前ニ停ム關人名刺ヲ傳フ須臾ニシテ門啓ク轎子入ル直チニ儀門際ニ至リ轎ヲ下ル門內天津知府馬繩武出迎フ引テ院門ニ入リ內庭深處客廳ノ門前ニ至ル李門闕內ニ立ツ揖シテ迎ヒ俱ニ廳ニ入ル坐ニ就ク左ノ如シ

右　柳原　愛　光
正面
左　李　類　三　馬

茶畢ル柳原以次坐ヲ起チ李ニ向フ李馬俱ニ興ツ柳云恭シク貴國皇帝ノ萬歲安康ヲ賀ス李揖シテ謹謝ス次ニ五ニ問候陳謝等畢テ坐ニ復ス此時柳原齎帶スル所ノ公文等ヲ李ニ親遞ス其件々

伊達從二位ヨリ總理衙門ヘノ申謝照會抄稿ヲ副ユ

右同氏ヨリ軍機大臣協辨大學士吏部尙書文祥ヘノ書啓是ハ印シテ糊封セス　外務卿輔ヨリ總理衙門ヘノ申謝照會抄稿ヲ副ユ

共ニ三件轉達ヲ託ス其文左ノ如シ

（註　此處ニ「伊達從二位ヨリ總理衙門ヘノ申謝照會」記載シアルモ第四卷一六四漢譯文ナルニ付略ス）

敬啓者宗城前奉使命入
貴邦幸逢
慶函獲親
丰儀欣榮何極荷
隆情之下逮尤賴
春風之噓拂諸有協循深喜歡洽銜佩之私
不律言宣恭惟
老中堂臺履萬福
鼎茵益休
德邵年高
譽隆望重引領下風彌切歌頌宗城區々拙
迹奚足道哉惟違
顏於遐陬猶慕
德於無既矣專肅鳴悃祇請
釣安伏冀
崇鑒謹具
名正肅

（註　此處ニ「外務卿輔ヨリ總理衙門ヘノ申謝照會」記載シアルモ一〇三ナルニ付略ス）

李諾シテ之ヲ收ム次ニ

伊達從二位ヨリ李ヘノ申謝照會

外務卿輔ヨリ右同　照會

竝ニ柳原鄭拜命官記御達書等ノ譯文ヲ出ス照會ノ文左ノ如シ

（註　此處ニ「伊達從二位ヨリ李ヘノ申謝照會」記載シアルモ第四卷一六五本文ノ漢譯文ナルニ付略ス）

（註　此處ニ「外務卿輔ヨリ右同照會」記載シアルモ一〇五ナルニ付略ス）

李之ヲ接受シ次第ニ展看ス

柳云是等ノ文書ハ早ク去冬十一月間ヨリ貴國ヘ達スヘキヲ敝國歐約ヲ改修スルニ因リ昨年伊大臣貴中堂ト訂修セシ約面ニ不合ノ處ヲ生出シ此爲メ發途ノ期遲々シテ今春ニ至リ及ヘリ

李云貴國欽使歐行ス是何ノ主意

鄭云我國外國ト約ヲ通ス米ヲ始メトシテ餘諸各國陸續トシテ來ル其約多ク幕政ノ時ニ成ル而シテ自來其約ニ依レリ今其改約ノ期ニ屆ル因テ我カ國是ヲ廣ク外方ニ視以テ改正ニ便ニスル爲メ特ニ大使ヲ發シ西洋各國ヲ巡觀セシムルナリ

此時柳原歐行大使以下人員名單竝ニ歐美ヘノ御國書譯漢文ヲ出シ示ス其譯漢文左ノ如シ

國書譯漢文

大日本國天皇敬白于
威望隆盛友誼親密之
大△△國大皇帝統領朕保有天祐自踐萬世一系皇祚以來未向
和親諸國一修聘問之禮是以簡選朕所信任依重之右大臣
正二位岩倉具視作爲特命全權大使參議從三位木戶孝允
大藏卿從三位大久保利通工部大輔從四位伊藤博文外務
少輔從四位山口尙芳均作副使並委任以全權一同派至貴
國及外諸國以修聘問之禮益厚親好情誼且與貴國換過條
約期以來歲應行改正玆朕所期望豫圖者竊比開明諸國使
我人民保有其公權與公利因欲釐正從前條約惟以我國開
化未洽政律亦從而異非需幾許時月不能達其冀望故勉擇
于開明諸國所行方法采其施于我國爲適宜妥當者以漸次
改政俗必要令同一致於是剖述我國事情詢于貴國政府得
其考案俾能商量其可施設于現今將來之方略一俟使臣歸

國定議改正條約用達朕所期望豫圖此諸使臣係朕素所依重信任切望善爲信聽其言而寵待榮遇之竝祈大皇帝大統領康福貴國安甯

明治四年辛未十一月初四日親記名璽于東京宮城

御諱

國璽

太政大臣從一位　三　條　實　美　花押

柳云請フ之ヲ一覽セヨ頃コロ聞ク歐行大使ノ始テ美ニ至ルヤ接待甚タ優渥ナリト愚按ス我君ノ期望スル所モ一ツヲ以テ十ニ及フベシ

李覽畢云美魯英佛孛等成ラハ餘ハ知ルヘキノミ

柳云然リ今我國斯ノ如クシテ西約改定ノ大局成ルニ至ラハ我レニ於テ貴國ノ民ヲ待ツ畢竟均一同例ナラサルヲ得ス因テ今般本使等ヲ貴國ニ遣ハシ預メ其不合大略ヲ報告セシムル所ナリ

李云從前中外議約ノ例ヲ按スルニ彼我全權訂約シテ一年ノ後正約互換スル迄ノ以前ニ曾テ其約面ニ不合ノ處有ルノ故ヲ以テ使臣ヲ來セシ事ナシ今子等ノ至ル少辨務使ヲ以テ交際事務ヲ辨理スト稱ス昨秋兩國既ニ和約ヲ定メ即日

ヨリ遵行シテ專ラ換約ノ欽使來ルヲ待ツノ間ナレハ更ニ交際ヲ辨理スル使臣ノ來ル謂レ無シ然レハ少辨務使ハ果シテ何ヲカ爲スヤ

柳云少辨務使ハ第四等ノ使臣ニシテ即チ外國ノ酌事達法ト稱スル者ト同シ今我外務卿大臣等

欽命ヲ奏請シテ本使ヲ遣ス所以ノ者ハ我國此後西約ヲ改定スレハ兩國ノ約面ニ在ル我諸港ノ例ヲモ亦隨テ照ラシ改メ不ルヲ得ス然レトモ岩倉大臣歸來ラ不ル以前ハ之ヲ改ムルニ由ナシ其歸期恐クハ來春ニ及フヘケレハ一ツニハ貴國ヘ換約ノ使臣ヲ出スノ期ヲ延ント欲シ二ツニハ換約ノ使臣來ルニ及テ改議スヘキノ概略ヲ今預メ中堂ニ就テ告明辨解シ熟商妥協ヲ得以テ我改定セシ各國ノ約ト一體ニ照改スルヲ待テ貴國ト換約スルノ地ニ便ナラシメン爲メ前光等特命ヲ奉シ再渡セリ其爲メ我カ外務卿輔ヨリノ照會竝ニ前光等ヘ委限セラレシ要旨アリ抑兩國定約ノ擧ニ就テハ初發ヨリ老中堂ノ誠慮ニ賴テ今日ニ至ル前光等尤戴德無涯ト爲ス今復タ此使命ヲ奉シテ來ル專ラ公事徹底ニ至ン事ヲ望ム耳請フ之ヲ熟察セヨト照會竝ニ委限要旨ヲ遞ス其文左ノ如シ

（註　此處ニ「照會」記載シアルモ一〇六ナルニ付略ス）

（註　此處ニ「委限要旨」記載シアルモ一〇二ナルニ付略ス）

李覽テ委限要旨ニ書キタル後附兩件ノ如キハ大局ニ礙有ルトノ句ニ至リ問テ曰ク此大局ハ何ノ謂ソヤ

鄭云大局トハ我國ニ於テ諸各外國ヲ待ツノ全體ヲ謂フ

李云修好第二條ノ義ハ貴國ト美トノ約面ニモ載タルニ非スヤ

鄭云即チ貴國ト美トノ約モ同ク然ルカ若クナレトモ下註ニ論スル所美國ノ偏爲ニ屬シ一面ノ詞ニ係レルヲ指明セン爲メニ此一張ヲ備ヘタリト（美國横文ニ漢語ヲ旁註シタルヲ取出シ李ニ示ス横文字旁註此ノ尾ニ附出ス）且今大局ニ礙有ルヲ以テ寺島大臣ノ說ニハ此條ヲ謝却スヘキ目途ナリト因テ此ニ及フ

李下註ノ中ニ於テ裁撤及ヒ削除等ノ字ヲ指シ問テ云ク是ハ昨秋議定セシ約面ヲ將テ裁撤削除セント欲スル者乎

鄭云誠ニ然リ

李愕然トシテ云是何ノ言ソヤ一昨年子等來テ約ヲ求ム我深ク心ヲ盡セリ遂ニ兩國約成ルニ至リ去秋此地山西公館ニ於テ兩國ノ欽差全權會同ス其時觀者如堵既ニ伊達ト吾ト親手畫押シテ信守ヲ證セシ條約ヲ何物カ能ク之ヲ間スル

ヲ得ン吾身國ニ代ル伊達氏亦然リ天下ニ對ス惟信アルノミ然ルヲ妄リニ裁撤削除セント欲スルハ何事ソト（急ニ命シテ條規章程ノ稿本ヲ取來ラセ卷尾ヲ展ヘ爲此兩國欽差大臣畫押以昭憑信ノ件ヲ指示シテ云　此レハ伊大臣ト本大臣ニ非スヤ）抑我昨年欽差ヲ奉シテ此約ヲ議定セシ以來總理王大臣ト雖モ一點雌黃スルヲ得ス誠ニ皇上至重ノ委任アルヲ以テ也貴國今此クノ若キハ是自カラ汚カスナリ將タ其レ我ヲ侮ルカ又淸國ヲ蔑視スルカ何ソ外務卿大臣等道理不通ノ甚シキ今我此照會ヲ受ケナハ上ハ朝廷ニ對シ職ヲ汚シ下萬民ニ對シ信ヲ失フ何ノ面目アリテ國ニ立チ權ヲ秉ラン請フ速カニ收回セヨト照會ヲ退還ス其聲勵其色厲

鄭云請フ中堂且怒ヲ息メテ一言ヲ聽ケ我卿輔モ亦外國事務ヲ總理ス豈其理ニ通セサル者ナランヤ其照會ノ首メニ伊達ノ使事復命既ニ畢テ兩國俱ニ照行スヘキノ旨ヲ擧ケタレハ何ソ曾テ是ヲ雌黃スル者有ラン只今年我西約ヲ改定スルヲ以テ嗣後貴國トモ改議スヘキノ意ヲ今預メ告明商妥シ而シテ後貴國ヘ換約ノ使臣ヲ出サントノ上諭也又下文ノ三條目ハ本是我ガ卿輔謹テ諭旨ニ遵ヒ覆奏准セシ文ヲ照錄シテ玆ニ揭ケ以テ中堂ニ似シ其裁答ヲ請フ者也

下官等此照會ヲ齎ラシ來テ如此解說參述スルノ責任ナレハ目中止一ツノ中堂アルノミ而ルヲ中堂如此峻拒セラル何ヲ以テ能歸國センヤ請フ再ヒ之ヲ熟閱シテ必ラズ尊裁ヲ賜ハン事ヲ

李云使來ル既ニ其時ニ非ス況ヤ其文書モ亦是レ和約ヲ議改スル事ヲヤ今我公然ト此照會ヲ接受スル時ハ從前ノ成例現在ノ職面ニ拘礙シテ多少ノ論駁ヲ引起シ妥協ノ照覆ヲ爲ス事萬々能ハ不ル所也若シ彼此不時ニ論駁ヲ滋クスルハ是レ兩國互ニ君命ヲ辱メ國權ヲ屈ムル也我深ク之ヲ憂フ復タ言フ勿レ柳原鄭俱ニ數回說解スレトモ李只接セス使者進退維ニ谷マル時ニ李色少シク定ル

柳云兩國欽使其全權ニ據テ定約遵行スト雖トモ一年ヲ期ト爲シ必ス　御筆批准ヲ俟ツハ將サニ改ムル所有ントスルニ非スヤ此我卿大臣等旨ヲ奉シテ預先改修ヲ擬議スル所以也故ニ約ヲ改テ後互換セン事ヲ望ム

李云　御筆批准ハ兩國之君其委任セシ臣ノ相定タル約ヲ信徵允准シ以テ永ク渝ラサルヲ誓フ也故ニ全權大臣ノ定メタル所ハ其君モ亦タ從テ允ヒ行フナリ若シ其定ムル所ニ不合有テ之ヲ改メ不レハ批准互換セスト謂ハヽ失信ノ甚キニテ其約終ニ和セサル也是我カ必ス批准換約ヲ俟テ始

テ大定ト爲ルノ例ナレハ豈易ク預メ擬議ヲ爲シ約面ノ字ヲ改動スル事ヲ容ルサンヤ

柳云敝國將ニ大ニ外交ノ政體ヲ革ントス若前約ヲ照シテ批准互換セハ以後十年ノ間多少ノ礙難有ルヲ致ス是ヲ以テ換約ノ期ニ至ラハ我改定セシ西約ト均ク照改シ此約ヲ劃一無憾ノ物ニセントノ意也且中堂貴國從來換約前ニ改正セシ例無シト云フトモ兩國往來通商ノ約ヲ修立セシハ只昨年ノ約ヲ始メトスル耳如此特異ノ約ヲ結ヘハ又特異ノ變通セ不ル可カラ不ル也如何且夫今番ノ一舉實ニ兩國交際ノ關鍵ニシテ全權所訂ノ約ヲ改ル事最モ至難前光已ニ此來中堂ノ允諾得易スカラ不ル事ヲ知ル故ニ此使命ヲ辭スル事再三然レトモ我カ諸大臣屢々諭シテ遂ニ此命ヲ奉スルニ至ル實ニ不得已ニ出ルナリ抑今我邦廣ク人材ヲ收メ朝廷ニ羅集ス前光ノ如キハ惟其斗量中ニ在ルノミ然ルニ前光ニ必シテ此行ヲ命ス是他ナシ前光一昨年來兩國交際ニ從事スルノ故ヲ以テ此重任ヲ付シ難キヲ變シテ易スカラシメント望ムナリ此一舉卽チ交際續絕ノ係ル所豈其易スカランヤ惟我カ外務卿ノ前光ニ誡示スル言ニ云フ汝交際ヲ保護シ約面ヲ修正セヨト前光此意ヲ體シ使事成全

ヲ祈ルノミ夫レ條約ハ外交ノ規則ニシテ今其法ヲ改ムルヤ十有列國ヲ變シテ獨リ貴邦ノミ特異ニシテ可ナラン乎中堂ノ刪除裁撤ヲ怪シムハ既定ノ約ヲ動カスノ嫌ヒアルヲ以テナリ然レトモ若シ其爲メ日本ヲシテ故障ヲ生セシメテモ可ト謂ハヽ和親ノ意安クニカ在ル今兩國獨立不羈ニシテ各自主權ヲ存スサスレバ清ハ日本ヲ矯制スル克ハズ日本ハ清ヲ壓逼スル克ハズ皆是一ナリ然ルニ今日本ノ欲セ不ルヲ枉テ制セントス固ヨリ得ベカラズ又伊達氏ハ議約ノ全權約上ノ可否其責任ニ歸ス是當然ナリ我カ政府モ是ヲ改ムルヲ好マサレトモ衆議ヲ經テ止ヲ得ズ實地故障アルモノハ之ヲ改メント望ムナリ況ンヤ又局面ノ已ニ改變シタル其本約ヲ互換セバ一片ノ廢紙ニ押印スルニ異ナラ不ルヲヤ是極テ不可ナリ前光已ニ中堂ノ明能ク難事ヲ裁シ交際ヲ保全スルヲ知ル前光來ルモ亦是ヲ以テナリ變ニ應シ機ニ處スルハ智者ノ所爲請フ美斷アツテ必ス前光ヲシテ使命成全ヲ得セシメン事ヲ

李云兩國ノ間定約スト雖トモ豈一二ノ變革無キ事ヲ得ンヤ故ニ和約ノ內不合ヲ生出セハ批准換約スル時兩國ノ全權大臣會同議改スルニ續約ニ就テ照會文等ヲ以テシ敢テ本

約ノ文ヲ改ムル者ナシ是前權後權俱ニ害スル事無ク約以テ永ク固シ貴國モ亦タ當サニ如此スヘキ耳惟其レ岩倉氏ノ歸ルノ後ヲ俟テ本約互換ノ使ヲ出シ自カラ其理ニ合シテ可ナラン

柳云前光委ヲ奉シ來テ中堂文書ヲ接セズ又預前擬議スルヲ准サス徒ラニ此行ヲ費スノミ仰望マクハ從前ノ厚待ニ仍リ必ス以テ前光ニ教ユル所有ン事ヲ

李云事苟モ改約ニ干涉セバ我決シテ其使ヲ見ル事能ハス況ヤ文書ヲ接スルヲヤ今日我レ子等ヲ見ルハ其舊情アルヲ以テ也然レトモ我ハ其舊情ヲ用テ公事ヲ辨スル能ハズ玆ニ公等ノ爲メニ曲ケテ一策ヲ畫ス如何

柳云願クハ教ヲ承ケン

李云吾今方サニ百揆多務他ニ及フニ暇ナシ子ハ昨年伊大臣ノ副使タリ而シテ此地海關道陳欽ハ我幫辨タリシヲ以テ舊情ノ素アレバ子カ奉委ノ事ヲ其レニ命シテ擬議ヲ爲サシメ以テ子カ復命ノ資ト爲サント欲ス請フ速カニ此照會ヲ右陳欽竝ニ伊欽差進京ノ節陪引セシ記名江蘇道孫士達等ノ處ニ持往キ共ニ會同商量セハ我カ多少好意ノ存スル所アルヲ見ン

柳鄭俱ニ云中堂既ニ好意アルト云ハヽ必ラス我カ使事成全ヲ得セシムルノ所アラン且ツ貴諭ニ遵ヒ陳孫ニ就テ聽カン

李云善シ

李云貴國三條大臣岩倉大臣ハ何如ナル人ソ

柳云何レモ方今ノ國柱ナリ

李云公等此來ノ擧アルハ定テ歐行ノ擧ニ乘ジ岩倉大臣ノ主張ニ出テタルナラン

柳云不然朝議ヲ盡クシ此ニ至レルナリ

此時柳原我カ金銀貨幣ヲ出シ示シテ云ク此ハ伊大人曾テ中堂ニ呈覽セン事ヲ約セリ請フ看ヨ

李覽テ云貴國ハ都テ西洋ヲ學ブカ

柳云然リ其取ルヘキ所ヲ取ル蓋シ開明ヲ期スルナリ

此他李ヨリ問ニ廢藩立縣諸道鎭臺兵廢刀洋服ノ形勢及ヒ東京火災伊達氏免官等ノ事ヲ以テス柳原鄭各答フル處アリ略之

右畢テ辭別ス送ルノ禮來ル時ノ如シ

柳原出ツ李鄭ニ謂テ云ク貴省卿大臣等ノ文書ヲ接セ不ルハ却テ我カ一片ノ好意ナリ子必ス之ヲ記取セヨ既ニシテ第十二字歸館

第十二字李府ヨリ返ル午後第三字柳原少辨務使鄭少記穎川大錄孫陳兩氏ニ訂刻往晤ス孫來テ陳署ニ會同ス各相敘禮就坐畢ル

鄭陳ニ對シ云今日柳原以次四員李中堂ニ拜晤イタセシ處中堂示談ノ次第有之此已後兩位ヘ御引合ヒ申度キ事アルニ付參上セリ

陳云昨日ハ葉大錄ヲ李府ヘ被遣タル由因テ今日中堂ニ御逢ヒノ上ハ中堂ヨリ彼是示談ニ被及タル事モ可有之

鄭云其儀ニ付此後何廉御相談ニ及ヒタク兩大人宜シク御聽キ給ハルヘシ

陳孫俱ニ云固ヨリ御同樣ニ公事ノ妥協ヲコソ期スルナレハ何廉腹藏ナク御相談イタスヘキ心得ナリ

柳云今日李中堂ニ御目ニ掛リ我カ外務卿輔ヨリ今次少辨務使派出ニ付テノ照會其外昨年來使ノ謝狀照會書啓等公文ヲ遞セリ

陳云少辨務使トハ何等ノ事務ヲ辨スルノ謂ヒカ

柳云交際事務ヲ辨ス現ニ我太政官ノ委任狀アリ（此時柳鄭拜命官記御達書等ノ譯漢文ヲ出シ示ス）

陳云兩國約已ニ成ル其間ノ交際只其約アルノミ更ニ復何事ヲカ辨セン

柳云請フ我カ外務卿輔ヨリノ照會ヲ看ヨ看而後ニ解スル所アラン其實事情ノ變已ムヲ得サルニ出ツ是此前光特ニ使命ヲ奉シ來ル所以ナリ

陳云公ハ四等官ナラスヤ止四等官ニシテ不時ノ使命ヲ奉シ來ル事是我カ解セサル所ナリ

柳云公未タ之ヲ詳カニセサルノミ我國出外ノ使臣四等ヲ分ツ其第四等ノ使節ヲ少辨務使ト云均シク是代國使臣ニシテ即チ外國ノ使臣酌事達法ト稱スル者ニ當レリ其外國酌事達法ハ既ニ貴國ニ於テ總理衙門ト平行ノ應對ヲ以テ公事ヲ辨スト閉ク獨我カ自主國ノ少辨務使何ヲ以テ然ラズト云

陳云然ラハ公ニ國書アルカ又全權ノ名アルカ惧ニ無之トセハ是國使ト謂フヘカラス只是貴國外務省派出ノ使臣ナラン我國外國ノ使臣ニ於ケル欽差ヲ以テ待ツモノ皆國書ヲ奉シ全權ヲ有ス

柳云公ハ公法ニ精シト聞ク公法ニ有之四等ノ使臣ハ信憑ヲ部臣ニ寄スト我國少辨務使ヲ出ス皆國書無キモノナリ但其出外辨務スヘキノ命ヲ奉スルヲ以テ代國秉權ノ任ヲ有

此日難論頗ル繁雜筆楮ニ罄ス能ハス前文只其概略ヲ擧ル而已

旁訓美清條約一則

第一款
Article 1

訓　後　照前　和平
There shall be, as there has always been, peace and
友好　于　大合衆國
friendship between the United States of America
與　大清國　竝　其民人之間
and the Ta-Tsing Empire, and between their people
各皆毋得或異　更不得　欺　凌　偶
respectively. They shall not insult or oppress each
因　小　故　而　啓
other for any trifling cause, so as to produce an
爭　端　于　兩　間　若　他國
estrangement between them; and if any other nation
有何　不公輕藐之事　大合衆國
should act unjustly, or oppressively, the United States
要　盡　其　好々的本分　一見報到
will exert their good offices, on being informed of
其由　須使出　可和順的　調　處
the case, to bring about an amicable arrangement
于其　爭論之事　以　示　其友誼關切
of the question, thus showing their friendly feelings.

（使清日記）

（附記二）

ス何ヲ以テ國使ニ非ラスト云既ニ又西國ニモ派駐セシ少辨務使アリ鮫島尙信ハ法ニ駐シ森有禮ハ美ニ住ス彼皆ソノ相當ヲ以テ待ツ何ソ獨リ貴國偏拘スルノ甚シキ

陳云貴國少辨務使西國ニ派駐スト云是定メテ換約已ニ畢リシ國ナラン請フ試ニ之ヲ言ハン公既ニ國書ナク又全權ノ名ナクシテ交際事務ヲ辨スト云ハヽ只是領事ノ權アルノミ將又酌事達法トハ外國ノ唱ヘニシテ其義ヲ辨セス我國從來外使ヲ待ツ其例三アリ其一議約大臣（即チ昨年伊欽差ノ如キ是ナリ）其二換約大臣（十二月ノ後ヲ俟テ來ルモノ）其三駐京大臣ナリ均シク是欽差全權ノ名アル者ニシテ皆其時ヲ以テ來ルナリ故ニ其等級ヲ問ハスシテ之ヲ接待ス可惜公等來ル其時ニアラス又其名ナシ何ヲ以テ交際ヲ辨シ一定ノ約ヲ改議スト云フ約書ニ言フニアラスヤ信守無渝ト貴國信ヲ守ラハ何ソ其時ヲ以テ來ラザル其時ヲ以テ來ルヤ昨日欽差ノ隨員今日ノ換約大臣トナル今日ノ領事明日ノ駐京大臣トナルモ更ニ又其人ヲ問ハス只其名其例アルヲ以テ待ツノミ宜ヘナルカナ西國ニ於テ貴國ノ少辨務使ヲ待ツ事公法ニモ信義ヲ破ルタメ使臣ヲ出シテ可ナルヲ聞サルナリ

柳鄭俱ニ云事ニ常アリ變アリ常ヲ守ルハ正變ニ處ルハ權來ルニ其時ヲ以ス是常ヲ守ルナリ今來ルヤ是變ニ處ルノ道也且今番來意ハ倍々信義ヲ講明セン爲メ改正ヲ求ルナリ然ルヲ株守シテ權ニ處ルヲ知ラス將タ復タ何ヲカ論セン兩國公事ヲ辨ス約中既ニ職掌相等キヲ以テスルノ條ヲ揭ク公不看ヤ且ツ公云フ領事ト同シト是何ノ言ソヤ領事ニ國使ノ權ナキハ固ヨリ然リ但我邦ノ制使臣ヲ四等ト定ム一等ハ常ニ置カス二等大辨務使三等中辨務使四等少辨務使以上秉權代國辨理交際ノ大臣ナリ其下ニ領事ノ制アリ五等總領事六等領事七等副領事八等代領事以上管東商民審判訴訟ノ吏員ナリ今使臣ヲ以テ領事ト一視スルハ甚タ不服ナリ

柳云今日來ル只我ガ使命ノ事ヲ熟商セント欲スル爲ナリ詎料ラン餘論斯ニ至ラントハ只願クハ各其公ヲ重ンシ其心ヲ盡シ兩國ノ和ヲ保全シテ公事妥協ニ至ラン事ヲ兩位其レ之ヲ體諒セヨ陳君ニハ眞ニ我カ知己ト謂フヘシ古人言ヘル事アリ不二相打一不レ成二相知一ト既ニ昨年約ヲ議ス只公ト多少論駁遂ニ約成ルニ至ル今復タ前光窈カニ焉ニ望ミ有リ今日時已ニ晏ソシ請フ明後日ヲ以テ再會ヲ期セン

陳孫俱ニ云誠ニ命ノ如シ我輩亦滿ニ商量順熟公事妥協ヲ擬スルノミ今日ノ論スル所幸ニ意ニ介スル勿レト陳筆ヲ執リ書シテ云我辨子駁其理乃確子駁我辨其理乃見ト遂ニ共ニ大ニ笑フ又云明後十一日午後乙點鐘ニ於テ駕ヲ俟タント乃チ別ル

此間論辨錯雜多變僅ニ其要略ヲ撮リ歸趣ノ一二ヲ記スノミ

夕第六字歸館

（使清日記）

註二、右文書ハ「使清日記」四月九日ノ條ノ記事ナリ

（附記三）

同　十一日甲子晴熱

午後第一字柳原少辨務使鄭少記潁川大錄陳孫會同ノ約ニ赴ク陳署ニ至ル孫已ニ來テ焉ニ在リ各相敍禮就坐畢柳鄭陳孫ニ對シ云日昨多々承教歸寓後猶李中堂ノ好意アルノ一句ヲ以テ細思一番深ク良味アルヲ覺ヘ大ニ了釋スル所アリ因テ此後ハ別ニ一新局面ヲ開キ惟我カ誠裏ヲ傾ケ兩位ニ就テ我ガ來意ヲ商量熟籌セント欲ス冀クハ公等之ヲ亮察シ爲メニ贊襄スル所アルヲ得ハ幸莫加焉請フ之ヲ熟覽セヨ然後猶其委曲ヲ語ラン

此時卿輔ヨリノ照會及委限要旨等ヲ出シ示ス陳孫之ヲ接展シ看畢ル

陳孫俱ニ云誠ニ尊諭ノ如ク中堂自カラ好意アリ公等既ニ能ク我ガ情ニ通シ了釋スル所アレバ始テ與モニ謀ルベキノミ

言畢テ孫座ヲ起チ手ニ其書件ヲ持テ內ニ入ル此間鄭陳ニ對シ日昨李氏ノ言ヒシ說ヲ述告ス言次孫出來テ坐ニ就ク仍テ其書件ヲ持還ス蓋シ之ヲ抄取セシナラン

陳孫俱ニ云果シテ然リ中堂結末ノ一句既ニ好意ヲ存スル處アリト云フ是多少ノ妙處公等之ヲ等閑ニ看ル勿レ夫レ始メ貴國ト約ヲ立ツ國論殆ント難シ中堂獨リ其可ヲ執ル以テ遂ニ成ル既而貴國不時ノ來使約ヲ改議セントスルノ傳報アリ中堂尤愕然深ク之ヲ憂フ既ニ來ルヤ又中堂一片ノ苦心良意專ラ其約ヲ保全スルニ在リ嗚呼中堂一片ノ苦心良意豈言ヒ易スカランヤ公等既ニ之ヲ了釋スル所アツテ我輩亦之ヲ體承セバ事終ニ成ラン請フ心ヲ寬セヨ

柳鄭俱ニ云能ク我輩ヲシテ速ニ使命銷復ヲ遂ケシメン事全ク兩位ノ周旋ニ賴ルベシ千萬公事ノ妥協ヲ祈ル

陳云敝邦近時外交ヲ論スル者尤多シ攘斥開化和親姑息ノ類其派別甚シ是皆僻スル所有ルニ出ルナリ欽以爲ラク外交之道他ナシ只其道ヲ守リ其和ヲ失セズシテ足ルノミ蓋シ萬國各其道理ノ維持スルモノ有レバナリ貴國ノ如キハ今如何

言次横濱新聞紙ノ漢文ニ譯セシ者ヲ出シ示ス柳原之ヲ展看スルニ東京ニ於テ三百人餘黨ヲ結ビ攘夷ヲ謀ル者アリシヲ官之ヲ緝捕セシ事ヲ載セタルナリ因テ答フ

柳云方今我國政府諸官以下皆開明一途ニ趣ケトモ遐陬僻邑ニ至テハ尚此等ノ頑類モアルニコソ斯ク粗暴ノ事モ有リタルナリ

陳云修好條規第二條ノ如キハ伊欽差等始メ之ヲ危踏ム因テ乃時(ソノトキ)美國ノ例ヲ擧ケ其創見ニ非ザル事ヲ證シ又別ニ指シタル深文奥義ノ無キ事ヲ告明シテ方サニ准決ヲ得タリ夫レ伊公ノ洪度ニシテ事ヲ謹メル事如此然ルニ復命ノ後物議ヲ生シ此等ノ條ヲ裁撤セント欲スルニ至ルモ只是外國ノ評論ヲ憚ル由リ起ルニ非ザル莫キヤ我國ニ於テモ此條ニ付外評ナキニモ非サレトモ我ハ惟十八省ノ全圖ヲ保有シ自主ノ特權アルヲ以テ事ヲ爲ス何ゾ他論ヲ待ン且其說

ノ來ルヤ美國ノ例ニ出テ和親ノ情ヲ表スルニ過キズトノ一言下ニ辨破セシ耳今ヤ貴國ノ此擧ニ至ルモ多少ノ評論ヲコソ經テナラン伊公ハ氣度寛宏言語寡少ニシテ眞ニ大人ノ風アリ昨秋伊公北京ニ入ル文中堂軍機大臣文祥一目シテ曰ク從來未タ如是ノ人表ヲ覩ザリシト文中堂ハ敝邦ニ於テモ一等ノ人流ニシテ伊公ニ悅服スル如是然ルニ今番公等特ニ此命ヲ奉シ來ルモ其間多少ノ苦心苦慮コソアリツラント李中堂深ク夫等ノ處ヲ推察セリ今伊公ハ如何

柳鄭云我國廷議ノ決第二條ヲ可トセハ固ヨリ論ナシ又何ソ外論ヲ憚カラン惟其レ不可ト爲スヲ以テコソ遂ニ斯ニ至ルナリ伊達氏ハ我朝ノ功臣歸國ノ後老ヲ以テ職ヲ辭シ自カラ高踏閑適ヲ事トス眞ニ福人ト謂フベシ夫ニ反シテ前光永寧ノ如キハ今番ノ使命辭スレトモ許サズ幾斗ノ心血只此一擧ニ灑クニアルノミ希ハクバ公等舊誼ヲ推シ善ク我カ意ヲ體シ事速カニ成熟ヲ得ナバ是ゾ一團和成ノ大方便幸焉レニ加フ莫シ

陳云兩位ノ我國ニ來ル今玆ニ三回故ニ能ク我カ國情ニ通シ又李中堂ノ意ヲモ知リタルナレバ共ニ事ヲ謀ルニ甚タ便ナリ欽等既ニ命ヲ聞ケリ敢テ力ヲ盡サヾランヤ昨年既ニ

言ヘル事有リ貴國若シ戒心アラバ必シモ此條ヲ立ツルヲ庸ヒザルベシト時ニ伊公ノ大度洪量其害ナキヲ知ルニ及ブヤ一刀之斷更ニ猶豫ノ色ヲ見サリシ實ニ欣服ニ堪ヘタリ若シ乃時ニモ尚難ンズルニ議論モアラバ寧ロ之ヲ除クニ易スカリシニ今ヤ抑已ニ遲カラン第十一條刀械之禁ノ如キニ至テハ貴國ノ理事官其商民ヲ督率シテ無事ナラシメバ夫デ可ナラン又貴國ノ西約改正ニ付起ル件々ハ之ヲ將來ニ付シ通商上ニ關スル件々ハ通商章程第三十一款嗣後變通ノ事アラバ理事官ヨリ駐京大臣ニ詳請シ隨時照會商辨ストアル條ニ基キ夫是均ク續約ニ議立シテ可ナラン其續約ヲ議スルニハ換約ノ大臣全權ヲ兼有シタル者ニシテ始テ議立スル事ヲ能ス可シ故ニ我等今貴國ノ來議ニ依リ其目度ノ擬案ヲ作リ之ヲ中堂ニ呈シ其裁准ヲ得以テ公等ノ復命ニ便セント擬ス畢竟兩國ノ約其原ヲ推セバ隣交ノ禮典ヲ修ルニ成リタル者ニシテ英佛ノ戰威ニ乘シ餘國ノ商利ニ趣ク如キノ約トハ固ヨリ異レリ因テ其約面每條兩國ノ字ヲ冠揭シ其公平均一ノ義ヲ示シタルモ皆是特異ヲ表シタキ我ガ國議ニ出タルナリ是以テ伊欽差ノ初メ擬稿セラレシ獨逸ニ仿ヒシ約ハ我カ望ミニ違フヲ以テ遂ニ

請フテ此約ヲ議立スルニ至レリ惟是伊公ノ大度容ル、所アルヲ以テ其見ル所モ自カラ小ナラザリシト方サニ景頌ニ深カリシニ今遽カニ此來議ヲ聞ク嗟夫伊公ヲ如何ニセン

柳云李中堂既ニ言アリ此議續款ニ讓ラント今公ノ說ク所正サニ之ト合ヘリ至此我カ心裏モ稍安キヲ得タリ夫前事ヲ回憶スルニ兩國交際ノ大本ハ李中堂ノ鼎力ニ賴テ立ツト雖モ議約ノ細底ニ至テハ陳大人ノ練達ニ出テ成ル者多シ蓋シ陳大人ニハ公法約義ニ審ラカナリト聞ク是ヲ以テ今來ノ事件モ其成熟ヲ公等ニ仰クベキトコソ思ナリ但夫伊達氏ハ素ヨリ官高望重ノ身ニシアリテ便宜行事ノ旨ヲ奉シ全權ニ據テ致セシ事スラ歸國ノ後ニ尙物議ヲ免レザリシ況ヤ前光ハ一介ノ輕年ニシテ伊ノ有ル所我レ皆無シ量ルニ此前光ニシテ果シテ能ク何ヲカ爲サンヤ卽玆(タトヒイマ)其答議ヲ得ルトモ自決ノ權ナケレバ必ラズ之ヲ我ガ外務卿ニ復陳シ朝議ニ取テ始テ其可否ノ決ヲ得ルベケレハ公等此等ノ處ヲ亮察シ我カ歸國ノ日ニ於テ衆議ノ允當ト爲ルノ地步ヲ此前光ニ予ヘ賜ハン事切ニ禱ル所ナリ且又前光ハ貴國ニ來ル事已ニ數回頗ル貴國ノ情ヲ識ル惟我朝ノ諸官ニ

於テハ知ルニ由ナケレバ併セテ此等ノ處モ酌量ヲ得タク思フナリ

陳云教ヲ領セリ當サニ其意ヲ體存スベシ但是我ガ總理衙門ニモ四十員餘ノ官僚アレバ其持論ノ異岐ヤアリテ中堂ノ好意果シテ徹底スベキカ未タ知ル可サル所ナリ雖然中堂主ヲ作サバ事必ラス終ニ吉ナラン遮莫我レ孫君ト計リ他日答フル處アラン

柳鄭云既ニ允諾ヲ蒙ル又何ヲカ多贅セン只此委限中ノ事件ニ就キ公等ノ良案ヲ乞フノ外其所有事件ニ就キ分明ナラ不ル處モアラバ惟命是來テ爲メニ辨述セン我等自來ノ辛苦此一擧ニシテ水泡ト成ルカ其ナラザルコソ千萬祈ル所ナリ

陳孫云貴國使ヒヲ出スノ報ヲ得ショリ中堂之ヲ憂フ事甚シ既ニシテ公等ノ來ルヲ知ルヤ稍其意ヲ安シ又之ヲシテ成功ニ至ラシメン事ヲ思ヘリ蓋シ一昨年交際ノ事起リショリ此ニ至ルモ其脈絡ヲ持シ方略ヲ立ツル者皆是公ナル事ヲ知レバナリ他日其功ヲ論ス公等ヲ除ク外誰ソ

柳鄭云我輩何ソ敢テ此ニ當ラン幸ニ今番ノ事成テ重擔ヲ放下シ得ハ足レリトスルノミ

畢テ陳置酒款待此間閑談更ニ記取スベキナシタ第五字辭シテ歸ル

（使清日記）

一二三　四月二十二日（五月二十八日）清國出張柳原少辨務使等（天津ニテ）ヨリ副島外務卿等宛

日清修好條規第十五條等改正ノ指令ニ對シ上申ノ件

益御安泰御勤職被爲渡奉遙賀候　前光永寧等叨庇粗安乍憚御放慮可被下候然者先達而以電信御掛合越シノ修好第十五條平時云々ノ文意不詳トノ義從金縣ノ書函本月十二日接閲之下翌十三日從前光等本省大少承記宛答函差立置候處三月廿九日附右事情ニ付猶外箇條共從本省ノ御細書當四月廿日天津ヘ到リ御示命之旨逐一承知仕候偖前光奉委イタシ候從兩位閣下李鴻章ヘ御照會竝ニ限旨面ノ件々ヲ以テ當月九日始テ李鴻章ヘ面謁ヲ經候後李所務多端ノ故ヲ述ヘ頃日陳欽孫士達等ヘ談判ノ權ヲ委ネ與前光等追々談論最中ニテ未タ彼カ決答ノ端倪不相分日夜焦灼案痛罷在候抑御照會竝ニ委限等ヲ李ヘ爲見實地ノ機合ヲ測察致候ニ何分ニモ彼等ノ疑難紛紜トシテ繼クニ憤怒ヲ以テシ前光等務テ辯論解說ヲ加フト雖トモ其奉委ノ全旨ヲ果サン事實ニ微力ノ及フ所ニ無之途方ニ暮レ候得共尙幸ニ委限面ニ云ヘル以上事件ニ就テ本卿大臣等ヨリ備文往來預議スルヲ除クノ外約面所有ノ各條款ハ兩國遵行セ不ル無シトノ結句有ルヲ以テ現在調處刀械等委任上ニ所列ノ件々ヲ以テ議論ノ幌表ニ押立テ此行談判ノ一局ト爲シ其餘ハ將來我カ改定セシ西約ヲ照シ改議セン時ニ附論ス可シトノ許諾ヲ得テ反命スヘキ迄ノ目途ニ限リ居候ヘ共夫スラ上文申述候通リ未タ其要略ヲ得ス然ルニ今般更ニ御掛合之趣ニ應シ照會委限等取調ヘ彼ニ示シ候時ハ端的最前ノ御委限面ニ戻リ彼將タ我不信ヲ憤リ斷然接受致スマシ縱令此事情ヲ以テ前光等ノ口吻ニ御任セ被成候共唯今只前此ノ委限ニ據リ專ラ彼カ紛疑ヲ解釋シテ我カ來意ヲ收結セント苦謀ノ央ニ方テ餘外ノ論ヲ出ストモ彼ヨリ我カ委限ヲ押ユレハ徒ニ前光等ノ贅議疣論ト謂ハン曩ニ前光等萬不得已奉委スル既ニ衝難蹈險ヲ稱ス今專ラ實地ノ談磯ヲ施セシ時ニ當リ只臨深履薄シテ其圓成ヲ毫髮ノ間ニ求ルニ過キサルノミ右ハ兩位閣下ヨリ前光ヘ特ニ兩國交際ヲ保護シテ約面ヲ修正セヨトノ重任ヲ奉體認ヨリ出候微忱ニ有之就テハ前件中述候通今般之一局相立候迄之間何分ニモ開議ニ差支候付實地情景御涵察右談判御猶豫被賜度相願候別ニ蠡測ヲ顧ミス申上候愚論如左

今度修好條規中ニ猶不穩當ノ條々御議定ノ廉有之前光ヘ更ニ刪除改正ヲ可議旨從本省ノ來示ヲ奉スルニ因リ隨即照會及委限ヲ繕寫シ唯是尊命遵奉シ開議ヲ爲ス可キハ當然ト雖トモ前文申陳候通リ兩國遵行セ不ル者無シトノ委限ヲ淸國官ヘ披示セシハ本月九日ニシテ電信機ノ來ルハ十二日ノ事ナリ是ハ定テ十五條文面ノ解義ヲ淸吏ニ質審スヘキ等ノ義ニモ可有哉ト臆察シテ續報ノ來ルヲ待チ居候處同廿日本省ノ來函ヲ接ス前光永寧捧讀之下相對シテ茫然タリ就中其刪除改正ス可ク被命候本趣旨臣等不學愚蒙ニシテ解シ兼候廉モ免レス苟シクモ昨年兩國全權ノ約セシヲ變改スル事容易カラス卽チ議ヲ發スルモ彼ノ說破ヲ承ケ候節ハ使命難徹既ニ前文ニ委限ノ廉ニ觸レ今般實地談判ノ一局ニ差支ヘ候旨申上置候就テハ幸ニ諒驅ヲ賜ヒ高諭ヲ奉シ臣等亦其教德ニ浴シテ將來ノ學問トナサン事ヲ欲シ玆ニ來示ヲ承テ二三ノ愚意ヲ白ス

修好條規第十五條中平時云々ノ一段甚タ難解其故ハ平時トハ卽チ戰時ニ對スルノ文字ニテ既ニ平時ト云ヘハ戰時ノ條規ニ非ス亦局外中立ノ義ニモ當ラス然レハ此條ニ揭ク可ラ不ル事判然且平時ニ於テ許サスト云ヘハ戰時ハ之ヲ許ルスト云フ義ニ涉ルノ嫌有テ文字穩當ナラス云々故ニ此條全ク刪去ヲ善トスノ事

兩國ノ內孰レカ一方若シ別國ト戰爭セント欲スル時ニ方リ自主ノ權ニ據テ其各港內ニ居住スル孰レカ一方ノ商民ニハ其貨物ノ貿易及ヒ船隻ノ往來ヲ停ムヘシ因テ右布告ノ期限ヲ照準トシテ其貨物ヲ取片付ケ速ニ去レヨ若シ耽擱シテ既ニ戰フノ後ニ至リ及ハヽ其管轄ニ屬スル各口岸及ヒ近海ニ在ル船貨ハ傷損ヲ受ケサルヲ得ス我國別國ト戰爭スルノ故ヲ以テ同盟國ノ人民ニ連累損傷ヲ受サスル事其國ノ處置ニ於テ忍ヒ不ル所也（以上上文ヲ解義ス）偖又平靜ノ時ハ兩國互ニ全數ノ各口岸ヲ開テ其商民ヲ住居セシメ其海疆ヲ船隻自由ニ往來スル事ヲ准ルスト雖トモ萬一甲國ニ別國ト戰爭ヲ始メタル迎其乙國（卽チ平靜ナル國）ノ各口岸及ヒ附近ニシテ管轄及フタケノ海疆內ニ在テ其甲國ト不和ナル國ノ人ト爭鬪ヲ起シ或ハ人貨船隻ヲ搶刦スル事ハ不許其

故ハ乙國ハ是ニ關セサルニ丙國ニ若シ此ノ如キ事ヲ爲サレ我カ自主ノ海疆內ヲ無主ノ地海或ハ大洋同樣ニ蹂踐ヲ蒙リテハ耻辱ト爲ス夫レ局外トハ自主ノ國權ヲ張リ他國爭戰ニ關セサルヲ云故ニ此約上ニ局外中立ノ四字ナクトモ甲國ノ戰ニ乙國關セス乙國ノ戰ニ甲國關セス己ノ附近洋面ニテ戰權ヲ行ハシメサレハ是局外ナリ若シ局外ヲ破ラハ甲乙竝ニ合縱シテ兩國ノ附近ニ在テ戰端ヲ開クモ可ナラン且又局外中立ノ義ヲ有スルト有セ不ルトヲ問ス日本轄海ニテ清國若シ搶刦爭鬪セハ可トセン乎隣近一帶海ノ國ナレハ此條ヲ存スル可ニシテ刪ルハ後年ノ爲メ不可ナラン乎今來文ニ平時ニ於テ許ルサスハ戰時ニハ許ルスニ嫌アリト云ヘトモ平時ノ戰トハ未タ曾テ聞カ不ル所ニシテ是ヲ刪ラハ附近轄海ニテ爭鬪ヲ許ルスノ嫌アルヲ免レス是ヲ以テ前光永寧伏テ疑問ヲ獻ス尙偏ヘニ御敎導ヲ冀フ（以上下文ヲ解義ス）

同上第十七條中ニ帶敍セシ書籍云々上文ト關涉セス是ニ揭ル甚不可也既ニ我カ無稅品ノ部ニ板本ノ桁有ルヲ以テ是ヲ刪リ通商章程ニ揭ケハ猶可ナリトノ云々

右第十七條ハ上一段ニ船隻ノ旗號ヲ假冒スルヲ制シ下一段ニ書籍誦習ヲ欲セハ採買ヲ准スノ事ヲ揭ク上下甚タ異ニシテ相關涉セ不ルニ似タリ然レトモ其義ヲ推原スレハ上ハ官方ヲ規箴シ下ハ士藝ヲ培植スルノ意ヲ表ス是ヲ修好ノ部ニ揭ク何ノ不可アランヤ夫レ此約ヲ爰ニ揭ケタル緣由ハ法清和約第十一款及ヒ孛清條約第九款等ヨリ來テ俱ニ商買品ニ關セス士民ノ文藝語學ヲ習フ爲メニ採買ヲ准ルシ且無稅タル事擧テ相同キナリ抑清洋所立ノ列約ヲ見ルニ每國主儆スル處ハ先前ノ例ニ準照スト雖トモ甲國ノ首款ヲ乙國ノ末款ニ入レ丙國ノ兩三款ヲ丁國ノ一款ニ包藏シ戊國ノ一款ヲ己國ニ分テ兩三款トナス等枚擧ニ遑アラス故ニ文章少シク突兀アルモ其分合ハ全權會議セシ時ノ意中ニ任セテ可ナラン何ソ必シモ是ニ揭ルハ甚タ不可通商章程ニ揭ケハ猶可ナリト謂ハン況ンヤ修好通商ハ部分ヲ立ツレトモ均シク一體ナリ故ニ是ヲ彼ニ移シ彼ヲ是ニ置クモ未タ利害ノ懸絕アルヲ見サルナリ

同上第十三條ニ聚衆滋擾數在十人以外ト云フハ好ケレトモ若シ十人以內ナレハ舍テ問ハサル者ニ似テ甚謂レ無シ宜シク改正ヲ議シ數字以下六字ヲ刪ルヘシトノ云々

右第十三條ノ下一段ニ十人以外ノ徒黨ヲ結ヒ害ヲ地方ニ播ス事ヲ制シタル大義ハ其勢已ニ强盜叛匪ノ形ヲ成ス片時猶豫ヲ容レス緝捕處分スヘキ者ナル故自主自治ノ國權ヲ擴張シ如此嚴約スル固ヨリ其宜キ所ナリ其上一段ノ首メニ述タル指定ノ口岸ニ在テ强徒ヲ勾結シ盜匪ヲ爲ス云々ヨリ其事各口ニ於テ起ルトキハ地方官ヨリ嚴捕シ理事官ヲ會同シテ審辨シ內地ニテ起リシトキハ其地方官ヨリ自ラ審辨ヲ行ヒ理事官ニ照會シテ查照セシムトノ義ハ正ニ其數三兩人乃至八九人迄ヲ指シ而下文ノ十人以外云々ト兩段ニ分チタルニテ其人多寡ニ應シ取計振ノ輕重ニ至ル迄判然タリ然ルヲ若シ十人以內ナレハ置而問ハサル者ニ似テ甚タ無謂ニ屬ストハ何ノ故カ其意ヲ解シ難シ抑數字以下六字ハ多寡內外ヲ分チ事ヲ處分スル所ノ關鍵也今此六字ヲ刪ラハ又何ヲ以テ別タン乎條規ノ文意ヲ反覆玩味シテ推考アリタシ或ハ別ニ論アリテ理事官ニ會審查照スルナトハ我カ國權ヲ失スト云ハヽ既已ニ先前前光ヘ下賜ル所ノ委任狀中ニ清國ヨリ理事官ヲ派來ストモ會同訊斷ヲ行ハサルヲ議スルノ意ニ盡クセルナリ

以上各件謬ニ蒭論ヲ加ヘ奉冒瀆候段惶懼不少候ヘ共御來示之趣理會難致萬不得已疑問ヲ陳ヘ御架誨相願候義ニ付何分

ニモ鄙悃御涵察之上宜舖御裁示被下度伏テ奉冀候謹言

壬申四月廿二日

外務少記　鄭　永寧
外務大丞兼少辨務使　柳原前光

副島外務卿殿
寺島外務大輔殿

（使清日記）

一二四　六月十六日（七月三十一日）清國出張柳原少辨務使（長崎ニテ）ヨリ副島外務卿宛

長崎到着ノ旨竝ニ天津談判成否要略報告ノ件

炎威猛烈の際益御清勝奉慶賀候陳者前光等奉委の公務百般の辨論を遂け駑力を極め候末五月廿二日陳欽より前光へ一刀兩斷の決答を來し廿六日には李鴻章より閣下えの照覆を面附し今般の一局蘊奥を定得候因て實地の形勢將來の施設を熟案するに餘外の變策に乏し是以て前光は全權を有せすを述へ歸朝復命進止を取り尙餘議有之候節は鄭少記より詢及可致懇々申殘し各員え辭別して本月四日一行惣容輪船に投し出津翌曉發纜渤海を渉り九日上海に着し公務を辨し十

四日鄭氏を上海に留置前光潁川大錄品川代領事等乘船今十六日無異長崎へ到着仕候此段乍憚御拙念奉願度船便一回滯在の後歸府拜謁萬縷言陳照覆類尊覽に可呈候得共先御安意迄成否要略を撮載して報明仕候如左

否

一約面の字眼を裁撤斧正する事は未曾有の例に屬すれは斷然承允せす故に閣下より須議裁撤との御照會を受れは辨論萎蔓して遂に交際續絶にも關係の恐れ不少當惑の趣にて李鴻章堅く接納を辭す然れとも其寫を本根とし前光より陳欽へ照會し彼の確答を得候事

此意味に等く前光を以て少辨務使兼任派出に候得共從來約面裁除を議する爲め四等公使を接る例なけれは引對不行屆の旨理り御座候事

一修好第二條は元より米國の例に據たれは更に兵馬錢粮の救助を請に非す然れ共和親上に於て當然の常理即ち御照會にも雖無此條有權可行といへる如く列國通例に屬し公法を干犯せさる旨を主張し裁撤の議に不應因て復命取裁の旨申殘し置候事

成

一皇國にて西約改定の擧あるは外交一新の盛時なれは其擧に付變更す可く竝に其際に附議する國法訊斷等の件は幾條といへとも本約互換の時に方り使臣の全權を以て續款或は照會を以て議定し昨年の約に附副刊行して變通すへき事

清國にて外約改正せは我を待も亦是の如くせさるを得す因て彼の改定目的を詢問候處同治九年一昨年也英と新改す清の全權は軍機大臣文祥參議官は陳欽孫士達英は公使アールコック氏にて清人大に壓服戰餘の舊套を脫し清の利を多し英の益を奪ふ故に公使鈐定後といへとも英政府請て全廢し十年間舊約になを遵守と然れ共清政府の目的は斷然是に定たるを以て列國其轍を覆を嫌ゐ皆改定せす就ては清吏に請て英人群議して公使の條約を辯駁せし書を接閲るに卅一條の大弊あり甚きは清帝の公使引見を許に代て漢口九口鎭江及內地通商を嚴禁す其餘皆是なり是に較して昨年伊達氏の約越たるは兩國と揭載して彼我平行なれは也と彼官員云へり

一修好第十一條商民佩刀の禁は右續款にて議定し公然除禁す可き事

一清國より領事を派出するも緒に就を俟つ間は會同訊斷の如き約の如く照行せさる事は一切地方官に諮詢して實地に於て酌議すへく尤換約後ならては出派せさるとの事

一通商第廿八條輸出入稅我成規を照辨する事は承允せり

一換約前に他に故障ありて變通を欲る條章ある時は約上に即日遵行と揭くれと現今纔に開港場へ布示するに不過は修好第三條に兩國政事禁令は自主の權に聽すとの義第八條に領事出派なき時は地方官にて約束照料するとの意を便宜に推擴し行否の都合は皇國の隨意になし百事考究を盡し西洋列國改定結尾の後に換約の使臣を出し續款を作り大成局を了すへき事

抑今般の義は大難事にして前光弱冠不材得て成辨すへきに非す然れ共艱澁を破て漸く歸着を得候は偏に國廷の洪福閣下の高明より所生にて欣慶仕候百端紛々の情況は亘細拜謁の期に餘讓候先は要々耳謹言敬白

壬申六月十六日

外務大丞兼少辨務使　柳原前光　手記

外務卿副島閣下

副啓此愚楮一通寫しを以て伊達從二位津田司法中判事

長文部少丞等ヘ内々御廻示奉願候客次忽忙率勒不宣

一二五　七月九日（八月十二日）柳原少辨務使ヨリ太政官正院宛

清國ニ於ケル談判ノ復命概略書送付ノ件

附屬書　七月九日柳原少辨務使ヨリ副島外務卿ニ差出セル右復命概略書

復命概略書全文

右今般清國ニ於テ談判ノ概略外務卿ヘ陳復仕候仍テ尊閲ニ呈候也

壬申七月九日

外務大丞兼少辨務使　柳原前光

正院御中

（使清日記）

（附屬書）

復命概略

微臣前光　明治五年正月廿四日少辨務使兼任宣下ヲ拜シ二月二日清國ヘ派出ノ旨ヲ奉シ閣下ヨリ彼國大臣ヘ御照會竝ニ條約改議ノ委任狀等諸文書ヲ領スルニ因リ愚見ヲ陳述シテ裁示ヲ仰キ行李束裝已ニ了テ三月八日ヲ以テ少記鄭永寧大錄穎川重寛十五等出仕末次繁雄等ヲ帶同シ金港發船順路東洋ヲ航シ十六日江蘇省上海ニ着シ兵備道沈秉成同知陳福勳ニ面晤等ノ公事ヲ辨シ廿三日纜ヲ解キ黃海ヲ渉リ廿九日直隷天津府ニ着シ三岔河旗昌洋行ニ投宿シ四月朔一行主從六名ノ名單ヲ行主劉森ニ託シテ協辨大學士北洋通商全權大臣李鴻章ニ報シ會晤ヲ請フ彼當時公務繁冗ナルヲ以テ別ニ日ヲ擇ミ回答スヘキ旨ヲ復ス二日十一字記名江蘇海關道孫士達即チ昨年伊達氏北京ニ入ル節導引セシ者二字兵備道丁壽昌三字知府馬繩武四字海關道陳欽即チ昨年清ノ全權ニ幇辨タル者五字知縣宋淵涇各名ヘ巡路訪問シテ舊情ヲ話シ來着ヲ告ク三日孫士達等來テ回拜ス是ヨリ先キ上海ニテ書柬ヲ作リ江蘇布政使應寶時昨年清ノ全權ニ幇辨タル者ヘ贈リ今般奉委件々ノ大略ヲ報明セシニ其寫シ早ク李鴻章ノ覽ニ入タル由ニテ閣下ヨリ條約改正ノ御照會アル事ヲ知リ紛々評議アリテ李鴻章當惑接受ヲ難スルノ趣風聞ニ承リ及候故八日ニ至リ穎川大錄ヲ李府ニ遣ハシ面晤催逼候處明朝九字候駕可致トノ答ニ付九日朝一行ノ者ヲ帶同シテ總督行臺ニ至リ李鴻章ニ面談ス因テ閣下及伊達氏ヨリ總理衙門竝ニ李氏ヘ昨年款接申謝及前光少辨務使トシテ出派等ノ照會ヲ交付ス皆接受ス次ニ條約改正擬議ノ命ヲ奉セシ意ヲ陳ヘ御照會及委任狀ヲ示ス如左

（註　此處ニ「御照會及委任狀」記載シアルモ一〇六、一〇二ト同文ナルニ付略ス）

李披見ノ下問答了テ乃チ云フ西約修定ノ後ヲ俟チ改正ヲ議スルノ件ハ異論無シ惟此調處刀禁等ヲ裁刪スルハ第一ニハ信義ニ悖リ第二ニハ伊達大臣ト自己ノ全權便宜ヲ憑證スルニ足ラス第三ニハ其例未曾有也第四ニハ貴國ノ處置清ヲ蔑視シ又自ラ汚辱ス第五ニ此來議ヲ聽クトキハ兩全權共ニ君命ヲ辱シムルナリ是ヲ大括スルニ議約ノ可否ハ其責只二人ニ在ル而已貴國既已ニ伊達大臣ノ議立セシ約ヲ否トセハ清モ亦李某ヲ否トセ不ルヲ得ス二人一體功罪相關ス必ス否トセハ只二人ノ罪ノミナラス兩君ノ聖明ヲ損スルニ至ル今此照會ヲ受レハ其辱ヲ蒙リ鴻章何ノ面目有テ天下ニ對シ何ノ言語ヲ以テ總理衙門ニ申陳セント憤怒赫トシテ解ク可ラス臣等百方辯說スト雖トモ確定不拔ノ色ニテ斷然御照會ヲ接受セス偏ニ我カ失信ヲ責メ且云フ自己若シ此照會ヲ受ルトキハ現在ノ職面ニ對シテ萬々妥協ノ答ヲ爲ス能ハスト從前日本ノ爲メニ自國ノ論ヲ破リ遂ニ約ヲ成セシ條理情實ヲ併ハセテ頻ニ怨言ヲ發シ使者ノ進退維ニ谷マル然レトモ我ニ在テ交際ヲ保護スル本旨ヲ表シ諄々談論シ候故彼モ亦其理ヲ解シ且前光等舊識ノ素有ルヲ以テ之ヲシテ窮困セシムルニ忍ヒス已ヲ枉テ曲全ヲ謀リ自己ハ機務繁擾ナルニ因テ應接ノ義ヲ陳欽及ヒ孫士達ヘ委辨スヘケレハ諸事二氏ト討論有テ然ルヘシ所詮約面ノ字眼ヲ改動スル事ハ許サスト云ヘリ爾後陳孫二氏ト辨論候ヘトモ其例曾テ無ケレハ斷然成就セ不ル所也併ナカラ約義モ時有テ變通セ不ル可ラサル理ヲ有スルノ意ヲ前光ヨリ陳說シ李鴻章モ素ヨリ深ク兩國交際ヲ重シタレハ日本ニ於テ故障ヲ生セシメ不ルノ方嚮ヲ定メ遂ニ紛々タル傍說ヲ破テ總理衙門ニ申達シ詰ル處換約ノ使臣派出ノ時ニ方リテ別ニ續款或ハ照會ヲ修立シテ條約ニ附添シ件々ヲ變通スル事ヲ許ルシ以テ前權後權ヲ竝立セシメント定ムヘキノ端倪ヲ窺ヒ得タリ就テハ裁撤ヲ請フノ御照會ヲ彼斷然接納セ不レハ空シク廢紙ニ屬シテハ不都合ニ付種々思惟熟議ノ末五月十三日其御照會ヲ以テ基本ト爲シ別ニ前光ヨリ照會ヲ作テ陳欽ニ致ス如左

○爲照會事于昨明治四年七月二十九日我

欽差大臣伊達　在
　貴國會同
欽差大臣李　所訂條約經該伊達奉回本國繳呈
朝廷深爲嘉悅會時
欽派右大臣岩倉等專往歐西諸國踐期改約因其往復自需年餘
廷議以伊大臣所訂日本一邊條款及有擬別國局面之事須照新
　定西約改議望其劃一
上諭外務卿大臣等即將此由備文照會清國大臣預前聲明俟岩
　倉等回國當即派使換約外務卿大臣等遵
旨擬議　奏明隨即具情函達
　李爵閣大臣又請
欽命派本大丞兼任少辨務使帶同外務少記鄭　等齎呈文函委
　本大丞便將文內細情面爲詳述今已抵津合應具由粘該文
　件及委限等抄底先行通報爲此照會
　貴海關道祈即代詳
　李爵閣大臣煩爲查准賜覆須至照會者
　　計粘　外務卿大輔照會及本大丞奉委文稿兩件
陳欽之ヲ接受スレトモ此頃病ニ臥スヲ以テ臣等連連孫士達
ニ面晤談論シ遂ニ五月二十二日ニ至テ照覆竝ニ評議案ノ寫

シヲ得ル如左

照覆封套表式

大清欽命按察使銜監督新關等處辦理直隸通商事務兼管海防兵備道加三級紀錄十次陳　公文　啓至

（朱枠）
（朱書）「監督天津鈔關關防」

（朱枠）
（朱書）「全　上」

大日本第四等官奉任外務大丞兼少辨務使勳錢正四位柳原當台開拆

同　背式
　内一件
（朱枠）
同治十一年五月二十二日
（朱書）「暫用監督關防」

照會譯註

爲照覆事同治十一年五月十三日准
貴大丞照會內稱以
右大臣岩倉等現往歐西踐期改約
伊大臣所訂條款及有擬別國局面之事請照新定西約改議

竝粘抄文稿兩件先行通報爲此照會祈即代詳等因本道當
即會同
記名江蘇海關道孫　逐款核議詳請
欽差大臣閣爵督憲李　核示玆于五月二十日奉
批
照會ヲ以テ答覆ニ及ヒ候事同治十一年五月十三日
貴大丞ノ御掛合文落手致候其文ニ
右大臣岩倉等現今歐西ニ往キ期限ニ付條約改定致サルヽニ因
テ
伊達大臣議定ノ條約面及ヒ各國ノ振合ニ礙ハリ有ル事ハ其新
定セシ西洋條約ヲ照シテ改議致タク竝ニ文案二通寫シ相添ヘ
先以テ右通報ノ爲メ照會ニ及候條其段御取次伺賴入トノ旨御
申越ニ付本道早即
記名江蘇海關道孫士達一同右條々ニ就テ評議取調ラヘ
欽差大臣內閣大學士一等伯爵直隸總督部堂李ヘ沙汰相伺候處五月
二十日左ノ通下知ヲ奉ス
據詳日本國外務大丞柳原照會關道商改條規各件竝該道
等逐條核議緣由均已閱悉本大臣上年奉
旨會議日本國約事因伊大臣老成暗練奉有日本全權明文是以
彼此相信議成此約今未換之先遽請商改查兩國初次訂交
最要守信若旋允旋改先自失信無此辨法即從前各國議約

經彼此畫押蓋印定案後竝無准改之例本應無庸置議姑念
柳原等前兩次來津曲達誠款贊成和誼頗爲勤勞特令該道
等與之會商
伺書面日本國外務大丞柳原ヨリ天津海關道ヘ照會ヲ送リ修好
條規等ヲ改議セント談スルノ各件竝ニ陳孫等ニテ有條々評議
ノ次第亘細檢閱致候本大臣昨年
上旨ヲ奉シテ日本國條約事務ヲ會議ノ節伊達大臣老實練達ニシテ
日本全權ノ明文ヲ奉有スルニ因テ彼此相信シ會議ノ上此條約
ヲ取結候處今般未タ本約ヲモ取換ヘサル先キ俄ニ扱ヒ直ホサ
ント申來ル爰ニ考ルニ兩國此頃初メテ交ヲ結ヒタレハ專ラ信
ヲ守ルヲ肝要トスヘキ處右樣今サキ極ハメシ契約ヲ程ナク仕
直ホスト云フハ先ニ自ラ信ヲ失フニテ之ヲ取計フノ法無シ前
カタヨリ國々ト假リ條約ナシタルモ曾テ仕直ホセシ例ナケレ
ハ何ノ評議ヲ掛クルニ及ハ不ル筈ナレトモ柳原等ハ前年ヨリ
兩度モ天津ニ通ヒ條約ノ事ニ骨折リ終ニ和誼ヲ執成セシ勤勞
モ有之旁以テ陳孫等ニ命シ此議ヲ會同談判セシム者也
玆閱來詳如第一條彼國與西國換約恐通商章程有所更易
特來預商一節本大臣查日本遣使往議西約此時尙無成說
何必懸擬預商未免多此一舉應如該道等所議俟換約後如
有必須更易之處隨時察酌商辨
儲伺面ヲ檢閱スルニ其第一條彼國今數西洋各國ト條約改定ニ
付テハ通商章程ナト自ラ變易スル所モ有ルベケレハ前ビロ談

判ノ爲メ渡來セシトノ云々本大臣考ルニ日本使節西約改定ノ爲メ洋行シタル央ナレハ只今ノ處其決定ノ廉モ相分ラサルヘシ然レハ見越シヲ以テ前ヒロノ談判ニハ及フマシク今度ノ一舉誠ニ餘計ノ事ト存ス故ニ陳孫等評議ノ通本約ヲ取替ハセシ後必ス變易スヘキ事有ラハ臨時談判取極ハムヘシ

第二條華民在彼訟獄繁興新派理事官須熟察情形酌議未及能照條約訊斷一節本大臣查中國因未換約現未選派理事官將來派員前往自應照約辨理惟理事官初到彼國情形生疎亦或不免應如該道等所議中國派理事官時令其留心察訪借抄卷宗務向地方官諮詢一切屆時再行飭遵

其第二條華民彼地ニ在テ訟獄繁雜ナレハ新タニ理事官ヲ派スルトモ先ツ其情形ヲ熟察シテ酌議スヘキ事モ有ルヘケレハ約而ノ通會同訊斷スルニハ至ルマジトノ云々本大臣考ルニ中國未タ本約ヲ取換ハサ不ル故未タ理事官ヲ差遣ハサズ追テ其員ヲ派シ遣ハシタラハ自ラ約面ノ通辨理スヘケレトモ理事官初メテ彼國ヘ越スニ因テ其情形ヲ心得知ラ不ル事モ有ルヘキ所ナレハ陳孫等評議ノ通中國ヨリ理事官ヲ派出セハ其者ニテ精精探索ヲ遂ケ清民一件ノ書留ヲモ借リ寫シ彼地方官ニ就テ萬端問合セ相勤ムヘキ旨其時ニ至テ申付心得サスヘシ

第三條請將兩國遇事調處議卽裁撤一節本大臣查兩國既結和好遇事調處誠如來文所云雖無此條亦有權可行惟去歲議約時不載則可既載復裁殊違信義既云是係諸國通例

本無窒礙何須裁撤且兩國相距較近永以爲好尤非西洋遠邦可比若欲裁去所謂修好者何在應如該道等所議此條無庸置議

其第三條兩國事ニ遇ヒ調處スルノ約ヲ議シテ裁撤セントノ云々本大臣考ルニ兩國既ニ和好ヲ結テハ若シ他ヨリ非常ノ事起リシ時其媒救ヲ爲ス義ハ誠ニ彼ノ來文ニ云ヘル如ク此條無シト雖トモ亦行フ可キノ權有ルナリ但シ去年假條約ヲ爲ス時此條ヲ載セ不レハ好カリシニ既ニ載セタルヲ又裁撤スル事何分信義相立チ難シ既ニ調處ノ義ハ諸國ノ通例ナリト云フカラニ此條有テモ差支ル事無シ夫レヲ何故裁撤セントスルヤ且兩國隔壁ノ思ヲナセハ永ク好ヲ契フ自ラ遠街ト交ハルヨリ親タシキ詞ノアルハ人情ノ常也然ルヲ裁去スルトキハ修好ト云フ義果シテ何ツクニ在ルヤ故ニ陳孫等評議ノ通此一條ハ何トモ議論スルニ及ハス

第四條佩刀係彼國禮制不便公禁一節本大臣查佩刀既係彼國禮制中國既與通好自未便明爲禁阻應如該道等所議由日本國理事官自行禁諭商民無犯俟換約後彼此照會核准通行仍候修約屆期酌改

其第四條佩刀ハ彼國ノ禮制ニ係リタレハ公然ト禁ス可ラストノ云々本大臣考ルニ刀ヲ佩ク事既ニ彼國ノ禮制ニ係ル由中國既ニ之ト好ミヲ通シタレハ條約ニ載セテ禁阻スルハ宜シカラス故ニ陳孫等評議ノ通日本國理事官ヨリ自ラ禁諭ヲ行ヒ商民犯ス事無ンバ本約取換ハシノ節彼此照會文ヲ以テ申シ極メ之ヲ布告シテ猶條約改定ノ節程好ク改ム可シ

第五條日本進出口稅一例照該海關成規收稅一節本大臣查日本國海關通商章程既有不同亦可稍爲通融應如該道等所議俟換約後照約商辨

其第五條日本ニ於テハ入出口稅ノ一例ヲ其海關成規ノ通收稅スヘシトノ云々本大臣考ルニ日本國海關ノ稅務章程ハ既ニ不同アル趣ナレハ夫レハ其規則通リニ計ヒ然ルヘシ故ニ陳孫等評議ノ通本約ヲ取換ハセシ上此義ヲ條約第三十一款ニ基キ談判取極ハムヘシ

總之條規既定各應信守將來兩國和好日敦其無關礙者自可日後會商其有關礙者無論何時斷難允從也仰關道照覆柳原知照仍候分別

奏咨備案繳文稿存等因奉此合行遵錄照覆竝粘抄原詳一件爲此照會

貴大丞查照須至照覆者

總シテ修好條規等既ニ定リタルニ因テ双方之ヲ信守シ以後兩國和好日ニ增シ敦クスヘケレハ其レニ關礙ナキ事ハ後日何廉談判相遂ヘシ其レニ關礙有ル事ハ何時ニテモ斷然承允致サ不ル也右條々關道ヨリ柳原ヘ返書相掛合ヒ猶京都ヘノ　奏聞及ヒ總理衙門ヘノ屆書案夫レ々取調ヘ且下知文返上シ伺書ノ控一同差出セトノ旨ナリ右ノ通下知受候ニ付其旨書取リ答覆ニ及フヘキ爲メ元伺案一通寫シ添ヘ

貴大丞ヘ照會イタシ候條此段御承知成サル可ク候以上

計粘抄　原詳一件　元伺書寫一通添ル

照錄會詳稿　詳ハ伺書ノ名ニテ陳孫兩員會合シ此事ヲ調ラヘ李ニ伺ヒシ故會詳ト云フ照錄ストハ伺書案ヲ其通リニ寫シタル也

爲詳請示遵事同治十一年五月十三日准

日本國第四等官柳原照會內開我文云々ヲ書ケリ等因

職道欽　會同　職道士達竊查日本國去秋甫經立約尙未互換此時遽請改議殊非信守無論何國皆無此例詳閱柳原抄送彼國外務省照會及奉委要旨各件有尙可通融者有斷難允從者謹就管見逐條核議

詳文ヲ以テ御下知奉伺候事同治十一年五月十三日　日本國第四等官柳原ノ照會ヲ受取其文ニ云々ノ旨申越候ニ付私共會同ノ上取調ヘ候ニ日本國ハ去秋始テ定約イタシ未タ本約ヲモ取替ハサズ今般俄ニ改議セント申越ス段實ニ信義相立タス何レノ國ニモ右樣ノ例シ無之尤柳原ヨリ寫シ送タル彼國外務省ノ掛合文竝ニ委任狀等ヲ詳閱致セシニ先ツ其レ形リニ聞置クヘキ事有之又斷然承允シ難キ事モ有之故ニ私共見込ヲ以テ其條々ヲ評議イタシ左ニ申上候

如第一條所言來歲與歐西改約之案起于欽使適清之後業已擬定專欲取法于歐西常行條例以改我國外交之約一節詢之柳原等據稱日本國遣使赴歐西各國修約恐通商章程有所更易特來預商職道等查兩國修好原不僅重通商日後更易章程彼此皆可變通是以去歲議約時並不以口岸多寡計較也惟現在日本與西國修約尙無成議勢難懸定原不必先期預商應俟換約後章程如有更易自可隨時商辨

其第一條ニ申シタル來歲歐西ト條約改定ノ見込案ハ伊達欽使清行ノ後ニ調ラヘ掛リ專ラ法ヲ歐米常行ノ條例ニ取テ我國外交ノ條約ヲ改定セント議決セシ云々ヲ柳原等ヘ詢問候處日本使節歐米各國ヘ赴キ其條約改定ノ上ハ和清通商章程ニモ變易スル所アルヘケレハ前以テ談判ノ爲メ渡來セリト申候故私共勘考候ニ兩國和好ヲ遂タレハ元來通商ナドハ今始テノ事ニモ非ス以後章程ヲ易ル事有ラハ双方何レモ變通ノ計ヒ致スヘキ心得ニテ既ニ昨年議約ノ時ニ端的開港場ノ多少モ異ナレトモ曾テ瑣論致サス候尤日本ハ現在西洋ト修約ノ央未タ成就ニ至ラス見越シノ決定ハ相成マシク然ラハ前以テ談判スルニ及ハ不ルヘシ故ニ本約ヲ取替ハセシ後ニ章程上ニ若シ變易スル事有ラハ固ヨリ臨時談判ヲ遂ケ取計フテ然ルヘシ

又如第二條所言各港所住清民不下數千新派理事官來須先熟察實地情形尙有隨時酌議之處未及能照條約訊斷一節又詢柳原等據稱日本國通商各口相距均遠清民人數又多若新派理事官一員難以兼顧未能各口會同訊斷且現與西國換約恐有更改期于一律辨理職道等詰以西國商民是否仍由西國領事自行審辨柳原等復稱現在如此辨理以後西約如何更改尙不可知職道等查各管各民係各國通例今彼國欲改西約諒亦未能定議我兩國既經定約自當永遠遵守惟聞橫濱長崎神戸三處華民最多向由日本官代爲管理中國新派理事官前往情形或未深悉自應留心察訪借抄卷宗竝一切詳詢彼地方官以期妥善應俟中國派員時再行辨理

第二條ニ申タル各港所住ノ清民數千ニ下ラ不レハ新派ノ理事官來ルトモ先ツ實地ノ情形ヲ熟察スルノ間猶其時宜ニヨリ斟酌相談ノ廉モ有ルヘケレハ條約面ノ通吟味裁斷スルニハ至ルマジトノ云々ヲ猶又柳原等ヘ詢問候處日本國通商ノ諸港何レモ遠ク相隔リ清民多人數住居シタレハ若シ今出ノ理事官一員ニテハ所詮總體ヘ管轄モ屆クマシク各港ニテ會同訊斷スル事難カルヘシ且西洋ト改約ノ上何程カ改革アラハ必一律ニ從ヘ辨理スヘキ見込ノ由申候故西洋ノ商民ハヤハリ西洋領事ノ手ニテ吟味裁判スルヤト問詰候處柳原等ノ說ニハ當分ノ處是迄ノ通辨理スレトモ以後西約如何改革スルカ未タ相分ラ不ル由ニ付私共勘考候ニ銘々ニテ其民ヲ管轄スルハ各國ノ通例ニ有之今般彼國西約ヲ改革スルニ如何議定スルヤ計リ難シ我兩國ハ既ニ定約シタレハ先ツイツ迄モ之ヲ遵守スヘキ筈ナ

レトモ橫濱長崎神戸三港ハ華民最多クシテ從來日本官ヨリ之ヲ管轄スルト聞ク中國ハ今ヨリ初メテ理事官ヲ差遣ハス事ナレハ其情形ヲ心得知ラ不ル事モ有ルハ勿論也因テ其邊精々探索致シ清民一件ノ書留ヲモ借テ寫シ萬端詳カニ彼地方官ヘ問合ハセ不都合無キ樣心掛ヘキ事ニテ右ハ中國ヨリ其員ヲ差遣ハス時ニ至リテ猶申付方有ルヘシ

又如第三條所言調處一條據查美國與清國所約之文美國止云自爲清國從中調處卽我國與美所約亦同皆屬偏爲美國單作一面之詞欲議裁撤一節又詢柳原等據稱現向美國換約擬將此條刪除詰以將來果能刪除否答云尙未能定職道等查兩國既結和誼遇事調處自是約中應有要義卽美國無此亦當增添況美約偏爲一面我則平列兩國尤屬周備去秋議約之初曾經應臬司與職道欽專函聲明並屢次面談凡立條約是自主之國皆有自主之權不必瞻徇他國

伊大臣深識大體亦以爲然故仍行列入也若悱于浮言忽欲裁撤西國環視當更相輕因人改約咎將誰歸且與來文所稱雖無此條有權可行是係諸國通例等語亦覺矛盾今請裁撤此條不但啓人猜疑將所謂修好者何事耶此條應毋庸議

又第三條ニ申タル調處ノ一條美國ト清國ト約セシ文ニハ只清國ノ爲メニ從中調處セント云ヒシノミ卽チ我國ト美ト約セシモ亦同然皆偏爲ニ屬シテ美國獨リ一面ノ詞ヲナシタル故裁撤ヲ議セント欲

ストノ云々ヲ猶又柳原等ヘ詢問候處今般美國ト改約スルニモ此條ヲ刪除スヘキ見込ノ由申候故彼方ニテ彌刪除叶フヤ否ト問詰候處夫レハ未タ定メ難シト相答候因テ私共勘考候ニ兩國和誼ヲ結ヒシ上ハ若シ他人ト不慮ノ爭ナトアラハ其無事ヲ祈リテ取扱フヘシトノ義理ハ條約面ニ自ラ有ルヘキノ會釋ナレハ假令美國ニ此條無クトモ是ハ增添スヘキ事也況テ美國ハ彼獨ニテモ爲スモノヲ我ハ兩國ニ平列シタル故猶更情誼周備セリ昨秋條約ヲ取組ム比曾テ應臬司寶時私欽ヨリ此義ニ就キ書簡ヲ以テ說明シ又凡條約ヲ結フニ自主ノ國ナラハ何レモ自主ノ權アル故他國ノ振合ヲ寫シ取テ物スルニ及サル旨ヲ幾度カ面談致シ伊大臣ニ於テモ深ク大體ヲ議リ尤ノ義ニ思ハレシニ因テ此條ヲモ列入シタル也若シ一時ノ浮言ニ驚テ今更之ヲ裁撤スルナラハ西洋各國ノ見合モ有之猶此上我兩國ハ人ノ言ニ因テ條約ヲ改動スルゾト世ニ輕侮セラルヽ時ハ其咎將タ誰ニカ歸セン且之ヲ裁撤セント云フハ來文ニ此條無シト雖トモ行フ可キノ權有ル事諸國ノ通例也ト云タル詞トモ符合セ不ル義ニテ今更此條ヲ裁撤セントノ議ハ却テ他人ノ疑惑ヲ引出スノミナラス抑モ修好ト謂フ者ハ何事ナルヤ故ニ此條ハ何トモ談論ニ及ハスシテ然ルヘシ

又如第四條所言刀械一禁論我國官吏紳商常佩雙刀卽農工商賈有時亦帶單刀本係禮制不便公禁由我理事官知其有禁令我商民無犯故議削除一節職道等查帶刀既係彼國禮制雖爲中國所禁如果由彼理事官自行諭禁商民無犯似尙無甚妨碍既經立約修好須求兩全不必强以所難顯爲公禁應俟換約後彼此照會

核准立案仍候修約屆期再行酌改

又第四條ニ申タル刀械ノ禁ハ我カ國官吏紳商常ニ雙刀ヲ佩ヒ卽チ農工商賈モ時ニヨリ一刀ヲ帶ル事有ルハ本來我體制ナレハ公然ト之ヲ禁ス可ラス我領事官ヨリ其禁制ヲ心得我カ商民ニ布令シテ犯ス事無ンハヨシ因テ削除ヲ議ストノ云々私共勘考候ニ帶刀ハ既ニ彼國禮式ニ係タルヲ中國ニテハ之ヲ禁スルト雖トモ彼理事官ヨリ能ク之ヲ禁諭シ商民トモ犯ス事無ンハ何ノ妨碍モ有マシキカ既ニ條約ヲ結ヒ好ミヲ修テハ双方互ニ都合宜キ樣相計フヘキ事ナル故强カチニ其差シ支ヘ有ル義ヲ顯ハニ公禁スルハ無用ト爲ヘシ因テ本約ヲ取替ハセシ上先ツ互ニ照會文ヲ以テ其個條ヲ申極メ置キ追テ改約ノ期ニ至リ猶程好ク之ヲ改ヘシ

又如第五條通商章程第二十八款所載進出口稅一例須議在我國各港則應照該海關成規收稅一節職道等查柳原等面交彼國海關通商章程其進口貨物未載進口稅則者雖或載有出口稅則不得援此納稅必須按價抽稅其出口貨物未載出口稅則者亦照上例等語核與原定第二十八款通商章程微有不同惟兩國通商章程第三十一款內業經載明兩國商民在通商各口如彼此海關嗣後有變通之處由理事官詳請駐京大臣隨時照會商辨等語今柳原等所請似亦無甚妨碍尙可稍爲變通惟必俟換約後方能照約商辨

又第五條ニアル通商章程第二十八條ニ載セタル入出口稅ノ一例ヲ我國各港ニテハ其稅關從前ノ規則ヲ照シテ收稅セン事ヲ議スヘシトノ云々ヲ私共勘考候ニ柳原等此議談判ノ節彼國海關稅務ノ章程ヲ見セ候ハ輸入ノ品ヲ若シ輸入目錄ニ載セ無之時輸出目錄ニ載セ有ルトモ之ヲ照シテ納稅ス可ラス直段ヲ積リテ五步ノ稅ヲ納ヘシ輸出品ノ輸出目錄ニ載ラ不ル者モ亦同例也トアル故原定第二十八款ノ通商章程ト突合セ見候處誠ニ聊ノ相違也尤兩國通商章程第三十一款ニ兩國商民開港場ニ住居シ双方ノ海關何レカ以後若シ規則ヲ變通スル事有ラハ理事官ヨリ駐京大臣ヘ伺ヒ時ニ隨テ照會ヲ送リ談判取計フ可シトノ義モ明載シタレハ今度柳原等ノ右談判ハ何モ妨碍ノ筋無之故當分其面談ニ從ヒ尤本約ヲ取替ハセシ上約面第三十一款ニ基キ談判取計ヒ申シ極ムヘシ

所有職道等逐條核議緣由是否有當理合詳請

憲臺查核示遵實爲公便爲此備由具呈伏乞

照詳施行須至詳者

計錄呈日本國外務卿大輔照會及柳原奉委文稿各一件

右ハ私共其件々ニ就テ評議致候次第如何可有之ヤ此段書面ヲ以テ憲台ノ檢查御下知ヲ受ケ相計ヒ公事取整候樣仕度是ニ因テ右ノ次第具サニ申上候條何トソ伺ノ趣可然御沙汰被下度奉願候以上

外ニ日本國外務卿大輔照會竝ニ柳原奉委ノ文寫シ一通宛錄呈仕候

（註「原稿以上略」）

彼ノ答議ヲ定メタル既已是ノ如ク其成スヘキハ一朝ニシテ許准シ否ム者ハ斷然拒絕ス此上辨論スルトモ徒ニ滋蔓シテ却テ使命ヲ辱ムルヲ免レ不ル耳ト其形勢ヲ洞察シテ意ヲ決シ翌廿三日海關道ニ到テ照覆ノ謝ヲ述ヘ竝ニ不日一同ノ者天津ヲ去リ上海ニ下リ前光ニハ全權ヲ有セ不ルヲ以テ本國ニ歸リ事情言上裁決ヲ請フヘク仍テ鄭少記ヲ上海ニ留メ置候ニ付本國決裁ノ都合ニ應シ同人ヨリ餘議詢及ノ事モ可有之旨委賴シ且孫士達ヘモ均ク相告ケ置候抑今般ノ役ハ固ヨリ大難事ニシテ議論紛々千綜萬錯得テ其縷々ヲ分チ筆記ス可ラス其成局ハ既ニ陳欽ノ照覆ニ據テ鑒ム可ク候ヘトモ尙歸趣ノ概略ヲ撮シ竝ニ愚考ヲ附シテ貴覽ニ便ス

一條約字面ヲ裁撤刪除スル能ハ不ル事

四月初九日李鴻章ト應接ノ語ニ據テ其本旨ヲ見ルニ足ル抑刪除ノ例ハ列國ニモ無ルヘシ故ニ淸ノ政府一定不拔ノ議ヲ以テ承允セ不ル也前光考ルニ惠頓氏公法論商議立約篇第五節公約照例商定書押君國必當遵守全權大臣既能代君行事則其君自當允其所行蓋命他人攝行卽與躬親無異各國律法實有此意也○全權之憑而外使臣另有訓條秘書唯其君所知者若行事或是淸國政越訓條秘書而未越全權之公憑則其君亦當允守其約　信憑內倘無必俟其君准行之語則使臣所行國君必准蓋兩君以府ノ裁刪ヲ拒ム本タル也又

臣相交特授全權依律法正必從副此等大臣卽君之副也副者必遵其主之訓而行其執何權亦由其主之訓而定倘未越權行事凡所許者君必成就之然今之常例君雖派臣代議猶留准否之權於君所以免爭端也

是卽チ我請求ノ起ル根原也且我ニ在テ西約改定ノ擧ヲ借テ一ノ辭柄ト爲スハ和蘭學士畢酒林氏公法平時泰西公法ノ條規第十章萬國公法ニ於テ定約盟約法式ノ篇ニ凡ソ條約ヲ結定セル後鈐准ノ時ニ至テ之ヲ拒ム事ヲ論スルノ下第十節ノ第二ニ云ラク商議ヲ始メテ許可ニ終ル迄其間時勢ノ轉換ト事變ノ起發トニ由テ其結タル約束ヲシテ遂ニ施行ニ便ナラ不ラシム事有リ　是ニ基ク

ト雖トモ彼ハ正我ハ奇彼ハ主我ハ客ナレハ遂ニ裁刪ノ意徹セ不ル也

本省公師斯密氏曾テ千八百十九年ヨリ同ク廿年間ニ米政府ト西班牙トニ於テ西ニ屬シタル「フロリダ」ト云ル地ヲ米ニ讓渡ノ條約議定ノ後西ニテ批准ヲ拒ミシ例ヲ引證スレトモ是ハ只批准ヲ拒ミシ事有ルヲ畢ルノミニシテ其事ハ數年ヲ費シタレトモ成就セス　是ニ由テ之ヲ觀レハ續款或ハ照會ヲ以テ議定シ其變通ヲ辨スルニ歸スヘシ

一互換ノ時ニ使臣ノ全權ヲ以テ續款或ハ照會ヲ作リ本約ニ附副シテ通行變易スル事

淸國ニテ續款ノ例二三ヲ見ル照會ヲ以テ議定スル如キハ甚タ多シ是李鴻章自國ノ成規ヲ照シテ我請求ニ從フ所以也前光考ルニ　畢酒林氏公法平時泰西公法ノ條規第十章ノ十二節ニ屢々本條約ノ外ニ條款ヲ附シテ左ノ事宜ニ便スル事有リ○第一ニハ其事別項ニ屬シ本條約內ニ適宜ノ地無キ者ヲ規定スル爲メ○第二ニハ本條約ノ款義ヲ倘精明ナラシメ或ハ其中ノ事項ニ就テ預メ期ヲ約スル爲メ○如是別條ヲ附スルトキハ其輕重强弱本條約ト均キ事ヲ加書スヘシ　是續款ノ體也　同第十三節ニ或ハ倘便易ナル式ヲ以テ定約スル事有リ是前文結尾ニ鄭重ノ書法ヲ用ヒ不ル文移ヲ交換シ以テ一定セル事件是照會ノ體也

一修好通商各條款內我國西約改定ニヨリ國法訊斷等ノ如キ應ニ後ヲ俟テ更正ヲ議スヘキ事

是將來ヲ指シ我外交ノ條例變更セハ清トノ約モ改議スヘキ旨ヲ廣ク陳述ス彼モ西例ニ更改ヲ生セハ一律ニ我ヲ待ツノ意有ルヲ以テ別ニ論スル所無シ

右事件孫士達ト談論ノ記略

孫云國法訊斷ノ如キ後ニ改正ヲ議スト指的スル何ノ意ソ

柳云公法ニ據ルニ（論制定律法篇第二節○各國疆內自操專權以制法也故凡疆內產業植物動物居民無論生斯土來者自外來者按律皆歸地方律法管轄且疆內行止舉動契據事件莫不歸其所制也）ト出タリ是ヲ以テ主權ヲ有スル國ハ固ヨリ宜シク如此スヘシ然レトモ（同篇第十節○即如二國立約許此國之領事等官住在彼國疆內而行權於其本國人住在彼國其權如何必由和約章程而定）ト云ヘル如ク列邦ノ條規各異同アリ但シ奉教ノ國ハ（惟准審斷其本國水手商人等住在外國者所有爭端）ト載タレハ領事ノ權至テ微ナリ惟奉教國ヨリ土耳其巴巴里回々等ノ國ヘ派出セシ領事ハ其人民ノ爭端罪案ヲ審辨スル兩權ヲ有セリ蓋法教異ニシテ政刑殊ナル故彼ノ地方管轄ニ歸セ不ル也貴國美ト（千八百四十四年道光二十四年）訂定セシ章程ニ彼此人民自國法律ヲ以テ訊斷スルノ約ヲ惠頓氏其公法ニ載セ以テ大ニ權利ヲ得ルト爲セリ敝邦外交ノ濫觴ハ安政戊午歲ニ在テ美ト議約ス其審斷ノ義亦然リ而シテ各國皆之ニ因襲ス今也國政漸ニ興リ公法ヲ溫ネテ我主權ヲ恢張セント欲シ因テ頃

コロ改約之役有リ是我カ後ヲ俟テ貴國ニ議及セント擬スル所以也

孫云貴國所見宏壯惟敝邦ノ如キハ本民罪ヲ犯シ外人ノ家宅ニ逃匿セシヲ探訪スレトモ或ハ之ヲ交出セ不ルノ弊有ルニ至ル甚哉

一卽今淸國ヨリ領事官ヲ派出スルトモ實地ノ情形ヲ熟察シテ隨時酌議スヘキ處有ルヘケレハ其緒ニ就クヲ俟ツノ間ハ會同訊斷ヲ行フニ至ラ不ル事（修好條規第八條○兩國指定各口彼此均可設理事官約束己國商民凡交涉財產詞訟案件皆歸審理各按己國律例覆辨兩國商民互相控訴俱用稟呈理事官應先爲勸息使不成訟如或不能則照會地方官會同公平訊斷其竊盜逋欠等案兩國地方官祇能查拏追辨不能代償）右ニ就テ陳欽及ヒ孫士達ト談論ノ記略

柳云貴國人民我カ各港ニ住ム者閱年已ニ久ク皆地方ヨリ之ヲ綏撫管轄セリ昨年議約ノ時李中堂曾テ云ラク兩國親近ト雖トモ往來稀少ナレハ未タ每港ニ官ヲ派スルヲ須ヒス我カ上海爾ノ橫濱ニ各一理事ヲ設テ足レリト顧フニ我領事ハ商ニ先ンシテ來タレハ何ソ其治ラ不ルヲ患ン惟貴國今新タニ一理事ヲ派スルトモ其民ノ先己ニ老奸巧猾ナルヲ奈何セン此レ我外務卿大臣等ノ慮ヲ爲ス所以也

孫云此レ貴卿大臣ノ好意ヨリ出テ良ヤ感戴ヲ爲ス誠ニ貴諭ノ如ク我今理事ヲ派ストモ實地民情ヲ諳セス地方ニ就キ一切ヲ諮詢シテ辨理スルニ非レハ焉ソ能ク妥善ヲ致サンヤ語ニ云ラク舊令尹之政必以告新令尹我カ內地新舊官交代スルニ三月ノ間新ヨリ舊ニ敎ヲ受ク內地猶且此ノ如クス況ヤ萬里他鄉ニ於テヲヤ敢テ問フ貴國西民ニ兩涉スル案件ハ如何會同訊斷スルヤ

柳云我西約ハ文面舊新參差アリ但シ兩民交涉ノ案ハ本官ノ理刑廳ニ於テ各其民ヲ審問裁斷ス若シ其案ヲ鞫審對詰センカタメニ他民ヲ拘喚スルトキハ其本官ヨリ員ヲ派シ之ヲ監セシムルヲ准ルセトモ曾テ其廳事ニ與リ共ニ是ヲ訊斷セシ事無シ今使ヲ西國ニ遣ハス一ハ此條ヲ修改セント擬シタル故將來兩國ノ約モ亦條理實情ニ據テ新例ヲ設ケ改メ不ルヲ得サルナリ

孫云我國未タ換約セサル故理事ヲ派セス商民久シク愛撫ニ沾フ然レトモ閩粵僻陬ノ民從前其奸猾ヲ恣ニシテ多ク貴國ヲ累ハスト聞ク故ニ暫ク其管理裁斷ヲ勞スレトモ將來當サニ四五品ノ官ニ於テ時務ニ練達セシ者ヲ選派シテ橫濱神戶長崎三港ニ置キ乂全權欽使ヲ東京ニ駐

劄セシメ約ヲ護シ民ヲ保ンスベケレハ務テ莠ヲ芟リ良ヲ進メ以テ貴國ニ謝セント要ス兩國ノ約ハ旣ニ常例ニ從タレハ各之ヲ遵守スルニ異議ナカルヘシ會同訊斷ノ如キハ中外法律殊異ナルヲ以テ兩民交涉ノ案ヲ裁斷スルトキ各其國法ヲ按シテ處置スルノ情罪當否ヲ兩長官會同シテ之ヲ信徵シ以テ公平ヲ昭カニスル也但シ爭訟兩民ノ間ニ在テ對審ノ爲メ此民ヲ彼ノ廳ニ出スト雖トモ此レニ因テ訊斷ノ權ヲ彼レニ讓ルヲ得ス是人ヲ着シテ監セシム所以也然レトモ兩國相交各情誼ノ親通ヲ貴メハ我領事ヲ派スル後ニ辨理スル方法ハ實地ニ方テ酌議シテ妥當ヲ得必シモ二三ノ字眼ニ拘泥スル事ヲ庸ヒンヤ其新例ノ如キハ後ヲ俟テ議スヘキ者ナレハ姑ク是ヲ舍ケ

一修好第十一條刀禁ノ事（兩國商民在指定各口彼此往來各宜友愛不得携帶刀械違者議罰刀械入官）

右ニ就テ陳欽及ヒ孫士達ト談論セシニハ第一我國禮制ニ關係シタルヲ載約明禁セリ第二淸國禁阻ノ權ヲ我疆內ニ及ホセリ公法ニ自主國內隨意ニ其主權ヲ行フト雖トモ他國之權ニ礙ハリアルヲ得ストノ義モ有之卽チ之ヲ削除セント望ムモ我禮制トテ敢テ貴國疆內ニ行フニ非ス只我國

權ヲ正シテ外侮ヲ禦クノミト申候處陳孫俱ニ云紳士刀ヲ佩ルハ素ヨリ其身ノ警備ト爲リ却テ履行淳良ヲ資クレトモ無知ノ小人ニ至リテハ寸鐵無シト雖トモ意外ノ兇ヲ致ス事多シ況ヤ刀械ヲ携ルヲヤ故ニ此レニ及ヒシ也然レトモ來議ニ據レハ誠ニ允當ヲ覺ユ既ニ管束ノ責理事官ニ備ハリタレハ我國又何ヲカ患ヒンヤト遂ニ覆翼ノ趣ニ談決セリ

一通商第二十八條ノ事

兩國稅則如有僅載進口稅則未載出口稅則者遇有出口皆應照進口稅則納稅或有僅載出口稅則者遇有進口亦皆照出口稅則納稅

第一則○輸入目錄ニ載セ不ル品ハ輸出目錄ニ載ル事有トモ是ニ隨テ稅ヲ納ム可ラス元代ニ隨テ稅ヲ納ムヘシ輸出目錄ニ載セ不ル品モ同樣タルヘシ

右前後文ノ相違ヲ述ヘ我開港ニテハ必ス後文ノ通收稅致スヘシト漢譯文ヲ以テ孫士達ニ談ス

孫云是小々事件也抑昨年ノ約通商章程ニ於テ彼此一樣ノ例ハ皆同條ニ載セタルト雖トモ若シ異ナル者アレハ彼時儘ニ分立ス可キヲ今此ノ如キハ何ソヤ

柳云昨年貴國ニ呈覽セシハ嶼國ノ約ニテ此條無リシ故一時悞ヲ致セリ上文ノ約ハ西班牙等ト議定シ我國ニテ普通執行ナヘルニ二十八條ニ兩國ト揭載シタレハ一樣遵

行セ不ルヲ得ス故ニ事瑣細ニ屬スレトモ此レニ及フ

孫云修好第九條ニ倘未設理事官其貿易人民均歸地方官約束又第三條中ニ其政事應聽各自ト有之右ノ文既ニ貴國ノ成規普通ノ稅則ナラハ直チニ照シテ行フトモ我民背クヲ得ス我モ亦タ問ハ不ルヘシ我國甚タ貴國ヲ信ス通商ノ如キニ至テハ時々穢ニ投シ利益ヲ謀ラ不ヲ得サレハ自ラ變通ノ道ヲ開キタリ何ソ此クノ如ク區々論スルヲ爲ント遂ニ照覆ノ趣ニ談決セリ

一修好第二條調處ヲ約セシ事

兩國既經通好自必互相關切若他國偶有不公輕藐之事一經知照必須彼此相助或從中善爲調處以敦友誼

清美條約漢文寫シ嗣後大清與大合衆兩國竝其民人皆照前和平友好毋得或異更不得互相欺凌偶因小故而啓爭端若他國有何不公輕蔑之事一經照知必須相助從中善爲調處以示友誼關切

（註　此ノ處ニ「右美文旁譯」ト題シ一二三附記一ノ末文記載シアルモ略ス）

右三樣ノ文ニ互助ト偏爲ノ違有ルヲ示シ我カ外務卿大臣等ノ照會及ヒ委任面ニ之ヲ裁撤セント欲スルノ義ヲ解說シテ陳欽孫士達ト談論ス

陳云貴國此條有ルヲ喜ハ不ル事昨秋議約ノ初メ之ヲ聞ケリ故ニ應大人及ヒ余等貴國既ニ戒心有ラハ美ノ例ヨリ

出テ公法ヲ害スル事無シト雖トモ我强カチニ此條ヲ立テント要スルニ非スト申セシ也爾後兩全權議約定稿ノ日伊達大臣其友情ヲ表スルヲ以テ遂ニ之ヲ立ラレ修好ノ義翕如敦厚ナルヲ得タリ于是李中堂及ヒ各幇辨共ニ伊大臣ノ敏達以テ大體ヲ識リ洪度以テ主權ヲ存スルニ欽服セリ夫レ一國共ニ尊ム所ノ者ハ君也君其信臣ヲ遣ハシ他國ト交ヲ締フ其要惟信義ニ在リ故ニ李中堂旨ヲ奉シテ貴國ト約セシ事ハ君權ニ仗テ行フ所ナルヲ以テ我國總理王大臣ト雖トモ敢テ喙ヲ容ル、能ハス況ヤ其群下ニ於テヲヤ此レ他無シ君ヲ尊ムノ至也貴國今此ノ若シ願ハクハ其說ヲ聞カン

柳云我國廣ク各國ノ局面ヲ視テ舊約ヲ修改ス伊大臣昨秋ノ役兩國友誼直チニ天壤ト窮リ無ケレハ誠ニ調處ノ條ヲ以テ多シト爲ス此レ美國ト昔シ約セシ此條ヲモ此度修約ノ便ニ命シテ裁撤セシムル所以也幸ヒ貴國ト未タ本約ヲ換ヘス公法ニモ今之常例君雖派臣代議猶留准否之權於君以免爭端ト出タレハ我外務卿大臣等ノ意此時裁撤ヲ議定シ以テ御筆批准ヲ請ヒ欽使換約ノ便ニ約面ヲ改正シテ外諸國ト其體ヲ劃一セント欲スルニ在ル耳

陳孫俱ニ云其義ハ來文ニ詳細ナリ然レトモ調處ノ約ヲ更ニ裁撤スルノ謂ハレ無ク且兩全權議定ノ約ヲ妄ニ改刪セシ例無キヲ奈何セン此レハ既ニ李中堂ヨリ公等ヘ說明セラレシ由ヲ聞タレハ更ニ贅論セス但シ公等所諭ノ公法ハ率キ得テ會スル所有ルニ似タレトモ我國ニ於テハ議ヲ庸フル事毋キ者也從前西洋各國ト議約セシニ曾テ貴國ノ如ク未タ互換セサル先キニ使ヲ派シテ君國ノ約ヲ改動セシ者無ク又兩君其臣ニ全權ヲ委テ議定セシ者ヲ指セル大故モ無ク改正ノ後ヲ俟テ之ヲ批准互換セント云ヒシ者ハ未タ有ラサル也蓋シ留准批之權於君以免爭端ノ義ハ歐西各國間ニ於テ從前戰爭ノ餘割地償金等ノ事ヲ兩使相議スル時ノ常例ナルヘシ此レハ我國約面ニ云ヘル御筆批准ヲ俟ツ云々ニハ關セス現在兩國ノ如キハ好ク我ト美トノ約ニ似テ原來戰爭割據等ノ故有ルニ非ス僅ニ永ク和好ヲ祝シ善隣通商ヲ契フニ過キス何ソ右等ノ子細ヲ用ンヤ

柳云我外務卿大臣等謂ラク美國媒救ノ約ハ彼カ偏爲ニ屬シ少シク節制ヲ受ルニ似タリ諸國ノ通例ニ據レハ此條無シト雖トモ其友誼ニ因テ行フ可キノ權有リト書ケル

ハ第一條既ニ天地悠久ノ親ヲ結ヒ調處ノ義自ラ其中ニ在リ故ニ後來美ヘ向テ此條ヲ謝却ス目的ト而シテ貴國トモ議シテ裁撤セント欲スルニ何ノ不可有ンヤ

孫云公等示ス所ノ美文旁譯ニ據レハ誠ニ一面ノ詞ナリ然ト雖トモ我國此條ヲ解スル所ヲ以テ試ニ公等ニ問フ夫レ美國ハ貴國ト良友也美君欽使ヲ派シ貴國東京ニ駐劄シ及ヒ領事等官各港ニ在住セシムル時萬一他國ヨリ貴國ヘ對シ非常ノ無理ヲ仕掛ル者有リタラハ友國ニ出張シタル職掌ヲ以テ仲ニ立チ相應ノ取扱ヲ爲シ和好ニ鎭マル樣相助クヘシト申付ケシヲ貴國トノ條約ニ載セ准ルシタルニ非スヤ然ル上ハ貴國ニ在ル美國ノ欽使及ヒ領事等官ヘ他國ヨリ右樣ノ事ヲ爲ス時ハ友國ノ使臣ナルヲ以テ貴國モ亦此條無シト雖トモ助ケ不ンハアル可ラス若シ此權ヲ行ハス旁觀シテ助ケ不ルヲ得ハ始テ彼カ偏爲ノ約ト謂フ可キ也且ツ外務卿大臣等ハ美國此條ヲ立テシ意ノ果シテ貴國ヲ節制セント欲スルヨリ出タル事ヲ明知シテ之ヲ謝却スル者乎又美國果シテ其謝却ヲ聽ク事ヲ知ルヤ今ノ交際者多クハ利ニ放テ行フト雖トモ吾ハ之ヲ美國節制ノ張本ト謂ハ不ル也況ヤ兩國有來有往ノ約ヲ成ス正サニ互換ヲ俟テ卽チ我國ヨリモ駐京欽使等ヲ派セント擬スル際斯ク疑惑ヲ懷カル、ハ豈無情ニ非スヤ

柳云調處ノ條謝却ノ議ハ各國ノ約ヲ劃一ニスルヨリ起ル何ノ疑フ事之有ラン美國ノ聽與不聽ハ彼ニ在レハ未タ定メ知ル可ラス

孫云曾テ聞ク或ル新聞紙ニ兩國ノ約ニ就テ外人多ク横議スル者有リ日本之カ爲メ大ニ惑フト不識有リヤ

柳云我國維新以來大ニ言路ヲ開キ廣ク芻蕘ニ採ル故ニ內外ヲ論セス言者紛トシテ至ル其中横議謬妄ニ涉ル者モ亦少カラス然レトモ擯斥ヲ事トセス其善ナル者ヲ擇テ之ヲ採庸シ其横議謬妄ヲ拆解ス是則善言日ニ進ムノ道也我邦議者ノ說ニ修好第二條ノ相助二字其指的分明ナラス且下ニ或字ヲ間セリ貴國ト美トノ漢文ニ或字無ク美ト貴國ノ横文ニ相助ノ語無シ而シテ此約ニハ既ニ相助ケト云ヒ又或ハ從中調處トアル故貴國ト美トノ漢文ノ如ク一直讀下スル能ハス相助ト調處ト兩項ノ事ニ相見エ人ノ疑惑ヲ生スト云ヘリ

陳云君權ニ仗テ議定セシ事ナル故數般ノ會同ヲ經テ專ラ信守ヲ昭カニス豈人ノ浮言ヲ容レン哉但シ我邦ニモ外人ヨリ一二ノ疑問ヲ致セシ者有タレトモ我ハ美ノ例ヲ用テ互ニ修好ノ意ヲ表セリト一言以テ之ヲ蔽ヒ復タ問フ者無シ貴國モ亦惟君權ヲ重セン耳況ヤ兩國全權約ヲ定メタル後何ソ議者ノ言ヲ容レ返テ孤疑ヲ滋スヤ

柳云約面ノ義ハ作者能ク之辨スレトモ其孤疑ヲ破ルニ足ラス願クハ貴國解スル所調處ノ義ヲ詳カニ公文上ニ述ヘ與ヘラレン事ヲ

孫云貴國公文ニ解スル所皆是ナリ惟裁撤ヲ欲スルハ竊カニ取ラ不ル耳ミ我公文ハ其意ヲ承テ答覆スルヲ以テ照准ノ義ト爲ス故ニ敢テ多ク書セ不ル也

柳云風評或ハ此約ヲ以テ兵力ヲ合セ相助クル義ト稱ス如何

孫笑テ云是何ノ言ソヤ夫レ條約ハ官之ヲ爲スト雖トモ無學ノ商民ニモ通曉シ易ラン事ヲ要ス故ニ其文或ハ俚俗ニ從ヒ深文奧義ヲ蘊蓄スル事無シ今虛空ヨリ合兵等ノ字ヲ添ヘタルトテ誰カ之ヲ信セン是虛妄ノ語ナリ合兵協護ヲ約スル如キハ公法ニ歷々觀ルヘシ豈此レヲ知ラ不ル者カ且從前美國ニ對シ曾テ之ヲ言ハス獨貴國ニ向テ此言ヲ爲ス亦異ナラスヤ相助ノ意ハ他無シ卽チ美文ニ云ヘル好友ノ職掌ヲ盡スノ義ヲ譯シタルニテ調處ヲ爲スト雖トモ他國之ヲ聽カサレハ默シテ退クノミ惟友誼ヲ表スルニ止ル事公法ニ委シク出タレハ多ク言フニ及ハス且又美文一面ノ詞ヲ譯スレハ或字無キヲ是トス或字ハ闕疑ノ辭トテ孰レトモ指究メ不ルナリ此約兩國ニ關スル故或字無キヲ得ス卽チ或ハ淸ヨリ或ハ日本ヨリ從中調處セントノ義ナレハ全文ヲ擧テ相助爲調處ノ義耳平俗常用ノ字眼ニ因テ多ク疑難ヲ生セシハ頗ル意外ニ屬セリ且人情多ク便宜ニ從フ美此約ヲ立ツル十數年今迄調處ヲ煩ハセシ事無ク殆ト空文ニ類セリ因テ修好ヲ表スルノ詞ト謂フモ亦可ナリ何ソ遠慮深思スルニ足ランヤ

柳云然ラハ則伊大臣昨秋議決セシ意ト異ナル事無シ惟內外既ニ疑團ヲ結フ之ヲ解クノ證無キヲ患フ公文內ニ能ク此解義ヲ加フ可キ乎

孫云來文曾テ此義ヲ述ヘ不ルニ我ヨリ解義ヲ添フレハ北京ヘ奏咨スルニ不都合也貴國此意ヲ了解セハ疑惑自カラ開クヘシ焉ンソ自主ノ國ニシテ解義ヲ他ニ求ムル者

有ンヤ

柳云前光幾回カ精神ヲ費シ公等ト談論スト雖トモ奉委ノ意ニ符セス之ヲ決スルノ權ヲ有セス只尊諭ヲ以テ國ニ歸リ裁決ヲ仰カンノミ

如是反覆談論セシ事數回此條最竭力ヲ爲セリ然リ而シテ遂ニ照覆ノ趣ニ止リ候ニ付奈何ス可キ無ク此段論判ノ概略謹テ復命仕候

五月二十六日前光等李鴻章ニ謁シ陳欽ヨリ照覆ヲ得ルノ謝ヲ述ヘ因テ別ヲ告ク李ヨリ閣下ヘ照覆ノ公文ヲ前光ニ付與シ且云總理王大臣ハ貴國ノ此舉例ニ違フヲ以テ照覆ヲ具セス余ニ囑シテ轉覆セシメ又王大臣及軍機大臣文祥ヨリ子ニ因テ伊達大臣ニ寄語ス云來書ヲ捧閱シ知ル公ノ官ヲ免スト殆ト約ヲ以テノ故ニ非スヤ惋トシテ復スル所ヲ知ラス珍重セヨト余更ニ悽焉我君ノ臣ヲ使フニ禮ヲ以テスルヤ余カ不肖ノ如キ今日名ヲ内閣ニ署ス伊達大臣跋渉萬里君ニ代テ交ヲ締ヒ遂ニ此極ニ至レリ余書ヲ得タルヨリ日トシテ慨嘆セ不ルナク書シテ慰問セント欲スレトモ殊ニ切々怡々ノ詞無シ寧ロ已マンノミ子歸ルノ日幸ニ此意ヲ致セト又問フ伊大臣官ヲ免ス又能ク之ヲ復スル乎曰知ラス李艴然トシテ曰朝廷功ヲ報フ其恩骸骨ニモ及フヘシ貴國此典ヲ明カニセ不ルハ禮ヲ隣國ニ失フナリ若シ其免官議約ノ故ニ由ルト云ハヽ余立ロニ約ヲ裂キ交ヲ絶タン前光等默シテ答ヘス辭シテ回ル李照覆文如左

欽差大臣辦理通商事務太子太保大學士兵部尚書直隸總督部堂一等肅毅伯李　爲

照覆事同治十一年四月初九日外務大丞柳原面呈

貴卿大臣照會內開曩者大藏卿伊達使于

貴國幸偵貴爵閣大臣暨應臬臺陳道臺早奉

欽派接議條約事宜況蒙盛誼厚待實所罕遇遂獲永結兩國之好

旋國反命殊愜

朝廷嘉悅本卿大臣等知之均深欣感之至肅此申謝玆奉

上諭和清兩國經已修好通商合亟揀派委員遣于清國口岸監視

兩國交際通商事宜欽此本卿大臣等隨即銓選外務大丞柳原　特請

欽命兼任少辦務使外務少記鄭　作爲幫辦同遣于貴國辦事嗣後遇有本卿大臣等與貴大臣爲因擬議改換正約事宜往來文件便令解通文內情節時加參述解說以期往來兩得妥協

又外務大錄品川忠道任代領事在滬管理本國人民通商事務所有屬員從之爲此備文照會貴大臣希即查照存認該官員等使其遵約供職等因查本閣爵大臣上年欽奉

諭旨會議和約因

貴國伊大臣奉有全權明文是以彼此相信議成條約當於畫押蓋印互交後即已

奏明定案兩國初次訂約最要守信斷不能旋允旋改來文既稱伊大臣旋國反命殊愜

朝廷嘉悅貴卿大臣知之均深欣感之至等語是

貴國應毫無異議向來中國與各國交際通例一經全權大臣公同議約只有再行各派大臣換約竝無定議之後未換之先另派大臣議改之事

貴卿大臣此次銓選柳原前來據稱爲因擬議改換正約事宜業經議定忽又遣員議改顯與上年全權大臣公同擬議者自相矛盾本閣爵大臣實未敢奉教也所有未盡之言已飭原派幫辦議約之津海關陳道臺等轉告柳原回國述知毋庸贅陳至品川忠道在滬管理

貴國人民應俟兩國互換和約事畢再行查照約章開辦爲此備文照覆

貴卿大臣希即查照可也再柳原面懇轉寄

貴卿大臣照會

總理各國事務衙門王大臣公文一件竝

伊大臣申謝照會一件已代轉遞昨准來函均令由本閣爵大臣轉覆知照合併聲明須至照會者

右　照　會

日本　外務卿副島

外務大輔寺島

五月廿七日李人ヲ使ハシ謝シテ云夜來病ニ臥ス門ニ踵テ送行スル能ハス歸舟ノ期ヲ請ヒ問フト我必六七日ヲ須ツト答フ六月二日李病ヲ勉メ我公館ニ來リ一路安瀾ヲ唱ヘ因テ復タ伊達ノ事ニ及ヒ前日ヨリ更ニ叮嚀反覆ヲ加ヘテ別ル翌日陳孫及ヒ地方官竝ニ懇識ノ西洋各領事等ト別送事畢リ同四日一同乘船翌朝解纜發津同九日上海ニ着ス

六月十四日穎川大錄品川代領事等ヲ隨帶シ上海ヲ發シ同十六日長崎ニ着シ書類繕寫ノ事ヲ辦ス

七月三日長崎ヲ發シ同八日横濱到着候抑今般奉委ノ役ハ失信ノ責我ニ負テ與奪ノ權彼ニ歸シ甚タ至難ニシテ若シ一着ヲ誤タハ交際ノ續絶ニ關スル恐アリ前光等不材ヲ以テ膺命承辦ス可キニ非ス然レトモ猶彼カ蘊奥ヲ定メ結成ヲ得タル

ハ全ク　國廷ノ洪福ニ仗ルト雖トモ抑亦清相李鴻章周折ノ所致ニ係レリ微臣竊ニ實地ノ形勢ヲ測リ現後ノ施設ヲ考ルニ餘外ノ變策ニ乏ク候夫レ彼我共ニ是自主ノ國ナリ其交際ニ於テ互相制逼壓屈スル能ハス只條理ノ在ル處ニ歸着スル耳冀クハ之ヲ情ニ揆リ之ヲ理ニ度リ深ク公義ノ大道ヲ察シ速ニ公平允當ノ御裁示ヲ仰キ其垂命ニ應シ至急鄭少記ヘ飭シ清國官員ヘ知照爲致度茲ニ行間ノ諸事概略復命仕候猶御詢問ヲ得テ使事成全ヲ期望仕候誠恐謹言

明治五年壬申七月九日

外務大丞兼
少辨務使　柳原前光

外務卿副島閣下

（使清日記）

一二六　七月十三日（八月十六日）副島外務卿ヨリ太政官正院宛

日清修好條規ノ處分ニ關シ伺ノ件竝ニ之ニ對スル太政官決裁

本月八日外務大丞兼少辨務使柳原前光清國ヨリ歸朝條約面談判ノ景況ハ同人ヨリ差出シ候復命概略書ニ據リ御照察ノ儀ニシテ先以事ノ順運ト存候就テハ處分之儀深ク熟案仕候處如左

一修好條規第二條ノ約ハ原ト清米ノ約例ニ據テ立タルニテ惟其友誼ノ情ヲ推擴シ列國普通和親ノ公理ニ出候上ハ其儘立置可然存候事

一方今歐洲列國ヘ被遣候使臣修約復命之後清國ヘ本約互換ノ大臣ヲ派シ併セテ續款ヲ訂立シ載ルニ今般議定ノ件々竝ニ我ニ在テ關礙ヲ生スル條ヲ揭明シ大成局ヲ了スヘキ事

一右御決評之上柳原ヨリ上海ニ留置候少記鄭永寧ヘ傳ヘ同人ヨリ清官員ヘ報告可爲致尤續款議定ニ至テ大定トナセハ其日ニ至テ稍活動ヲ得ルニ便ナル餘地ヲ文意ニ含マセ可然事

右條々至急御決准有之度相伺候也

壬申七月十三日

外務卿　副島種臣

正院御中

（朱書）「伺之通　正院之印」

七月二十三日

（使清日記）

一二七　七月二十七日（八月三十日）柳原外務大丞兼少辨務使ヘノ辭令

少辨務使ヲ免スル件

依願免兼官

壬申七月廿七日

外務大丞兼
少辨務使　柳原前光

太政官

（使清日記）

一二八　十一月十五日（十二月十五日）副島外務卿ヨリ三條太政大臣宛

米國人「リ・ゼンドル」雇入ノ件

太政大臣殿　　外務卿　副島種臣

四　清國トノ修交條規通商章程締結ニ關スル件　一二七　一二八　一二九

今般顧問のため米人ゼネラール、リセンドルを雇入度候に付ては雇中二等官の敬禮を與へ月給の義は其本國應給の數を照し毎月一千圓充下賜候樣致度此段相窺候也

壬申十一月十五日

註　「リ・ゼンドル」雇入ノ日附及其ノ決定條件ニ關スル文書見當ラス但シ P. J. Treat: Diplomatic Relations Between the United States and Japan 1853—1895 ニヨレハ「リ・ゼンドル」ハ本號文書ニ揭示セル條件ニテ外務省ニ雇入レラレ十一月三十日謁見ヲ賜ハリ居レリ

一二九　十一月十八日（十二月十八日）副島外務卿ヨリ太政官正院宛

柳原外務大丞等ニ對シ遣清使節隨從ヲ命セラレ度旨伺ノ件竝ニ之ニ對スル太政官決裁

正院御中　　副島外務卿

御用有之清國ヘ被差遣候に付ては左の通隨從被命度候可然候はゝ内達仕置候樣可致候

外務大丞　柳原前光
外務少丞　平井希昌

外務少丞　鄭　永寧
領事井田讓
判任官壹人
漢語生徒の内貳人
等外附屬小遣の内壹人

右の外拙者儀は從僕貳人奏任已上は各壹人つゝ召連候樣致度右從僕は下等を以船賃幷船中賄料旅籠料丈け下賜支度料日當御手當金は不被下尤現實都合に寄り不召連節は右の分丈け相除可申候依て此段相伺候也

壬申十一月十八日

追て本文柳原大丞始使員相當の官名は別段可相伺候也

「伺之通」（朱書）　正院之印

壬申十一月廿四日」

註　遣清使節副島外務卿ノ隨員任命ノ辭令ハ明治六年二月二十八日發令サレタリ

一三〇　十一月十九日（十二月十九日）

副島外務卿へ賜ハリタル勅語

外務大臣　副島種臣

爾種臣外務ヲ總理スルノ全權ヲ以テ清國ニ適キ條約ヲ互換セヨ前ニ使臣柳原前光ヲ遣ハシ議准セシ事宜ハ一々照辨シテ可ナリ今清帝婚儀已ニ諸ヒ且政ヲ親セントスト聞ク朕當サニ書ヲ送リ賀ヲ伸フヘシ爾種臣其之ヲ致セ欽哉

明治五年十一月十九日

御璽

一三一　十一月十九日（十二月十九日）

條約批准交換竝ニ清國皇帝婚儀祝賀ノ爲副島外務卿御差遣ノ國書

大日本國大皇帝敬テ

大清國大皇帝ニ白ス曩ニ兩國俱ニ泰西ノ諸國ト交通往來ス而シテ獨リ兩國未タ親善ヲ修メス故ニ去歳親臣大藏卿伊達宗城ヲ簡派シテ貴國ト條約ヲ議定シ已ニ批准ヲ予フ允ニ宜ク使ヲ派シテ互換スヘシ適聞

大皇帝既ニ婚ヲ成シ且政ヲ親ラスト朕深ク之ヲ歡喜ス乃チ特ニ外務大臣副島種臣ヲ貴國ニ遣シ和約ヲ交換シ併セテ慶賀ヲ伸ヘシム朕固ヨリ種臣ノ喉舌ト爲スニ堪タルヲ知テ專ラ各國ノ事務ヲ總理セシメタレハ朕ニ代テ擔當シ言ニ好ニ歸セ不ルハ無シ冀クハ

大皇帝交誼ヲ思ヒ隣好ヲ篤クシ玆ノ使臣ヲ待スルニ優ニ仁厚ヲ加ヘ此ヨリ兩國慶ヲ蒙リ永久渝ラ不ラン事ヲ特ニ玆ニ敬テ白シ併セテ

大皇帝ノ多福眉壽ヲ祈ル

明治五年壬申十一月十九日

御名國璽

奉勅外務大臣　副島種臣　畫押

一三二　十一月二十日（十二月二十日）　柳原外務大丞ヨリ上海在勤品川領事宛

副島外務卿ヨリ直隷總督宛ノ書翰達シ方等依賴ノ件

附屬書　十一月二十日副島外務卿ヨリ清國直隷總督宛書

翰

日清修好條規批准交換竝ニ清國皇帝大婚慶賀ノ爲渡清ニ付照會ノ件

品川領事殿　　柳原外務大丞

本月十九日外務大臣照會抄錄面の通旨を奉し入清換約可被執行に付直隷總督えの照會及ひ劉森えの書翰（註「秦論」ノ誤ヵ）一同差立候條着到即日右抄錄を以て其地道憲え示談の上現下寒中封船の頃に候得は該道より陸路驛遞を命し至急直隷へ本照會及ひ劉えの書翰相屆き其用意整候樣周旋有之度精々御依賴尤右驛遞の費用は該道へ問合せ其公館より拂置追て大臣着申の上其高可戻入義と御心得可被成候

昨年欽差大臣以下轎子五肩損處も候はゝ至急修覆成就候樣御定辨可被成候轎丁帽子看板其他轎中小道具等御檢査の上不足の物は補添致し尤大臣の駕丁帽衣は別段異樣に不及通例同樣にて可然候

外務卿は萬國交通を掌るの重任にて其權たるなり内外異らさるを以て清國交際上に於ては卿の字を除き欽命總理外務大臣と可稱呼との

朝命有り抑外務卿の職掌は固より海外え出す各等公使の上に立ち其進退を掌るの權を有したれは何國に出候とも外務大臣と稱へ更に欽差全權等の字を加へさる事に定り候條爲御心得申進候

大臣着港の上和田雄次郎及應昌槐を天津え召達相成へく候處公館繰合せ出來候はゝ内命傳達の上相當の支度御申付可有之候

換約の事由及大臣發程の期隨員名單等照會文字の通御承知可被成因て別段細述不致候右要事而已先及報告候間尚此他使事に便なる義は何廉御注意の上辨理豫備有之度別けて依賴候也

壬申十一月二十日

（附屬書）

（朱枠）「外務（朱書）照會（朱書）省印」

大日本欽命總理外務大臣副島　爲

照會事于本年二月間特派使員賚呈公文以我國改西約請緩換約之期便議照改事宜經蒙

貴閣爵大臣回文並委津海關道陳憲會議將該各節請批裁覆繳回到本大臣業已感悉據情

奏准在案惟我改約欽使東徂西轉已經一載未定何日言旋本大臣切思若必俟其歸方行換約似覺太晏殊違通例

茲復疏請當派欽使先行互換旋于十一月十九日奉

旨外務大臣副島種臣着即適清換約所有前遣使臣議准事宜可悉照辨今聞清帝大婚已諸親政在邇朕當送書伸賀爾其致之欽此本大臣奉即促裝擬于來月下旬啓行過滬買舟赴入津門決不遲悞爲此備文照會

貴閣爵大臣煩爲查照預前奏請

欽派大臣以便到即換約覲奉

國書恭伸

慶賀須至照會者

計送隨員名單壹紙

右　照　會

大清太子太保大學士直隸總督部堂一等肅毅伯李

明治五年十一月二十日

（朱枠）「外務（朱書）省（朱書）印」

（朱枠）

外務大丞	柳原前光
外務少丞	平井希昌
外務少丞	鄭永寧
判任隨員	三人
語生	二人
從士	六人

（朱枠）

外務顧問	李仙得
總領事	井田讓

（朱書）「右紅箋二枚ニ認メテ副ヘタリ」

事項五　朝鮮國トノ通交ニ關スル件

〔第四卷事項一〇參照〕

一三三　一月十六日（一八七三年二月二十四日）　朝鮮國出張吉岡外務少記等ヨリ深見草梁公館々司宛

草梁公館ノ士民朝鮮國人ニ對シ不都合ノ振舞無キ樣布令スヘキ旨指令ノ件

附屬書　右布令案

在館士民彼國人民ニ對シ不都合ノ振舞無之樣戒示ノ儀今朝及御達候次第有之即別紙ノ通御布令被成度候也

正月十六日

外務出使

深見六郎殿

（朝鮮事務書）

（附屬書）

當館滯在ノ士民朝鮮人ニ對シ親愛懇篤ノ情ヲ以テ相交可申ハ勿論候處今般益隣誼友情ヲ敦ク被遊度思召ニ付一同御趣意ヲ奉體認聊粗暴ノ振舞等致間敷萬一舊弊ニ拘泥不心得之者有之節ハ屹度御處置ノ次第可有之此段末々ノ者迄厚ク相心得可申事

壬申正月

（朝鮮事務書）

一三四　一月十六日（二月二十四日）　朝鮮國出張吉岡外務少記ヨリ外務省宛

森山、廣津兩名著韓、諭書ヲ奉セシ旨上申ノ件

本月十四日森山廣津兩名來著

卿輔公御諭書奉拜誦事務取扱心得方ノ儀ハ別冊ノ通タルヘキ旨

御內諭（註）ノ次第逐一敬承誠ニ確乎不拔御英斷ノ程深奉感佩候斯ル上ハ魯鈍ヲ竭シ心力ノ及丈兩名ト協同シ尋交ノ道周旋善隣ノ御誠意令感徹度志願罷在候抑宗氏ノ私交ヲ廢シテ本省ノ公交ニ歸シ舊交醜弊ヲ一洗シ益交誼ヲ敦クスルハ實ニ時勢當然不可已ノ御措置ニ候得ハ決テ彼不承諾ノ理無之候乍然彼元來頑固凝滯沈深狡獰ノ國俗故今般改制報告ニ付テハ一旦大驚疑ヲ起シ可申就テハ或ハ强辭ヲ以テ我ヲ拒ミ或ハ態ト曖昧澁滯シテ時日ヲ遷延シ我勇銳ノ氣ヲ挫キ徐々彼意中ニ引落候樣相謀モ難計假令其節ニ立至候共我ニ於テハ益禮義ヲ守リ恒久忍耐懇々致說諭候ハヽ無雙ノ頑人ト雖モ漸疑團氷解御誠意ニ感服可仕存候右樣我ニ於テハ尋交ノ意ヲ以テ盡スヘキノ道ヲ盡シ及懇說候共萬一彼交際條理ヲ不論一概相拒候ハヽ屹度萊釜兩使ニ其旨趣ヲ致推誥然上在館ノ士民引纏引揚可申然レハ條理ニ遵ヒ隣誼ヲ敦クセントスルハ我ニアリ條理ニ違ヒ隣誼ヲ破ルハ彼ニアリ彼曲我直毫モ

御國威ノ相汚候理ハ無之且後來御遠略ノ資トモ相成可申哉舊來對韓ノ私交ノ如ク年々彼ノ給穀ヲ仰キ臣屬ニ齊シキ禮ヲ執リ我ハ卑屈ヲ極メ彼ハ倨傲ヲ極メ只彼ニ駕馭セラレ候ヨリ稍勝リ候樣愚存仕候尙追々事機ニ應シ變化ノ策ニ出候節ハ相伺候儀モ可有之候得共差當申進度如斯候也

正月十六日

吉岡弘毅

本省御中

（朝鮮事務書）

註　「御內諭」ハ第四卷二二二附屬書ヲ指ス

一三五　一月十六日（二月二十四日）　朝鮮國出張吉岡外務少記等ヨリ外務省宛

樋口大差使等ヲ引揚ケシメ草梁公館ノ肅正ヲ斷行シツツアル事情等報告ノ件

春寒强候得共　卿輔閣下始諸彥御精務大賀此事ニ候陳ハ茂弘信等於崎嶺火輪船借入正月六日開帆ノ儀ハ既ニ同地ヨリ及御報知置候通同夜拔錨翌日平戶近海ヨリ雪風烈敷終ニ大島浦ニ投錨滯泊三晝夜九日夜第二字同浦發帆十日第十一字對州嚴原着直ニ伊萬里縣解ニ至リ相良正樹浦瀨最助儀本省出仕被仰付候旨屆出即刻兩人ヘ相達候處謹テ拜命イタシ候ニ付尙大丞殿書契中字句等篤ト協議イタシ淨書出來同所三晝夜繫泊ニテ十三日第八字開帆候處穩波微風既ニ釜山灣口ニ近附候節漸第四字比ニテ未明中浦入イタシ候テハ韓人ノ

疑慮ニ渉リ候半ト拂曉相待第七時無異着館イタシ候間此段
御安神可被成下候
一外向動靜客冬來依然ノ體然ルニ訓導安俊卿再任ト申事ニ
テ此程ヨリ罷下居候扨今般火輪船入港イタシ候ニ付テハ釜
山近村ハ聊驚愕イタシ候哉ニ候得共傳語ノモノヨリ令申聞
候處則日本船ニ紛ナキ事了明イタシ居候乍併異樣船着港ト
申ヨリ兼テ日日入館イタシ居候韓人壹人モ不入來昨日ヨリ
ハ三十人餘被差免入館イタシ候右ハ火輪船繫泊中ハ多數ノ
モノ入館差留候譯ニテ出帆イタシ候ハヽ平常ノ通供市相始
メ可申トノ事ニテ訓導入館等モ畢竟火輪船出港ノ後ト存候
右ハ懸念ノ筋ニ無之事
一今般宗家差使渡泊ニ付問情可致旨別差ヘ申聞候處訓導ヘ
モ申出可及御報段相答出館イタシ候處即日兩人トモ漂民護
送船脇乘イタシ候ニ付問情ノ爲其地ヘ罷越候ヨシ今日火輪
船開帆イタシ候後ハ何トカ可申出ト存候
一漂民差渡シ方ノ儀ハ舊來ノ規格モ有之候處今般大丞殿ヨ
リ禮曹エノ書契八月附ヲ以差立候儀ニ候得ハ漂民護送使ノ
相携候書契ニ舊官銜ヲ相用ヒ且八月後ノ日附ニテハ前後牾
牴イタシ候儀ニテ彼必異難申張候ハ必然ノ儀既ニ昨今館着

ノ際差使モ有之候間差當リ漂民送受ノ手數ハ舊格モ有之事
ニ候得共兩國尋交成孰百揆改撰迄ノ所假ニ送受之小例ヲ設
ケ對州地方官ヨリ館内エ送越シ候上微官ヨリ引渡シ候カ又
ハ館司ヨリ可相渡カ說示ヲ遂ケ可申候得共彼尙頑固不承付
節ハ兼テ伺定候通或ハ留或ハ送臨機ノ所分モ有之儀ニ候得
共現今緊急ノ事件ニ候間先彼カ欲スル所ヲ問ヒ其上ニテ見
込相立可申存候猶當今對州ニ殘リ居候漂民ノ分ハ伊萬里縣
廨ニテ是迄ノ如ク厚ク補給イタシ置候樣申遣置候事
一從來在館ノ士商韓人ニ對シ粗暴苛虐ノ振舞有之候間今般
益隣誼ヲ敦クセラレ度御趣意深ク拜認シ克親愛ヲ盡シ懇篤
ノ情ヲ以可相交萬一舊慣ニ拘泥シ不心得ノモノ有之節ハ屹
度所置候次第モ有之候間此段末々ノモノ迄厚ク相心得可申
樣トノ事館司ヨリ在館士商ヘ一同爲致令示事
一歲條船渡來ノ節風波ノ爲メ上下脇乘イタシ候船船エハ御
入來ト唱ヘ大中小船ノ品別ヲ以米薪等受納イタシ候舊約ニ
候處往々無智不歎ノ水主共或ハ風波ニ詫シ兩道脇乘イタシ
浦々ニテ粮米貪求イタシ候ヨリ兩民爭端ヲ生シ候儀モ不尠
彼素ヨリ之ヲ出スヲ欲セサル儀ニ候得共不得止恒規ニ遵ヒ
居候情狀モ有之候間今般書契差渡候談判相始リ候ハヽ宗家

使船接待向等ハ廢絕可致左候ハヽ對韓急報等ニ往復イタシ
候船耳ト相成可申右船事實風波ノ爲メ脇乘イタシ候節ハ薪
水等ノ世話尤可受儀ニ候得共粮食受納方ニ付醜弊不少候間
右粮米ノ儀ハ救助ニ不及申乍併難風破損或ハ存外遲延途中
粮食及缺乏候事實無據節ハ相應ノ粮米借與ヘ吳其時々船主
ヨリ證書取之早速館内ヘ差廻候ハヽ補救相成候米ノ分ハ正
米或ハ代價ヲ以返辨可致旨篤ト相示シ我水主共ヘモ申達シ
漸々我誠意洞徹イタシ候樣意ヲ用ヒ候積ノ事
一當時在館役々始メ下部ニ至迄大約貳百餘人夫々歲遣船貿
易ノ利得ヲ以補給イタシ來候處向後歲遣船廢絕相成候上ハ
無用ノモノ又ハ歸縣ニ臨ミ居候モノハ勿論不可缺人員ノ外
銘々課務取纏漸々歸國爲致候積ニ候得共歸留ノ遲延モ有之
粮食ニ虧闕イタシ候テハ詰リ公幹ニ差響候間現今彼ヨリ取
納有之候貿易米ノ内燃眉ノ供用トシテ相應ノ手當米館庫ニ
占メ置候方可然哉ノ旨館司ヘモ差含メ爲取計候積リノ事
一大差使樋口鐵四郎儀兼テ御伺申上置候通當火輪船便ヨリ
爲引揚申候今日ノ形態端ヲ改メ候場合ニテ至極好機會ト相
見申候其外歲條船接待使節等歸縣ニ臨居候分上下三十餘人
當船ニ便乘伺出候ニ付差免シ申候猶差當リ積年ノ羈縛ヲ弛
メ稅關船監等ヲ廢シ貿利ハ彼此商民ノ意ニ隨ハセ度是亦親
交ノ一助ニモ可相成候間時機ヲ計リ漸々差圖イタシ候積ノ
事
一相良正樹浦瀨最助拜受書差出サセ申候且廣瀨豐吉儀無據
事情ニテ渡韓申渡候始末及同人出仕被仰付度儀等ハ別紙大
少丞前ヘ差出シ置候間猶速ニ御下命相成候樣被下度祈所ニ
御坐候
右提要而已猶後信可申進候也
申正月十六日

廣澤（々）權大錄
森山權大錄
吉岡少記

朝鮮事務課御中

追テ大學ヨリ借用書籍ノ内不足ノ分取調書ニ點朱ヲ加
ヘ及返却候無點ノ分ハ當地ヘ持渡リ無之候事

（朝鮮事務書）

一三六　一月十八日（二月二十六日）

朝鮮國出張吉岡外務少記等草梁公館ニ於ケル議定

議　定

今般於
朝廷與朝鮮國尋交ノ儀厚ク被爲盡公議候上ハ御趣意一點ノ齟齬有之候テハ實ニ申譯無之次第ニ付吉岡弘毅始館司ニ至リ七名ノ外ヘ妄リニ尋交御用件中ノ事談話致スマシク事
一毎日第十二字後會議ノ時刻嚴ニ不可有怠慢事
一深ク御盛意ヲ奉體認二六時中一途ニ尋交講明ノ事務ニ潛念スヘキ事
一大小深淺ニ限ラス見込ノ相立候儀ハ互ニ公議ニ可照事
一自他見聞ノ次第ハ一點ノ包藏ナク申出ヘキ事
一七名一身心協同スヘキハ勿論七名ノ内相心附候次第ハ決テ面從腹非私ナク共ニ忠告スルヲ要スヘキ事

壬申正月十八日

（朝鮮事務書）

一三七

一月十八日（二月二十六日）　朝鮮國出張吉岡外務少記等ヨリ深見草梁公館々司宛

草梁公館ノ士民朝鮮國人ニ對シ戒心ノ旨布令スヘク指令ノ件

今般朝鮮國ト舊交ヲ尋キ益懇親ヲ敦クセラレ度御盛意ニ付在館ノ者共不拘士商彼國人ニ對シ其情ヲ推問シ或ハ我ヨリ妄談スル等決シテ致スマシキ事ニ候若右等ノ事於有之ハ可申付次第モ有之候間士商ノモノヘ不洩樣布令可被致候也

正月十八日

外務出使

館司宛

（朝鮮事務書）

一三八

一月十八日（二月二十六日）

朝鮮國人トノ應接心得方大意

應接向心得方大意

一遣禮曹書契八月附ニ認メ有之從前ノ歲遣船後來差渡シ難キハ勿論昨冬當春ニ掛ケ接待相濟候船若八月後附ノ分候ハ

ハ大丞殿在京中ニテ報知書契及ヒ使節遲延ノ旨程克辨解スヘキ事
一今般ノ談判曲直名分ヲ推シ立ヘキ事曲トハ舊誼ヲ破ルヲ云直トハ隣好ヲ修スルヲ云故ニ我ヨリ毫末モ拒絶等ノ辭ヲ弄フ事必ス無用也數年鄭重信誠ヲ盡スト云ヘトモ彼猶枝末ノ舊格等ノミニ拘泥シテ重大ノ隣交友情ノ大本ヲ顧ミサルトキハ詮スル處我尋盟誠意ヲ受ルト不受トノ道理ヲ明白ニ推究スルニ在リ尤初端ヨリ以實告實及ヒ隣誼ハ誠信ノミト云意ヲ主張シテ尙鄭重ヲ盡ス心得アルヘキ事
一支那交際成熟ノ事漸々說示スヘキ事
一重大ノ事務在館ノモノヘ妄傳シテ
朝廷ノ大旨ヲ誤ル事勿ルヘキ事最恐レ愼ムヘシ
一報知書契差渡シ方ハ廣瀨浦瀨見込ミ被相立委曲可被申出候事
一今般書契都テ新印章被相用候上ハ彼ヨリ差渡シ有之候舊勘合印無之船ハ賊船或ハ漂流船ト認候舊條約ノ上御尋交談判成熟ノ上新條約新勘合印等互ニ取交ハシ候迄ノ處ハ往復ノ船舊勘合印ヲ齎ラシ賊漂ニテハ無之證ト致シ置キ成否決定ノ上ニテ返却可致趣兼テ相含ミ置辯辨致スヘキ事

但シ右無據往復船舊勘合印證所持爲致候共朝鮮地方上下脇乘イタシ候節從前仕來ノ米受納停止スヘキ事幷ニ彼國ヘモ右往復船上下脇乘ノ節米相渡シニ不及尤難風破損又ハ日數存外ニ遲延ニ及ヒ候節ハ救助ニ預リ薪水ノ周旋可有之候得共米缺乏イタシ候趣ノ節ハ何程ノ米相渡シ其證書其船主ヨリ取置富館ヘ相廻シ候ハヽ富館ヨリ返辨ニ可及趣モ申入置候事
一國號ニ大ヲ用ヒ尊稱ニ
天皇ト號スル事ハ淸國ハシメ各國ニ至ル迄異論ナキ我固有ノ稱號タル事

（朝鮮事務書）

註　本號文書日附ヲ缺クモ前後ノ事情ニ照シ此處ニ挿入ス

一三九

二月二十八日（四月五日）　朝鮮國出張吉岡外務少記等ヨリ外務省宛

朝鮮國接待官訓導病痢ヲ口實トシテ回下セサル爲書翰傳達困難ナル事情報告ノ件

正月十三日出ノ御紙面本月廿七日着拜讀扨ハ此地着船ノ及

報知置候書翰ハ先月中御落手ノ事ト存候陳者厥后公幹ノ事序次舊例ニ倚リ舒々開手イタシ訓導下來方申遣候處彼託病怡然回下ノ模樣モ無之就テハ訓導病氣ノ處强テ下來相促候儀ニハ無之候得共急報ノ事件一刻モ等閑波滯イタシカタク候間何レ歟公幹順擧ノ道相立候樣周旋可致旨別差訓導ノ次官ヘ申達シ其後屢次及往復候得共訓導所勞ノ旨ヲ以曖昧阻塞爲致候術策ニ候間猶懇々申諭右訓導下來相促候爲通辯ノ内兩三人充任處ヘ爲相詰置動靜相伺候處累日何ノ報酢モ無之候間又々別差入館申遣候處前夜府使ヨリ至急上府ノ命有之自是上府可致尤用事相濟次第此夕ニモ回下可致旨申聞上府イタシ終ニ其日ハ下來不致候處幸ヒ差備官（是ハ假訓導ト唱ヘ訓導別差缺官ノ節相替リ候官吏既ニ本日別差上府ノ節是歲遣船使節接遇方ニ付入館イタシ居候間別差入館ノ儀申達シ候處同人府使ノ急命ニヨリ非此夕回下イタシ候旨引受候者）上府イタシ即速下來可致旨申聞イマタ回下不致甚以不都合ノ儀ニ候間別差入館迄ノ處其方館内ニ留リ居公幹順便ノ道取計ヒ候樣申聞右差備官挽留置猶又爲及催促候處別差儀ハ日前送使燕席ノ禮順抵觸ノ譯ヲ以府使ヨリ嚴譴ヲ蒙リ府下ニ謹愼罷在何分入館難致旨翌日ニ至リ申越シ右ハ全ク公幹ノ順路ヲ壅塞シ使价ヲ境上ニ抑留シ氣鋒ヲ拉キ候點策ニ有之候間右樣兩國ノ大關節ヲ耽擱致サレ候テハ甚以誠誼ニ悖リ候儀ニテ何分順即辨幹ノ周旋有之度旨更ニ訓導ヘ申遣シ候處訓導不相替病痾未痊且通辯ノモノ任所ニ爲相詰幷ニ差備官館内ニ挽留イタシ候事ヲ口實トシ兩間生疑等ノ語ヲ用ヒ候回酬差越候ニ付縷々條理辨明ノ書翰差立置候就テハ此末如何相答可申哉摠テ欺計詐謀ヲ呈シ徒ニ年月ヲ累ネ退屈爲致候ヲ最上ノ長策トイタシ居候儀ニテ舊冬追々陳上候通リ何樣條理押立掛合ヲ詰メ結局人數引纏メ等ノ場合ニ至リ候ハテハ彼ノ眞情和絶何レニ出候儀難決候間漸々其場ノ駈引ニ可至晝夜籌畫仕居候右今日迄ノ大略如此御座候猶委細ノ儀ハ後信ノ節申進候也

申二月廿八日

廣津權大錄
森山權大錄
吉岡少記

朝鮮事務課御中

此一書不容易末條也摠テ欺計詐謀云々ノ語ヲ見ル ニ前段詳ナラサレハ確答ナシ難シ（朱筆朱書）寺島宗則

一四〇　三月二十三日（四月三十日）朝鮮國出張吉岡外務少記等ヨリ外務省宛

（朝鮮事務書）

三月二十日朝鮮國側ニ宗大丞ノ書契案、相夏差使ノ口陳書等傳達セシ事情等報告ノ件

如月七日出ノ御狀本月十四日落掌各位益御精務欽慕ノ至陳ハ此地景況ハ既ニ先月念八日附ヲ以概略及御報知置候通ニテ厥后屢次條理ヲ推シ緩急彼ノ簡慢ヲ督シ往復數回ヲ重ネ候處漸訓導疾痾少快ニ趣候間本月十八日還府ノ上入館可致旨相答候ニ付此機ニ投シ先般ヨリ任所ヘ爲相詰置候通辯ノ者一先引揚稍駈引ヲ弛メ聲息如何相伺居候處又々訓導ノ實母ナルモノ此節急症ニ罹リ候趣京表ヨリ報知有之旁狼狽ノ至ニ候就テハ公幹ノ緊重ナル耽擱スヘカラスト云トモ亦孝道モ不可虧儀ニ候間今日ヨリ歸省可致尤小通事崔在守ヘ百事委附イタシ置候間拙者同樣御示談被下度旨申越候間夫々迫切挫問ニオヨヒ候積ニテ不取敢崔在守ヲ呼入前條不都合ノ次第取詰サセ候處訓導儀ハ事實不得止儀ニ候得トモ右ニ付此程ヨリ謹愼罷在候待勘被差免明後十九日ハ急度回下可致旨申出候間然ハ同人下來候ハヽ斯速ニ入館公幹順擧可有之旨申達置候處如約十九日夕回下ノ趣屆出候間明廿日入館可致旨相達シ當日ニ至リ先館司（對人深見六郎）ト面接是迄公幹澁滯ノ次第猶此末頃刻モ等閑難致云々諭示ノ上終ニ差使相良正樹面謁ニ及ヒ候迄ノ手續ニ相運ヒ申候扨御用ノ顚末懇々申示シ候上書契開緘致サセ且異例ノ廉々甄錄ヲ以辨明ニ及ハセ候處夫々奉服ノ趣然ニ本書契ハ府使ノ差圖ヲ得候上ナラテハ捧出（受取ヲ云）難仕ニ付今日御達シノ旨逐一兩使道ヘ傳囑ニ及ヒ追テ回醻可致旨申出候間則書契草稿及ヒ差使展達書取トモ相渡シ當日ハ出館申渡シ候

但シ是迄公幹波滯ノ末ニ候間微官等東萊釜山兩使ヘ面晤シ尋盟ヲ商量スルノ書契稿モ同時ニ相渡シ候處無異存收掌イタシ候事

（欄外註記）昨廿一日暴雨激風今廿一日別差上府イタシ候間何レ三四日ノ間ニハ回酢可申出ト存候今般ノ書契上從前ノ格例ニ悖リ候廉モ有之定テ一驚靭イタシ候儀ト被存候得共舊ノ如ク啻ニ例款古典ヲ叩キ境上ニ拑制スル能ハサル儀ニ候得ハ是非京表ヘ啓聞ノ上左右決答ニ及ヒ可申左候ハヽ其間多少ノ時

日ヲ銷シ可申樣ト相考申候猶將來ノ時機ニ應シ可申ト一同論評イタシ居候且又相良正樹面謁ノ節廣瀨浦瀨ヲ以清國ト交際往復書翰及其他疑訝ヲ解キ候樣ノ書類等爲差示候處別差及ヒ小通事共モ微ク氷解發明イタシ候儀モ可有之哉ト推計イタシ候

一シヤハンヘラルト新聞譯書其他米韓ニ干係ノ書類夫々握掌イマタ此地ニテハ何ノ景象モ無之候得共猶精々蒐索致サセ可申候清國在留品川大錄ヘノ御書狀ノ趣是亦拜承仰卒同人ヨリ探索ノ次第早々承知イタシ度ト企望此事ニ候

一伊萬里縣ヨリノ伺書幷ニ本省ヨリ回答書共夫々拜承イタシ候漂民取扱ノ儀ハ當今ニテハ先適主モ無之姿ニ候間新規則相立候迄ハ同縣ニテ厚ク補給致シ置レ度旨先般及掛合候處承知ノ段回答申越候

一廣瀨直行儀本省十一等出仕被命幷ニ正院ヨリノ御書付共卽日轉達卽別紙(註「別紙省略」)御請書差出サセ候間職務課ヘ御廻シ有之度存候然ニ同人儀支度料其外共御規則通リ御下渡可相成候ハ勿論ノ儀ニ候間此方ニテ用金ノ内ヲ以操合相渡シ申置候且在韓賄料等ノ儀ハ既ニ伺濟ミノ儀ニ候得ハ則相良浦瀨同樣取計可申候間是亦御承知有之度存候猶增減差引等ハ歸國ノ上精算可致候

但小林氏私狀ノ内同人儀渡韓以來拜命迄ノ旅費等ハ其管轄地方官ニテ相渡シ可申ハ至當ノ規則ニ有之云々右等ノ說昨今新律御布行相成候ニ付テノ御處分ハ不存候得共全體同人儀ハ内地ニ在住イタシ居候處當般事務ニ關シ功須ノ人物ニ候間今里縣ヘモ別紙(註「別紙省略」)ノ通掛合ニ及ヒ渡韓爲致候儀ニテ既ニ相雇ヒ候ヨリ本省出仕一行中ノ人員ニ有之候得ハ相良浦瀨ニモ相替リ候儀ニ無之筈尤内地旅行ノ儀ニモ無之候得ハ支度日當内國旅費及此地賄料共悉皆本省ヨリ御渡シ可有之ハ應當ノ儀ト存候間右等篤ト御盡論ノ上大藏省ヘ御掛合有之候樣イタシ度爲念此段モ申進置候

右先月廿八日已來ノ景狀大略如此候也

壬申三月廿三日

廣津權大錄
森山權大錄
吉岡少記

朝鮮事務課御中

(欄外註記朱書)「此日付ケ甚可怪今依原書不用改正」

(朝鮮事務書)

一四一　四月三日(五月九日)　朝鮮國出張吉岡外務少記等ヨリ外務省宛

我カ書契ニ對シ朝鮮國側回答ヲ遷延シツツアル事情等報告ノ件

附屬書　草梁公館取締見込書

去月廿日別差入館兩書契案トモ捧出イタシ候段過日申進候然ニ右回答如何相待居候處彼ニ在テハ餘程困却ノモヤウニテ既ニ小通事崔在守ヲ以内々申入候ニハ今番公幹ノ事書契中異例ノ廉モ相見ヘ萊釜要路ノ銘々ニモ種々苦評イタシ候得共何分突然之ヲ兩使道ヘ轉達イタシ候テハ兩間ノ事情不相貫シテ忽絶交ノ擧ニモ可立至哉難計就テハ暫時兩使ヘハ相包ミ置幸ヒ當時上京イタシ居候訓導ヘモ申遣シ篤ト朝廷ノ内議ヲ經候上其時宜ヲ以兩使ヘ稟達イタシ候ハヽ順便ノ道ニモ可相運哉抔例ノ點策ヲ呈シ來候ニ付確乎條理ヲ主張シ速ニ兩使ノ披見ニ入レ回答可承旨申遣候處再次手ヲ易品ヲ附及内談來候得共無透間一片ノ條理押詰爲相達候處終ニ其手順ニ相成過ル廿九日右回答ノタメ別差入館差使相良正樹面接候處過日捧出致シ候書契案幷ニ口陳書取共兩使道ヘ轉達イタシ候然ニ重大ノ事件萊釜一己ノ所分ニハ難相成ニ付秘々廷議ヲ經其上左右可及回酬就テハ都表往復ノ間凡三十餘日ニテ相辨可申旨依賴イタシ候ニ付然ラハ其間相待可申約諾ノ通リ屹度回答可有之其節外務官員萊釜兩使道ヘ面議ノ儀モ併テ確答可被致旨相答(註「別紙ナラス」)別紙ノ通約書被差出申候兼テ申上置候通異例ノ書契一見ニモ及ハス堺上ニ於テ拒絶等ノ時機ニモ可立至哉ト一同案勞罷在候處存外穩ニ相見ヘ此末如何成否難計候得共先我邦萬政改革ノ情狀幷ニ尋盟ヲ議スル等ノ旨趣顚末具ニ彼ノ都表ニ相通シ候事故彼ニ在テモ三思熟慮ノ上ナラテハ輕易ニ排斥可致儀トハ不被存尙且此程ヨリノ動靜イカニモ困憊ノ色相顯レ申候間一同益忍耐館内取締愈溫醇猶此上成熟ノ處企望イタシ居候就テハ先五月中ハ此地滯在ノ事ト存候

一右ノ運ヒニ立至候上ハ彼若無異議承服イタシ候ハヽ兼テ覺悟ノ通リ懇々談判ヲ重ネ尙進退相伺候得共萬一彼自國一分ニテ決答イタシカタク先清國ヘモ内啓ヲ經其許ヲ得候上可及確答旨申出候哉モ難計左樣ノ節ハ迚モ三五月間ニハ埒明申間敷併シ右樣熟談イタシ來候ハヽ早晚成熟ノ方ト被存候間其期ニ臨ミ程克談判ヲ纏メ回答ノ期月ヲ約シ一應引揚

可申積ニ御座候然ルニ引揚候上ハ從前在役ノ銘々一同歸國申渡候ハ勿論ニ候得共舊來居込ノ商人モ有之其上館内擴濶且多數ノ屋宇モ有之其外漂民迎送方假ニ小例ヲ設ケ候節ハ是非官員一名其他通辯小者ニ至ル迄凡十餘名在館爲致置候ハネハ内外取締相立不申則別紙見込大略前以御評論ニ入置候尤從前渡シ來ノ格ヲ以右止置候人員給料并ニ大小船雇入賃總入費一ケ月大約五百金ト相立候ハヽ悉皆補給方行屆可申哉ト相考申候右ハ尋盟成熟迄ノ取繫方ニテ成熟ノ上ハ大藏省官員等モ出張ノ上實地適宜ノ見込相立可申存候委曲ノ儀ハ紙上ニ盡シカタク此上彼ノ回答次第至急一名上京相伺可申候

右輓近ノ景況及御報知候也

壬申四月三日夕

吉岡少記
森山茂
廣津弘信

朝鮮事務課御中

（朝鮮事務書）

（附屬書）

和館取締見込

官廳
館司　壹員　但シ廣瀨浦瀨兩人ノ内一名殘シ置候節ハ兼務可然歟
庶務　壹員　舊來交隣方ノ内熟知ノ者
通詞　四員　會計書辨兼務
卒　三人　館中見廻リ并ニ兩門守衛
小者　五人　内船大工一人　大工一人　小使三人
用船　三隻　大船一隻　十六人乘　小船二隻　七人乘　但押切舟

右ハ臨機ニ應シ或ハ三隻或ハ二隻見計ノ事

右

（朝鮮事務書）

一四二

五月二日（六月七日）　花房外務少丞等ヨリ　朝鮮國出張吉岡外務少記等宛

朝鮮國トノ交渉其後ノ景況竝ニ向來ノ見込申越ヘキ旨申達ノ件

二月廿六日附御用狀四月廿七日相達致披見候先以各位益御壯榮被成御奉職候段欣喜ノ至ニ候扨御來書中訓導托病下來ノ模樣無之ニ付御用件順舉ノ道相立候樣周旋可致旨別差ヘ

申達シ其後屢次往復ノ末假訓導館内ニ挽留候處兩間生疊等ノ語ヲ用ヒ回酬差越候ニ付條理辨明ノ書翰差立置候云々委曲御申越致承知候右ハ不容易事態トモ被相考卿輔公初メ一同痛心ノ事ニ有之候就テハ舊冬御出立前夫々御伺定メノ件モ有之曲直條理分明講究シ寛猛宜ニ從ヒ御處分可有之ハ申迄モ無之尙其模樣ニ寄テハ廟議ノ次第モ有之ヘクト存候間其後ノ景況竝向來ノ御見込等篤ト御中越有之度且御開手已來ノ往復書類竝御用件ニ關シ候日記等巨細御認至急便ヨリ御差越有之度此段急飛ヲ以申進候也

壬申五月二日

小林權少錄
副田權中錄
花房少丞

吉岡少記殿
森山權大錄殿
廣津權大錄殿

（朝鮮事務書）

註　「二月廿六日附御用狀」トアルハ一三九ヲ指スモノト認

一四三

五月四日（六月九日）　外務省ヨリ　朝鮮國出張吉岡外務少記等宛

草梁公館々員引揚ノ節館内取締ノ向ハ廟議ヲ經テ確答ニ及フヘキ旨等回答ノ件

三月廿三日四月三日附御用狀兩通共一昨二日相達致披見候先以各位益御壯榮被成御奉職候段欣喜ノ至リ候扨其後訓導ト屢次往復ノ末訓導病氣小愈入館ヲ約シ候處其期ニ至リ老母急病ニ因テ登京致シ代テ別差入館館司大差使等面會應接ノ上漸ク書契案竝口陳書受取候一段ニ至リ其後右書契案口陳書共一同兩使道ヘ轉達イタシ候處重大ノ事件廷議ヲ經候上可及回答就テハ往復間三十餘日猶豫ノ儀依賴越候ニ付其段聞屆ケ依テハ自然淸國ヘモ内啓ノ上ナラテハ難及確答抑申出候哉モ難計左樣ノ節ハ迚モ三五月間ニハ埒明申間敷候間夫々取纏メ回答ノ期月ヲ約シ一ト先引揚可申就テハ館内取締トシテ役々殘シ置入用金高等凡見込別紙被差越云々委曲御申越ノ趣致承知候先般御中越ノ模樣ニテハ不容易事體

トモ被考一同痛心罷在候處今般ノ御報ニテハ書契案捧出モ存外容易ニ相濟一同落意全ク各位ノ御盡力ニ候得共尚此上成功ノ目途偏ニ御厚配致祈念候且萬一ト先御引揚ノ節館内取締向御見込ノ趣等何レ廟議ヲ經候上可及確答候乍去遠隔ノ地往復モ遲滯致シ萬一其時機ニ至リ候ハヽ御見込ノ通リ御處分有之可然存候尤前文ノ通リ愈清國ヘ内啓ノ上云々トノ儀中出候ハヽ同國ヘモ柳原少辨務使在勤故可申含右手數眞僞等ハ篤ト御注意御談有之度事ニ存候氣付ノ儘中進候

一亞米利加國ヨリ大久保伊藤ノ兩副使條約改定ノ儀ニ付伺ノ儀有之先月初旬中歸朝相成今般廟議一決ノ上條約上改定スヘキ分ハ便宜ニ從ヒ調印致シ可申旨更ニ特權ヲ御附與相成候寺島大輔公ニモ先月廿五日被任大辨務使英國在留被仰付且外使節ト同シク右條約改定委任ノ命ヲ被蒙候岡田凌雲鈴木金藏（滋賀縣人開拓出仕）外務少記ニ近藤權大錄大錄ニ被任何レモ大辨務使隨從被仰付兩副使一同本月十七日米國ヘ向發行ノ筈決定致シ候

一御來書中小林匡ヨリ内狀中廣瀨直行拜命迄ノ旅費受取方ノ儀ニ付云々御申越右ハ二月廿日附ノ出狀ヨリ右旅費出方ノ儀ニ付大藏省ヨリノ達書寫シ差進候間疾ク相達シ御了解ノ儀ト存候

右御報旁中進候折角時下御加養御勉勵ノ程爲邦家祈候也

壬申五月四日　　朝鮮事務課

三名宛（朱書）「吉岡森山廣津ヲ云原案往々此略例アリ一々明辨セス」

追テ廣瀨直行奉命受書御差越落手則兼テ申進候通月給日當等本受取ニ直シ大藏省ヘ可相達候間於御方モ兼テ及御廻置候同省ヨリ達書ノ通奉命當日迄ノ賄日當十五等ノ相當ヲ以渡シ方可然御取計有之度候也

何月後ニ參ルト約シテ外務官員皆引退クモヨシ氣力拔テモ無妨（朱枠朱書）「寺島宗則」

既ニ柳原少辨務使ヲ以北京天津ノ間ニ在留セシメタリ清國ヘ内啓ニ無相違候ハヽ柳原ヨリモ其儀ヲ爲掛合可申眞ニ然哉否ト詰問爲致可然候

外務官員一ト先引拂候テハ又々氣力拔ケ候事ニ相成彼ノ情態モ苟安姑息ヲ生シ易ケレハ是非一名ハ殘リ居候樣申遣度候（朱枠朱書）「宮本」

（朝鮮事務書）

一四四　五月七日（六月十三日）外務省ヨリ太政官正院宛

朝鮮國側ノ回答遲延ノ場合ハ草梁公館々員一時引揚クヘク其節ノ館内取締ニ關シ上申ノ件

朝鮮國ヘ出使官員森山權大錄廣津權大錄再渡以來彼ト應酬ノ次第時々報知有之候得共兎角彼レノ習僻トシテ先例古格ヲ固執シ順擧ノ運ニ不至屢次談判往復ノ上昨今漸ク御改制報知ノ書契案受取都表ヘ内聞ニ入候一段ニ相運此上ハ都表ノ決議次第不遠回答可有之ト存候得共萬一清國ヘ内啓差圖相受候上決答可及抔申出候哉モ難計旨出使ノ見込モ有之其節ハ回答ノ期ヲ約シ館内取締向相附一ト先引揚候積リニテ右館内取締向見込別紙ノ通申越候右ハ相當ノ儀ト被存候ニ付其分取計可申旨相達置候得共御承知マテ來翰ノ内拔萃別紙相添此段申上置候也

壬申五月七日　　外務省

正院御中

註　右文書ニ謂フ「右館内取締向見込別紙」「來翰ノ内拔萃別紙」ハ何レモ一四一附屬書ヲ指ス

（朝鮮事務書）

一四五　五月八日（六月十三日）朝鮮國出張吉岡外務少記等ヨリ外務省宛

東萊府使ヘ直接示談ノ意嚮ヲ差備官ニ口達セル旨等報告ノ件

時下薄暑ノ砌　卿輔公始各位益御精務欣喜ノ至扨先般申進候三月廿九日假訓導入館相良正樹對面ノ節彼レ京表内啓聞ノ手段モ有之回答ノ儀ハ凡三十餘日ノ間相待呉候樣倚賴ノ末約書取之置候處既ニ期日ニモ推移候間本月二日假訓導入館申達シ館司深見六郎面謁回報如何ノ旨爲及催促候處イマタ回下無之夫ニ付種々周旋イタシ居候段相斷候ニ付先一通リニテ出館爲致其後何ノ模樣モ不申出候間又々昨日入館申達相良正樹面晤段々是迄遲滯ノ末今日ニ至リ猶不得確答奉使職掌ニ於テ切迫惶悚ノ情實逐一陳述此上片响モ等閑スル

ニ堪ス候間東萊府使ヘ直接對觀及示談度其旨篤ト府使ヘ轉達イタシ面接ノ都合旋力可被致且府使回答ノ儀ハ必來ル九日十日ヲ期シ入館ノ上可申聞旨差詰爲及談判尚口陳書等爲相渡置候間府使面晤等ノ儀ハ直下ニ承諾可致哉トモ不被存候得共府使返答ニヨリ追々迫緩其機ニ投シ結局挫問可致覺悟ニ御座候猶後便可申上候得共昨今動靜大略如此候

一別紙（註「別紙省略」）金銀仕拂略算書差出シ候間不足ノ分急速御差廻相成候樣御盡力被下度尤遠路ノ儀ニ候得ハ途間濡滯存外延着等ニ相成候テハ甚不都合ニ存候間成丈神速御差贈被下候樣賴遣候且徽官等官祿日當等ノ儀ハ歸京精算ノ上受納可致積ニ御座候是亦庶務課ヘ御致聲置被下度存候

右提要耳委曲後雁ノ節申進候也

壬申五月八日

廣津權大錄
森山權大錄
吉岡少記

朝鮮事務課御中

（朝鮮事務書）

一四六　五月十四日（六月十九日）　朝鮮國出張吉岡外務少記等ヨリ外務省宛

朝鮮國接待官訓導安俊卿ノ下府ヲ待ツコトトセル事情報告ノ件

本書中申進候通去ル六日假訓導入館ノ節相約置候九日十日ノ期日ニモ相及ヒ候處兩日陰雨十一日ニ至リ同人入館早速差使相良正樹對面爲致候處彼ヨリ申出候ニハ過日御示達ノ趣逐一府使別ヘ稟達イタシ候處府使被申聞候ニハ差使直接ノ儀ハ我國ニ於テ舊規モ有之拙者獨斷ヲ以面晤イタシ候譯ニハ相成カタク然處昨日京表ヨリ公書到來其趣ニハ今般公幹ノ儀ハ實以莫重ノ事件ニモ有之候間舊訓導安俊卿ハ喪中ナカラ從前ノ手續モ熟知ノ者ニ候間除服中付萬端附託相成來ル廿五六日ニハ着府可致旣ニ本月三日ヨリ六日ノ間ニハ必京表發足可致居儀トモ相聞候間俊卿下府ノ上ハ卽速入館爲致萬般御應對可申就テハ右俊卿下府迄ノ處相待呉ラレ候樣イタシ度尤差使職掌ニオイテ苦悶且惶悚ノ情實ハ深ク洞察イタシ候得共拙者直接イタシ候儀ハ舊規モ有之如何トモ（註一四五ニヨレハ七日カ）

イタシカタク且面晤イタシ候共緊重ノ事件拙者決裁確答可被致儀ニモ無之候間何レニモ俊卿下府ノ上往復可致宜布相斷可申入旨府使被申聞候段申出候ニ付相良正樹相答候ニハ早春渡着以降旣幾旬ヲ空送イタシ候モ訓導病托其他京表內啓聞等ノ譯ヲ以被及懇談候故不得止先般モ契約ノ上三十餘日間苦待罷在候處四十餘日ノ今日ニ至リ又々十餘日相待呉候抔曖昧ノ儀申入ラレ候ハ實ニ公幹ヲ藐思イタサレ候儀ニモ相當リ抑拙者每回面觀陳述イタシ候儀モ府使別ヘハ貫徹不致事歟甚以不安存候訓導安俊卿ハ從前ヨリ公幹熟知ノモノニテ下府ノ上ハ充分旋力可有之儀ハ企望イタシ候事ナカラ斯迄重大ノ事件何ソ訓導ノ下來不下來ニ關シ可申哉將又外務官員ニ於テハ徒ニ留滯相成是ヨリハ日々督促ヲ蒙リ最早拙者ヨリ可言解樣モ無之此上ハ片响モ速ニ府使ヘ面謁意情呉々申述度候間直接ノ都合御周旋可有之旨儼然申詰サセ候處彼ヨリハ前言ノ通リ申詫同問同答談判モ纏リカネ終ニ其夜ハ假訓導ヲ館內ニ挽留置尙翌十二日早朝ヨリ種々手段ヲ設ケ詰責致サセ候得共矢張前同樣來ル廿五六日ノ間ニハ訓導俊卿下府イタシ候段京報有之候旨府使ヨリ被申聞候上ハ其期ニ至リ故障申立前言ヲ食ミ候樣ノ儀ハ決テ無之別テ拙者病體ニ有之候間出館爲差許度段歎願イタシ候間押テ挽留挫問イタシ候共到底假訓導ノ獨斷ヲ以一事ノ決答モ可被致儀ニ無之候間差使ヨリ矢張前言ノ如ク使事職掌ニ於テ苦悶ニ堪ス候間速ニ府使直接ノ儀旋力可被致段聢ト申達サセ猶廣瀨浦瀨等ヨリハ篤ト諭示ヲ加ヘ昨今被申立候通廿五六日ノ約定ニ於テ必違迂有之マシキ段申聞サセ終ニ出館差許申候右ノ運ヒニ相成又々此先十餘日間空送イタシ候事實ニ一日三秋ノ懷ニ候得共何分京着ノ確答無之內ハ進退相決シ候儀ニモ至リカネ無據右ノ詞宜ニ取計ヒ申候何レ期限ニ及ヒ候ハヽ屹度差詰決極ヲ得可申積ニ御座候四月中ニモ成否可相決筈ノ處追々時月ヲ移シ一同恐悚且憤懣ニ存候得共兼テ御承知ノ通リ韓人ノ情態ニ候間是亦御了察祈所ニ候

右十一十二日談判撮略如此猶追テ可申進候也

中五月十四日

廣津權大錄
森山權大錄
吉岡少記

朝鮮事務課御中

尙々本書ハ去ル八日便船ニ相託シ置候處時氣不順ニテイ

マタ繫泊イタシ居候間副書申進候也

（朝鮮事務書）

一四七　五月二十八日（七月三日）太政官史官ヨリ外務省宛

草梁公館處分竝ニ漂民取扱方ノ儀指令濟ノ旨通達ノ件

附屬書一、　五月二十二日外務省ヨリ太政官正院ヘノ伺書草梁公館處分竝ニ漂民取扱方ニ關シ伺ノ件竝ニ之ニ對スル太政官決裁

二、　五月宗外務大丞ヨリ外務省ヘノ伺書草梁公館々員ノ進退竝ニ日鮮兩國間澁滯物品清算方ニ關シ伺ノ件

三、　五月二十八日太政官ヨリ外務省ヘノ指令書草梁公館ヲ外務省ノ管轄トスヘキ旨指令ノ件

四、　五月二十八日太政官ヨリ伊萬里縣ヘノ指令書寫朝鮮國漂民取扱方等ニ關シ指令ノ件

五、　五月二十八日太政官ヨリ長崎縣ヘノ指令書寫朝鮮國漂民取扱方等ニ關シ指令ノ件

六、　五月二十八日太政官ヨリ宗外務大丞ヘノ指令書寫草梁公館ヲ外務省派出ノ官員ヘ交付スヘキ旨指令ノ件

朝鮮國草梁倭館詰幷漂民取扱方ノ儀御沙汰書幷伺書御指揮濟ニ付相達候且伊萬里長崎兩縣ヘ御達ノ寫幷爲心得宗外務大丞ヘ同斷寫共相廻候也

壬申五月廿八日

史官

外務省御中

追テ本文兩縣宗大丞ヘハ明日御達ノ筈ニ候間此旨申入置候也

（朝鮮事務書）

（附屬書一）

（朱書）「壬申五月廿二日柿本外務大丞持參差出同五月廿八日伺ノ通濟」

正院御中　外務省

朝鮮國草梁倭館詰幷漂民取扱方ノ爲長崎表ヘ爲相詰候伊萬里縣貫屬ノ者引揚方ノ儀ニ付伊萬里縣ヨリ縣合越評議中外務大丞宗重正ヨリモ（註 附屬書二）別紙ノ通申立右ハ戊辰以來維新報知ノ書契ヲ不受邦內更革ノ世態更ニ不貫徹然ルニ舊來接對ノ役員卒然引揚候テハ當省出使ノ官員談判ノ道相絕候ハ必然ニ付不體裁ナカラ今日マテ舊貫ニ依リ在館ノ役員等其儘據置候儀ニテ此程出使ノ官員ヨリ報知ノ趣ニテハ書契案ヲ請取都表往復三十餘日ノ猶豫ヲ以回答申出候筈ニ付外務省出使官員ノ進退及ヒ館內ノ所置等回酬ノ模樣ニ寄可取計旨ニ有之右ハ去ル七日大略申上置候通リニ有之夫是取束勘辨イタシ候處此上彼國ヨリ何樣申出候トモ從前ノ姿ニ可差置筋ニ無之宗重正轉任ノ事實彼國ニモ前書契案ヲ以承知候上ハ在館ノ役員ハ則宗氏家人ニ當リ候ニ付一同可爲引拂ハ勿論ノ處舊來在留ノ商民モ不少館內四五萬坪モ有之屋宇多數其上漂民迎送方假ニ小例ヲ設ケ候節ハ官員一二名通辯庶務會計館中見廻兩門守衛小仕等マテ如何樣減少候テモ凡貳拾人位ハ在館不爲致候ハテハ交際幷取締難相立趣ニ付右ハ在館舊役員ノ內人撰ノ上更ニ當省官員ニ申付其餘ハ一同爲引拂候積ヲ以所置方ノ儀出使官員見込ニ相任セ候樣致度候抑草梁倭館ノ儀右樣廣大ニ過當今不用ノ姿ニ相當リ候得共是ハ後來御國威ヲ彼ヘ振揚ノ必要物ニ付可成舊貫依然一歩モ退カサル樣致度候

一漂民取扱方ノ儀ハ是マテ內地漂著ノ分ハ長崎縣ヘ送リ同縣ニテ一ト通リ相糺詰合ノ伊萬里縣官員ヘ引渡シ便船次第對州嚴原ヘ送リ同所ヨリ使者ヲ添ヘ朝鮮國ヘ送屆候仕來ニ有之方今ノ御政體伊萬里縣官員長崎表ヘ相詰漂民取扱候ハ不都合ノミナラス御入費ニモ差響キ候間自今長崎縣ニテ引受所置イタシ通辯必要ノモノハ同所官員ニ申付嚴原マテ送屆候失費等ハ同縣官費ニ相立嚴原ヨリ朝鮮國ヘ送還ノ儀ハ同所出張伊萬里縣官員ニテ取扱ヒ失費モ同縣廳費ニ相立可申旨改テ兩縣ヘ御達相成候樣イタシ度然ル上ハ從前在館ノ役員及ヒ漂民取扱ノ爲メ長崎表ヘ爲相詰候役員ハ爲引拂草梁倭館ハ外務省出使官員ヘ引渡長崎表ニ於テ漂民取扱ノ爲メニ設置候建物等有之候ハヽ同縣ヘ引渡候樣伊萬里縣ヘ御沙汰相成宗大丞ヘモ其段御沙汰有之度候

一彼國館內失費ノ儀接對入費ヲ始メ給料竝大小船雇入賃筆墨紙蠟燭等館內諸失費一ケ月金五百圓ト相立候ハヽ悉皆補給方可行屆哉ノ趣出使官員見込ニ候得共右ハ大約ノ儀此上

當省官員在留中付御國體ニ不拘儀ハ非常ノ省略イタシ追テ御入用ノ目途可相伺元來公私貿利ヲ以靖來候得共去未年限歲遣船相廢シ今日ニ至テハ重正自費ヲ以相償候時期ニ至難澁ノ段相違モ無之今般當省ニテ管轄候上ハ速ニ其所置無之テハ端的差支可申儀ニ付差向館內諸入費トシテ金五千兩御下ケ相成候樣イタシ度右ヲ以テ精々省略爲取賄追テ清算御勘定仕上大藏省ヘ可差出右ハ航海ニ時日ヲ費シ殊ニ秋冬ニ向テハ渡海ノ日和稀ニテ急場ノ音信相成カタキ場所ニ付前書金高丈ケハ是非トモ御下ケ相成候樣イタシ度依之當省幷伊萬里長崎兩縣宗大丞ヘノ御沙汰振相添此段相伺候也

壬申五月廿二日

（朱書）「伺之通」

但金子之儀ハ大藏省ヨリ可受取事　「正院之印」

（朝鮮事務書）

（附屬書二）

先般廢藩置縣ノ御變革重正韓國將命ノ家役被免更ニ本官ヘ轉任ノ始末自家使命ヲ以報知ニ及猶

朝廷御誠意ノ存スル處兩間交際ノ體裁ニ至テハ本省出使專任超海有之候ニ付從前自家ヨリ差遣置候役員ハ不取敢引拂歲船往來ヲ廢シ勘合ノ印等ハ速ニ送還ニ及更ニ本省ニ於テ御主意宜御談判可有之儀至當ノ筋ニ候處頑固ノ國風公幹ノ委實徹底不致前從來ノ條約ヲ變シ是迄居込役員等卒然引拂候テハ御用害顯然ニ付內外名實相違不體裁ノ儀ナカラ暫ク舊貫ニ依リ在館役員ノ進退等總テ本省出使ノ官員ヘ相托シ置候然處此程韓地ヨリ報知ノ趣ニテハ先日任譯ノ者入館書契案令捧出候ト相聞然ル時ハ御邦內御更革ノ世態重正轉官ノ事實彼國ニモ公然承知致シ候上ハ從前ノ行掛リヲ以難相運ハ勿論ニテ彼ヘ對シテハ重正家臣內實ハ伊萬里縣貫屬現今取扱候事務ハ卽本省ニ管ス則體裁不相立ノミナラス昨年迄ハ公私貿利潤ヲ以役員月給往來船飛船等ノ入費ヲ初メ館內一切ノ用費從前ノ振ヲ以テ差償居候然處歲船貿易ノ儀ハ昨年限相止メ當春以來纔ノ餘金ヲ以テ渴々差償ヒ置御談判ノ御用邊相整候上內外名實ノ齟齬等無之樣一齊本省ヘ引渡役員ノ儀モ速ニ引揚候樣取計度先以當時暫ノ場合ト相心得在館役員共ニ於テモ必至精配イタシ總テ用費無不都合償來候處今日ニ至候テハ更ニ可相補目途モ無之春來今日マテ館內入費ヲ初メ朝鮮ニ屬候用途全重正自費ヲ以相補兼々困難ノ內情切迫今後如何共難相屆候ニ付館內用費ハ力ニ不及飛船往來船漂民冗費等夫々速ニ御所分被成下從前長崎嚴原ニ於テ自家々從ノ名稱ニテ漂人ニ相携候役員韓地同樣速ニ差免長崎ノ儀モ爲引拂度通辯其他是迄取扱來シ者ノ內爾後トモニ被召仕者ハ本省長崎縣何レノ屬下ニモ被命被下度奉存候

一昨辛未年限歲遣船貿易廢止致候處年來通貿ノ物品兩間未收ノ差引相濟數十ケ年ニ引纏入縺レ居候處此節ニ至リ其儘可閣樣無之雙方差引合等明瞭相立度精々及差圖置候得共多年ノ儀ニテ未タ取調濟ニ不至候ニ付爲取調承掛ノ者少々差遣雙方從來ノ出入爲致清算度候事

右件々差向候儀ニテ纔モ猶豫難相成何分至急御指揮被下度所希御座候以上

五　月

宗　大　丞

（朝鮮事務書）

（附屬書三）

外　務　省

朝鮮國草梁倭館在住同國交際事務幷漂民取扱ノ儀自今其省可爲管轄候就テハ從前同館幷長崎表ヘ爲相詰候伊萬里縣貫屬ノ輩今般爲引拂內地ヨリ漂民送還ノ儀ハ同縣幷長崎縣ヘ別紙ノ通相達候條倭館ハ宗重正ヨリ受取取締向等處置可致候事

壬申五月

太　政　官

（朝鮮事務書）

註一、右文書日附ハ「太政官日誌」ニ據ル

（附屬書四）

伊　萬　里　縣

朝鮮國交際ハ外務省ニテ管之同國漂民長崎ニ於テノ取扱方ハ同縣ニテ致所置候條右兩所ヘ從前爲相詰居候其縣貫屬ノ輩ハ爲引拂可申候尤嚴原ヨリ朝鮮國漂民送屆ノ儀ハ從前ノ通相心得倭館出張外務省官員ヘ可引渡候事

壬申五月廿八日

太　政　官

（朝鮮事務書）

（附屬書五）

長　崎　縣

朝鮮國漂民長崎表ニ於テ取扱方從前伊萬里縣貫屬ニテ致所

置候處今般右貫屬ノ輩爲引拂候條自今漂民ノ儀其縣ニテ取扱對州迄送屆候樣可取計候事

但從前伊萬里縣官員便宜ニ依リ其縣出仕爲致候儀ハ不苦候事

壬申五月廿八日

太　政　官

（朝鮮事務書）

（附屬書六）

外務大丞　宗　重　正

朝鮮國漂民取扱方ノ儀今般伊萬里長崎兩縣ヘ別紙ノ通相達候條同國倭館ノ儀ハ外務省出張官員ヘ可渡候事

壬申五月

太　政　官

（朝鮮事務書）

註二、右文書日附ハ「太政官日誌」ニ據ル

一四八　六月九日（七月十四日）花房外務大丞ヨリ朝鮮國出張吉岡外務少記等宛

宗氏ノ負債ハ公貿易ノ滯リノミナルヤ否ヤ事實取調フヘキ旨通達ノ件

宗氏伺書ノ内朝鮮貿易計算十數年入纏居候ニ付清算取調ヘ負債ノ分猶可申立趣ニ有之右ハ最初取調候砌ハ凡四萬兩程ノ高ニ相當リ其後宗氏ヨリ歲遣送使モ渡韓ノ趣ニテ今日ニ至リテハ借財貳萬八千餘ニ減少イタシ候趣ニ候得共内情如何ノ取引ニ相成居候哉了然スヘカラス彌右借財筋判然清算相立負債高相分リ候上ハ返辨ノ道政府ニテ御引受無之テハ難相成儀ト存候得共全ク公貿易ノ滯リ耳ニ候哉或ハ私貿私借等ノ分可有之哉根原來由トモ明了不相成テハ不都合候間事實篤ト御探知可被成且右返辨方手續幷ニ物品數量等モ夫々御取調ヘ悉詳御申立有之候樣イタシ度此段別テ申進候也

六月九日

花　房　義　質

吉岡少記殿

森山權大錄殿

廣津權大錄殿

（朝鮮事務書）

一四九　六月九日（七月十四日）花房外務大丞等ヨリ朝鮮國出張吉岡外務少記等宛

草梁公館外務省管轄ノ儀伺濟ノ旨竝ニ草梁公館入用金五千兩元嚴原縣士族前川太衛ニ相渡シ差廻スヘキ旨等通達ノ件

附屬書　六月宗外務大丞ヨリノ伺書

草梁公館外務省管轄ニ付内外心得方ニ關シ伺ノ件

附記　右伺書ニ對スル外務省ノ附紙振

暑氣相催候處各位愈御壯健御奉務珍重ニ存候本省如常相替候儀無之御放念有之度候

一伊萬里縣幷宗重正ヨリノ伺書ヘ評議ノ書面伺濟相成去ル廿八日本省幷伊萬里長崎兩縣幷重正ヘモ別紙（註二）ノ通リ御達相成候間委細ハ右ニテ御承知可被成候

但右書類ハ先便差進候ニ付相省キ申候

一前條伺濟ニ付和館諸入用金五千兩請取濟ノ處元嚴原縣士族前川太衛ト申者從前和館會計向爲取調此度渡韓爲致候ニ付來ル十三日郵便船ニテ横濱出立ノ積ニ付右金太衛ヘ相渡差廻申候御入手ノ上ハ早々請取證書御廻可被成候仕拂等ノ儀ハ曾テ大藏省ヨリ達ノ通リ口々請取證書添一ケ月限リ仕上ケ清算帳御廻有之度候右金請取候節大藏省ヘノ掛合書寫（註「掛合書寫」省略）御廻シ申候

一前書ノ御用金此度ハ前川太衛ヘ托シ候得共以後出使官員旅費ヲ始メ御用金等差廻シ方如何樣ノ手續ニ致シ可然哉和館ハ當省ノ管轄ト相成嚴原ハ伊萬里縣ニ屬シ公貿歲遣ヲ廢シ候上ハ從前爲替融通等ノ辨理如何可有之哉イツレニモ東京ヨリ韓地ヘ相達候マテノ都合御勘考迅速御申越可被成候

一和館引渡方御沙汰相成候ニ付内外心得方重正伺書ヘ（註「附屬書」）別紙ノ通リ附紙（註三）ヲ以テ御達相成候ニ付寫シ御廻シ申候委細ハ右ニテ御承知不都合無之樣御所置有之度候

一今般省中分課御改制ニ付寫（註「寫シ者略」）シ壹冊御廻シ申候

一過ル五日

皇太后宮皇后宮濱離宮ヘ行啓夫ヨリ御新造ノ御船ニテ墨陀川邊ヘ御舟行被爲在候事

一皇后宮來ル十七日御發輿相州宮下溫泉場ヘ御湯治被　仰出候事

一省中官員進退（註「別紙御承知」省略）別紙御承知可被成候

一柳原少辨務使來狀ノ內淸國近時新聞韓事關係ノ分御心得マテ書拔(註「書拔省略」)御廻シ中候

一貌刺屈ヨリ新聞紙(註「新聞紙省略」)御廻中候右ノ者ハ先般來新聞局ヨリ取設諸局ノ官舍ヘ出入致シ候テ當省ヘモ御國人名代ニテ罷出居候

一別紙(註「別紙省略」)入記ノ通御廻中候御落手有之度候書外暑氣差迫リ候折角時季御自玉專一存候也

壬申六月

奧少錄
齋藤權大錄
花房大丞

吉岡少記殿
森山權大錄殿
廣津權大錄殿

（朝鮮事務書）

註一、右文書日附ヲ缺クモ他ノ文書ニヨリ一四八ト同時ニ發送セラレタルモノト認メラルルヲ以テ假ニ九日トセリ

二、別紙ハ一四七附屬書三、四、五、六ヲ指ス

（附屬書）

韓國事件ニ付過日御伺ニ及置候處漂民取扱方伊萬里長崎ノ兩縣ヘ此節更ニ御達有之草梁館所ノ儀出使ノ官員ヘ可引渡旨正院ヨリノ御沙汰奉畏候然處右地所ノ儀ハ御體知ノ通元來私有ノ場所ニ無之歲遣船定約ニ付自家舊來借用ノ地ニテ此節ニ至彼國ヘ一應ノ駈合不致內向ニテ館所引渡ノ手數相成候時外向ハ矢張從前ノ姿ニ相心得可申且其事實ヲ相察候節ハ信義ニ於テ渠カ見ル處如何可有之哉然ル時ハ右ノ事態彼國ヘ應對ノ上引渡ノ事ニ不至候テ難協譯ナカラ卽今尋盟ノ御談判中渠カ狡猾年來ノ風習枝葉ノ細末ニ引纏セ幹事諸否ノ緩急ニ關シ候儀ハ相生間敷哉ト懸念イタシ候ニ付御用件順受ノ御回答申出候マテ名實不相稱儀ナカラ外向ヘ發露方ハ暫猶豫イタシ實地ノ時機ヲ以御用便ノ道可然駈引イタシ候樣差含ミ越シ如何有之ヘク哉奉存候

一彼國往返ノ大小船共總テ條約ノ文引ナキモノ接待不致ノ舊盟ニ有之往來船ニ付テハ尤緊要ノ事故御談判濟マテ舊章其儘相用先從前ノ振ニテ可相濟置段兼々御省議モ承知罷在候得共此節ノ時機ニ至右相用候次第ハ取扱ノ者ヘハ別段不申越候テハ不都合ニ付此段相達越候御主意可然御差圖被下度奉存候

一彼國ヘ公貿易ニ付出送前漸々澁滯ニ至リ候分交際向御更革ノ今日ニ至消却不致候テハ難協依テハ事實取調追テ可奉願候條可然御懇評ノ程奉希候

右ハ此節御達ニ依テ猶又氣附ノ儀申上候間何分ノ御沙汰被下度偏ニ奉希候以上

壬申六月　　宗大丞

（朝鮮事務書）

註三、右宗大丞ノ伺ニ對スル附紙見當ラス然ルニ右附紙ノ原案ト見做サルル文書存スルニ付左ニ附記ス

（附記）

朝鮮倭館引渡ノ儀此程御沙汰相成候ニ付內外心得方等宗大丞ヨリ別紙ノ通伺書差出候ニ付御附紙振左ニ相伺申候

一初箇條ノ趣ハ尤ニ相聞候間伺ノ通相心得猶實地ノ駈引ハ總テ出張官員ノ差圖受候樣可差含越事

一二箇條舊章相用候次第ハ談判濟マテハ先從前ノ通可取扱儀ニ付其旨可爲心得置事

一三箇條ノ趣ハ取調申立ノ上猶可及評議尤大藏省ヘモ可申立置事

朝鮮往復課

一五〇　六月十二日（七月七日）　花房外務大丞等ヨリ朝鮮國出張吉岡外務少記等宛

宗重正ヨリ朝鮮國ヘ相渡スヘキ物品澁滯調差出セルニ付右事實取調フヘキ旨通達ノ件

（朝鮮事務書）

附屬書一、六月宗外務大丞ヨリ外務省ヘ伺書寫

朝鮮國トノ國交更新ニ際シ彼國ヨリノ負債品淸算ノ儀伺ノ件

二、右物品澁滯調書寫

向暑ノ節各位愈御安寧御奉職珍重存候陳ハ宗重正ヨリ韓國貿易筋ニ付彼ヘ可相渡物品澁滯調相添ヘ御處分ノ儀別紙ノ通伺書差出右ニ付テハ既ニ一昨十日附(註一四八ヲ指スカ)ヲ以云々申入置候儀モ有之候間不取敢前書寫御廻申候篤ト御取調否速御報知有之度此段猶又申入候也

壬申六月十二日

奧少錄
齋藤權大錄

花房大丞

吉岡少記殿
森山權大錄殿
廣津權大錄殿

（朝鮮事務書）

（附屬書一）

韓國貿易筋ニ付出送前漸々澁滯ニ至候起原ハ追々政府幷大藏省ヘモ申出置候通舊嚴原藩ノ儀生毛些少管轄内正租雜稅ノミニテ一歲ノ出納相適セス歲入莫大ノ不足相立候ニ付貿利ヲモ兼テ藩計ニ差加罷在候處多年ノ困迫藩費難支一州ノ命脈ニモ相關シ無據處ヨリ尙モ彼國懇談入送物品繰進漸々資用相償來候淀ミ延ヒテ今日相及候處今般韓國通交謬例ノ弊習ヲ除歲遣船公貿易昨未年限御廢止更ニ御交際向御更革公幹專御談判中旁澁滯品等速ニ消却淸算不相立候テハ難叶時機殊ニ調送方嚴催切迫ニ申立居候得ハ此節彼國御應接ノ御馳引ニモ相關シ時態難闇然處貿易御差止メ相成候ニ付テハ別段償却ノ見込等無之殆當惑ノ次第奉存候就テハ前章ノ通舊國累歲ノ困難不得止次第トハ乍申重正　知事在任中ノ負債ヲ以

朝廷御多事ノ央御厄介ヲ奉掛候段重疊恐縮仕候得共前文ノ始末依然難打過別紙（註附屬書二）ノ通澁滯物品金高凡積取調差出候條事實可然御明辨被下御評議ノ程偏ニ奉希候以上

壬申六月

宗大丞

（朝鮮事務書）

（附屬書二）

覺

一金貳萬四千百八拾壹兩永七百四拾文
　内壹萬百七拾五兩
　　丁銅五萬五千斤　百斤　拾八兩貳分替ト見
　　右都中渡前ノ分
　同壹萬四千六兩永七百四拾文
　　公貿易ニ付出送物品代價積
　　此譯
　　金壹萬三百五拾三兩
　　荒銅六萬九百斤　百斤　拾七兩替ト見
　　金千八百兩
　　延銅九千斤　百斤　貳拾兩替ト見
　同六百五拾兩永貳百四拾文
　　丹木八千百貳拾八斤　百斤　八兩替ト見
　同七百貳拾兩
　　胡枏四千八百斤　百斤　拾五兩替ト見
　同百三拾貳兩貳歩
　　明礬貳千六百五拾斤　百斤　五兩替ト見
　同三百五拾壹兩
　　蒔繪臺附大硯箱二十一内中硯箱七
　　同中丸盆　五束　金小屏風　二雙
　　同大丸盆　一束　蒔繪料紙箱　十四
　　同大重箱　廿六　同中重箱　十三
　　家入七寸鏡　廿面　蒔繪枕掛硯箱　二ツ
　　家入八寸鏡　四面　紋紙　三千貳百枚
　　唐鋏　五拾三挺　黑塗手燭　十四本
　　朱竿烟品　五百六十本　蒔繪文庫　二ツ
　　黑塗文庫　壹ツ　日本朱　八斤
　　銅野風呂　壹ツ　銅三ツ入子手洗一組
　　錫天目　壹束　蒔繪衣桁　一脚
　右ハ去冬澁滯物品代價凡ノ見積ヲ以御屆申上置候處即今ニ至格外銅物以下高價ニ相成居候得共時價一定難仕候間先御屆ニ及候代價付ノ儘取調候ニ付尙當時ノ處ヲ以御較量被下度奉希候事

澁滯物品代價凡ノ見積ヲ以金二萬四千八百六十八兩永九百五文ト去冬御屆申上置候内六百八十七兩永百六十五文銅物竝丹木以下船賃ノ分朝鮮負債ノ譯ニ無之候ニ付除之候金高如是

（朝鮮事務書）

一五一

六月二十四日（七月二十九日）　朝鮮國出張吉岡外務少記等（釜山原ニテ）ヨリ外務省宛

東萊府使ニ面接セントシテ果サス釜山ヲ引揚ケタル事情等報告竝ニ伺ノ件

附記一、六月六日朝鮮國差備官ヨリ相良差使等宛

舊約條ヲ遵守スルニ非サレハ尋交協ハサル旨口陳ノ件

二、深見草梁公館々司ヨリ萊釜兩使宛

差備官ヨリ差出セシ口陳書ニ對シ論駁

ノ件

三、深見草梁公館々司ヨリ萊釜兩使宛

漂民送受ノ儀ニ付回答督促ノ件

朝鮮事務復命及伺書

客冬森山廣津兩名伺定メ候御裁印書ノ意趣ヲ體シ春來一同協議或迫或緩往復數次ヲ經抑揚投機聊微力ヲ盡シ候儀ハ別冊（註「別冊省略」）應接類書往復類書其他日記等ニテ御高覽被下度然ルニ去ル五月廿五日彼訓導都表ヨリ下來就館候ニ付相良正樹面接公幹澁滯職掌悶迫ノ情等遂一臚陳應答兩日ニ及ヒ候得共到底回答ノ期月ヲ約セス曖昧糢糊ノ言ヲ以テ待應イタシ候上ハ此末百回舌論ヲ費シ候共決然其確答ヲ得ルノ日ナク剩ヘ進止途ヲ失シ可申然ル上ハ條理ヲ講明シテ彼東萊府ニ入リ府使直接我誠意ヲ可令貫徹議ニ相決シ差使相良正樹館司深見六郎廣瀨直行浦瀨好裕等五月廿六日夜出關六月六日歸館ニ至ル途間ノ動靜公幹ノ駈引等別紙（註「別紙入府錄省略」）入府錄ニ撮要有之候通リ一行歸館ノ上篤ト現地ノ事情ヲ推酌シ此機ヲ失セス一同引上ケ可申ニ相決シ申候然ニ館內舊來居込ノ士商モ有之館司ナルモノハ微官等ヨリ一二巡相延本省ノ御指示ヲ仰キ候上引揚可申筈ニイタシ右入府ノ節彼ヨリ相認出シ候（註二）口陳ニ對シ論駁（註三）書ヲ裁シ之ヲ館司ノ傳唱ノ書ニ仕立差備官ナル者ヘ可相渡積ニテ既ニ微官等解纜前右渡方取計ハセ候處差備官儀過日來瘧疾甚篤ク下來難致且一行入府後ハ東萊府使釜山僉使其外水營兵營等ノ役員數名統營ヨリ捕縛或ハ閉籠等被申付既ニ府使ニハ近隣ノ山寺ニ囚セラレ候哉ニ相聞且又訓導ハ叱責別差ハ闕官差備ハ病故加之ニ畢竟差備ノ職任ニテ莫重ノ事件ヲ管理スルノ手段無之段例ノ狡獰目今往復ノ手ヲ塞キ我聲息ヲ覷ヒ候點策ヲ呈シ來候ニ付尙傳唱書ハ差備官ノ手ニ止メ爲置可申段差詰爲及往復候處是亦其者ノ手ニ難止置何分府使復官カ又ハ新任下府ノ上ハ盡力辨幹可致旨小通事ヲ以請求イタシ來然處右府使訓導等復官又ハ新任下府ノ儀ハ必當月中ニハ相定可申旨申出候間右傳唱書ハ追テ相受取可申ト存候就テハ時機モ有之微官等三名及相良正樹廣瀨直行合テ五名過ル六月十六日夜發韓同十七日對州嚴原着イタシ候右ノ如ク種々點策ヲ弄シ頑固無條理ノ言ヲ皇張イタシ候モ全ク從來對人ヲ睥睨籠絡スルノ長策ニ有之候間此上小手段ヲ以區々ノ小价ヲ馳セ督論確答ヲ促シ候共到底水泡ニ歸シ可申ハ顯然其上我ニ於テ彼小利ニ昏溺スルモノト看做サル、時ハ兩情氷炭實ニ國辱ヲ釀シ可申ト存候間斯速ニ館司ヲシテ在館士商一同引纏歸國爲致可申外無御座右不得已情實ヨリ條理ヲ以引纏候上ハ當分ノ處絶交ニ侔シキ姿ニ候得共彼ノ心術支捂必後日解悟氷釋可致時機モ可有之其節ハ何時ニテモ寬猛御下手ノ條理相立可申奉存候且御裁印伺書ニモ御座候通リ萬一館司引揚ノ節居込ノ商民共彼ノ商民ト計リ舊來ノ取引行縺等一時取捌カネ候ニ付一二巡滯館イタシ度段及懇願候節ハ共辭宜ヲ酌察シ共旨聞屆是迄一粒タリ共給米ヲ食ミ候モノハ學テ引拂ハセ可申積ニ館司ヘモ委實申含置候間何分神速御下令相成候樣イタシ度然ルニ五月附宗氏ヨリノ伺書ニ數十年引縺ノ末ニ候間其筋ノ役員取纏ノタメ差渡シ度云々有之候得共從前公私貿易渡シ殘リ品幷ニ受取不足トモ彼地ニ於テ代官ト唱ヘ來候役人共ヘ春來精算爲取調（註「別紙夏答ス」）別紙之通候間別段差渡シ候ニハ不及此間ノ委曲ハ口陳上ナラテハ難盡候得共先大略陳上イタシ置候尤微官等引揚ノ後外向動靜探聞及漂民送迎等ノ儀ニ付彼ヨリ如何可申出哉右等ノ爲浦瀨好裕是亦一巡滯韓爲致置申候且館司引揚方駈引其他庶務引纏歸國ノ上ハ舊冬ノ本末等取調候タメ廣津弘信嚴原ニ相滯リ本省ノ御指旨ニ隨ヒ內外辨理可爲致積リニ候間何卒至急御評決被下候樣奉伺上候也

壬申六月廿四日

廣津弘信
森山茂
吉岡弘毅

外務省御中

（朝鮮事務書）

註一、七月四日附在嚴原廣津外務權大錄ヨリ外務省宛書翰ニヨレハ六月「廿四日晩吉岡森山兩名上京」云々トアリ卽チ右文書ハ出立當日嚴原ニテ認メラレシモノト認メラル

二、右文書ニ謂フ「口陳」左ニ附記ス

（附記一）

交隣以來約條堅如金石彼是相守已爲三百餘年矣　貴國所幹如係約條所在則我國處分必無不施之理若或違畫約條雖千訴萬言斷不聽許已悉雷慣而今以公幹事言之此是彼此間沿革事務則何以一朝一夕遽議左右乎前已備陳於　朝廷亦當收議於國中然後始可進退故今番訓導三自京師下來後業以此意回報於館中則勿論早晚惟當恭俟處分而以探出館門犯越禁界看作能事至於上府騷擾之境者安有貴國守約條知法禁之意乎假令

自貴國有絶措於國中之事而其所施措有或不便於公儀者則其勢不得不還　而況不可容易議　之事肆非欲行於隣國隣國寧有肯受之理乎以面接事言之宴享時相接外無更相接自是約條亦所吾知則此尤萬不近理之說設或許其面接其間訓導公朝之說皆是使道分付則此外有何樣詞說强請面接乎更勿煩說卽速撤還安頓惟徯早晚問處分而處分回下之前凡係交隣事務遵守舊約無一違畫然後乃可有公議決末之日以此諒之無傷隣好可也

右親率軍官口傳分付以此照諒焉

壬申六月初六日

差備官敬海　韓主薄印

差　使

館　司　尊下

（朝鮮事務書）

註三、記錄中ニ存スル「壽盟日涉」六月九日ノ條ニ「差使携歸リ候府使傳喝書に對し討論書並に漂民送迎小例可取設等の兩書を裁す稿成筆者に附して淨書せしむ」トアリ參考ノ爲右兩書ヲ左ニ附記ス

（附記二）

傳喝書

一春來　貴國應接我輩之情狀　具陳於　外務省官員前　官員曰曩日我　外務省奉朝旨令余輩納尋交　盛意於　彼國　彼國　不款接余輩顧　彼國有未了悉我意之所在者故　反復鄭重傳致我意有年于玆　彼國輕侮終始以曖昧模糊之語對我不毫應來意　今亦以所聞　察之則托辭於左右　以拒我尋交之誠意也夫交隣條理曲直名分世界自有公議正論今不更贅　余輩當回報　彼國之情態於　本省仰　處分耳　館司其以此告　彼國

一日前某等直入貴府者專使超溟以來頻俾任譯傳致公幹緊重之情由五閱月不得捧出書契　奉使之任館司之職不堪悶迫惶悚之情至五月念五日訓導始就館曰書契捧出之事將收議於國中而後致決答　因問其期則曰不可期幾年月嗚呼是何言歟　夫收議於國中當以　府使內啓達京師之日直行之托決議之旨於訓導以答我　然曠日踰月至今日曰將收議於國中決議之遲速　不可期幾年月也且貴國之大小人民之多少大抵可知貴朝神速下令收議於國中數月可決安有遲速不可知之理乎因恐春來任譯之稟告

我情實於使道前或有未盡其委曲者　若夫不然則　兩國間隣誼友情之所在豈有如此澁滯使令於境上之理乎因欲入　貴府親接　使道陳述來意之委曲　以約決議確答之大限　乃告其意於訓導　且求其同伴開路　訓導曰　貴使入府之事　非僕所是非　然使節之入府非無前例若夫同伴護行　卽任譯職分中之事　不敢辭其命　於是乎入府之議決　而其途中每遭村民之抑留　公然陳述入府之情由　遂得開路穩入　貴府者　貴國官吏之所共承諾也豈圖軍官所傳　差備官所錄書中　曰欄出館門犯越禁界云々嗟乎是何誣我之甚乎一書中又曰交際條約堅如金石　貴國所幹如條約條則從之若或違畫約條則斷不聽許　此言遽聞之則似有理細察之則不通之甚也何則交際條約盡起於　兩國考察時勢商酌事體　以制其宜　苟守之利兩國則當堅守無違若至時勢變　事體革　守舊有障礙之時則不得不相共商議以變通更革　我邦之交　貴國　以武將足利氏爲始其次豐臣氏其次德川氏其間交際約條之變通改革者不遑枚擧　是自然之理勢不待智者而知也今　本邦時勢大變庶政一新　宗氏解州守之任止將命之職更任

外務大丞則交際之體亦不可不變通然而頑然拒之曰一違舊約則斷不聽許無類膠柱鼓瑟之喩乎以　貴國之多士發不通之論　如此　甚堪怪愕想托辭以欲擯我絶交歟

一書中又曰有施措於國中之事而其所施措或有不便於公議者云々　我邦

天子親政百度維新是三千餘年

一系萬葉之國體復其古制天地不易之一大盛事其公明正大世界萬國之齊所欣慕拜賀今如書中所言則　貴國看以爲尋常施措之事　誤之甚也

一書中又曰不可容易議到之事肆然欲行於隣國隣國寧有肯受之理乎原夫　我邦與　貴國脣齒相保三百餘年　貴國之幸福卽　我邦之幸福　我邦之盛美卽　貴國之盛美是豈可不以事之實告事之實乎顧　貴國得我邦政體維新之報宜有慶賀之意今書中却加以肆然云々之語是可謂隣誼歟何不可言隣誼乎

一書中又曰沿革事務則不論早晚只當恭俟處分今問其早晚期幾年月則曰大事十年若其緊急則六七年是亦何等無條理之言夫隣國有報告之事宜速達其書以酬於來意若其回答之旨趣在　貴國之所決耳我豈爲强之乎唯天地間自有公論而

已今　貴國以曖昧無條理之言　徒遷延歲月春來未見有一言一句答及於我縷々傳致之情實者豈可謂善隣之情誼乎

一書中又曰處分回下之前凡係交隣事務遵守舊約無一違畫然後可有公議決末之日夫　宗氏既解州守之任現任外務大丞及止將命之職　外務省管外國交際云々之事情春來縷々陳述今不更贅　使道不捧大丞之書契不接大丞之差使却言凡百之事遵守舊約假令今欲遵守舊約以既解之州守與不管之州人欺罔　貴國則　貴國甘受其欺罔以爲隣誼宜然乎　貴國動輙曰誠信曰金石夫口稱誠信而行勸欺罔　貴國以之果爲遵守舊約乎

一書中又曰無傷隣好可也是兩國蒼生之福也我輩區區盡力專爲之耳夫欲敦隣好久遠不渝須言行一致然差使超海以來貴國之遇我無大反此語乎差使雖魯無安然待早晚不可期之回答之理故直去此土至　東京報超海以來　貴國遇我之情狀於　大丞如異日來取確答仰　大丞之處分而已因托某告別　請亮之

一某以不肖　任館司之職　職關交際　是以　春來頗竭微力於此因深覩　貴國遇差使之情狀有大反善隣之道者爲　兩國不堪憂慮乃同差使直至　貴府欲見使道以成　兩國之歡好　然峻拒不接唯使軍官傳旨所傳旨趣盡違交隣之情理如右所論是以　欲去此土報告春來事情於　大丞然人民尙有滯於此土者不得不管理故暫止行李急取進退於　大丞嗚呼事之至此可勝痛歎乎不宣

右項稟告　萊府使道前而後同告　釜山令公是希

（朝鮮事務書）

（附記三）

傳　喝　書

夫天地之間無重於人命　保國上人者　所當深憂厚護也本邦與　貴國　沿海相望　人民之漂流相到者每歲不知幾次實堪掛念　從前互有護送之式　今事體一變不得不改革焉故　曩者　面別差致宜急設護送小例之意　然于今不得回答　現今有　貴國漂民之寓我地者　亦有我漂民之寓此地者　可以想見後來之事　是不可片時忽略放過者也　乞急賜回答

右告東萊釜山兩使請速處回答事

館　司

一五二　七月十三日（八月十六日）廣津外務權大錄（嚴原ニテ）ヨリ柳原外務大丞等宛

（朝鮮事務書）

退鮮後ノ草梁公館內外ノ事情ヲ報告シ館司引揚ノ節ハ代官所ノ者殘ラス引揚ケシムヘキ旨等上申ノ件

柳原公長崎ヨリノ御狀宮本公花房公六月附ノ御狀トモ追々相達シ拜讀仕候各閣下益御勇健被遊御奉職恐賀此事ニ存候扨退韓前ノ詳細ハ既ニ吉岡森山兩名ヨリ御聞取被下候通ニテ何分納約ノ聰ヲ不得ニ付テハ外朝鮮ノ頑固ヲ破ル事能ワス內對人ノ委靡ヲ振フ能ワス弘信考ニ大ニ其責一身ニ迫リ恐慚惶恐ノ至此上厚顏喋々公幹ヲ可議ニ堪エス候得共猶爰元ニ於テ內外ノ御指揮奉待候內相考候次第左ニ陳上仕候

一頃日內承仕候處貿易掛ノ者共見込ニハ尋交云々被申モ元來三五名ノ者アリテ一新ノ機ニ混同騷擾ノ徼功射名ノ策ヨリ出候事ニテ方今內國御多端ノ折柄寬猛トモ迎モ盛大ノ御下手無覺束付テハ其詰リ當分從前ノ古格舊規ニヨラスシテ交際接續ノ道無之事ト輕蔑スル所ノ情白然彼國其筋ノ者ヘモ響彼亦充分侮慢ヲ長シタル趣ニ候然ニ差使正樹館司六郎入府ハ實ニ韓人ノミノ意外ニアラス館中ノ者モ驚愕イタシタルヨシ引續官員差使一同引揚ニ至リ候テモ韓人猶モ相疑ヒ居崔在守ト申モノハシメ四五名ノ小吏廣瀨直行ヘ暇乞ニモ不參シテ其日入館ノ姿ヲ匿シ番所裏手ノ門內ニ潛ミ乘込候人員ヲ伺候趣ニ御座候然レ共猶此後ノ處館司貿易方至急引揚ケニ至ルマシクト內外ノ者共ニ怠慢ニ心得罷在候模樣ニ御座候右貿易掛リ奸私ノ情ハ市商輩ヨリ漏泄ノ語ニテ公然承不申儀ナレトモ三名在韓中ヨリ察シタル處ト符合イタシ候

一前川太兵衛云々前便伺置候間早々被仰越可被下候同人進退ニ付テモ御賢考可被下候昨冬出京ノ折宗家ヘモ打合セ置候上ハ在韓ノ者引拂云々ノ儀ハ實地機ニ臨ミ變ニ應シ微官等ヨリ見込ミ申上候儀勿論ノ處韓地ヘ打合モ無之朝鮮相詰居候伊萬里縣貫屬現今取扱候事務ハ本省ニ管ス云々昨未年限リ歲遣公貿廢止春來渴々ノ餘金ヲ以自費云々通辯其外ノ役員至急爲引拂度云々數十年來引纏ヒ爲取調承掛ノ者少々差渡シ云々右差向候儀故纔ニモ猶豫難成云々以上五月宗氏建白ノ略　宗

君ハ御說ノコトク順貞ノ性質ニ候得共流石大名育チ事務大
樣ノ儀モ可有之然ルニ三月頃歟韓地詰一代官靑山繁二郎ト
申者暫時歸鄕ノ屆ニテ引拂無程上京候得共黴官等ヘハ深ク
相秘シ東京ノ御模樣ニテハ一昨年主張ノ論ヲ投シ候思ワク
有之候ハンノ處舊冬御決議ノ御都合且又書契案內啓聞ノ報
知等ニ至候處ヨリ遽ニ館內ノ失費ヲ厭ヒ本省ヘ振懸却テ數
十年引纏ノ末結算名目ニテ貿易掛リノ者差渡シ云々公然御
體裁ニ託シ纔カモ猶豫成カタキ云々等申立置內心ニハ迚モ
當年間ニ斷然御處置ニハ至リ兼候ハント輕蔑イタシ居候ヨ
リ前川太兵衞ヲモ緩々上阪爲致候ト歟爰元貿易署及親類家
族中ニモシカト手代モ不參趣申立大阪ヨリハ和船タルヘク
候間歸着月日モ難期抔私奸狡黠ノ致シ方彼伺書トハ言行全
ク相反シタル儀御賢察可被下候得共尙陳上イタシ候且自費
ヲ以相補ヒ云々有之候得共是ハ渡韓早々舊年貿易ノ餘利館
內手當如何程ノ備相立候ヲ尤正實難澁ニ不及所取調候樣深
見六郎ヨリ相諭シ候處四月已後ノ處ヘ韓米五百俵丈ハ引當
藏殘シイタシ置候段申出候間差當リ宗氏手元ヨリ被差補候
譯ニモ無之段ハ韓地ニ於テ其筋ノ者ヨリ明白申立候儀ニ御
座候

一負債書取ノ儀モ靑山韓地出帆後海津茂太郎ヨリ差出候得
共餘リ曖昧ノ略書ニ候間重々差詰夏秋ノ間ニ至リ談判如何
ニ拘ラス宗氏貿易品送受過不及ハ明白取調出來イタシ居不
申テハ大丞殿マテモ落度ニ至リ候哉モ難計第一舊主ト申且
又貿易ノ職分ニテ不取調不行屆一主ノ樣無之段重々申示シ
尙深見六郎ヲ以諄々理解セシメ漸ク取調相濟吉岡森山持上
ノ書類出來申候右ハ靑山上京後ノ事ニハ候得共靑山ハ總轄
ニテ別テ貿易事務熟達ノ者ニテ有ナカラ右宗氏被差出候負
債代價物品トモ大分相違有之的面御所分ヲ仰ク云々等實ニ
無恥ノ至ニ候尤韓地幷爰元ニテ精調ノ上何分仕解キ出來兼
候情實明了ノ上ハ黴官等ヨリ御一新御改制ノ御規模モ貫通
ノタメ差當リ御處分ヲ仰キ候儀申立候由ハ兎モ角書契案內
啓ニ至リ候哉否突然貳萬餘金御處分ヲ仰クトノ申立ハ不條
理ノ至リト奉存候

一今般如何ノ御指揮ニ被及候哉難計奉存候得共前文申上ノ
通今日ニ至リ猶公然ニハ體面ヲ飾リ內情幾分歟ノ私欲ニ蔽
ハレ候樣ノ事タトヒ詰問スルトモ眞ノ悔悟ニ至ラス却テ外
國ヘ對シ詐僞ヲ重ネ候基ト奉存候間自然館司引揚ノ都合ニ
決シ候ハヽ代官所ノ者壹人モ不殘同時引揚候樣イタシ度不

然ハ其內奸ノ根ヲ斷候ハン事難ク後年我意貫徹ノ期有之マ
シク愈醜態ヲ遺シ可申ト奉存候

一館司引揚振リ幷外向ヘ申殘シ辭柄ハ先便ニモ相伺候通リ
委曲御指揮被下度就テ彼ヨリ送居候舊印章當分往來ノ船々
ヘ相用罷在候處已後受ルト不受トニ關セス本省御印章相用
可申哉且又此後漂民等ノ節彼カ接スルト不接トニ係セス外
務官員名目ニテ渡海可致哉先左樣無之テハ御體裁難相立奉
存候得トモ猶イヨイヨ一旦ハ絕交トノ御覺悟御確定ナラテ
ハ新印章相用カタク候右御治定ノ上ハ舊印章返却ノ儀ハ館
司在館中取計ヒ可申儀ト奉存候且舊印章返却ニ及ヒ候テ旗
章モ相改不申テ難相濟從前宗氏使節ノ體ハ同氏船印幷ニ引
龍ノ絹幕打廻シノ儀ニ御座候又尋常往來船モ同氏船印相用
居候後來ハ總テ日ノ丸御旗章相用不苦候哉此段モ御決議奉
願候

一先便本省ヘ申上ノコトク金學成歎願ノ趣韓地ヘモ申遣シ
猶況景爲相伺候處既ニ八日ニ及ヒ候得共天氣不順ニテ差立
候海士船未タ歸著ニ到ラス近來ノ動靜委ク相分リ不申候尤
深見六郎ヨリ吉岡森山ヘノ書狀中何カ申送リ候儀モ可有之
候得共何分當月上旬マテノ處ハ新任譯官下府イタシ候哉舊
訓導再任ト來候哉相分リ不申最兩使及訓導放役被申儀モ畢
竟右樣申立置候テ此方ノ況景探偵時宜次第新舊何レ差使ヒ
候便利ヲ考ヘ候ト被存候間只此方ノ擧動ニヨリテ相表示ス
ル積リト被存候朝市其外貿易不相變被行候趣ニ御座候

一柳原公ヨリ高諭淸國ヘ米韓中保依賴ノ儀早速深見六郎浦
瀨好裕ヘ申含メ遣シ置候得共其狀著後ノ返書未タ到來不仕
候

一宮本公高諭花房公賢慮ノ次第一々感佩仕候總テ退韓後拜
誦ニテ少シ遺憾ノ事モ御座候得共今更致シ方ナク此上ノ處
尙御評議宜奉願候何分ニモ韓人ヘ直接出來不申候テ何事モ
隔靴搔癢ノ事ト存候口惜次第多分ニ御座候

一先便申上置候長崎漂民取扱振幷當分ハ每漂速ニ嚴原ヘ差
送リ相成候共當所ハ不毛ニ齊キ場處ニテ御座候間長崎ヘ相
集メ置產業ヲ與ヘ心服セシムルノ諭誨方及ヒ其方法長崎縣
ヘモ御打合御取調相成樣有御座度當所ニテモ縣出張所ノ官
員トモ申談シ候テモ格別ノ見込ニモ無之候得共當島ヘ直チ
ニ漂著ノ分ハ先當所ニテ補給イタスハ勿論ニ御座候間當所
市人抔ヘモ見込ミ相尋候處當地ハ市中ニテハ人不足ノヨシ
ニテ壹岐島ヨリ多分雇ヒ入ノ者ヲ以テ用辨イタシ候付テハ

韓人ヲ日雇ニ相用ヒ候得ハ一日壹貫文ヨリ壹貫五百文位ノ料ハ遣シ候テ不差支雙方辨利ノ趣ニ御座候附テハ縣出張所ヨリ韓人日雇ニ用ヒ候儀不苦段布告イタシ候得ハ忽チ各業ニ在附申ヘク候最ソレニ至リ候ハヽ夜分ハ韓人ノ小家ヘ必歸著可致其他法則ハ雙方ヘ相立置不申候テ難叶其邊御指揮次第取計ヒ申度奉存候

一當月廿日後マテニテ浦瀨好裕モ歸國可致候ニ付猶相變リ候儀御座候ハヽ可申上病中別シテ亂筆御海涵奉伏願候尙御不審ノ廉モ候ハヽ森山茂ヘ御問合被成下候樣奉願候也

申七月十三日

廣津弘信拜白

柳原大丞殿
宮本大丞殿
花房大丞殿

（朝鮮事務書）

一五三　七月十九日（八月二十二日）廣津外務權大錄（嚴原ニテ）ヨリ吉岡外務少記等宛

朝鮮國在留士官引揚ノ節ハ商民モ殘ラス引拂ハシムヘキ旨上申ノ件

追々御評決トハ存候得共猶陳上

一館司始メ役員全ク引揚ニ相決シ候トモ商民ハ兩間情好ノ模樣ニヨリ願ニヨリテハ引殘シ置云々ノ儀猶爰元ニ於テモ往々渡韓ノ志有之モノモ御座候得共篤ト熟考仕候時館司代官其外通詞禁徒ニ至ルマテ悉皆引拂ヒ商民ノミ相殘候末彼ヨリ隨意ニシテ縛ラレ自ラ行違ヒ等出來候節取締リ可申者無之テハ後害必然ノ儀候間假令ヒ士卒ノ内ニテモ商民ニ擬シ幾分歟ノ貿易ヲモ繫キ又館司引揚後ノ韓情暗探イタシ候抔ノ人物可有之哉ト樋口大島相良等ヘモ内談イタシ試候得共壹人トシテ擔當シ得ヘキ人物無之却テ御趣意ニ反シ候ノ内泄等イタシ韓人ヘ詐僞詔曲一時僅少ノ貿易ヲ覗ヒ其末其身モ進退窮シ且斷然條理押貫來リ候テ内々ニテ商人ヲ引殘シ置候淺陋ノ策ト被見侮候樣成行マシキニモアラス附テハ館司始メ館員引揚ノ御下知ニ決シ候ハヽ商民一人モ不殘引纏メ候樣無之テハ不宜哉ニ愚案仕候中ニ對州人殘シ置後來手懸リヲ得候儀ハ有マシク然レハ迎對州人ニ無之者差渡シ候トモ是亦決シテ難被行存候附テハ公然御布告相成候譯ニハ無之候得共何人ニ拘ラス釜山ニ限ラス斷然束縛ヲ解キ何道ナリトモ漂流名目ニテ商船仕立私商イタシ試候方却テ國情探索ノ一ツニモ相成可申ト存候御賢評奉希候

一愈右樣ノ次第ニ相成候ハヽ舊勘合印返還ハ申迄モ無之且後來我國ヨリ貴國清國其外ヘ航海ノ時風波ニヨリテ何方ヘ投錨可致モ難計右樣ノ節ハ兼テ申入置候國旗ヲ引ハ勿論ナリ幷ニ外務省印所持イタシ居候ハ即チ大日本國船ノ證タルカ故此段貴國内遍ク布告被致置度云々ヲ以テ舊印返還ノ節一同外務省印雛形相渡爲申度左候ハヽ彼ヨリハ定テ左樣候儀舊規ニアラサル故不承諾ノ旨可申答其時吾ヨリハ既ニ大丞書契案内啓ノ上國議ニ掛被居候上ハ我國改制ノ委曲ハ全國承知イタシ居候儀ニアラスヤ然ルニ右國旗幷ニ外務省印所持ノ儀ハ御國其地萬國ノ航スル官船皆然リ貴國ヘ航スルモ此後舊印章ノ文引難用次第ハ既ニ詳悉ノ譯ナレハ舊章返還ニ付テハ其證ヲ貴國ヘモ相告置ナリ而シテ貴國其處分ヲ如何被致候哉ハ貴國ノ論定ニ有之ヘク候トモ我ニ在テ隣盟ノ國ヘ我邦外航ノ記證判然相達シ置候ハ當然ノ理ナリ又兩間事ノ齟齬ヲ生セサル爲ナリト申ス邊リヲ以テ彼カ受ルト不受トニ拘ラス一應相渡シ候テハ如何可有之哉ト愚考仕候

一絕影島炮臺云々ハ崔在守カ家ヲ建候テ益密商ヲ防クト云說アルヨシ

一何事モ一時ニ申陳御下令後躑躅ナク取計候樣有之度存候先日差渡シ置候海士舟便今日迄モ相待候得共既ニ十四五日ニモ相成歸帆不致定テ浦瀨歸帆ノ趣候哉又ハ韓情ニ付キテノ儀哉ト日々相待申候兎角長崎迄ノ便宜モ甚困リ度々雇切舟ト申テモ雜費ヲ恐レ扨申上候後又々申陳候ハテハ情實貫徹セサル事モ有之所謂有智無智三十里或ハ三千里ノ遲鈍モ可有之慚懼ノ至ニ御座候扨前文商人ノ儀ニ付云々其外先便申上候等ノ内御指圖御發シニ後レ齟齬ノ廉有之候テモ恐入候間御下知著ノ上ニテモ先便今便申上候儀ニ付テノ御返教到來迄ハ時機ニヨリ韓地ヘ差圖ニ難及儀モ可有之候間此狀迄ノ御回教至急御下可被下候右重々懇願候也

申七月十九日

廣津弘信

朝鮮往復課御中
吉岡弘毅殿
森山茂殿

（朝鮮事務書）

一五四　七月二十四日（八月二十七日）　副島外務卿ヨリ太政官正院宛

朝鮮國在留士官等引揚ノ儀竝ニ宗氏負債品處理方等ニ關シ伺ノ件

七月廿四日朝正院ヘ可差出宮本大丞被申聞候ニ付
同文淨書廿四日正院ヘ差出ス

一昨庚午年十月吉岡弘毅等朝鮮國ヘ出張被仰付置尚彼地ノ模樣ニヨリ昨冬十二月更ニ被仰含候ハ彼若シ固執論ヲ主張シ我誠意ニ不應ノ節ハ在韓ノ士官一應引纏ヘキトノ儀ニ有シ(之カ)已來談判ヲ盡シ三月下旬書契寫シヲモ相渡シ五月廿六日ニ至リ訓導入館回答候ニハ來意ノ事須ラク國議ヲ收メ決答スヘシト故ニ其決答ノ期限ヲ問ヘハ則チ曰フ幾年月ヲ期スヘカラスト其意曖昧糢糊空敷時月ヲ遷延セシムルニアリ因テ前條被仰含ノ旨ニ基キ今般吉岡弘毅等彼地引揚ケ委曲ノ情狀申述候ニ付篤ト熟考候處後來ノ措置御勘辨中彼地在留士官等矢張一應引纏サセ其旨ハ別紙（註 別紙草案論示文（省略））草案論示文ノ意ヲ以館司役ナルモノヨリ彼國ヘ爲致通達商民ノ儀ハ去留其モノヽ自由ニマカセ可申事

一宗氏通交中丙寅年已來彼ニ對シ滯品金高凡貳萬五千兩ノ品物取揃返却清算可爲致事

一自今タリ共彼國漂民ノ儀ハ懇々愛護ヲ加フヘク其地方官ニ御達相成逐次護送可致事

右ノ通取計度候間
御裁決被下度此段申上候也

壬申七月廿四日

外務卿　副島種臣

正院御中

（朝鮮事務書）

一五五　八月四日（九月六日）　副島外務卿ヨリ太政官正院宛

朝鮮國在留士官等引揚ノ儀ニ關スル伺修正シ度旨上申ノ件

朝鮮事件ニ付頃日意見申上置候處本月一日本省出仕浦瀨好裕同國ヨリ歸著實地情狀承合候上尚又箇條中相改度

商民タリトモ不殘可致引拂候事

右申上候也

壬申八月四日

外務卿　副島種臣

正院御中

（朝鮮事務書）

一五六　八月十日（九月十三日）　副島外務卿ヨリ太政官正院宛

朝鮮國尋交ノ次第ヲ述ヘ懸案解決ノ爲格段ノ官員ヲ特派セラレ度旨上申ノ件

朝鮮尋交手續幷目的

一明治戊辰宗對馬守旨を奉して大差使を派し隣誼を脩めん事を告く其書中政權一歸　皇室不佞嚮奉勅左近衛少將平朝臣某禮曹參判公等之語あり然るに彼謂右　皇室奉勅之字は兩國書契中未た之を用ゆる者あらす左近衛少將平朝臣も先規無之押印約の如ならす禮曹參判公は宜く禮曹參判大人と書すへしとて接受不致候事

一其後談判度重り庚午二月に至り東萊府使尚又單簡を以て大差使へ遣し　皇勅等之字を論難致候事

一然れ共左近衛少將の稱呼丈けは承知致候事

一皇勅等の字句を用ひす兩政府不差碍樣の法語を用ひ交際を收めは可然哉と訓導談合の末書信を作り同十月外務官員等渡韓候へ共訓導一應の面晤さへ許し不申候事

一辛未六月我漂人數名を和館の前岸に放棄置候事

一宗對馬知事書を東萊釜山兩使に送りて外務官員に款接せられん事を請ひ候へ共承知不致旨返簡差越候事

一同人對馬藩知事を止られ更に外務大丞に任せられ兩國間交際を掌る可き旨の告書幷外務官員等東萊釜山兩使に面晤を請ふの書簡を送れり始め遣せし大差使は四年の時月を費し歸國候事

一新差使等著韓の日より訓導に應接を懇求する事殆んと二十回に及ふといへとも其儘上京致候事

一別差下來候に付兩書契の寫しを寄付し速に回答あらん事を求るに三十餘日猶豫あり度段申出候事

一右期日を過て廿五六日後に至り訓導下來申出候には公幹之事は議を國中に收めて後決答すへく其期限の如きは早

晩歲月を定むへからすとの儀に有之候事
一此上は親しく東萊府使に接して使節苦悶の情決答の大限を約し度に付訓導に同伴開路候樣申聞候處承諾に付差使館司等東萊に入り面謁を乞へとも許さす軍官をして答へしめ候には議を國中に收めて後決答すへし惟恭て早晩間の處分を竢へしとの事に有之故に其早晩間の期を問へは十年乃至六七年と言ふ因て其言ふ處を彼に筆記せしめ空しく歸館候事
一其後論難書を作り投示せし處一人の接受者無之候事
一右之情狀にては假令十年を期す共何等の都合可相成哉此上は大丞の所分を取るの外無之旨を告け差使等引取り相成候事
一然れ共右和館は嘉吉以來我人民往來居住我國權も行はれ來り候處にて一朝打棄候は好ましからさる儀に付追て使節差立談判相成迄は左件之通り取計候方方今の便宜に可有之事
一草梁館司幷代官所は打追の通相立置可申候事
一無用之士官雜人等は悉く引纏め歸國可爲致事
一商人の去留勝手たるへき事

一勘合印は舊章通りの事
一歲遣船は不差渡候事
一歲遣滯品宗氏負債と相成候分は勘定可拂渡事
一對州に滯居候漂民共は盡く送り返し候事
一右の目的を達すへき爲め一時格段なる官員を草梁まて差遣し穩當所分可致候事

明治五年壬申八月十日

外務卿　副島種臣

正院御中

一五七　八月十五日（九月十七日）　花房外務大丞ヨリノ伺書

朝鮮國關係事務處分ノ儀ニ關スル心得伺ノ件

附屬書　草梁公館々司ヘ口達スヘキ覺書

今度私儀朝鮮國出張被仰付候就ては諸事目的書に照準し專ら方今の便宜を旨とし穩當處分可致義に候へとも尙心得として左の件々相伺候也
一差使半途歸國の事に付論難申出候事有之候はは接受の期限も定まらす緩慢の罪を恐れ一應歸報せし事故同人又は他人を必らす再ひ渡さるへしとのみ答置かせへく事
逐て必らす格段なる使節可被差渡尤最初の論は何所まても變改無之に付其節は兩國人民安全繁榮の基を確立候樣御互に都合能周旋いたし度との旨幷に當今世界の氣運進歩の樣抔折を以て訓導其他へも談及いたさせ候樣可致候事
時宜により代官所は三代官に持切らせ一代官は引取らせ候方內外眞の都合と見定候節は然樣取計ひ候儀も可有之事
若し館司又は學館引拂らひを强て朝鮮より相望候樣の義有之候共本國の命に非らすしては一歩も動かさる段穩に論辨し益溫和にして決して動搖いたす間敷尤其言辭擧動等は逐一無加除申越候樣可爲致候事
一奧義制には前件に心得させ候外自ら館司代官の下僚の振を以兩官の間を調和し監察の心得を以其心腹に入り代官と韓人との間に存する私交の深淺厚薄其情狀等逐一探知し臆斷を雜へす有體見聞の儘可申越若し別に所見あらは本件と混せさる樣別に密封して可差出旨極密可申聞置事

一前件館司幷に奧義制へ心得置かせ候付ては同人等身上萬一不慮の儀有之節は家族のもの御見捨無之旨申聞尙當人內存も有之候はゝ承り置申上へく候事
一代官へは同人等所業に付兼々御聞込の儀も候へ共凡て吟味の沙汰に及はれさるに付既往を顧慮せす前途の都合一遍に心掛盡力可致樣是亦內密申聞せへく候事
一私貿易と唱へ宗氏「モノポリー」の貿易は我長崎唐館のすし元に等しきものに付少々模樣替いたし候はゝ引續取行ふへき無害の方法も可有之乍去差向は此外バハン拔荷の振にて取引いたし候共實公然通常の貿易といふへきもの有之却て此分を盛大になる樣相助け漸々勢ひを移し候積りに心得置かせへく候事
一館司へは別紙之趣へ達覺書を以達し置候積りに候事

壬申八月十五日

花房義質

（附屬書）

館司へ可爲心得置件々
口達の覺
一今般廟議の趣も有之其元を撰て更に館司に命し夫々役員

をも差添當館に差置かれ候に付一層勉勵堅忍勤務可有之
様存候
一韓人へ接遇の手數等は凡て舊に倚り取計ひ置かるへく萬
一一已難決論談等有之節は嚴原出張の向へ打合差圖を得
取計ひあるへく事
一是迄入送し來れる供饌類澁滯候共決て催促いたす間布乍
併懇意を以て差向候分は其意に任せ置へく候事
一歳遣船は中止と可被心得候事
一歳遣滯品は宗氏負債の分此度清算可拂渡候事
一勘合印は先つ舊章に從ひ置可申歸帆吹噓も同斷取計ひ置
へき事
一彼我漂民の義は便宜の處置を以受取渡し可致候事
一在館商人の儀は去留其もの〻勝手に可爲致尤正邪驗定往
來切手渡し方嚴重致すへく候事
一彼我商人互の貿易は可成差障無之様助け遣し候儀と可心
得候事
一在館上下となく不體裁無之様取締可有之萬一心得違のも
の於有之は其趣取調らへ可申立事
一兩國人民交通の義は專ら禮讓を存し粗忽の擧動あるまし

く義に付屹度取締萬一心得違のものは時宜により早々歸
國可爲致候事
一雜人舟子等に分賦し館内屋宇道路等常に清掃を加へへき
事
一役々邸宅營繕の儀は成丈省費候は勿論當時不用之向は商
民とも願にまかせ借渡し不苦候事
一彼我掛合事は勿論外情風聞に至るまて詳細時々報告可致
候事
一會計向の義は多少に不拘一同檢印の上取計ふへく事
一月々出納の記錄は證書相添便宜毎に嚴原出張の向迄可差
出候事
以　上

註　花房義質等朝鮮差遣ノ辭令「太政官日誌」ヨリ左ニ轉載ス

○壬申八月十八日分

外務大丞　花房　義質
御用有之朝鮮國へ被差遣
同　海軍省七等出仕　遠武　秀行
　　外務少記　廣津　弘信
御用有之花房外務大丞朝鮮國へ被差遣候ニ付隨行被
仰付
同　外務少記　森山　茂
同　外務權大錄　齋藤　榮
　　外務少錄　奥　義制
朝鮮國草梁在勤申付候

一五八　八月十八日（九月二十日）

對鮮事交問題ノ處理ニ關シ副島外務卿ヘノ勅旨

寫

勅旨

外務卿正四位　副島種臣

一草梁館司并代官所ハ從前之通相立置可申事
一無用ノ士官雜人等ハ悉ク引纏メ歸國可爲致事
一商人ノ去留勝手タルヘキ事
一勘合印ハ舊章通リノ事
一歳遣船ハ不差渡事
一歳遣滯品宗氏負債ト相成候分ハ勘定可拂渡事
一對州ニ滯居ノ漂民共ハ盡ク送リ返ス可キ事

一右之通朝鮮國出張外務大丞花房義質ヘ可相達事
明治五年壬申八月十八日
奉勅　太政大臣從一位三條實美　花押
（朝鮮事務書）

註　右勅旨ノ趣ハ「朝鮮事務書」所載ノ他ノ文書ニ據レハ同日副島外務卿ヨリ花房外務大丞ヘ達セラレタルモノナリ

一五九　八月十八日（九月二十日）副島外務卿ヨリ太政官正院宛

嚴原ニ朝鮮語學所ヲ設置シ右教授方ニ廣瀨外務省出仕ヲ任命シ度旨上申ノ件竝ニ之ニ對スル太政官決裁

（朱書）
「伺之通　正院之印」
壬申八月廿五日」

朝鮮語學ノ儀元嚴原藩ニ於テ從來世話致シ居候處當今廢絶相成居候ニ付テハ過日來申上置候通壹ケ年凡三百圓位ヲ目的トシ嚴原ニ於テ朝鮮語學所被設置候樣イタシ度右教授方

ノ儀ハ是迄本省十一等出仕廣瀨直行儀此度出仕差許シ更ニ同人ニ十四等給ヲ賜リ教導申付爲助教等外ノモノ壹人差置可申候就テハ右御入用差向候分ハ此度持越候御用金ノ内ヨリ一時仕拂ヒ置カセ可申ト存候此段相伺候也

壬申八月十八日

外務卿　副嶋種臣

正院御中

（朝鮮事務書）

一六〇　八月二十三日（九月二十五日）太政官史官ヨリ花房外務大丞宛

對州管轄ノ儀ニ付佐賀、長崎兩縣ヘノ達寫ヲ添ヘ回答ノ件

附屬書一、　八月十七日太政官ヨリ佐賀縣ヘノ達寫
對州ヲ長崎縣ヘ移管ノ件

二、　八月十七日太政官ヨリ長崎縣ヘノ達寫
對州ヲ管轄スヘキ旨ノ件

對州管轄替ノ儀ニ付御問合ノ趣致承知候則別紙寫ノ通本月十七日御達相成候間寫取御廻シ申候也

壬申八月廿三日

史官

花房外務大丞殿

（朝鮮事務書）

註　本號文書ハ八月二十二日附花房外務大丞ヨリ前件ニ關スル照會書ノ返翰ナリ

（附屬書一）

佐賀縣

其縣管轄對馬國一圓御詮議ノ次第有之今般長崎縣エ管轄被
仰付候條同縣エ引渡可申事

壬申八月十七日

太政官

（朝鮮事務書）

（附屬書二）

長崎縣

佐賀縣管轄對馬國一圓御詮議ノ次第有之今般其縣エ管轄被
仰付候條同縣ヨリ地所可受取事

壬申八月十七日

太政官

（朝鮮事務書）

一六一　八月二十四日（九月二十六日）外務省ヨリ長崎縣宛

朝鮮國關係ノ事務ハ嚴原出張ノ本省官員ト協議スヘキ旨指令ノ件

長崎縣

外務省

對馬國一圓其縣管轄替相成候ニ付テハ從前朝鮮國ヘ關係ノ事務都テ當省ニテ管シ彼地竝對州嚴原ヘ官員差置事務爲取扱候條目今漂民取扱方ハ勿論朝鮮國ヘ關係ノ事件ニ付嚴原出張ノ當省官員ヨリ直ニ御打合可及儀モ可有之其縣ニ於テ差向候儀ハ右官員ヘ打合被取計候樣此段申達候也

壬申八月廿四日

（朝鮮事務書）

一六二　九月十七日（十月十九日）朝鮮國出張花房外務大丞（釜山ニテ）ヨリ外務大丞等宛

嚴原貿易署竝ニ釜山代官所取扱向等取糺シ處置振等報告ノ件

附屬書　九月十六日深見外務省出仕ヘ草梁公館々司ヲ申付
深見外務省出仕ヘ草梁公館々司等ヘノ辭令寫
等ノ件

附記一、　九月十六日深見館司等ニ對スル内諭

二、　九月十六日海津茂太郎等ニ對スル歸國命令書

三、　九月十八日奥外務少錄ニ對スル辭令

四、　九月二十日春田長十郎ニ對スル辭令

壬申九月十八日出ス

追日秋冷相增候處各位御平安珍重存候然者春日艦ハ去ル十日有功丸ハ同十二日兵隊乘込對州着同所留易署取糺シ公私貿ニ關シ候同署現有品等ハ歸國掛ケ處置可致積ヲ以一ト先預ケ置候事

一圖書印幷書類等夫々爲差出右印ハ元交隣掛ノモノヘ一ト

先相預ケ置候事

一一行官員去ル十五日未明對州出帆同日午後第四字頃春日有功兩艦トモ無恙着韓近日外向ノ景狀相尋候處別ニ相替儀無之火輪船渡韓ニ付强テ動搖イタシ候程ノ義モ相見不申韓人小通事幷ニ水營ノモノ等御船拜見願出快ク差許候事

一漂民十三名嚴原ヨリ和船ニ爲乘組蒸氣ヲ以牽キ渡リ一代官ヨリ彼國任官ヘ引合略手數ニハ任官ヨリ受取書ヲ取今晩渡方相濟候事

一代官所取扱向取糺シ現有ノ物品取調相濟負債償却方任官ヘ引合中ニ有之候事

一代官海津茂太郎外貳名義當五月中差使等入府留守中府使面會一條彼ヨリ内意問越候節一已不束ノ返答オヨヒ候始末取調ラヘノ末一同歸縣申付明朝出船致サセ於嚴原親類町預ケ等取計ラヒ置候樣佐賀縣出張所ヘ掛合置其他無用ノ士族卒悉ク歸國申付不遠爲引取候事

一於嚴原評議之次第有之廣瀨直行義渡韓申付候事

一一代官ハ假ニ廣瀨直行ニ兼務申付不都合無之樣爲取扱其他別紙之通申渡候事（註附記參照）

一右代官所貿易方取調ニ付宗從四位ヨリ何等伺出候義有之候トモ歸朝迄ハ御差圖無之樣イタシ度候事

一兩艦着韓後館門ハ常ノ通リ相開キ居小通事ハ不絶出入イタシ居候得トモ商賣雇工ノ類一切入館致サス所謂撤市ニ御座候

右之趣大略申入候也

壬申九月十七日

花房外務大丞

大少丞御中

尙以別紙宗氏ヘノ書翰壹通御達被下度候也（註別紙不錄）

（朝鮮事務書）

（附屬書）

各通之事

深見六郎

廣瀨直行

住永友輔

館司申付候事

但九等官給下賜候事

一代官兼務之心得タルヘキ事

二代官兼大通詞申付候事

但十四等官給下賜候事

東田喜三郎

通詞兼書記申付候事

但十五等官給下賜候事

住永啓三

通詞兼書記申付候事

但十五等官給下賜候事

壬申九月十六日

外務省

（朝鮮事務書）

註　本號文書ニ關聯スル諸文書左ニ一括附記ス

（附記一）

深見廣瀨奥三名ヘ

内諭

一差使半途歸國ノ事ニ付論難申出候事有之候ハヽ接受ノ期限モ定マラス緩慢之罪ヲ恐レ一應歸報セシ事故同人又ハ他人ヲ必ラス差渡サルヘシトノミ答ヘ置ヘキ事

一追テ必ラス格段ナル使節可被差渡尤最初ノ論ハ何所マテモ變改無之ニ付其節ハ兩國人民安全繁榮ノ基ヲ確立候樣御互ニ都合克致周旋度トノ旨幷ニ當今世界ノ氣運進歩ノ樣抔折ヲ以テ訓導其他ヘモ談及スヘキ心得アルヘキ事

一若シ館司又ハ擧館引拂ヒヲ强テ朝鮮ヨリ相望候樣ノ儀有之候共本國ノ命ニ非スシテハ一歩モ動カサル段穩ニ歸辨シ益溫和ニシテ決テ動搖イタスマシク尤其言辭擧動等ハ遂一無加除可申越事

△一館司ト代官トノ間ヲ調和シ且監察ノ心得ヲ館中諸取扱向ハ勿論代官ト韓人トノ間ニ存スル和交ノ深淺厚薄其情狀等遂一探知シ有體見聞ノ儘可申越若シ又別ニ所見アラハ本體ト不混樣別ニ密封シテ可被差出事

一歳遣船中絶候上ハ從前代官所ニテ取扱來ル專買ヲ止メ在館商民トモ便宜ニ從ヒ取引イタサセ候儀ハ不苦候且是マテ拔荷ノ振ニテ商人トモ取引イタシ來ルモノハ代官所ニテ正實ニ取締イタシ遣シ候樣心得ヘキ事

明治五壬申年九月十六日

館司一代官ヘハ△印ヲ除キテ内諭ス

（欄外註記）此條奥ヘノ分ニ加ヘ館司代官ヘノ分ヘハ除ク

（附記二）

海津茂太郎
上野敬助
中山喜兵衛

御穿議之品モ候條早々歸國可致候事

壬申九月十六日

外務省出使
深見六郎

海津茂太郎外貳人ヘ別紙之通申渡候間早々歸國候樣可被取計候事

壬申九月十六日

外務省出使

（朝鮮事務書）

（附記三）

學士兼監察可相心得事

壬申九月十八日

奥義制

外務省出使

（朝鮮事務書）

（附記四）

二代官之心得タルヘキ事

九月廿日

春田長十郎

外務省出使

（朝鮮事務書）

一六三

九月二十三日（十月三十五日）　副島外務卿ヨリ太政官正院宛

朝鮮國饑饉救恤ノ儀上申ノ件

附屬書　九月副島外務卿ヨリ花房外務大丞宛命令書案

朝鮮國饑饉救恤ノ儀彼官ニ照會セシムヘキ旨指令ノ件

（註「別紙省略」）別紙上海ノ新聞紙其他支那等ヨリノ報知ニ當年朝鮮國ハ飢饉甚ク餓莩相望ムノ由唯今當朝米穀餘アリ之ヲ以テ彼ノ地ニ輸シ陽ニ隣國荒乏相救ノ意ヲ表シ陰ニ兩國交際ノ路相開度同國ハ曾テ米佛等交通ノ爲メ充分盡力終ニ兵端ヲ開キ候迄ニモ立至リ候ヘトモ人民頑愚固陋ノ風習ニテ于今孤立ノ

姿ニ有之然ルニ饑饉ノ時ニ乘シ之ヲ名トシテ彌交通ノ路相開候上ハ　皇國ノ利ノミナラス各國ニ對シ實ニ大ナル名譽ト可相成幸ヒ花房義質彼地ニ差遣シ有之候得ハ同官ヘ別紙案ノ通差贈彼官ニ照會セシメ候ハヽ都合ト存シ奉リ候運輸ノ便ノ如キハ大藏省ヘ御下議有之度候也

壬申九月廿三日

外務卿　副島種臣

正院御中

（朝鮮事務書）

（附屬書）

以書柬令啓達候足下健勝逐日鞠躬其任ヲ被陳候儀ト信據イタシ居候陳ハ近頃頓ニ朝鮮國飢饉殊ニ甚シク餓莩相臨ツトノ報ヲ得タリ親親ノ情實ニ痛哭悲嘆ニ堪ヘス然ルニ幸ヒニ皇朝當年天惠殊ニ深ク五穀豐ニ實ル因テ速ニ朝廷ニ告シ大藏ニ謀リ該朝我好意ヲ容レハ幾多ノ糧餉ト雖モ其望ニ應シ十分ノ低價ヲ以テ之ヲ運輸シ之ヲ販賣シ或ハ貸附シ便宜一時ノ窮乏ヲ充スルノ議ヲ起セリ固ヨリ射利ノ企ニアラス實ニ隣近ノ際荒乏有無相救ノ厚意ニ出ツ足下幸ニ該境ニ在リ能ク其意ヲ體シ懇ニ當路ノ官ニ謀リ速ニ回報ヲ送ラレヨ百事固ヨリ整頓セリ唯其報ヲ待テ早晩直チニ發スヘキノミ不宣

明治五壬申秋九月　日

外務卿　副嶋種臣

外務大丞花房義質殿

（朝鮮事務書）

註　右命令書ハ一六五ニ依レハ九月二十七日花房外務大丞ヘ宛テ發送サレタリ

一六四

九月二十七日（十月三十九日）　朝鮮國出張花房外務大丞（厳原ニテ）ヨリ外務大丞等宛

對鮮滞滯品償却ノ儀ハ安俊卿ノ復職ヲ待チテ行フヘク尚夫迄一應厳原ヘ引揚ケシ旨報告ノ件

本月十七日附草梁館ヨリ相發シ候書面中申入候後相變リ候儀モ無之内一代官廣瀨直行ヨリ口陳書ヲ以テ歳遣船未收品償却可致間別差入館ノ儀相達シ候處陪通事崔在守ト申モノヲ以テ火輪船往來ノ人ニハ相關スル勿レトハ兼テ關文ノ旨モアレハ物品出入ノ事ハ火輪船在館ノ間ニ擧論スヘカラス

ト云意趣申出候ニ付直行ヨリ篤ト相諭シ候末在守ヨリ一々尤ノ事ニ候ヘトモ當別差ハ新任ノ儀ニテ凡事昧例ノ仁ニ候ヘハ如何ニ申立候トモ情實不相分然ルニ訓導安俊卿復職ノ儀既ニ都表ヨリ令下リ候筈ニテ延着相成候得共最早近日復職相違無之被相考候上ハ今暫ク相待呉度旨懇々申出候テハ拔錨後ノ擧動モ試ミ度當月末マテノ景況如何ニ可有哉早早報知可致旨及館内諸取締向内外一切ノ心得方申付置去廿四日曉一應釜山浦ヲ發シ嚴原表マテ引取申候

右ニ付月末一報知ノ後猶今一度渡韓可致哉又ハ不及其儀ハ後來ノ差圖イタシ置歸京可致哉未決定不致候ヘトモ右ノ都合ニ付テハ河村兵學權助ハ歸京イタシ度旨示談候間致承知候同人歸京ノ上猶御聞取相成度存候

一有功丸儀近日都合見合セ歸帆可申付見込ニ御座候

右ノ趣大略申入候也

申九月廿七日　　花房外務大丞

大小丞御中

（朝鮮事務書）

一六五　十月二日（十一月三日）　副島外務卿ヨリ太政官正院宛

朝鮮國饑饉救濟ニ付花房外務大丞ニ指令ノ次第報告ノ件

附記一、九月二十八日井上大藏大輔ヨリ太政官正院宛朝鮮國饑饉救濟ニ關スル見込上申ノ件

二、十一月花房外務大丞ノ「朝鮮周急一件復命書」

朝鮮國凶荒ノ儀ニ付先達テ差上置候建議ニ付大藏省見込御下相成承知仕候別紙花房大丞ヘノ書狀者何分差迫リ候事故去月廿七日長崎ヘ郵船便有之ニ付不取敢差遣候儀ニ有之其節新聞紙類差送リ其他種々申遣置候得共尚大藏省見込ノ程來五日郵船便ヲ以テ委細可申遣奉存候也

壬申十月二日　　外務卿　副島種臣

正院御中

尚々最前差上置候書類幷大藏省ヘ御下問ノ答書御下ケノ分共返上仕候也

註一、右文書ニ謂フ「別紙」ハ一六三附屬書ト同文ナリ

二、「大藏省見込」左ニ附記ス

（朝鮮事務書）

（附記一）

申十月五日郵船便ヨリ來ル同十五日弘信ヨリ大丞ヘ差出ス

正院御中　　大藏大輔　井上馨

朝鮮國凶荒人民及饑饉ニ付周急ノ方外務卿建白ノ趣御下問有之熟考相遂候處彼國卽今切迫ノ際彼是往返ノ末米穀輸出相成候共時機相失其詮無之節ハ折角ノ御趣意モ空敷成行可申ニ付目今ノ見込ニテハ壹石ニ付代價金四圓外ニ船費相加ヘ大凡五圓位ヲ目的トシ示談可然存候尤代金ノ儀彼國貨幣ヲ以相辨候儀ハ不工面ニ有之候間彼國所有之金銀銅都テ地金ノ類ニテ至當ノ價格相立請取候樣致度存候間此邊相含花房大丞ヘ掛合相成候樣外務卿ヘ御下命有之度依之及御回答候也

壬申九月廿八日

追テ彼國入用ノ石數等大凡相分候樣花房大丞ヘ掛合ニ相成度此段認加且外務卿建言書一冊返上仕候也

（朝鮮事務書）

註三、猶便宜「朝鮮周急一件復命書」ヲ左ニ附記ス

（附記二）

朝鮮周急一件復命略

十月八日竹内精三嚴原到着朝鮮國饑饉ノ聞有之救餓ノ御廟議御決定ニ付虛實探偵ノ上當路ノ官ニ議リ運輸ノ道可相開旨外務卿ノ教令相達候付篤ト考量候處朝鮮國近年追々物價騰貴殊ニ今年ハ全羅道ハ豐作ナレトモ慶尙道ハ凶作ニテ米價モ隨テ騰貴シ全羅道ヨリ追々入送米モイタシ候趣ニ相聞乍去今夏秋ノ交草梁館中士商トモ米穀買込對州マテモ送運シ同所ニテ肥筑ノ上米ニ比スレハ貳割位モ下直ナルニ尙商人共送リテ利スル所アル位ナレハ凶作トイヒ高價トハ云ナカラ猶饑饉トイフニ至ラサルコト明白ニ有之乍去運送不如意ノ國柄故東邊ハ如此ニテモ西邊ハ如何アルヘキ哉切角ノ御好意可成ハ相通シ候樣可致ト存シ尙別ニ飛船ヲ遣シ近況ヲ親敷聞繕ヒ申越ヘク樣申遣シ候處在館ノ面々商議ノ上目前如此潤澤ニ見ユルニ付テハ假令東西趣ヲ異ニスルコトアリトモ急々事實ヲ探偵スルコト難カルヘシ寧隣誼周急ノ御盛意ヲ通シ候方可然ト則陪通事崔在守ト申モノ呼寄其意ヲ差含別差ヘ申入サセ候處別差ヨリ在守ヘノ回答ニ朝鮮ノ穀

產ハ天下ノ所稱萬一一所不作ノ事アレハ他所ヨリ舟漕キ人負ヒ之ヲ補フテ不足アル事ナシ況ヤ今年ハ八道均シク豐饒ナルニ如此浪說何レヨリシテ播聞セシヤ館中ノ所言ハ隣睦ノ情タル疑フヘキナケレトモ無據ノ事ナレハ可然館中ニ傳致セヨトノ意ナリトテ在守ヨリ返答書差出候由ニテ則書面差越候折節重テノ御指揮到來イタシ大藏省議定ノ糶糧價位等モ承知イタシ候處彼地ノ價ヨリハ却テ上位ニモ當リ候程ノ義殊ニ目ノアタリ潤澤ニモ相見候處ニテハ差向運送ノ道モ無之追テ事實探偵ノ上ハ尙別ニ運輸ノ道可相開方法モ可有之ト探偵ノ義無油斷相心得候樣館司代官等マテ申遣シ置引取候事御座候以上

壬申十一月

外務大丞　花房義質

（朝鮮事務書）

一六六　十一月五日（十二月五日）　廣津外務省出仕ヨリ外務大丞等宛

花房外務大丞等ノ嚴原發艦前後ノ景況報告ノ件

齋藤權大錄嚴原發艦後之大略

一宗氏ヨリ可差渡澁滯物品渡ノ義十月廿二日花房大丞嚴原出帆迄ハ相濟不申候事

但同月廿四五日頃迄ニハ訓導多分大丘ヨリ東萊ヘ罷歸候筈ニ付歸府次第受取手數相立可申趣崔在守ヨリ申出候ヨシ

一饑餓一件ハ決而無之事ノヨシ在守ヨリ別差ノ意ヲ以テ答出候ヨシ

但シ事實探索ノ上猶報知可致由ノ事

一總テ館內ニ於テ彼我共ニ至極靜穩ノ模樣ニ候事

右三ケ條ハ在館ノ面々ヨリ申越候義ニ御座候

一舊一代官海津茂太郎始メ三人ノ者共當六月上旬大差使館司以下入府中東萊府使面接ノ可否代官所見込ミノ次第爲打合崔在守ヨリ夜分密使差越候節面議相勸メ可遣處却テ相妨候樣返答イタシ遣候始末於韓地一應相糺シ尙嚴原ニ於テ再應取調ヘ大概明了恐入候間口書爲致置候事

一嚴原商人共ヨリ大小船貳三隻仕立渡韓願出既ニ出帆ニ及候船モ御座候事

右等之都合ニ御座候間此上滯嚴仕候共急□（マヽ）格別ノ況景相變

リ候儀モ有之間敷被察候ニ付森山少記（註）ハ嚴原ニ滯在仕弘信ハ花房大丞ヘ隨從仕十月廿二日曉第二字春日艦ヨリ嚴原ヲ發シ同日夕馬關着同廿四日夕馬關拔錨同廿六日兵庫着同廿八日夕大丞ハ春日艦ヨリ發庫相成弘信ハ不快難堪候ニ付本月二日アメリカ郵船便ヨリ神戶ヲ發シ昨四日橫濱着今五日着京仕候九月渡韓以來ノ日涉及事務書取其他取調書類等ハ大丞着京ノ上可被差出右大略而已陳上仕候也

俱シ春日艦ハ志州鳥羽ニ於テ天氣見定メ遠州超灘ノ積ニ御座候事

壬申十一月五日　　廣津弘信

丞記御中

（朝鮮事務書）

註　外務少記ハ十月十四日廢セラレ廣津少記森山少記ハ外務省出仕ニ轉シタリ

一六七　十一月六日（假）（十二月六日）

花房外務大丞ヨリ提出セル朝鮮御用復命概略書

朝鮮御用復命略

義質儀

壬申八月十八日御用有之朝鮮國ヘ被差遣候旨被仰付隨行森山少記ハ大坂ニ於テ銅其他品々調達ノタメ同廿三日ヨリ出立義質儀ハ同廿八日春日艦ニ乘込ミ有功丸一同品川出帆大坂神戶ニ於テ銅ソノ他品々有功丸ニ積入レ九月五日兩艦大坂兵庫ヨリ出帆春日艦ハ同十日嚴原着有功丸ハ長崎ニテ對州ヘ可被遣兵隊乘組セ同十二日嚴原着同所滯留廣津少記ヘ渡韓ノ命ヲ傳ヘ尙同人等申談シ舊貿易署幷舊交隣掛リ等ノ近況內情取シラヘ同十五日一行擧テ同所ヲ發シ兼テ嚴原ニ留メ置候朝鮮漂民拾三名ハ別ニ和船ニ乘セ有功丸ニ牽カセ三船等シク同夕第五字草梁館前灣ニ投錨今夜小通事入館問情候ニ付大船ハ（和船大船ヲイフナリ）對州役々幷ニ順付ノ漂民乘込定式ノ勘合印モ持居リ火輪船壹隻ハ外務官員乘組居リ同壹隻ハ護衞船ノ旨答置カセ候

一着館卽夜館司始代官通事等貿易ノ差引出入幷ニ去五月中差使館司入府中密往復ノ次第等取糺シ候處不束ノ義モ相見ヘ候ニ付更ニ商議ノ上翌十六日館司始代官通詞等マテ歸國又ハ新任等夫々申渡シ歸國ノ向ハ同十九日別船ヨリ出帆爲致候

一十七日館中不要ノ人員夫々歸國中達シ同廿三日有功丸ヨリ歸國爲致候

一在館商賈ノ中滯韓志願ノモノハ當分館中見廻リ等相當ノ課役申付其儘殘シ置澁滯品引渡シ等相濟候後ハ外向相對ノ取引ヲ許シ代官所ニテ正實ニ取締リイタシ遣候筈ニ定置候

一勘合印ノ事ハ當春訓導迄相渡シ候解疑書中ニモ暫ラク舊印ヲ用ル旨申置候ニ付其儘舊印相用ヒ置カセ候

一歳遣船中止ノ事幷ニ澁滯品拂渡シ方ノ事ハ新一代官ヨリ別差ヘ口陳書ヲ以テ宗氏解任等ノ事ニヨリ當時歳遣貿易從前ノ例格ニ從フ能ハス故ニ今度澁滯物品全額ヲ送致セルニヨリ出入ヲ檢清シ以テ公韓(幹カ)順成ノ日ヲ待ントス速ニ就館査收アラン事ヲ冀フノ旨申遣シ候處右口陳ト行違ヒニ別差ヨリ代官ヘ申越候ニハ代官歸國ノムネ承知セリ屢年澁滯ノ物品清算相スマサル間ハ壹人モ歸國スマシキ筈ナリ强テ歸州スルトアラハ隣國所送ノ物品ヲ報フマシトノ事ト見ユサレハ天下公論如何アルヘキヤトノ事ニ付官所ヨリハ出入清算ノタメニハ既ニ物品ヲ持越シ有之代官モ夫々兼務ノ人アリテ既ニ其事ヲ一代官ヨリ口陳書ヲ以

テ別差ヘ申送ラレタレハ舊代官ノ歸國ハ心遣ヒニ及ハスト答置カセ候其後舊代官歸船ノ船切手等モ差越候

一澁滯品彼方取調書差出候樣曾テ申入置カセ候處十八日任所調印ノ取調目錄差出候

一別差ヘ遣シ候口陳書落手シカタキ旨ニテ度々異難申出候ヘトモ辨論シテ持歸ラセ置候所二十日別差ヨリ在守ヘ送レル書ヲ内見ノタメ持出ス大意火輪船滯泊中ハ物品出入ノ事モ擧論スル勿レトノ義ニ付如例廣瀨直行ヨリ辨論セシ所其理ニハ伏シタレトモ別差新任凡事昧例何事モ氷解シガタシ實ハ訓導復職ノ命不日ニ都ヨリ達スヘキ筈ナレハ暫ラク猶豫クレ度旨懇情候ニ付尙陪小通事ハ如此事件ヲ氷解セシムル社其責任ナレト深ク責メ置マツ其儘持歸ラセ置候事

一右ニ付勘考仕候處今ハ火輪船滯泊モ徒ラニ事務澁滯ノ詞柄ヲ與ヘ候ニ近ク且館中ノ錯(搖カ)置モ大概相スマセ候ニ付一應退港ト議定荷積卸シ人員乘セ組手繰リイタサセ候

一二十二日天長節ノ事前以申入近村マテモ觸置カセ候上當日御軍艦オイテ揭旗發砲彩燈號火等如式取行ヒ館中オイテモ上下士商祝酒ヲ賜ヒ終日歡ヲ盡シ候朝鮮人ニモ通事

其他當日入館ノモノヘハ祝酒ヲ分與候事

一二十三日夕一同乘船

一二十四日朝解艦有功丸ハ卽日嚴原着春日ハ淺海浦ニ滯泊ス灣廣ク且深シ數十ノ大艦ヲ繫クニ宜シ

一二十六日嚴原着

一十月三日草梁ヨリノ飛脚船着兩艦退港後ハ朝市商其他館門出入及ヒ諸商賈ノ模樣等大概平常ニ復シ尤別差ハ兵營ヘ參居候由ニテ口陳書ノ回答ハ未差越且去朔日在守入館別差傳言ノ旨ニテ別差義昨夜歸府候ヘトモ臥病罷リ下リカタク尤過日ノ口陳書幷ニ催促ノ事ハ承知イタシ受前物品ノ事ハ故障無之ト雖トモ府使モ再職訓導モ復職ニ付何レ議定ノ上返答可相成訓導モ五七日中ニハ大丘ヨリ歸府アルヘク歸府ノ上ハ面晤ニモ至ルヘク旨等申立候旨申越ス

一同廿日飛船便ヨリ訓導大丘ヨリ歸リ來ルモ多分廿四五日頃ニハ相違有之間敷趣在守ヨリ申出候趣申來ルト雖モ彼國從來ノ風習ヲ以考ルニ前述日積リ通リ面晤等相成ヘクモ相見ヘス候ヘハ代官等ヨリ寬ニ引合ハセ置方可然ト評決シ尙無油斷應答致スヘク樣在館ノ面々ヘ申遣シ尙臨時處置振等森山茂ヘ申談置同人ハ嚴原ニ滯リ義質儀ハ同月廿一日春日艦ニテ嚴原出帆十一月六日一行擧テ東京歸着仕候

壬申十一月

外務大丞　花房義質

（朝鮮事務書）

註　本號文書日附ヲ缺クモ假ニ花房一行東京歸着ノ日ニ挿入ス

一六八　十一月十二日（十二月十三日）森山外務省出仕（嚴原ニテ）ヨリ花房外務大丞等宛

花房外務大丞出發後ノ景況報告竝ニ諸懸案ニ對スル廟議ノ決定ヲ尋ヌル件

拜別後韓地ノ動靜ハ御用狀ニテ御照察今程ハ御上京御盡議ノ儀ト奉想像候扨訓導儀先ニ再任還府ノ趣在守ヲ以テ及挨拶候節ハ至極丁寧ニ相見ヘ候處我底意ヲ伺察シ忽然拒論ヲ構ヘ竣拒不接ノ勢ヲ示シ來リ候上ハ迚モ下來ハ致スマシク右應接上夫是彼ニ透制セラレ候モヤウモ有之候間今後御一

報マテハ敢テ不迫時月ヲ移シ候樣差圖可申遣積リニ御座候
其内彼レ彌不應ニ相定リ候ハヽ小子一應渡韓可致心得ニ御
座候實ニ應對ハ其議ニアラス其人ニ在リテ隨分投機抑揚ノ
場合モ可有之候ヘトモ先只今ノ行込ニテハ不迫不緩一論一
議ヲ以何事モ不仕出方上策ト存候飛船吹噓一件モ應接上ニ
テハ從此說クヘキ理ヲ彼レニ說カレ主客顚倒漸々昔日ノ地
位ニ退歩可致色有之是ト申モ應接掛ノ人々ハ舊弊未脫充分
甘服セサルノ說ヲ以テ彼ヲ抗御セント欲スル故彼カ答及ス
ル所一々有理ニ似タリ終ニ其機ヲ失スルニ至ルハ不得止事
ニ候ヘハ右一件迚モ此程御同議ノ旨ヲ以皇張爲致候歟又ハ
倚舊カ今一報ノモヤウニヨリ左右指示可仕積リニ御座候館
内ノ折合方ハ奧義制内狀中ニテ御推認可被下候過日モ義制
出嚴中大丞ヨリ内諭ノ趣夫是誤認ノ廉モ不少一々加開諭稍
氷解候ニヨリ數條内伺申上置候事共モ一已ニ差含メ置同人
モ悅服渡韓イタシ候右外向ヨリ仕向候旨意ハ則換面更名役
員ハ悉ク朝官ト相成候間不及接待トノ所置振ニ有之候ヘハ
何トカ御下手ノ方法モ可有之存候乍併早晩御廟決迄ハ先館
地ヲ維持スルヲ以テ主務トシ何事モ不仕向方可然トノ御省
議ナラハ其趣委シク御報告被下度存候

一將來ノ運方ニ付國使御差立相成候ハヽ我意ヲ徹シ可申ハ
勿論ナレト若廟議不出於玆時ハ當今ノ儘御差置相成候テ
ハ人々屈退就テ趦趄セン事必セリ然レハ拜別前申上候通
リ可然人物掄選相成深ク御委任魯人ノ柯太又ハ先年對州
ニ來泊セシカ如ク他ノ議論ニ關セス館内上下ノ舊弊ヲモ
一掃シ屋宇ヲ補理シ家族ヲ移シ空地ヲ拓キ飛船ノ外大中
商船共無吹噓ニテ往復爲致彼萬一難異申來ラハ我等大丞
ノ命ニ從テ館内ヲ修補シ他日國使ノ來ラン日ヲ待ナリ貴
國之ヲ論スレハ將ニ大丞ニ往復アルヘシ我等ノ進退ハ惟
大丞ノ命ニアリト云フ意ヲ以スル時ハ彼ノ定論深淺共ニ
究知スルニ足レリ其内廟議モ御決定可相成樣小生愚見ヲ
以テ計算スルニ不出於此外今日ニ至リ彼ノ疑訝ヲ解ク等
ノ說ハ實地ニ於テ萬々不行屆儀也省議イカヽ　卿公ニハ
定テ　御良謨可被爲在此事ノミ相樂ミ罷在候御報跂望仕
候

一在館ノ士商共家族引纏ノ儀ハイカヽ候哉

一語學所教授荒川金助儀月給十圓大勉强ニ付可相成ハ十五等出
仕被仰付候テハ如何候ヤ廣瀨直行ヲ除ノ外實ニ此人ヨリ
外使用可致モノ無之右被仰付候ハヽ此後韓地ヘ臨時御用

ニ付差渡シ候儀モ有之候節抔ハ至極都合ヨロシク可然御
評議可被下候

一池上武市彭城等滿州邊ノ探狀等申越候ハヽ御泄シ可被下
候

一鎭西鎭臺出張兵モ不相替滯嚴候ヘトモ此程モ臺兵中ノモ
ノト雜談中此地ニハ出張不及事ト存候ニ付其趣本營ヘモ
及建言今程ハ東京ノ伺ヲ經候ハント存候實ハ當地ヘ分隊
出張ノ儀ハ外務省ヨリノ建議ニ出候樣承及候抔相咄シ居
候餘程困却ノ模樣ニ御座候

一長崎縣出張所ハ丸山大屬勉强ニテ追々相運ヒ一般ノ人望
ヲ得至極折合克相見ヘ候大屬明日ヨリ歸崎イタシ候ニ付
則書狀相托申候

一佐寸奈鰐浦兩所關所ノ儀ハ舊嚴原藩官員中ヨリ地方官ヘ
引渡シ候ニ付右兩關所ノ儀ハ差當リ入用モ無之候ヘトモ
今後兩間交通相開候ハヽ自然所用モ可有之候間建築ノ儘
立置カレ度段縣出張所ヘ及掛合置候

一先般モ申上候通リ新聞日誌官員錄等必二部ツヽ御差廻シ
被下度旣ニ夏以來ノ新聞等語學生徒ヘ相見セ候處初テ王
政復古ノ體裁ヲ拜聽セリナト實ニ遠陬ノ情態御推察是祈

一小生拜別已來ハ兎角舊病差起リ其上時々左身ニ痛ミ處相
發シ攝養中ニ御座候廣津君ニハ其後如何候哉花房君ニハ
艦中ニテ噓以御困却ト存上候御歸京後ハ御治療モ被遊候
ハン寒氣折角御厭ヒ被下度
右公私提要申上度如是御座候也

十一月十二日　　森山茂拜

花房大丞殿
廣津少記殿

尙々廣津君ニハ御旅宿ノ都合イカヽ候哉御不自由ト察上
候暫時御勤務祈上候

（朝鮮事務書）

一六九　十一月二十七日（十二月二十七日）副島外務卿ヨリ太政官正院宛

宗氏ノ對朝鮮公私貿易澁滯品償却剩餘處分方ニ付伺ノ件竝ニ之ニ對スル太政官指令

（朱書）
一壬申十一月廿七日差出ス

明治六年三月二日朱書之通下知濟同五日郵船便ヨリ對州出張先森山廣津ヘ申遣ス」

正院御中　　外務卿　副島種臣

朝鮮國ニ對シ候宗氏公私貿易滯品償却ノ爲メ銅類其外御下渡ノ品々花房外務大丞彼地ニ携帶シ實地償却高及取調候處兼テ宗氏ヨリ申出候澁滯品高ヨリ大ニ相減シ丁銅四萬斤延銅九千斤其餘諸品聊ツヽ餘分出來右ハ此後ノ模樣ニ寄リ御遣ヒ用ニモ可相成若其儀無之候ハヽ彼地商人共ヘ拂下ケ草梁公館公費ノ内ヘ振向候見込ヲ以其儘彼地ニ殘シ置追テ精算爲致候樣仕度尤右丁銅ノ義ハ宗從四位幷貿易掛ノモノ等申立前後齟齬有之ニ付取調候處訓導其他韓商共ヨリ借入候口々ヘ可相渡約速ノ處丁銅不相整ニ付外品ヲ以差繰リ相渡シ償却相濟候ヘトモ尚又差繰ヲ以内地負債ヘ振向候積ノ由申立全ク有餘相成候儀ニ有之其餘對州及ヒ韓地元貿易掛ニテ追々取入居候公私貿易諸品代價ニ見積リ凡七千餘金ノ現品有之其儘嚴原オイテ元貿易掛ノモノヘ相預ケ置候然ルニ元貿易署ニオイテハ前書朝鮮負債ノ外東京大坂長崎等ニテ借入候分凡四萬餘金有之何レモ知藩事奉職以來ノ事ニテ則右負債モ半ハ藩計ニ差向ケ且隣交之職掌上ニ付歲遣贈酬等ノ費ニ充候分モ有之又罷職後私ニ貿易ヲ行ヒ其爲メ借入候分モ有之去辛未年中伊萬里縣幷大藏省差圖ノ趣モ有之由ニテ廢藩前負債ノ分ヨリ引續キ當壬申年ニ至リ借入候分公私相混シ前書四萬餘金ノ高ニ相成候趣ニ有之就テハ借入月日ノ前後使用ノ目的等篤ト取調知藩事奉職中ニテ歲遣公貿易存在セル間ノ負債幷其砌藩計ニ差向候分ハ出入トモ公ニ屬シ廢藩罷職歲遣廢止ノ後私貿易ヲ通スルニ付テノ負債幷其後縣用ニ差向候分ハ出入トモ宗氏私家ニ屬シ相當ニ可有之然ル上ハ前書凡七千金ノ現品モ公貿易ニ屬シ候分ハ奉職處事ノ譯ヲ以テ官ニ引揚私貿易ニ屬シ候分ハ罷職後私事タルヲ以テ宗氏ニ被下候テ相當ニ存候然ルニ右ハ内國負債ノ義ニ付借入月日ノ前後及ヒ使用ノ内譯幷ニ前書丁銅員數中立齟齬ノ内情等事實大藏省オイテ篤ト取調候上曾テ對州ヨリ大藏省ヘ差出シ同藩債ノ金高内譯等ニ比較シ夫々處分候樣同省ヘ御沙汰相成度尤右調方ノ爲メ現品久敷其儘ニ被差置候テハ白米其外品々腐損欠減ノ憂モ有之候間速ニ御決定相成度依之（注「別紙」ヲ略ス）別紙書類相添此段相伺候也

壬申十一月

（朱書）「書面朝鮮國負債償却殘品丁銅四萬斤延銅九千斤其他諸品彼地ニ於テ賣却代金大藏省ヘ相納候歟又ハ草梁公館公費ノ内ヘ爲換繰込ミ明細勘定書同省ヘ差出候歟兩樣ノ内ニ可取計且貿易諸品代價七千餘圓ノ現品ハ公私ノ區分相立候上御處分可有之候得共腐損欠減ノ品ニ付賣却代金同省ヘ可相納事」

明治六年三月二日

正院之印

（朝鮮事務書）

事項六　樺太問題ニ關スル件

〔第四卷事項一一參照〕

一七〇　四月十三日（一八七三年五月十九日）　露國代理公使（横濱ニテ）ヨリ副島外務卿宛

横濱ニ到着セル旨通知ノ件

僕儀當所え到着仕候へ共少々不快にして迅速御面會相叶候日限を御取極の義何分願兼候段遺憾無遣方候併不日全快の上貴都府え可罷出候急き此段高閣下え御報知およひ候余か最上の恭敬及ひ全く高閣下え隨從する事を御信用可被下候

千八百七十二年五月七日壬申四月十三日

高閣下の謙遜なる從者

エウ・ビューツォフ

皇帝陛下

副島外務卿高閣下

註　本號文書發信地ハ他ノ文書ニヨレハ横濱ナリ

一七一　四月二十五日（五月三十一日）　外務省ヨリ太政官正院宛

露國代理公使參朝願出ノ件

正院御中　　外務省

今度新渡來の魯西亞公使ビューツォフ儀御序に參朝拜謁相願度旨申立候然るに右公使はシャルセタフアールにて國書所持無之表立參朝の權理無之者に候乍去新派出の公使にも有之一應拜謁被仰付候方可然候間内式を以宮内おゐて謁見相成候樣致候依て當月下旬又は來月初旬の内御差支無之日限兩三日御取極にて御沙汰有之候樣存候此段相伺候也

壬申四月廿五日

一七二　五月十三日（六月十八日）　副島外務卿ヨリ露國代理公使宛

露國代理公使謁見ノ日取通知ノ件

附記一、　謁見ノ際ノ露國代理公使言上振

二、　明治四年十二月二十二日露國外相ヨリ副島外務卿宛

「ビユツォフ」ヲ駐日代理公使兼總領事ニ任命ノ件

三、　副島外務卿ヨリ露國外相宛書翰草案

右ニ對スル回答ノ件

四、　明治七年二月田邊外務省出仕作成ノ樺太境界談判概略

五月十三日達

以手紙致啓上候然は我天皇陛下來る十五日午前第十字於内宮閣下を御延見可相成候尤其節嚮導の者御旅館迄差出可申候此段可得御意如此御坐候以上

年　月　日　　卿

魯國代理公使閣下

註一、五月十五日露國代理公使謁見ノ次第ハ略ス但シ謁見ノ際ノ露國代理公使言上振左ニ附記ス

（附記一）

魯國代理公使言上振

余か淑德なる君主皇帝陛下は魯西亞國と日本國との懇親友睦なる交誼を堅固ならしめん事を配慮するより總領事兼代理公使の官を以て魯國政府の目代の任に充て陛下政府の傍に在らしむる事を欣望せり貴國に於て魯國最初の目代の職を奉し皇帝陛下の信用を蒙り以て陛下政府に對し魯國政府の親睦なる深情及ひ互の許多の裨益ある所の隣國の間に行わるへき確信の基に兩國交誼を建立せんとの衷誠を貴皇帝陛下の前に表せん事余か大幸なる勤とす日本國の大幸福および當今の開化の道を歩せん事を希望するは余か淑德なる君主皇帝陛下の深情なりと余は確然疑を容さる事を爰に奏上す余か常に全力を盡して以て仕遂へき肝要の職務は兩政府の間に仁惠の交誼を保護するの一助とならん事を勉勵す其勉勵にて職分の成功は貴陛下政府の信用を以て容易からしめん事を希望し將陛下の叡慮に可適せん事を懇禱す

代理公使
ヒウツォフ（マヽ）へ
箱館領事
ヲラロースキー
〆兩名

註二、「ビュッォフ」ヲ代理公使ニ任命セル旨ノ露國外相ノ書翰（原文見當ラス）便宜左ニ附記ス

（附記二）

余か尊敬すへき君主
皇帝はスタツスキー・ソウエツニク五等位名ビューツォフを日本在代理公使兼總領事に任る事を望まれたり
政府の名代人を貴首都え任しられたるは
皇帝政府おいて兩國の間に存する所の懇親なる交誼を彌益堅固にし將之を隆盛增大ならしめんと欲するか故なり
魯西亞
皇帝の領事の職を以て久しく函館に在り日本政府にも既に知らるゝ所のスタツスキー・ソウエツニク・ビューツォフは
余か
皇帝の充滿なる信用を蒙る者也

兩國互の裨益になるへき萬事彼へ注意し給ふへし亦彼が建言する事あらは專ら信し給わんことを余は懇願す
余全く恭敬して仁君へ隨從するを信し給へ
サンクツ・ペテルブルク千八百七十二年正月十九日
侯　ゴルチヤコフ
仁君日本外務卿閣下

註三、右附記二ニ對スル我カ返翰ノ達否不明ナルモ返翰ノ草案存スルニヨリ左ニ附記ス

（附記三）

申四月二十三日草

貼紙

千八百七十二年正月十九日附の貴簡致拜見候然は今般貴國
皇帝陛下よりスタツスキーソウエツニクヒューツォフ氏を
我國在留の代理公使兼總領事に被任御來示の趣我
天皇陛下へ及奏聞候處同氏は曾て我函館に在て久敷貴國領事の職を被奉我國情勢も了知の義故兩國間懇親の交誼爾後益堅固にして隆盛に可至と欣然御信用被爲在候猶又兩國互に裨益に可相成義を拙者とも同氏と協議可致は素より所冀望に候右の趣回答可得御意如此御座候茲に閣下の康寧を敬祝いたし候謹言

年　月　日
卿輔御兩名
魯西亞國外務卿
コルチヤコフ閣下

（貼紙）

卿御一名ニテ宜

註四、明治五年以後東京ニ於テ行ハレタル樺太境界談判ニ關シテハ記錄見當ラス但シ左ニ記スル概略ハ明治七年二月ノ作成ニ係ルト雖モ其ノ内容前記談判ニ互ルニ付便宜茲ニ附記ス

（附記四）

明治七年二月田邊四等出仕外務卿ノ命ヲ奉シ柯太談判ノ概略ヲ書記スル左ノ如シ
柯太島境界談判ノ濫觴ハ寔ニ嘉永六年癸丑ニハジマレリ乃今年甲戌距ル事蓋シ二十年前ニアリ
嘉永癸丑（即千八百五十三年）八月魯西亞使節布恬廷軍艦數隻ヲ率ヒテ我長崎嶼ニ來リ其國上宰相子世利羅德ノ憑書ヲ出シ定界通商ノ兩事ヲ請フ
憑書中云ク（上略）其一ハ兩帝國ノ境界ヲ定ムルニアリ此件ハ兩國間ニ注ケル洋中ニ起ル處ノ諸事ニ就キ復更ニ遲延スル事ヲ得ス是ヲ以テ魯西亞帝ノ意方今必正ニ此切要ノ一事ヲ始ムヘキノ時ナリト謂ヘリ。然ハ兩國會同シテ貴國最北ノ極界ハ何レノ島ヲ限リ我國最南ノ極界ハ何レノ島ニ限ルトイフ事ヲ約定セン事是當今ノ要務ナルヘシ但シ右境界ヲ定ルハ又カラフト（即薩哈連）ノ南陬ニ就テモイフナリ夫魯西亞帝所領ノ地ハ其大サ世界萬國ニ冠タレハ更ニ地ヲ益シ境ヲ廣ムルハ實ニ要須トセス然トモ魯西亞臣民當然ノ利ハ帝亦コレヲ思ハサルヲ得ス且兩國和平ノ關係ト兩國臣民ノ安穩ヲ保固センニハ兩國ノ境界ヲ確定スルヲ良法トナセハナリ云々
於是幕府其重臣筒井肥前守川路左衞門尉等ヲ長崎ニ遣リ布恬廷ト相接話セシメ當時ノ老中阿部伊勢守等ヨリシテ報書ヲ裁シ其定界ノ請ニ答フ
其報書略云ク（上略）第邊土之經界貴國以爲不甚明晰則論飭邊藩細加查覈而差大吏與貴國官人會同商議以歸劃一然邊疆之查覈必按圖藉確有憑據愼重從事不許絲毫疎謬是固非今日所能辨也云々
ヨツテ數次ノ談判ヲ經テ布恬廷又一書ヲ出ス
其略ニ云ク（上略）カラフト島ノ事ニ至リテハ其島ニ住スル處

ノ土番近比甘心シテ本國ノ下ニ庇ワレ大君ヨリ遂ニ命アリテ其地ヲ据守セシメ玉ヘリ夫ヨリ後貴國ノ人民數年來海ヲ渡リテ此島ノ南端ナル「アニワ」港ニ至テ魚ヲ捕ルヲ以テ生業トナシ又其地ニ居住シ房室ヲ營造シ元來ノ事ト思ヘリ此事モ又貴志中道理ヲ以テコレヲ論センニ此島ニアル貴國人ノ人々ヲ如何樣ニ處置セントノ決斷ニ及ヒタク候モシコノ「アニワ」港口ニ留住センニハ本國ノ官人トモ例ニ從ヒ我支配ノ下ニ付ケン云々　五十三年十一月六日附

（原註朱書）「帝ヲ云フ」

猶幾次ノ談判アリ布恬廷又一書ヲ出ス

其書略云ク第三カラフト島ハアイノ住地ニテ其南方ハ纔ノ日本人住居イタシ候近來アニワヘ魯西亞人ト日本人ノ間ニ外民ノ住居ヲ防ク爲此南方ヲ魯西亞人領知イタシ候當節ノ御取扱堺境何ノ地迄日本所屬ニ候哉御定ニ相成迫テ其土地ニ双方ヨリ吏役差遣シ見分可相成候右振合ヲ以テカラフト島魯西亞國ト日本トノ境界相立日本地ニ魯人住居有之候ヘハ引退候樣可致候尤此住民繁蔓イタシ境界ノ取極メ延引候ヘハ其義六ケ敷候　五十四年第一月六日附

（原本朱九）

十八日

右ニテ此方ヨリ境界見分ノ吏役差出スヘク尤定界談判ノ權ハナシトイヘトモ自然魯國官吏ニモ可引合トノ談ニ涉リテ

布恬廷ソノ爲一書ヲ裁シテコレヲ其人ニ授ケン事ヲ請ヘリ

其書略云魯西亞ト日本ノ境界ノ事ニ就テ予日本官府ノ全權ト商議ヲナシ其故由ニヨリ當冬ノ間日本官府サカリン島掛リノ一役人ヲアニワ港ニ遣ルヘシ是レ其地ニ在ル日本ノ領分ヲ見分スル爲ナリ而シテ右ノ役人此書翰ヲ汝ニ渡スヘシ云々一月十四日附

（原本朱九）

而レトモ定界通商ノ二儀トモ急々決定ニ及ハサレハ布恬廷竟ニ長崎ヲ去リ再ヒ來リテソノ決ヲ取ル事トナレリ爾時文同旨意ノ一書ヲ遣ス

其書略ニ云クカラフト島境ノ義ハ來春双方ヨリ役人差越治定可相成義ニ有之此義年越御差支相成候ハヽ甚六ケ敷相成後ニ至リ魯人日本地内ニ罷在候樣相成候云々　五十四年一月十四日廿六日附

翌甲寅年正月兩重臣ヨリ書取ヲ以テ此迄談判ノ趣ヲ述フ

其書略ニ云クアトロスカラフト二島ノ事一旦申サル、旨アレトモエトロフハ元來我國所屬ノ地タル事既ニ分明ナリヨリテ彼是ノ議論ニ及ハスカラフトハ各其所有ヲ糺シテ國境ヲ確定スヘシ先達テアニア港ヘ置ク所ノ守兵ハ外寇ノ來據ヲ慮カ爲ニシテ我地ヲ侵奪ムカ爲ナラス境界定

ルノ後ハ速ニ引拂フヘシ右邊疆取調トシテ遣ワス所ノ我國ノモノ貴國ノ守兵ニ出合ストモ聊害意ヲ挾ム事ナク和平ヲ以テ待ツヘシトノ事彼守兵ニ示サル、書付ニコレヲアラハシ云々

又一書取ヲ渡ス

カラフト島ハ我國所屬ト存居候處此度對話ノ節南寄ノ方ノミ我國所屬ト被申聞候哉ニ候得共外國彫刻ノ地圖ニモ凡半島五十度ノ處ヲ以テ境トセルモ相見エ候得ハ追テ見分ノモノ罷歸候迄ハ境ノ義治定難致候事

布恬廷又之ニ答フ

其略ニ云ク歐羅巴版地圖ニテハサカリン島眞中五十度迄ヲ境界ト相見ヘ候趣ニ候。此儀ニ於テハ使節存候ニハ歐羅巴ノ地圖ハ是等ノ事ニ於テ據トナシカタク候全體此等ノ國ニハ右樣ノ義充分行屆候事ニ無之甚不行屆勝ニ有之歐羅巴人トイヘトモ魯西亞人ノ外ハサカリン島ニ來ルモノ無之就テハ何所ヲ魯西亞人住居イタシ候哉何所ニ日本人住居イタシ候哉等ノ義聊以他國ノ人難究事ニ有之候此地ヲ穿鑿イタシ候ニ只魯西亞人先前ヨリ專勉强シ今ニ五十度ヨリハ多ク南手ニ住居イタシ居候爰ヲ以テ日本ニ屬スル處ハサカリン島ノ南端而已ト相心得候則是ニハ當時ノ趣向ノ以前ニモ日本人居住仕候五十四年一月廿五日　二月五日

（原本朱九）

布恬廷彌去ルニ臨ミ又一書ヲ兩重臣ヘ贈ル

其略ニ云ク我此所ニ時日ヲ費スヲ欲セサレハ今將ニ北方ニ航シ第六月下旬ニハ薩哈連ノアニワ港口ニ至ルヘシ此地ニ於テ兩大臣ノ内一員ニ會シ共ニ其疆界ヲ定ムル事ヲ謀ラハ我カ望ミ誠ニ足レリ然ルニ我既ニ往時兩大臣ニ告ルコトク此事件ハ決シテ猶豫スヘカラサルヲ以テ若シ兩大臣ノ内一員モ彼地ニ來會セサル兩帝國ノ疆界ヲ檢査劃定スル事ハ已ムヲ得ス唯一人ノミ歸スヘシ云々

爾後幕府ニモ評議アリ箱館奉行堀織部正村垣與三郎實地經驗ニヨリトツフ、コタンウトルニテ經界ヲ盡シ可然ノ議アリシカ用ヒラレス因循ノ内布恬廷再ヒ下田ニ來ルニ至リ筒井川路ノ兩員再ヒ之ニ會シ數次談判ノ末柯太嶋日本人幷アイノ住居シタル地ハ日本所領タリトノ書取ヲ渡サントスル時ニ臨ミ蝦夷アイノト書スヘキトノ論起リ竟ニ纏ラス左ノ如キ條約ニ決定セリ

（註「條約」記載ナシ蓋シ右ハ安政元年十二月二十一日ノ日本國魯西亞國通好條約ヲ指スモノト認メラル）

爾時アニワ港ニアル魯兵撤回セシムヘキヲ告ケ且通辯官ポスセツトヨリ一書ヲ出ス

其書ニ云クアニワ港ノ内ハカトマリ村ニ在ル魯西亞陣營ハ千八百五十四年以來我軍兵立退タレハ是ヲ日本政堂ノ所屬ト爲スヘシ五十五年一月廿六日二月七日附

此條約ニ於テ其界ヲ明ニ分タストイヘトモ柯太島ノ南界ヲ以テ日本ノ所屬ト認シハ明白ナリ爾來柯太開拓方ニ付建言セシモノモアリ又魯西亞人ノ南侵セルモノアルヲ以テ條約コレマテノ如クアルヘシトノ意ニ戻ルナレハ其本國政府エ照會シタキ旨堀織部正等ノ建議モアレトモ行レス再ヒ因循セル内安政己未七月ニ至リ魯西亞使節ムラヒヨフ渡來再度柯太經界ノ議ニ渉レリ幕府若年寄遠藤但馬守酒井右京亮ヲシテ之レニ接セシメシニ彼曰クサカリンノ内アニワ港ヘ年來日本人漁業ノモノ罷在トイヘトモ本國支那ト境界ヲ定メアムール河魯西亞領ト相成候上ハ元來サカリンハアムール同樣ニ可有之ト

（欄外註記）

註五、右記事ノ上ニ左ノ欄外朱書アリ

（欄外註記朱書）「布恬廷ハ柯太ヲ以テ舊來ノ魯領トシ其南邊ヲ日本ノ所有トイヘリムラビヨフハ其地ヲ支那ヨリ引取タル如クイヒナセリ此彼ニ於テ確乎タル證アリテソノ所領タルヲ徵スル能ワサル一徵ナリ」

（朱書）「千八百六十年清峨續增條約第一欵曰設定詳明一千八百五十八年瑪乙月十六日卽咸豐八年四月廿一日在愛琿城所立和約之第一條遵照是年伊云月初一日卽五月初三日在天津地方所立和約之第九條此後兩國東界定爲由什勤喀額爾古納兩河會處卽順黑龍江下流至該江烏蘇利會處其北邊地屬俄羅斯其南邊地至烏蘇利河口所有地方屬中國云々トアリ使臣ノイフ所ハアイホンノ條約ナルヘシ」

依テ其全權憑書ヲ出シ且ツイフサカリント蝦夷地ノ間ニテ海ヲ以テ堺ヲ定ムヘク日本人ハ貴賤ノ差別ナクアニワ、サカリンハ不及申黑龍江滿洲ノ地方ニ至リ住スルト妨ナシト爾時種々ノ評議アリテ竟ニ又模稜ノ議ニ陷リ猶下田ノ條約ノコトクナルヘキ事ニ談決セリ

（朱書）「此談決書類ノ徵スヘキナシトイヘトモ當時口碑ニアルモノ本文ノ如シ」

然ルニ魯人ノ南侵スルモノ歲月ニ增加セルヲ以テ文久元年辛酉幕府使節竹内下野守松平石見守等歐洲列國ヘ遣スノ序

復柯太經界ノ議ヲ魯國政府ニ謀ラシム然ルニ彼專ラ全島領地タルノ論ヲ持ストイヘトモ猶南邊ニ至リテハ强テ論スル能ワサル場合アリ曾テ堀邨垣等カ建議セシコトク天然ノ險ヲ以テ界ヲ分タハ或ハ協同スヘキ勢アリシヨシナレトモ爾時幕府ヨリノ下知狀ニ五十度ヲ以テ界トスヘキ趣アルヲ以テ使人專決スルヲ得ス竟ニ双方ヨリ全權ノモノヲ出シ實地ニ就テ談決スヘキ約ヲナシ同壬戌ヲ以テ歸朝スルニ至レリ然ルニ此頃ヨリシテ鎖攘ノ說盛ンニ起リ國内穩ナラス加ルニ老中安藤對馬守罪ヲ得シヨリ外國ノ事務ハ高閣ニ束ネ先ツ携ラサルヲ以テ時宰保位ノ一術トセシ故ニ右ノ約束ヲ果スヘキ爲箱館奉行外國奉行等ノ建議度々ナリト雖トモ竟ニ行レス魯西亞ニテハソノ約ヲ蹈ミカサケウイチトイフ者ヲシテ全權タラシメ黑龍江口ニコライスキニ出張セシメ其旨ハ箱館ニアル岡士ヲシテ日本政府ニ告知セシメタレトモ竟ニコレニ答フルコトナカリシ幾モナクシテ魯人ノ南侵益甚シケレハ慶應丙寅年箱館奉行小出大和守江戸ニ出テソノ事ヲ抗論シテ力爭セシカハ漸ク廟議決シ乃チ大和守ニ副スルニ石川駿河守ヲ以テシ是ヲ魯京ニ差シ境界ヲ議セシムトイヘトモ事既ニ一着ヲ失セシ後ナレハ彼方ニテモ其失約ヲ咎メ議論每々左シ要領ヲ得ル事ヲ得ス最後柯太雜居規則ヲ約スルニ至レリ

（註　此處ニ「柯太雜居規則」記載シアルモ第二卷第一册七六附記ト同文ナルニ付略ス）

大和守等丁卯ノ年ヲ以テ復命シ規則中第四款ノ旨ニ隨ヒ准否ヲ政府ニ乞シニ政府竟ニコレニ同意シソノ旨ヲ魯西亞ノ箱館岡士ニ通知シ又結盟各國ノ公使ニモ公報セリ

戊辰御一新ノ際戎馬倥偬柯太等ノ地ニ至リテハ鞭ノ長キモ馬腹ニ及ハサル勢アリテ姑ク束閣アリシニ己巳ニ至リ英公使ヨリ中立ル所モアリテ再ヒ經略ヲ肇メラレシニソノ任ニ膺ルモノ交際ノ公法ヲ知ラス兩政府間ノ約束ノ廢スヘカラサルヲモ辨セス事ニ從ヒシヲ以テ瑣末ノ爭ヒヨリ不都合ヲ起シソノ破綻ヲ補ンカ爲メ亦多少ノ委曲ヲ費シ益柯太地ニ在ル魯人ノ威福ヲナサシムル勢トナリ政府竟ニソノ棄置ベカラサルヲ知リ庚午二月中米國政府ノ媒ヲ賴ミ魯國政府ヘ照會スヘキ談判ニ渉リシニ清國上海在留魯國總領事ビユツオフ御國ヘ渡來副島參議ニ會シ直ニ魯國政府ニ照會スル方然ルヘキ由シヲ話ス折柄米國政府ヨリモ一應魯國政府ヘ引會アリテ纏ラサレハ取計フ旨モアルヘシトイヘトモ最初ヨ

リ引受ル事ナシカタキヨシヲ告越シタレハ其十一月竟ニ箱館ニ在ル魯領事ノ手ヲ經テソノ本國政府ヘ我外務卿ヨリ書ヲ贈リ北雪兎港ニテ兩國全權會議セン事ヲ請シニ久シテ其答ヲ得ス然ルニ時期既ニ至リシヲ以テ箱館ノ魯領事ヲ促カセシニ渠ソノ本國全權ノ必ス來ルヲ受合シヲ以テ副島種臣ニ右談判ノ全權ヲ任セラレ御委任狀ヲ下サル、左ノ如シ

（註　委任狀ハ第四卷二三二ト同文ナルニ付略ス）

右ノ委任ヲ受ケ副島種臣箱館マテ出張ノ所魯國政府ヨリ電信ヲ以全權ヲビユツォフニ授ケ別ニ日本政府ヘ差遣スニヨリ經界談判ヲ委シテ北雪兎港ヘ出スヘキ人ナキヲ以テ其事ハ斷リ及フヘキ旨箱館領事ニ告知アリ領事ソノ事ヲ種臣ニ告ク於是已ムヲ得ス歸程ヲ促スニ至レリ

（朱書）「彌時談判振ニ付別ニ敕旨アリシヤ又ハ種臣ヨリ見込何ノ趣ニテモアリヤ書類存スル事ナケレハ考フル能ワス談判ノ歸宿スル處廷議ノ決スル所今知ルニヨシナシ」

因テ外務省ヨリ彼全權未タ來ラサル先ニ是ヨリ使ヲ派シテ經界ノ事ヲ議セハ先人ノ道ニテ都合宜カルヘキヲ建議セシニ未タ行レス

壬申年三月魯代理公使ビエツフ渡來兼テ柯太經界談判委任ニ涉リシヨリ幸ヒ佛國ヨリ聞ケル所ヲ以テ魯廷ニモ其論アリシヲ傳聞セリトイヘトモ畢竟双方政府ヨリソノ委任ヲ受ケシモノ、口ヨリ出タルコトハ徵信スヘキニ然サルヲ辯シ畢竟島上ニ就テ經界ヲ分タス又全島ヲ賣渡ヲ肯ンセサル上ハソノ終リヲ要スレハ徒手ニシテ人ノ土地ヲ奪ワントスルモノナルヘキヲ詰論セシニ其結末愈全島魯國ニ附與セラルヘキニ決シ玉ハ、魯政府ヨリ日本政府又ハ人民ニ對シ右相當ノ利益ヲ與フヘシ其爲兩國間ニ條約ヲ結フモ可ナリトノ談判ニ推移リ右與フヘキ利益又ハ條約ヲ結フトハ如何ナル見込アリヤトノ談論ニテ未タ結尾ニ至ラサルノ央

（朱書）「魯公使日本政府ニ棄島ノ論アリシトイヒ出タルハ黑田次官ノ建議ヲ聞込タルナリ別ニ存ス此建議ハ此際魯士官三人我國ニ來リ柯太蝦夷地ノ形況ヲ探索スルノ體ナリシ其一人ハ東京迄來リ數日淹留ノ末米郵船ヲ以テ歸國セリ名ハネレニコーフトイフ實ニ癸酉年三月ノ末ナリ」

種臣全權大使トシテ清國差遣サレタリ仍テ經界ノ談判ハ右留守中代理ノモノヲ撰任スヘキ旨ビユツオフニ相談セシニ彼コレヲ肯ンセス折角兩人ノ間ニ就緒セシ談判ナレハ種臣歸朝ノ後マテ見合スヘシトテ分レタリシニ不圖母子泊魯兵暴動ノ聞エアリコレニヨリテ種臣歸朝直樣談判ニ取カ、ル

ノ趣魯國外務大輔ヨリ書東ヲ以中越有之副島種臣モ亦恰外務卿奉職ノ時ナレハ右ニ付數回ノ談判アリ彼方申分ハ從來ノ見込ヲ固守シ島上ニテ界ヲ分ツコトヲ肯ンセス仍テハ全島買受ルモ然ルヘシトイヘトモ魯政府マタ所須ノ金ヲ有セスナトノ談シニ涉リ竟ニ結局ナキニヨリ此カタニテ全島買取スヘキノ論ニ遷リシニ公使其答ヲナス權ナキヲ以テコレヲ其政府ニ諮禀スヘキヨシヲ申出暫時談判ヲ擱キタリシハ同年五六月ノ事ナリ然ルニ其八月ノ頃ニ至リ佛公使ウートレー歸國中代理ノ書記官チユレーヨリノ內告ニ同國公使魯京在留ノモノヨリ本政府ヘノ報告ニ魯國政廷ニオヰテ該島ノ儀ニ付テハ屢次日本トノ爭モアリ隣國交際ノ義ニ背クコトモ不少大ニ大國ノ面目ニ關係スレハ結局コレヲ棄テ全島日本ニ附與スルコト一ハ交誼ニ關シ二ハ省費ノ道ナルヘシトノ論アリトノ趣本國ヨリ報シ越セシ旨ヲイヒ出タリシカ癸酉年ノ始ニ至リビユツオフ本國政府ノ指揮ヲ得タル旨ヲ以柯太島ノ儀ハ魯國オヰテハ罪人放竄ノ爲必須ノ地ナレハ日本ニ附與シカタキ趣ナレハ價ヲ以テ賣渡スヘキニアラサルヲ告ケ且日本政府ニハ棄テ魯國ニ與フヘキ議論不少ニ獨外務卿ノミコレヲ有タンコトヲ執論スルヨシナルナトノ論ヘキヲ彼方ヨリ促カセシニ此ヲ肯ンセス先右暴動ニ付魯政府日本ニ對シ如何樣ノ處置アランカヲ問ヒ彌日本政府ニオヰテ滿足スヘキ取扱ナクハ柯太經界ノ儀モ懇親ノ談判ハナシカタキ旨ヲ以テ斷リオヨヒシヨリ我方ニテハ宮本外務大丞彼方ニテハ書記官某ヲ差シ實地ニ就實情ヲ取調ヘ猶談判處分オヨフヘキニ協議セリ然ルニ宮本大丞等歸京復命ノ折ハ種臣既ニ辭職ノ後タリシノミナラズビユツオフモ兼テ在清公使ニ轉任セシカト種臣トノ引合マタ央ナレハ此一事ヲ決セシ後ニ赴任セントノ見込ニテ延稽シ居タリシニ種臣既ニ職ニアラサレハ此迄ノ引合モ空ニ歸スヘキヲ考ヘタリシニヤ竟ニ十一月ヲ以テ我國ヲ去ルニ至レリ

寺島外務卿種臣ノ後ヲ承ケ强テビユツオフヲ引留メ且清國ニ在ルトイヘトモ柯太談判タケハ引受取扱レ度杯談判オヨヒシトイヘトモ右談判ノ權ハ日本在留ノ職ト同シクコレヲ解タレハ本政府ニハ猶代人ヲ撰任スヘシトテ肯ンセサリシ以是論之ハ柯太經界談判ノ儀川路筒井等カ布恬廷ニ接セシハシメ模稜ヲ以テ局ヲ了セシニ始リムラヒヨフ渡來ノ時モ彼方ヨリ請フトコロノ太侈ナルヨリ十分ノ談ヲ盡サス竹內松平輩ノ彼朝ニ至ルニイタツテ決議ノ機會ヲ得タリシトイ

ヘトモ訓條中ニナキ所ナルヲ以テ果スアタワストイヘトモ約ヲ立テ其端緒ヲ開キ歸朝セシニ當時ノ政府多事ヲ以テ其約ヲ蹈コト能ワス信ヲ失スルニ至リ小出大和守カ議界ノ命ヲ奉シ再ヒ彼朝ニ至ルニイタリテハ實ニ奈何トモスヘカラサルノ時ナリシ因テ不得已ヨリクルリ群島ト交換スヘキカ又ハ從前ノ體ヲ存シ双方雜居ノ地トシテソノ規則ヲ立ヘキカノ兩途ニ協議決定セシハ跡拙ニ似タリトイヘトモ情實ニ然ラサルヲ得サルモノナリ爾時政府ソノ約ヲ認メ引ツヽキ御一新ニイタリ彼是ノ論談アリトイヘトモ始終決議ニオヨヒシコトナク其實ハ廿年前ノ模稜ノマヽニテ今日マテ引續アルモノナリ

事項七　琉球使臣來朝ニ關スル件

一七三　八月十五日（一八七三年九月十七日）　外務省ヨリ太政官正院宛

琉球使臣來朝ニツキ本省竝ニ鹿兒島縣ヘ接待方ニ關シ御沙汰アリ度旨上申ノ件

附記　琉球使臣來朝ニ關スル梗概調書

正院御中　　外務省

近日琉球人上京に付ては接對振の儀見込可申進旨致承知候同國は固所屬の儀に付外國人と視傚し接對候には不及候乍去猶客禮を以被遇候儀に付琉人に附添來候鹿兒島縣官員共總て本省に屬し右接對御用掛被命御維新以來初て入貢の儀に付優渥の御取扱相成可然存候右にて可然は本省幷鹿兒島縣へ速に御沙汰有之度候也

壬申八月十五日

（琉球使臣來朝始末）

註　琉球使臣來朝ニ關スル梗概調書左ニ附記ス

（附記）

抑琉球島ハ古昔沖繩島ト唱ヘ南海十二島ノ内ニシテ本朝ノ屬島タリ文治元年島津氏ノ始祖豐後守忠久薩隅日三國ノ守護職ニ任セラレシ時南海十二島ノ地頭職補任ノ命アリ正平文中ノ頃琉球國亂起リ中山南北ト三ツニ分レ各雌雄ヲ爭フ是ノ時ニ當リテ本朝モ兵馬騷擾ノ折ナレハ島津氏ノ威令行ハレサリシニヤ明國ノ力ニ依リ全國ヲ一定セント明洪武五年中山王始テ使臣ヲ遣シ方物ヲ貢シ冊封ヲ乞フ明主朱元璋其乞ニ應シ冊封ヲ與ヘ衣冠ヲ賜リ國號ヲ琉球ト改メ彼レノ正朔ヲ奉セシム是レ中山西土ヘ朝貢セシ始メナリ然レトモ我ト拒絶セシト言フニハ非ス時ニ書翰ヲ呈シ方物ヲ貢ス嘉吉元年足利義教賞賜トシテ更ニ島津忠國ヘ琉球國加封ノ令アリ元龜以降群雄割據土地ヲ略有スルヲ務メトシ餘事ニ暇アラス繼テ朝鮮ノ役起リ久シク兵ヲ異域ニ暴シ遐方ノ指令行屆カス久シク貢納ヲ怠リ使臣ヲ出サス故ニ人ヲ遣ハシ屢

之ヲ督責スレトモ曾テ承服ノ色ナシ是ヲ以テ慶長十四年島津家久德川秀忠ニ請ヒ其許ヲ受ケ樺山權左衞門ヲ將トシテ兵ヲ發シ之ヲ討ス數戰ニ及ハス降服罪ヲ謝セリ權左衞門國王ヲ縛シ鹿兒島ヘ護送シ永ク違犯スヘカラサルノ旨ヲ誓盟セシム此時琉球ノ領地十二萬七千石餘ノ內大島德之島喜界島沖ノ永良部島與論島ノ五島ヲ鹿兒島ノ直管トナセリ玆高三萬二千八百石餘ナリ全體琉球ハ洋中ノ小島　本朝西土ノ間ニ介立シテ一國ヲナス事能ハス兩國ヘ航海貿易セサレハ立行カタク且遠カニ拒絕ス可カラサルノ情アルヲ以テ清國ヘノ貢獻ヲ絕タシメス萬事舊ニ仍リ彼ノ措置ニ任セ別ニ人ヲ遣リ版籍中ノ諸島ニ至ルマテ戶數人口ヲ改メ土地ヲ撿シ田畠ノ租稅ヲ定メ那覇市內ヘ官廨ヲ設ケ以來鎭撫ノ士官ヲ輪番在留セシム其後全ク變革等ノ事ナク今日ニ至リ依然舊法ヲ固守シ自ラ一小天地ヲナシ諸官堂々尊大ノ風ヲナシ且竭取暴斂ノ意ナキ事アタハス殊ニ世上ノ沿革形勢ニ至ツテハ更ニ其何事タルヲ識別セス屢鹿兒島縣廳ヘ時世不當ノ事共申立テ維新ノ日ニ當リ不都合ノ至ナリト縣官ノ評議ヲ以テ奈良原幸五郎及ヒ伊地知貞馨ニ渡琉ノ命ヲ下シ百般ノ事因革釐正シテ時世ニ的當セル政ヲ施サシム且曰海路杳渺一々指揮シカタシ二人ニ因革ノ事ヲ委任ス都テ二人ノ見認ヲ以テ宜シク處置スヘシト二人縣命ヲ受ケ明治五年正月五日鹿兒島ヲ發シ同十五日琉球那覇江ヘ着ス琉官狐疑如何ナル令ヲ發スルヤト恐怖ノ色アリ細カニ政體風俗人氣ヲ注視スルニ官階秩然禮制肅然上下敦撲ノ風アリテ觀ルヘキモノ甚タ多シトイヘトモ僻陋頑固ノ風人々心肝ニ凝結シ一時ニ釋然タラシムル事能ハサルヲ察シ二人內議ノ上三部二ノ變革ヲ行ハント目途ヲ定メ日ヲ刻シ攝政三司官ヲ招キ初メ因革ノ爲メ二人ヲ差スト書タル縣參事大山綱良ヨリノ一翰ヲ渡シ次ニ二人存慮ノ程ヲ細書シテ之ヲ與ヘ本朝ノ沿革宇內ノ形勢事情ヲ示諭シ此ノ趣ヲ國王ニ達シ要路ノ官員評議ノ上答酬ヲキカント述フ琉官承諾シテ退ク其後國王ヘモ面接前條ノ趣ヲ傳フ二十餘日ヲ經テ令セル所說クトコロ至當ニシテ異議ナシトノ答書アリ因テ先ツ從前鹿兒島ヨリ束縛セシ事件ヲ解テ其心ヲ悅ハシメ繼テ不急ノ冗官ヲ汰シ百般ノ事務煩擾ヲ去リ易簡ニ就キ年中ノ禮式且門閥諸官ノ僕從三部二ヲ減シ縣官在勤ノ接待贈答十ノ八九ヲ減シ學校ヲ盛ニシテ敎化ノ道ヲ擴メ制度ヲ寬ニシテ士庶ヲ愛撫シ各自由ノ權ヲ全フセシメ永ク　朝旨ヲ奉戴シ違犯スヘカラサル等ノ事

ヲ細カニ書記シ之ヲ授ク爾後懇々說得且威シ且諭シ三月餘ヲ經テ謹ンテ說諭ノ如クセント因革ノ措置ヲ取調ヘ書面ヲ以テ相示セリ琉球ヨリ島津氏ヘノ負債金五萬圓餘アリ年賦ニテ消却スルノ定メナリ二人ノ鹿兒島ヲ發スル之ヲ與ヘ切ニセントノ一札ヲ受取タリ故ニ琉官ヲ招キ之ヲ授ケ依テ曰ク必ス官用ニ費スベカラス此ノ五萬圓ヲ本ニ立テ年々消却スヘキ金ヲ差分ケ窮士民ヲ救育スヘシト諭ス琉官拜シ恩ヲ謝ス彼ニ農民ノ滯祖(租カ)三萬石餘アリ年々數ヲ照シテ補ハシム琉官ノ議ヲ以テ皆之ヲ免シ攝政三司官門閥ノ祿高ヲ減シ前ト合シテ窮士民鰥寡孤獨ヲ救育スル方法ヲ定メ二人ニ示セリ盡ク其議ノ如ニシテ之レヲ確定ス八重山島石炭取調等ノ事ニ付縣廳書記伊地知小十郎渡航ノ命ヲ受ケ共ニ鹿兒島ヲ發ス縣官小十郎ニ二人ノ指揮ヲ待ヘシト令スヨツテ之レヲ托シ八重山ノ事ヲ糺シ其弊害ヲ改メシム在琉中清國福州行ノ琉船歸着セリ此船ヨリ臺灣ヘ漂流セシ八重山人十二名ヲ乘セ歸レリ臺灣ノ土蠻八重山人數十名ヲ殺害セリトノ說ヲ聞キ萬國交和ノ今日ニ臨ミカヽル事アツテハ如何ノ至リナリト漂流人ノ內宮古島人仲本筑登之島袋筑登之ノ兩名ヲ招キ其顚末ヲ糺シ之ヲ記載ス六月廿一日鹿兒島縣ヨリ命セル琉球在勤ノ官員着セリ此ノ便リニ縣參事ヨリ維新以來國王ヨリ慶賀ノ禮ヲ修メシ事ナシ其爲ニ權典事右松五助權大屬今藤宏ヲ遣スヘケレト速ニ承諾ノ程心許ナケレハ二人ヨリ內諭シテ異議ヲ生セス登京セシムヘシト告來レリ依テ大旨ヲ一紙ニ認メ攝政三司官ヲ招キ親政ヲ祝シ奉ル爲ニ重臣ヲ使トシ上京セシムヘキ旨ヲ傳ヘ且迎ヘ船トシテ縣官某々不日ニ蒸氣船豐端丸ヨリ來ルヘシコノ由ヲ國王ヘ傳ヘ王子三司官ヲ正副トシ此節來港ノ船ヨリ出京アルヘシ期近キニアリ速ニ其決答ヲ聞ント達ス兩日ヲ過キテ國王ヨリ伊江王子宜野灣親方及ヒ喜屋武親雲上京(上脫カ)慶賀ノ使節ヲ勤ムヘシト內命ヲ下セリト答報ス奉命ノ事粗緖ニツクヲ以テ琉官ニ歸期ヲ告ケ今般變革ノ个條ハ將來ノ規則トシ永ク背犯セジトノ攝政三司官ノ請書ヲ取リ同七月十一日那覇江ヲ發シ十四日鹿兒島ヘ着ス渡球以來處置セシ始末且八重山人殺害ニ逢シ事共ヲ縣參事等ニ陳述ス八重山人殺害ニ逢ヘル屆之ヲ處置スル縣官ノ見認ヲ奏スル爲ニ貞馨ニ出京ヲ命セリ同廿七日琉球使臣縣官員ト船ヲ同シ鹿兒島ニ着ス廿八日貞馨鹿兒島ヲ出發シ八月十二日東京ニ着ス同十四日今般琉球使臣上京ニ付同國ノ事實ヲ知レル者ヲ出頭セシムヘシト外務省ヨリ

鹿兒島出張縣廳ヘ達シ玉ヘリ縣官ヨリ貞馨ニ出頭スヘシト命ス同日出省宮本大丞ヘ面會其尋ニ應シ之ヲ答フ同夜外務卿宅ニ至リ八重山人殺害ニ逢ヒシ始末鹿兒島縣官右處置ノ見認ノ次第及琉球ノ政體風俗事情ヲ演說ス同廿二日貞馨外務省七等出仕ノ命奉シ同日參
朝ノ琉使臣接待掛ノ省命ヲ受ク兼テ參
朝ノ使臣ハ外務省ヨリ接遇スヘシト正院ノ命アルニヨリ愛宕下毛利從五位ノ邸宅ヲ假リ旅館ヲ設ケ使臣ノ着スルヲ待ツ

（琉球使臣來朝始末）

一七四　八月十九日（九月三十一日）　太政官史官ヨリ外務大丞等宛

琉球使臣取扱方御達書送付ノ件

附屬書　八月十九日右太政官ヨリ外務省ヘノ御達書

附記　琉球使臣接待掛名簿

別紙琉球人取扱御達書御達ニ及候御落手可有之候也

壬申八月十九日　　史官

外務大少丞御中

（琉球使臣來朝始末）

（附屬書）　外務省

今般琉球使人攝政三司官三名其他隨從ノ者貳拾七八人來朝候ニ付於其省萬事可取扱事

但鹿兒島縣附添官員其省官員ニ申付諸事取扱可爲致事

壬申八月十九日　　太政官

（琉球使臣來朝始末）

註　因ニ琉球使臣一行ハ九月二日東京ニ來着シタリ尙一行ニ對スル接待掛左ノ如シ

（附記）

琉球使臣接待掛

外務大丞　宮本小一
外務少記　渡邊洪基
外務省七等出仕　伊地知貞馨

外務中錄　副田節
鹿兒島縣大屬　上原尙德
外務小錄　上柳久徹
外務小錄　堀江弘貞

壬申九月四日同掛中付ノ姓名

鹿兒島縣權參事　權原營門
鹿兒島縣權典事　右松五助
鹿兒島縣權大屬　今藤宏
鹿兒島縣史生　上村彥四郎
鹿兒島縣史生　鎌田市兵衞

右五名當日各御請書差出ス

（琉球使臣來朝始末）

一七五　九月十日（十月十三日）　外務省ヨリ太政官正院宛

琉球ヘ新貨幣及紙幣下賜アラセラレ度旨上申ノ件竝ニ之ニ對スル太政官決裁

正院御中　　外務省

今般琉球國王の儀藩臣に被列候儀に至り候に付ては同國の儀貨幣無之從來寛永通寶而已を以て通用罷在候處此度御發行の新貨幣幷に紙幣相交都合三萬圓右王え下賜候はゝ國內え頒布いたし其潤澤に沾ひ愈
皇恩を感戴可仕と存候因て別紙金高相渡候樣大藏省え御達可被下候依之三萬圓大小貨幣別紙割合書相添相伺候也

壬申九月十日

追て本文金高大小貨幣割合の儀凡目當相定候迄にて紙幣五千圓の分は御在合の都合に寄り彼是差引加減は大藏省の見込に隨て差支無之尤可成小數金銀の分多き方に仕度候也

伺の通下賜候條大藏省より可請取事

九月十五日　　（朱書）正院之印

（琉球使臣來朝始末）

註　右文書ニ謂フ「別紙割合書」詳ナラス尙九月二十日太政官ヨリ琉球藩王ヘ三萬圓下賜ノ御沙汰アリタリソノ內譯左記ノ如シ

記

新貨幣三萬圓也
金貨

二十圓　五十枚　但千圓
十　圓　百　枚　但千圓
五　圓　三百枚　但千五百圓
二　圓　千五百枚　但三千圓
一　圓　三千五百枚　但三千五百圓
〃　壹萬圓
銀貨　各種三千七百五十兩ッヽ
五十錢　七千五百枚
二十錢　壹萬八千七百五十枚
十　錢　三萬七千五百枚
五　錢　七萬五千枚
〃　壹萬五千圓
紙幣　各種千貳百五十兩ッヽ
五　圓　二百五拾枚
二　圓　六百二十五枚
一　圓　千貳百五十枚
半　圓　二千五百枚
三口
〃　三萬圓也
右之通候事
壬申九月

（琉球使臣來朝始末）

一七六　九月十三日（十月十五日）柳原外務大丞等ヨリ尙琉球使臣正使等宛

琉球使臣ヘ拜謁仰出アリシニ付通知ノ件

列位使命ヲ奉シ御入朝ノ次第我外務卿ヨリ奏聞ニ被及候處
皇上深御滿足有之明十四日午半刻
御對面被　仰出候ニ付御參　内可被成其禮式儀注ハ拜晤可
申進候得共先以申進候也敬呈
明治五年壬申九月十三日
外務大丞從五位　宮本小一花押
外務大丞正四位　柳原前光花押
正使尙　健
副使向有恒
贊議官向維新
列位坐下

（琉球使臣來朝始末）

一七七　九月十三日（十月十五日）尙琉球使臣正使等ヨリ柳原外務大丞等宛

琉球使臣ヘ拜謁仰出アリシ旨ノ通知了承ノ件

附記一、琉球使臣參朝次第書
二、琉球尙泰ノ上表、之ニ對スル勅語竝ニ獻上目錄
三、琉球尙泰ヘノ冊封ノ詔書、之ニ對スル御請書竝ニ賜品目錄

明十四日午半刻　御對面被
仰出候ニ付參　内可致其禮式儀注ハ拜晤可被申述與ノ趣奉畏候敬具
明治五年壬申九月十三日
贊議官向維新花押
副使向有恒花押
正使尙健花押
外務大丞正四位　柳原前光
外務大丞從五位　宮本小一
列位坐下

（琉球使臣來朝始末）

註　琉球使臣參朝次第書竝ニ參朝ノ節ノ琉球尙泰ヨリノ上表、之ニ對スル勅語及冊封ノ詔書、之ニ對スル御請書等一括左ニ附記ス

（附記一）

琉球使臣參　朝次第

一來ル十四日午後一字使臣參　朝可致旨從外務大丞書達ノ事
正使副使贊議官三員ノ事
但其他ト雖モ相應ノ者ハ御廊下緣外ヨリ儀式拜見爲致
外務大丞式部官員案内致候事
一當日出仕ノ官員直垂着用ノ事
使臣ハ琉球服ヲ用候事
一先導ノ爲メ從旅館御車寄迄外務判任官騎乘出張伊地知七等出仕同車案内ノ事
一中仕切御門外ニテ下乘ノ事
一使臣從御車寄上ル此處ヱ外務大丞出迎ヒ引テ櫻ノ間ニ休息セシム
一茶ヲ賜フ大舍人役之
一外務卿式部頭出テ接ス
此日早晨琉球尙泰ヨリノ貢獻物ヲ大廣間入リ口ノ御座

敷ニ陳列シ置ク事
藩王及妃幷ニ使臣ヘノ賜品ヲ傳達所ニ供置ク事
一使臣參　内事具スル旨式部頭言上ス此前内習禮爲致候事
一樂起ル
一出御玉座ニ着セラル太政大臣外務卿
御前ニ侍立シ諸省長次官傍ニ立列ス若シ諸省長次官不參ナレハ其代員ヲ出ス
一式部頭正使ヲ引テ
玉座前ニ進ム副使贊議官後トニ跟從ス
一式部頭使臣三員ノ名ヲ披露ス
一使臣磬折謹拜ス
一正使
主上及　皇后ヘノ尙泰上表幷ニ獻貢目錄各二通ヲ式部頭ニ呈ス頭讀上ケテ獻ス（御執リノ後侍從長ニ授ケ給フ以下準之）
一有
勅語
一使臣自己ノ獻物目錄ヲ讀ミ式部頭ニ呈ス頭取テ獻ス
一有
勅語
一主上冊封ノ詔ヲ取テ外務卿ニ授ケ給フ卿宣讀畢テ使官ニ傳フ
一使臣磬折謹揖シテ尙泰ニ代リ御請言上ス
一次ニ式部頭藩王及妃ヘ賜賚ノ目錄ヲ宣讀シテ授ク
一使臣拜ス
一樂起ル
一式部頭使臣ヲ引テ櫻ノ間ニ退ク
一太政大臣參議諸官省長次官出會シテ遠來ヲ勞シ封冊ノ榮命ヲ祝ス
一式部官員三使ヲ案内シ傳達所ニ進ム式部頭三使ニ賜賚物ヲ達ス
一退朝外務大丞其歸ルヲ送ル來ル時ノ如クス

（琉球使臣來朝始末）

（附記二）

書簡之寫

恭惟
皇上登極以來乾綱始張庶政一新黎庶
皇恩ニ浴シ歡欣鼓舞セサルナシ尙泰南陬ニ在テ伏シテ盛事ヲ聞キ懽忭ノ至リニ勝ヘス今正使尙健副使向有恒贊議官向維新ヲ遣シ謹テ慶賀ノ禮ヲ修メ且方物ヲ貢ス伏シテ奏聞ヲ請フ
明治五年壬申七月十九日

琉球尙泰謹奏

（琉球使臣來朝始末）

書簡之寫

恭惟
皇后位ヲ中宮ニ正シ德　至尊ニ配シ天下ノ母儀トナリ四海日ニ文明ノ域ニ進ミ黎庶生ヲ樂ミ業ニ安ス尙泰海陬ニ在テ伏シテ盛事ヲ聞キ懽忭ノ至リニ勝ヘス今正使尙健副使向有恒贊議官向維新ヲ遣シ謹テ慶賀ノ禮ヲ修メ且方物ヲ貢ス伏シテ奏聞ヲ請フ
明治五年壬申七月十九日

琉球尙泰謹奏

（琉球使臣來朝始末）

獻上品目錄

主上江
一　唐筆　三箱
一　唐墨　一箱
一　唐硯　二面
一　唐畫手卷　二（劉松年　趙仲穆）
一　紺地島細上布　十端
一　紺島細上布　十端
一　島紬　十端
一　白大綸子　五木
一　縮緬　十卷（紅　白）
一　金入龍紋緞子　壹木
一　金入龍紋紗　壹木
一　青貝料紙硯箱　一通
一　燒酎　十壺
右中山王ヨリ

皇后樣江

（琉球使臣來朝始末）

一　紺地島細上布　五端
一　紺島細上布　五端
一　白大綸子　五本
一　紗綾　十卷　紅白
一　縮緬　十卷　紅白
一　金入龍紋緞子　一本
一　金入龍紋紗　一本
一　燒酎　五壺
右中山王ヨリ

（琉球使臣來朝始末）

勅語

琉球ノ薩摩ニ附庸タル年久シ今維新ノ際ニ會シ上表且方物ヲ獻ス忠誠無二朕之ヲ嘉納ス

（太政官日誌）

主上江

一　紺地島細上布　五端
一　紺島細上布　五端
一　島紬　五端

一　圓金　一本
一　燒酎　五壺
右正使伊江王子ヨリ

（琉球使臣來朝始末）

主上江

一　紺地島細上布　三端
一　紺島細上布　三端
一　島紬　三端
一　片金　一本
一　燒酎　三壺
右副使宜野灣親方ヨリ

（琉球使臣來朝始末）

主上江

一　紺地島細上布　二端
一　紺島細上布　二端
一　島紬　二端
一　燒酎　二壺
右贊議官喜屋武親雲上ヨリ

（琉球使臣來朝始末）

勅語

汝等入朝シ能ク汝ノ主ノ意ヲ奉シテ失フナシ自ラ方物ヲ獻ス深ク嘉納ス

（太政官日誌）

（附記三）

詔書

大日本國璽

朕上天ノ景命ニ膺リ万世一系ノ帝祚ヲ紹キ奄ニ四海ヲ有チ八荒ニ君臨ス今琉球近ク南服ニ在リ氣類相同ク言文殊ナル無ク世々薩摩ノ附庸タリ而シテ爾尙泰能ク勤誠ヲ致ス宜ク顯爵ヲ予フヘシ陞シテ琉球藩王ト爲シ敍ノ華族ニ列ス咨爾尙泰其レ藩屏ノ任ヲ重シ衆庶ノ上ニ立チ切ニ朕カ意ヲ體シテ永ク皇室ニ輔タレ欽ヨ哉

明治五年壬申九月十四日

天皇御璽

（太政官日誌）

御受之寫

臣健等謹白ス臣寡君ノ命ヲ奉シ天朝ニ入貢ス今聖恩寡君ヲ封シテ藩王トナシ且華族ニ班セシム聖恩重渥恐感ノ至リニ勝ヘス臣健等代テ詔命ノ辱ヲ拜ス

明治五年壬申九月十四日

正使　尙　健
副使　向有恒
贊議官　向維新

（琉球使臣來朝始末）

賜物目錄

琉球藩王江
大和錦　五卷
遊獵銃　三挺
鞍鐙　一具
琉球藩王夫人江
大和錦　五卷
七寶燒大花瓶　一雙
新製紙敷物　三枚
右

琉球藩王江

金地織天鵞絨　二卷
博多織　三卷
西洋敷物　三卷
右中宮ヨリ

琉球藩王夫人江

天鵞絨　五卷
西洋敷物　三卷
右中宮ヨリ

正使伊江王子江

大和錦　三卷
天鵞絨　三卷
白縮緬　二匹
紫縮緬　一匹
七寶燒小判形盆　二枚
松島蒔繪文臺硯箱　一組
新貨幣　二百圓

副使宜野灣江

大和錦　三卷
白縮緬　一匹
緋縮緬　二匹
紅絹　五匹
七寶燒皿　二枚
蒔繪花臺　一箇
新貨幣　百五十圓
右

贊議官喜屋武江

大和錦　二卷
紅絹　五卷
紅白縮緬　二卷
蒔繪料紙硯箱　一組
七寶燒鉢　二枚
新貨幣　百圓

（琉球使臣來朝始末）

一七八　九月十五日（十月十七日）副島外務卿ヨリ太政官正院宛

琉球藩ニ對シ我藩屬體制ノ徹底ヲ期スヘク處置アリ度旨願出ノ件

此度琉球使臣尙泰ニ代リ封冊ノ詔書ヲ謹領シ候上ハ彌以我藩屬ノ體制徹底ニ到リ候樣御處分有之度件々左ニ申上候

一同藩ハ從來淸國ニ關係シテ現在福州府ニ商民來往シ其他曾テ外國人ノ航渡應接セシ舊轍モ有之邊陲ノ要地ニ候得ハ本省官員在勤爲致度候事

一我政治制度ヲ漸々宣布シ適否將來ノ目的ヲ定メ候爲同藩租稅民政以下一體ノ風俗視察トシテ本省官員ニ同道シ大藏省ヨリ官吏被差遣度事

一琉球藩王ハ一等官ニ被　仰出度事

一尙泰儀華族ニ被列候ニ付テハ其待遇ヲ厚フシ歸向ノ志ヲ堅フシ候事切要ノ儀ニ有之仍テ東京府下ニ於テ家屋園庭具足相應致候邸宅一圍下賜リ度候事

一琉球藩王エ冠裝束類皆具入朝ノ使臣三名エ直垂總テ各ヘ一領ツヽ下賜度候事

右條々ハ入朝ノ使臣歸藩迄ニ被　仰出度御裁決相願候也

壬申九月十五日

外務卿　副島種臣

正院御中

（琉球使臣來朝始末）

一七九　九月十八日（十月二十日）米國公使ヨリ副島外務卿宛

琉球合併ニ際シ米國琉球間條約ニ關シ照會ノ件

附記　安政元年六月十七日米國琉球間ノ條約

No. 121　U. S. Legation, Japan, October 20, 1872.

His Excellency
Soyoshima Tonomi,
Minister of Forign Affairs.
Your Excellency,

Understanding you to advise me a few days since that the King of the Leu Chew Islands had been called upon by the Japanese Government to resign his tittles and estates to it, which had been done, Letters patent of nobility issued to him constituting him a member of the nobility of your Empire ranking as do the former Daimios, thus incorporating Lew Chew, as an integral portion of the Japanese Empire;

I feel called upon to call your attention to a Compact entered into between the former Kingdom of Lew Chew and the United States of America, on the 11th of July 1854, (See Bound volume of Treatys (sic) Page 4) and to ask of the same will be observed in all its provisions by Your Government within the territorial limits of the former Kingdom.

I have the honor to remain
Your Most obedient Servant,
C. E. DE LONG.

（右和譯文）

此頃日本政府より琉球島王え辭爵護地を促かされ同人儀日本帝國中の故大名と同格に列せられ華族に敘せられ候旨宣下有之候由閣下の御しらせにて承知仕候然れは之よりして

（附記）

以來何時タリモ合衆國人民琉球へ至ル節ハ丁寧懇切ヲ以テ取扱フヘシ右人民ヨリ請フモノハ何品タリモ國產ノ分ハ官員又ハ平民ヨリ賣渡スヘシ且ツ長官ヨリ禁法ヲ設ケ琉人ヨリ物品賣渡ヲ妨ク可カラス而シテ兩國ノ人民カ買ント欲スル物ハ何物タリモ至當ノ價ヲ以テ賣買スヘシ

何時タリモ合衆國船琉球何レノ港ニテモ入港ノ節ハ至當ノ價ヲ以薪水ヲ供スヘシ然レモ他ノ物品ヲ得ント欲セハ「ナパ」ニ於テノミ買フヲ得ヘシ

若シ合衆國船大琉球若シクハ琉球王國政府管轄島ニ於テ破船セハ人命且所持ノ物ヲ救ワン爲メ地方官ヨリ人ヲ送リ出シテ救ヒ得タル諸物ヲ取リ運ンカ爲メ其國船至ル迄ハ陸ニ持チ運ヒ得ヘキ

一此後合衆國人民到琉球須要以禮厚待和睦相交其國人要買求物雖官雖民亦能以所有之物而賣之官員無得設例阻禁百姓凡一支一收須要兩邊公平相換

一合衆國船或到琉球各港內須要供給其薪水而亦公道價錢支之至若該船欲買什物則宜於那覇而買

一合衆國倘或被風颶漂壞船於琉球或琉球之屬洲俱要地方官遣人救命救貨至岸保護相安俟該國船到以人貨附還之而難人之費用幾何亦能向該國船取還於琉球

Hereafter, whenever Citizens of the United States come to Lew Chew, they shall be treated with great courtesy and friendship. Whatever Articles these persons ask for, whether from the officers or people, which the Country can furnish, shall be sold to them; nor shall the authorities interpose any prohibitory regulations to the people selling, and whatever either party may wish to buy, shall be exchanged at reasonable prices.

Whenever Ships of the United States shall come into any harbor in Lew Chew, they shall be supplied with Wood and Water at reasonable prices, but if they wish to get other Articles they shall be purchaseable only at Napa.

If Ships of the United States are wrecked on Great Lew Chew or on Islands under the jurisdiction of the Royal Government of Lew Chew, the local authorities shall dispatch persons to assist in saving life and

琉球は合併せられて日本帝國の一部分と相成候就ては千八百五十四年七月十一日に亞米利加合衆國と琉球國と取結し規約に閣下の注意を乞ひ甲度其ため印行條約書の四枚目を御覽可被下候隨て琉球國一圓の惣地境中右規約の諸條目を貴政府にて御維持被下候哉此段御伺申進候拜具

千八百七拾貳年第十月二十日

シー、イー、デロング

貼紙

外務卿副島種臣閣下

（貼紙）

本文中「閣下ノ爲御知云々」ト有之候ハ口上ヲ以テ御申述相成且當時多クハ筆記無之故對話書モ無之候

註一、一千八百五十四年七月十一日ニ締結セラレタル米國琉球國政府間ノ定約ヲ左ニ附記ス